

郷土の文化財 12
HASHI BARA SITE

橋原遺跡

—中部山岳地の弥生時代後期集落址—

中央本線岡谷・塩尻間別線複線化工事に伴う
長野県岡谷市橋原遺跡発掘調査報告書

1981.3

長野県
日本国有

信州大学附属図書館



3470342175

員会
事務所

橋原遺跡出土後期弥生土器編年表(試案)

器種分類	壺A	壺B	壺C	壺Aa	壺Ab	壺Ac	壺B	壺C	壺D	壺Ea	壺Eb	壺F	壺G	鉢A	鉢B	鉢C	鉢D	高坏A	高坏B	高坏C	高坏D	器台	环	台付壺
I 期																								
II 期																								
III 期																								
IV 期																								

210²

ky²

12

橋原遺跡

— 中部山岳地の弥生時代後期集落址 —

中央本線岡谷・塩尻間別線複線化工事に伴う
長野県岡谷市橋原遺跡発掘調査報告書



橋原遺跡遠景（中央黒土部分が発掘現場）、上方は諏訪湖



橋原遺跡59号住居址、炉付近から出土した土器と炭化材

は し が き

中央本線岡谷・塩尻間の別線複線化工事の施工に先だち、長野県教育委員会に同区間の埋蔵文化財について、その分布状態を照会したところ、同起業地内に橋原遺跡が存在することが判明しました。

埋蔵文化財は貴重な国民的財産であり、開発と両立させるのがわれわれの義務でありますので、私は、これを後世に永く保存する必要があると考え、岡谷市教育委員会に発掘調査を委託しました。

岡谷市教育委員会では、国民体育大会開催前後のご多忙中にもかかわらず早速これをご了承いただきこの調査にあたっていただきました。

この間、地元関係者、諏訪地区考古学研究者及び長野県考古学会各位の熱意あるご努力により、このほど調査が完了し多くの貴重な文化財を発見することができ、ここにその報告書が出版されることになりました。

今後、この報告書が単に長野県下ばかりでなく、広く考古学研究の資料としてお役にたつことを心からお祈りすると共に関係各位のなみなみならぬご努力に改めて深甚な謝意を表明いたします。

昭和56年3月20日

日本国有鉄道岐阜工務局
長野工事事務所長

山元啓太郎

序

橋原遺跡は天竜川河畔の岡谷市橋原地区に位置し、ほぼ40,000m²にひろがる大きな遺跡であり、「諏訪史」第一巻、「岡谷市史」上巻にも、諏訪地方における代表的な弥生時代遺跡として知られ、しばしばかなり豊富なその時代の遺物の発見があったと書かれている重要な遺跡である。

たまたま中央本線岡谷・塩尻間の別線複線化工事が施工されることとなり、線路がこの遺跡を通過するため、昭和53年7月から昭和55年5月末まで、あしかけ3カ年にわたって発掘調査を行うことになった。

発掘の面積は約6,700m²におよび、本発掘により大量の炭化米の検出、68棟の住居址、多数の遺物が発見された。これらは諏訪地方における弥生時代の全容を知るうえに貴重な資料であり、弥生式土器の型式や弥生時代農耕文化の実態を知ることができるものと思われる。

この報告書は上記の結果をまとめたものであり、このような成果を上げ得たことは、国鉄、県教育委員会、地元の方々をはじめ直接発掘に従事された調査団の団長以下調査員・作業員の皆さん、さらに報告書作成にご尽力下さった方々のお力によるものであり、ここに深く感謝申し上げますとともに、本遺跡の出土遺物、写真、スライド等は学術上からも貴重な資料でありますので、教育文化の向上に活用されることを願って止みません。

昭和56年3月20日

長野県岡谷市教育委員会教育長 八 幡 栄 一

例 言

1. 本書は中央本線岡谷・塩尻間の別線複線化工事に先だつ、長野県岡谷市橋原遺跡発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理は昭和53・54・55年度にわたって、日本国有鉄道岐阜工務局長野工事事務所と岡谷市教育委員会との委託契約に基づいて行われた。調査の概要については第I章にまとめてある。
3. 調査結果については短期間の整理作業であったため、すべての遺構・遺物について十分に検討を加えることができず、原則として資料の提示に重点をおいて本書をまとめた。また本文中の用語、表現方法は個々により多少の相違のある点は了解されたい。
4. 調査団の構成メンバー、作業分担は第I章に、執筆分担は巻末に記した。遺物観察表、その他の記述説明はそれぞれの項および表の前後に付してあるので参照されたい。
5. 調査にあたって遺跡地内の地層は岡谷市南部中学校教頭齋藤保人氏に、石器の石材については神明小学校長両角昭二氏の御教示を得た。
6. 植物遺体の種の同定、分析には信大農学部助教授氏原暉男氏に鑑定を依頼した。放射性炭素年代測定は学習院大学理学部教授木越邦彦氏に依頼した。
7. 調査・整理にあたっては実測図、遺物分布図、写真、スライド等多数を作成したが、そのすべてを本書に掲載することが不可能であるため、そうした資料は出土遺物とともに市立岡谷美術考古館に保管している。広く活用されることを希望する。



目 次

序

第 I 章 調査の概要

第 II 章 遺跡の位置と環境 9

第 III 章 遺 構 14

第 1 節 縄文時代の遺構 18

第 2 節 弥生時代の遺構 18

1. 住 居 址 19

1 号住居址 19

56号住居址 55

50号 " 19

55号 " 56

49号 " 21

20号 " 59

32号 " 21

59号 " 60

41号 " 23

39号 " 64

36号 " 24

21号 " 66

54号 " 25

40号 " 66

15号 " 25

58号 " 67

33号 " 27

8号 " 68

31号 " 27

68号 " 70

34号 " 29

70号 " 71

24号 " 31

69号 " 73

2号 " 34

22号 " 75

5号 " 35

9号 " 76

29号 " 35

14号 " 77

3号 " 38

10号 " 78

28号 " 39

65号 " 80

4号 " 41

11号 " 81

37号 " 42

12号 " 82

35号 " 43

66号 " 84

46号 " 44

67号 " 85

44号 " 46

64号 " 87

48号 " 47

63号 " 89

47号 " 47

60号 " 90

6号住居址	47	61号住居址	91
51号 "	50	17号 "	93
43号 "	52	62号 "	94
19号 "	52	16号 "	97
7号 "	54	57号 "	97
2. 溝	104		
3. 集石址 (屋外焼石炉)	106		
4. 小 豎 穴	110		
第3節 平安時代以降の遺構	115		
1. 住 居 址	115		
2. 豎 穴 状 遺 構	120		
3. 33号土 塚	121		
第4節 第Ⅲ区低地の調査	121		
第Ⅳ章 遺 物	125		
第1節 縄 文 土 器	125		
第2節 弥 生 土 器 (弥生土器観察表)	126		
第3節 石器その他の遺物 (石器その他の遺物観察表)	221		
第4節 平安時代以降の遺物	269		
1. 住居址出土遺物	269		
2. 豎穴状遺構その他の出土遺物 (古代・中世土器観察表)	271		
第5節 植物遺体 (炭化種子類)	276		
第Ⅴ章 調査のまとめ	280		
第1節 石 器	280		
1. 石 庖 丁	280		
2. 砥 石	282		
3. 砧 石	285		
第2節 土 製 品	287		
1. 紡錘車と土器片円板	287		
2. 小形手捏土器	289		
第3節 弥 生 土 器	292		
第4節 弥生時代住居址と集落	300		
第5節 橋原遺跡における古代以降の様相	329		
第Ⅵ章 橋原遺跡における植物遺体からみた古代の農耕文化	332		
結 語	345		
あ と が き			

第 I 章 調査の概要

遺跡名 橋原遺跡（遺跡発掘No.18 全国遺跡地図No.1807 岡谷市史 文化財地図No.38）

遺跡の所在地 長野県岡谷市川岸橋原

調査主体者 岡谷市教育委員会

発掘調査期間 昭和53年7月25日～11月30日、54年3月5日～12月7日、55年5月1日～5月15日

出土品整理期間 昭和53年12月1日～54年3月4日、54年12月8日～56年3月20日

調査地点と調査面積 鉄道の用地内を3区に分け、岡谷から塩尻へ向って、第I区、第II区、第III区とし、各区ごとに用地内全面に2m四方の基準方眼でグリッドを設定した。グリッドの設定は、各区とも、新設上り線の測量杭を選定して、直線で結び基準線とした。上り線の長軸方向に、岡谷から塩尻へ向って、基準線から左側（山側）へ51・52・53…右側（川側）へ50・49・48……の数字を用いた。A～Yの25字で50mを1つの地区としておさえ、それを岡谷から塩尻へ向ってA・B・C……とした。したがって、それぞれのグリッドは「I BW45」というように表示される。これは、Iが第I区の略で、BW45はB地区のW45地点であることを意味する。

第I次調査は、用地内に遺跡がどの範囲に及んでいるかを確認するために各区のグリッドに合わせて10m間隔でトレンチを入れた（折込図）。

第I区 トレンチ16ヶ所（112グリッド分） 448m²

第II区 トレンチ42ヶ所（235グリッド分） 940m²

第III区 トレンチ15ヶ所（58グリッド分） 232m²

計1,620m²

トレンチによる調査は9月で終了したので、その後の調査については調査団会議を開き、関係機関との協議の結果、引き続き第II次調査として第I区北側から全面発掘に着手した。

第I区 355グリッド 1,420m²

第II区 891グリッド 3,564m²

第III区 24グリッド 96m²

計 5,080m²

総計 6,700m²

調査の方法 グリッドの設定については前項の通りである。遺物の取り上げはすべてグリッドごとにNo.を付して記録した。石器、石製品、土製品、復原可能な土器等は個々にNo.、レベル、出土位置、層位についてグリッド図（縮尺1/10）に記入してある。遺構内の出土であってもグリッド単位の記録で統一した。したがって例えば住居址竪穴の出土の遺物が見落としによって出土

位置不明の場合も、最低限 2m 四方のグリッド内には特定できる。なおグリッド図は天竜川をほぼ北方向として記述している。

遺物Noは、遺跡No・地区・グリッド・遺物No・遺構Noの順に記入されている。例を引くと、「18ⅡBY47・3・3H」は橋原遺跡第Ⅱ区・BY・47グリッド出土No.3，3号住居址ということである。

遺構の実測は遣り方測量であり、平板測量はしていない。報告書の個々の実測図中にはグリッド杭を記入していないが、全体図で判るようにしたので遺物の出土グリッドはそれで判読されたい。

絶対標高は国鉄岡谷工事区作成のベンチマークを利用した。

発掘中の観察事項は「発掘日誌」「住居址カード」を用いて、主として調査補助員と現場の正副主任が記録した。

発見された遺構 橋原遺跡は過去に正式な調査が行われたことがなく、諏訪史第1巻、岡谷市史上巻にわずかに報告されているのみであった。岡谷市史上巻では、橋原水源池の工事の際に出土した遺物を紹介し、弥生時代の集落があることを示唆していたが、今回の調査で弥生時代後期の住居址58棟が発見されて、大規模な弥生時代集落の存在が確認された(第3図)。

縦穴住居址	68 棟	縄文時代中期	1
		弥生時代後期	58
		平安時代～中世	9
溝状遺構	3 本	弥生時代	
集石址	1 基	弥生時代	
土 坂	8 基	弥生時代	7 その他 1
縦穴状遺構	2 基	江戸時代初期	

出土した遺物

種 別	器 種	点 数	
石 器	打 製 石 斧	150	
	横 刃 型 石 器	7	
	多 頭 石 斧	1	
	磨 製 石 斧	18	
	磨 製 石 鏃	6	
	磨 製 石 劍	1	
	石 庖 丁	14	
	砥	石	46
	石	皿	19
	敲	石	13
	凹	石	20

種 別	器 種	点 数
石 器	石 鏃	72
	石 槍	4
	石 錐	4
	石 匙	1
	ス ク レ パ ー	1
	穀 摺 石	1
石 製 品	紡 錘 車	1
	有 孔 円 盤	1
	管 玉	1
土 製 品	小 形 手 捏 土 器	20
	紡 錘 車	36
	紡 錘 車 (未 成 品)	9
	有 孔 円 盤	1
	土 玉	4
	勾 玉	1
	土 偶	2
土 錘	18	
ガ ラ ス 製 品	小 玉	1
鉄 製 品	ヤ リ ガ ン ナ	2
	鉄 片	6
土 器 (弥生土器)	壺	75
	甕	297
	台 甕	4
	鉢	14
	片 口 鉢	1
	甌	5
	高 坏	31
	坏	2
	器 台	2
	不 明	1
(土師器他)		43
(縄文土器)		1

○炭化種子類 米 46.8ℓ(2斗6升)
粟 3g以上
豆、麦、蕎麦、栗、ドングリ、(若干)

なお、土器類は実測図が作成され、掲載できたものの点数であり、大多数の破片は含まれていない。土器破片の総数は9,000点以上である。

出土遺物の整理 土器の接合・復原は、遺構内出土を主として行い、遺構外の出土土器片は数量が少ないこともあって、特にまとまって出土したものだけ復原した。セッコウによる補修は、形が壊れない程度に行い、器形全体のセッコウ復原はできなかった。

土器の実測図は復原されたものはすべて行い、復原未了の土器や大きな破片については、器形がある程度推測できるものはできるだけ実測した。

報告書の作成にあたって、遺物分布図の土器の出土地点は、原形を保って出土した場合は問題はないが、散在した破片の接合した場合は、最も量の多い破片の位置に出土位置を印して図示してある。バラバラの破片から拾い出して接合・復原した土器は出土位置を特定できないので図示していない。石器その他特殊な遺物は、現場での見落としがあり、全点の出土位置は図示されていないので理解願いたい。

遺物の説明は一覧表で行い、まとめについては第Ⅴ章で述べている。遺物に関する本文中の番号、遺物出土状態実測図の中の番号、図版の遺物番号は、すべて一覧表の通し番号を用いている。ただし、土器と石器その他の二つに分けて通し番号としている。図版中の番号はこの通し番号で示しているので、番号のぬけている遺物は実測図を掲載しなかったものである。

出土遺物の整理作業は次の分担で行った。土器の復原——高木保人、花村鈴江、山崎勝彦、土器の実測・トレース——野沢明子、花村鈴江、石器の実測・トレース——山崎勝彦、遺構図版・遺物分布図の作成——田中未央子。

報告書原稿の執筆は主として副団長・調査員・現場担当者が行い、遺物観察表は上記担当者が作成し、住居構造の分析を小沢由香利が、遺物分布図の分析を亀割均が行った。整理作業全般の総括は会田進、高林重水が当たった。

調査団の構成 調査を委嘱された岡谷市教育委員会は、次のように橋原遺跡調査団を組織して発掘調査の体制を整えた。調査の開始以来、調査団会議は15回を数え、報告書のまとめまで無事遂行することができた。(以下敬称を略させていただいた)

調査団団長は岡谷市史編纂室主任伊藤正和が当り、副団長に河西清光(岡谷東高校教諭)、宮坂光昭(諏訪市文化財審議員)、調査員に林賢(岡谷市文化財審議員)、武藤雄六(井戸尻考古館)、太田喜幸(岡谷南高校教諭)、岡田正彦(岡谷東高校教諭)、征矢鑑(諏訪二葉高校教諭)の諏訪在住の日本考古学協会会員の研究者をお願いし、中央道遺跡調査団から細川光貞、木下平八郎の応援を得た。また当市出身の岡谷市史(原始編)執筆委員戸沢充則(明治大学教授)に特別参加を願ってアドバイスをいただいた。

調査団事務局は教育委員会社会教育課に置いて、八幡栄一(教育長)、岡西良治(前教育長)

矢崎輝美（同次長）、胡桃沢伸平（社会教育課長）、武井正己（同前課長）、小口米男（同補佐）、上条重利、平出待子が当り、現場作業は主として会田進、高林重水が担当した。

発掘調査と出土品整理の作業を遂行していただいた諸氏は次の通りである。

吉村振一 花村鈴江 田中未央子 野沢明子 山崎勝彦 山田武文 三上徹也 小林深志
石守晃 樋口喜重子 中山賢嗣 小沢由香利 宮坂茂樹 亀割均 勝沼温美 森井孝 田中
正夫 高尾好之 青木和明 高林敬子 市村雄一 樋代明美 内藤正明 下田なつみ 井出
篤 花岡桂一 西沢一 小池一夫 矢島笛美 宮沢志郎 鮎沢真二 足助裕司 横内やよい
野村修治 平林朝治 滝沢志津子 山岡のり子 野沢季代 小口裕史 瀬戸達雄 横内真由
美 一ノ瀬昭弘 笠原康典 山田順子 小口智子 斉藤博子 織田享子 宮坂美和 福岡忠
博 山本佳子

小泉西男 小松亥之一 高木保人 浜幸助 陸川三郎 花岡貞男 清水喜造 山岡岩雄 大
槻周治 中島甫 岩本よし子 浜園江 浜まき子 清水うめ子 鮎沢静子 鮎沢八重子 中
村益雄 小坂茂富 西村松子 三沢要一 武居義弘 三沢ふくえ 有賀つたゑ 新井美智子
片倉長衛 浜隅子 横内信介 内藤正 松下永喜 宮坂和徳 飯塚井公子 佐々木とみ子
小口恵吉 丸山雅子

（岡谷東高校地歴クラブ） 山田美千代 宮坂美智子 羽場ふみ江 藤森元味 森田美智子
酒井孝子 大内和子 佐藤美江 浅田文子 長井美晴 田中みゆき 川手通子 斉藤順子
宮坂理恵 宮坂睦子 清水ゆかり 矢崎千鶴 松沢みどり 笠原智優美 堀川幸子 小沢陽
子 橋戸則子 山口さと子 浜宏美 小林みゆき 藤森稔子 永田智子 小口由美 藤森さ
つき 富井淳子 岩波身江 新海智子 林美奈子 今井一子 上原美香 宮坂香代 佐藤美
景 大島典子 浜順子

（岡谷南高校歴史クラブ） 清水昌夫 田村浩 林敏幸 向山裕喜 上原正彦 赤沼三雄
（諏訪二葉高校地歴クラブ） 稲垣由美子 根橋恭子 小松美那江 浜ひろみ 今井洋子
小口貴子 小口峰子 小池安子 小飼きくよ 溝口晶子 伊藤順子 小坂真貴子 両角啓子
内海啓子 有賀さえ子 三井要子

（諏訪清陵高校地歴クラブ） 小池千尋 今井清文 両角浩志 小林洋一 小海健治 小林
重雄 西川俊夫 浜善久 小平進 杉本誠 赤羽俊昭 野沢重典

（諏訪実業高校地歴クラブ） 大沼由香里 浜まゆみ 高林郁子 小口智也子 八木佳子
金原明美

岡谷西部中学校クラブ生徒

諏訪西中学校クラブ生徒

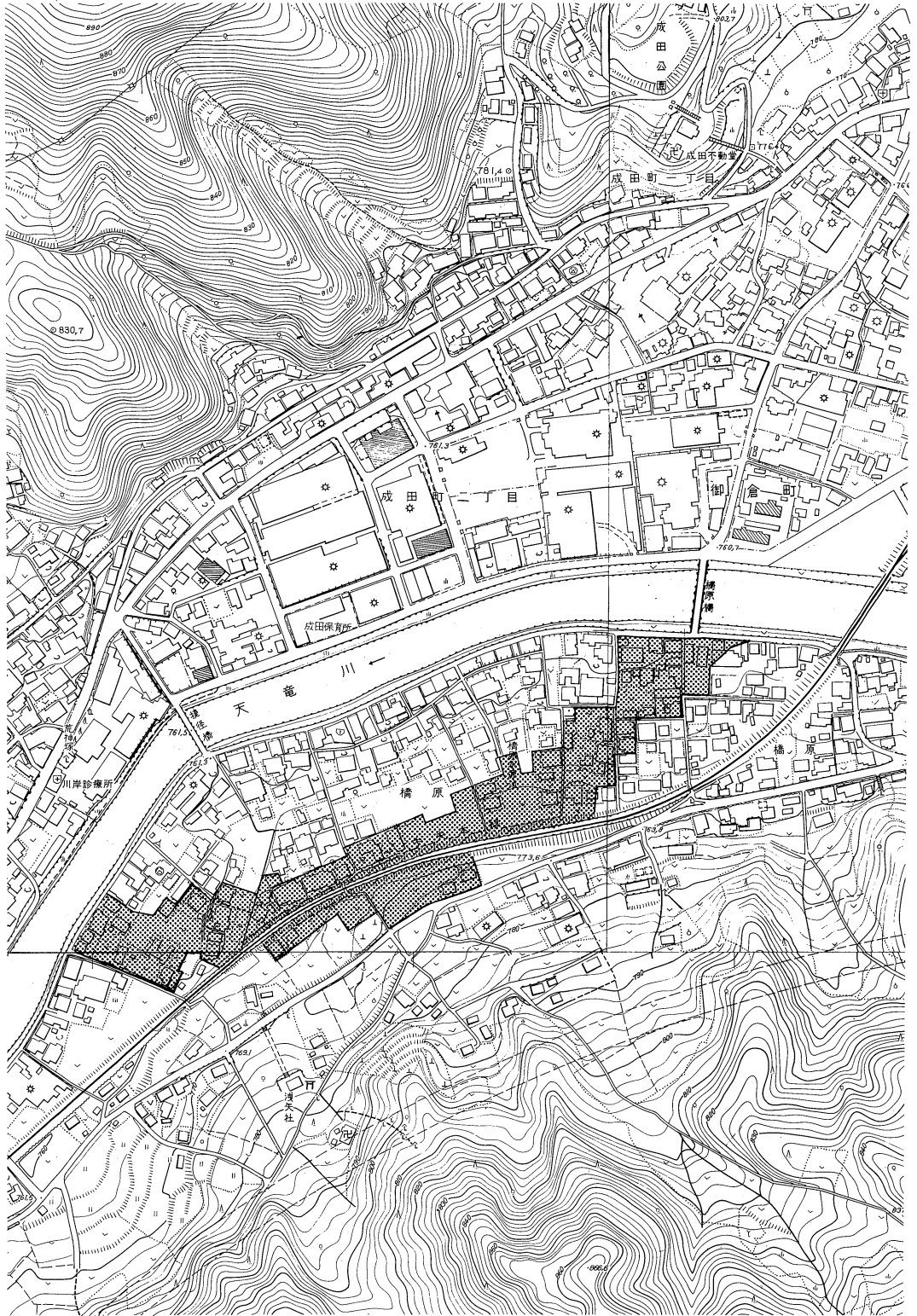
第II章 遺跡の位置と還境

橋原遺跡は岡谷市川岸橋原区にあり、諏訪湖より流れ出ずる天竜川の源から約1km下った左岸に位置し、背後には赤石山系から連なる峰々が迫るその北向き斜面に営まれている。現在この付近は、崖錘地の中央付近を国鉄線路と鎌倉街道が通り、近年の宅地造成ブームによって今でこそ線路から山側の高台が宅地化されてはいるが、戦前までは天竜河岸のわずかな平坦地に人家が集中していた。遺跡はこれら近世の集落と重複して存在している。(第1・2図) (写真1)



第1図 橋原遺跡の位置(○印1/50,000)と周辺の弥生時代遺跡

1. 庄の畑
2. 天王垣外
3. 横道
4. 岡谷丸山
5. 海戸
6. 岡屋
7. 志平
8. 長塚
9. 後田原



第2図 橋原遺跡発掘調査地区図(1/5,000)

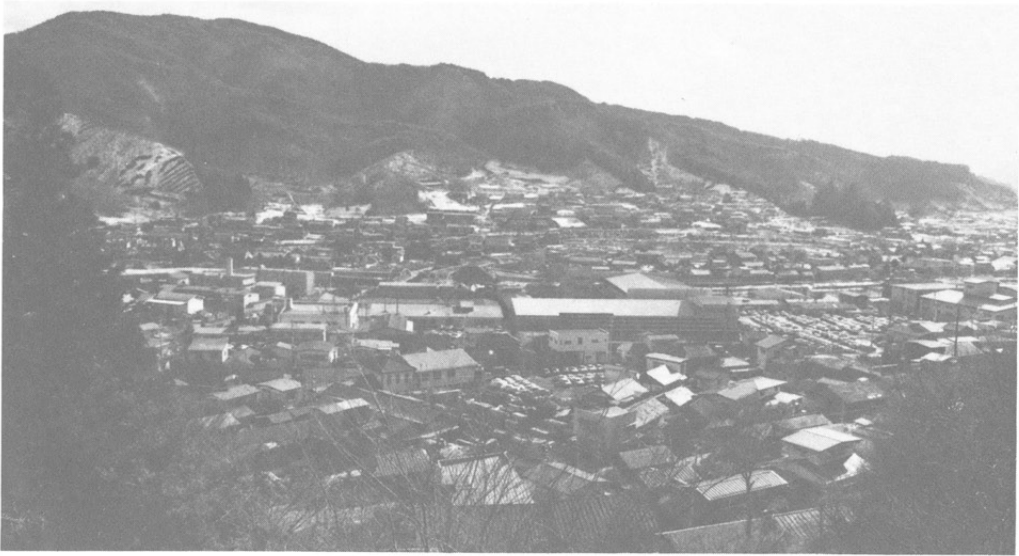


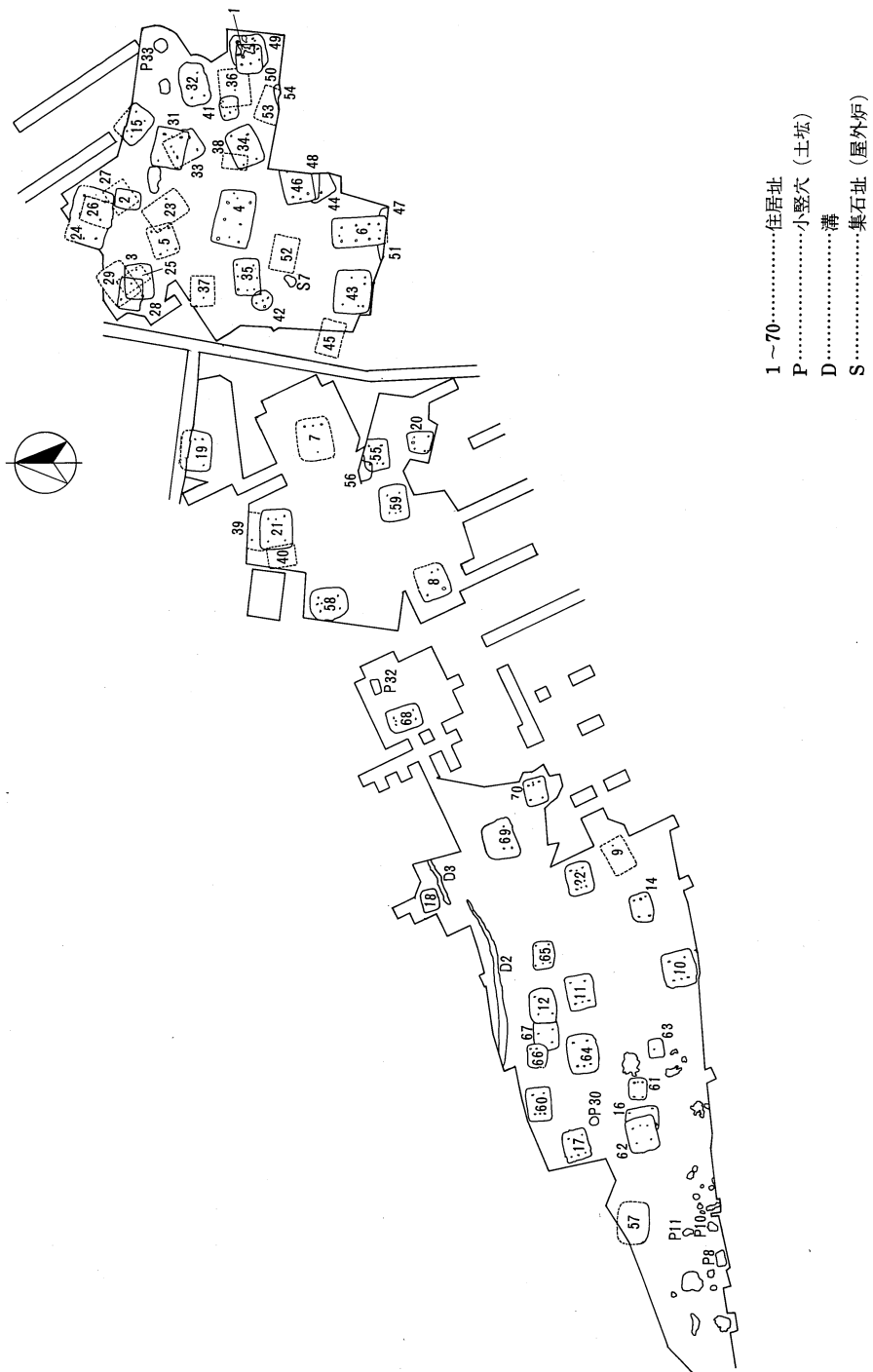
写真1 遺跡遠影

このあたりは、伊那谷への入口に当り、河川が交通の大きな役割を持っていた昔から重要な地点で、経済、文化等もこの地を通らずには諏訪地方へ持ち込まれなかったであろうし、伊那地方への進出もできなかったものと思われる。

橋原地区にはいくつかの崖錘地形があり、それぞれに遺跡の存在が知られている。当遺跡の直ぐ西側、今回の調査の第Ⅲ区の山際には、洩矢神社のまつられている崖錘地があり、縄文時代・平安時代の遺跡となっている。ここから直ぐ西側には経塚原と呼ばれる崖錘地があり、縄文晩期・平安時代の遺跡となっていて、さらに西側には志平沢による小扇状地があり、縄文時代・弥生時代・平安時代の遺跡となっている。これら3つの遺跡は昭和52年の中央道建設に伴う発掘によって明らかにされ、土地の狭い当地方での遺跡の在り方が提示された。

洩矢神社の崖錘地の北側、つまり今回の調査区の第Ⅲ区から志平沢の扇状地までは、天竜川の蛇行でできたと思われる平坦地が広がり、江戸時代には一面に、水田耕作が行われていた。

天竜川をはさんで、対岸には岡谷駅前周辺に横道遺跡、その直ぐ東側に海戸遺跡があり、いずれも伊那口にある弥生時代の大集落であり、西からの弥生文化の東進をいち早く受け入れることができる地理的条件にあったと言える。



第3図 遺構全体図 (1/1200)

第三章 遺 構

第1節 縄文時代の遺構

42号住居址(第4図)

本址は橋原遺跡において発掘された、唯一縄文時代の住居址である。褐色土層を掘り込んでいるため、全周囲の壁を検出することができたが、確認面が低く、残存壁高はわずかであった。

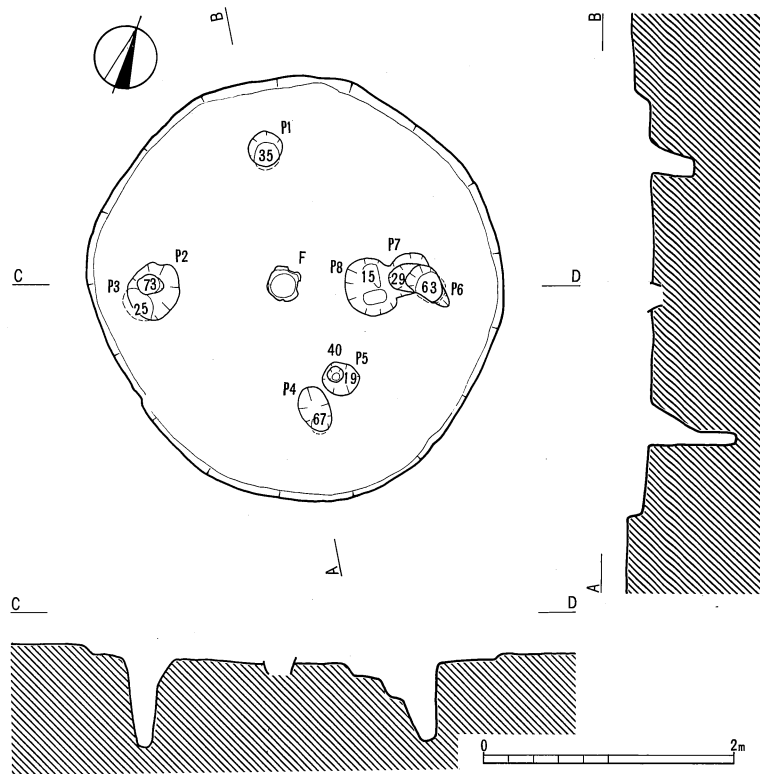
竪穴の壁は鍋底状で形状は略円形で径3.4×3.2mを測る。ほぼ中心にある埋甕炉の北側には、わずかに堅緻な床が検出できたが、全体に褐色土の床面にタタキはみられず、覆土が黒色土のため、色

の差で床面とわかる程度であった。中央部に長方形の攪乱があり、一部床面まで達して、埋甕炉の土器の上部を壊している。

柱穴は4本検出されたが、他は攪乱のためあまりはっきりしない。最初に検出された東南のP₄は、柱の周囲にローム混りの褐色土を堅く詰めた形跡があり、黒色土の落ち込み、すなわち柱の太さは径17cmを測ることができた。柱穴下底部は外側にズレるが、柱の跡は外側に寄っていた。P₆・P₇・P₈は、本址が少なくとも3回は柱の建替があったことを示している。

遺物はたいへんに少なく、磨製石斧(定角式176)1点である。

埋甕炉は、土器の内外に焼土が見当らず、炉の掘り方は径50cm位であった。炉の土器の型式は中期の後田原式土器であり、新道式に相当する。



第4図 42号住居址実測図(1/60)

第2節 弥生時代の遺構

1. 住居址

1号住居址（第5図）

調査の経過 本址は黒色土層の上部近くに構築されていたため、現代の工場建築の際の攪乱によって遺構のほとんどが失なわれていた。

遺物は、わずかに残っていた床面上に集中し、土器破片が主で甕の底部(1)が1点出土した。そのほか土製の紡錘車が1点(379)発見されている。

床は、ローム粒を多量に含む黒色土で堅く二重の部分もあった。

遺構 アメーバ状に残っていた床面以外、確認できなかった。その他、焼土および焼土の周辺に人頭大の石があり炉ではないかと思われたが、後世のものであることがわかった。

なお、49住、50住との重複があるが、新旧関係は49→50→1住(古→新)である。

50号住居址（第5図）

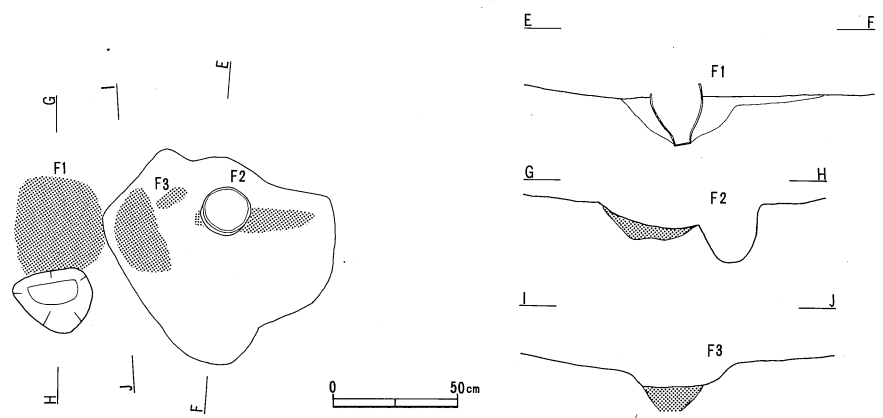
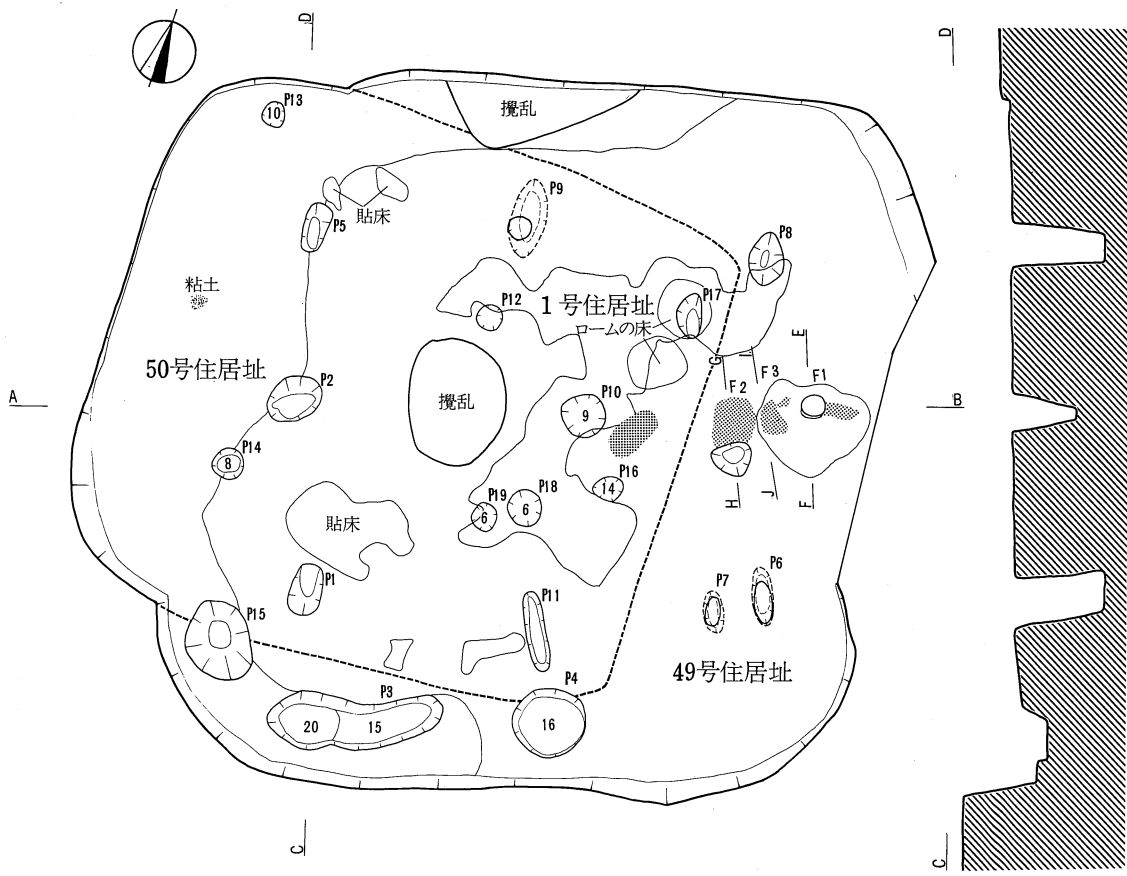
調査の経過 49住の竪穴を検出する過程において、西側落み込みが不自然に張り出し、その部分の黒味の強い褐色土が略正方形に49住覆土を切るように認められたため、一期新しい重複する住居址50住として発掘した。竪穴プランは、第一次調査で1住調査のためBM列トレンチを発掘しているため、北東コーナー付近を除いて、なから確認することができた。

遺物は、覆土内には非常に少なく、主な遺物は床面およびその近くで発見された。まず、壺の胴下半部(266)が南西コーナーの壁下床上から出土、1住構築に際し、上半分を削られたような状態であった。その他に覆土内から石製紡錘車(380)や小型手捏土器片(424)が発見されているが、まとまった形で出土した土器はない。

遺構 竪穴の平面形は隅丸正方形に近く、主軸は東西方向と思われるが、炉が検出されていないのはっきりしない。床は、西壁際外区と北壁際の一部には堅い床が見られず、中央から東側が堅い床となっていた。床は49住床面まで達していず、その差は1.5cmほど上で貼床となっている。部分的にロームの貼床が見られる。

支柱穴は、P₁₄・P₁₉の二ヶ所のみ検出された。P₅はあるいは49住と重複するのであろうか、正方形に近い四本柱の配列に構成されるとすればP₁₉またはP₁₈を柱の跡と考えてよいのではないか。

東壁際のほぼ中央に浮いた状態で焼土が認められた。床は焼けていたが、攪乱の下であり、あるいは炉であるかどうか確証は得られなかった。もしかすると中央の攪乱によって炉が無くなっている、とも考えられる。



第5图 1・49・50号住居址实测图(1/60)、49号住居址埋葬炉实测图(1/30)

49号住居址（第5図）

調査の経過 1住の床下に、新たにもう一枚の床が検出され、当初は貼床とも考えられたが、1住床の16～20cm下であり、支柱穴と思われるピットが床下に入り、炉と思われる焼土も発見され、新たな住居址であることが判明、49住とした。

竪穴は黒色土層を掘り込んでいたが、50住に切られた西壁と道路敷に入る東壁の一部を除いては明瞭に検出できた。

遺物は、竪穴確認の段階では土器片の出土が多かったとはいえ、大部分後出する50住覆土の出土ということであり、本址の主な遺物はわずかに炉のすぐ北側床上に甕（259）2/3個体が、二つに分れて潰れた状態で出土したぐらいである。

遺構 竪穴プランは隅丸正方形に近いのであるが、支柱穴はP₁・P₁₁・P₆・P₈・P₉・P₅の6本が長方形の配列になっている。支柱穴の掘り方は6本とも楕円形で、P₉は径18cmの柱痕が見られ、まわりは堅い床が貼られていた。P₆とP₇は、P₆が支柱穴でP₇は支柱穴と思われる。

床は、西壁際外区と北壁際40cmの中が軟らかい床である以外は、比較的堅いしっかりした壁下まである。床は黒色土をタタキしめている。

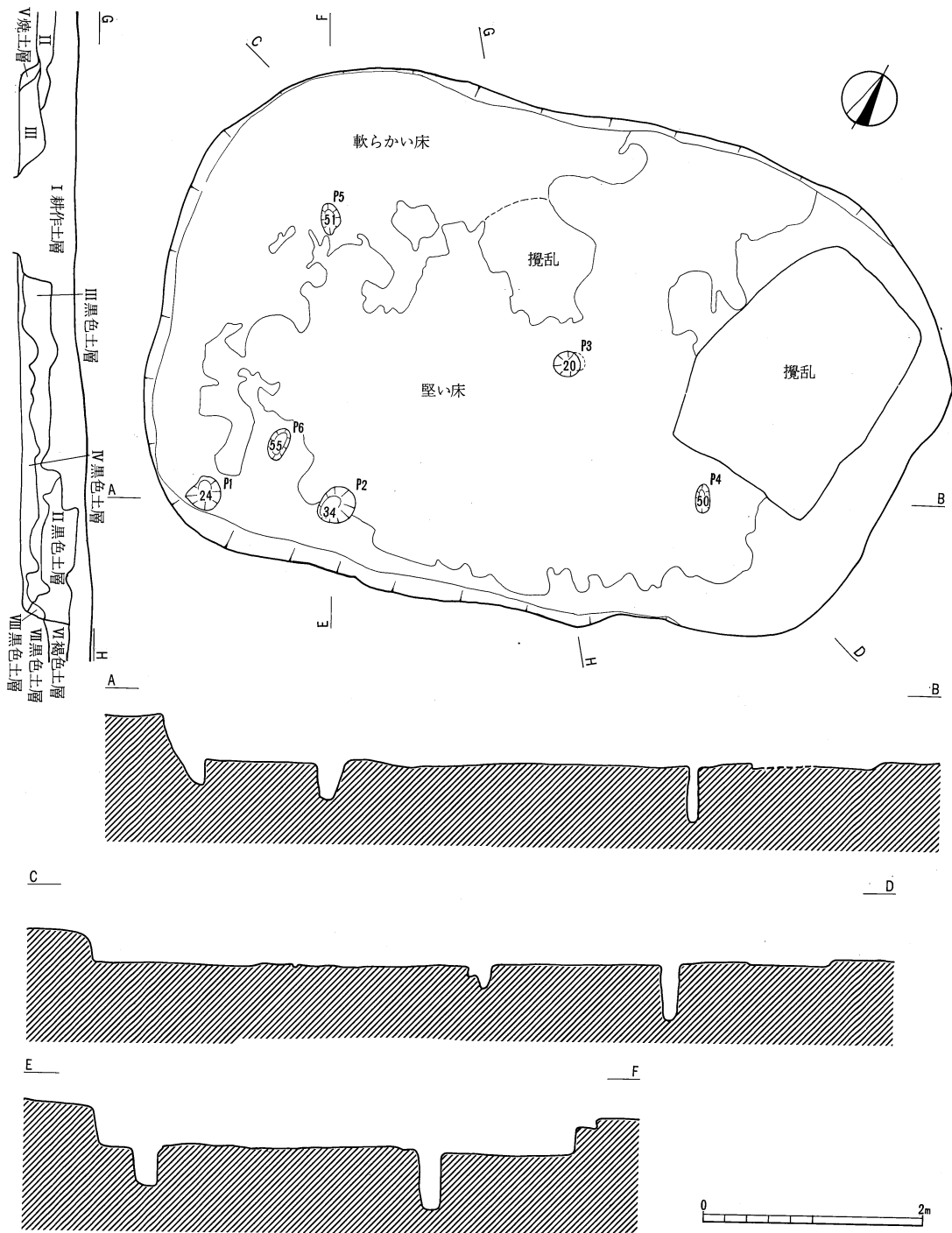
壁際のピットは南西コーナーのP₁₅・P₃、南壁中央のP₄の三基がある。P₁₅上面に砥石が出土し、P₃上面には（床上10cmのレベル）焼土がのっていた。内区中央付近に底の浅い凹みP₁₆があるが、間仕切り柱穴であろうか。ただし支柱穴を結ぶ線上からはずれる。また支柱穴P₁とP₅を結ぶ線の上にあるP₂は、位置的には西側の炉としてもよいものの、焼土もなく、深さ、形態からすれば柱穴であり、今後の検討を必要とする。

炉は三ヶ所重複して検出されている。F₃は焼土の在り方からみて、炉の土器が抜かれた埋甕炉であったと推察される。F₂は貼床で埋められていた。床下より土器片多数が出土しており、これも埋甕炉であった可能性が強い。F₁は甕（264）頸部以下を正位に埋めた埋甕炉である。炉の土器の周囲は床がなく焼土と炭化物が散在し、炭化した栗が出土している。F₂に接するピット内には焼土が混じる。

このように本址は炉の状態や、柱穴の在り方等から、また49→50→1住（古→新）という三棟の重複から、かなり長期間、何回か建直しをしながら居住したことが推測される。

32号住居址（第6・7図）

調査の経過 本址は重複関係の全くない住居址であったので、竪穴の検出および覆土の掘り下げは容易であった。覆土は、他の住居址と同様で白色粒子を含むやや褐色味を帯びた黒色土で軟らかい。竪穴の縁に焼土が点々とめぐり、火災に遭った住居址であることが当初より予想されていたが、はたして床上10cm内に多量の焼土とともに炭化材が検出された。炭化材は、角材または丸太材と思われるものが中心に向うような在り方を示し、焼土とともに分布が大きい。



第6図 32号住居址実測図 (1/60)

く東西に二分されている。これらのことから本址は火災によって廃絶した住居址で、原位置倒壊であると判断される。また発掘の所見から、火災終息間際に土盛消火を施した痕跡も考えられた。

遺物は覆土中および床面近くで発見された。まず、南西コーナー床上で完形壺(180)と甗(183)が並んで出土し、北西柱穴東付近で甕(182)が、

南東柱穴西の床面上で器台(184)の脚部が発見されている。遺物は総体的に西側に多く、西壁下の床面には相当量の粘土塊が放置されていた。この粘土は全く焼けていない。

石器類は打製石斧2、石鏃2、石槍1が出土したが、すべて攪乱部や覆土上部であった。床上からは鉄製品二点が出土した。北東コーナーに近い北壁際の堅い床上にあり、一点は鉈の完形品(455)、一点は同先端部破片(456)であるらしい。

遺構 主柱穴P₄・P₅・P₆は長方形の配列を示し、長楕円形に掘り込まれていた。内区中央の柱穴は1本(P₃)だけ検出されている。

床は南側が堅い床で、北西と北東コーナーが軟らかい床である。内区中央から北壁下まで細長く堅い床がのびている。壁際の東西壁は10~30cmが残存し、壁際には堅い床が見られなかった。入口部は西北西の位置か、南西コーナーのP₁・P₂を入口施設と考えられる。

本址には、主柱穴のほかにP₁・P₂・P₃しか検出されていないが、いずれも炭化物が遺存していた。

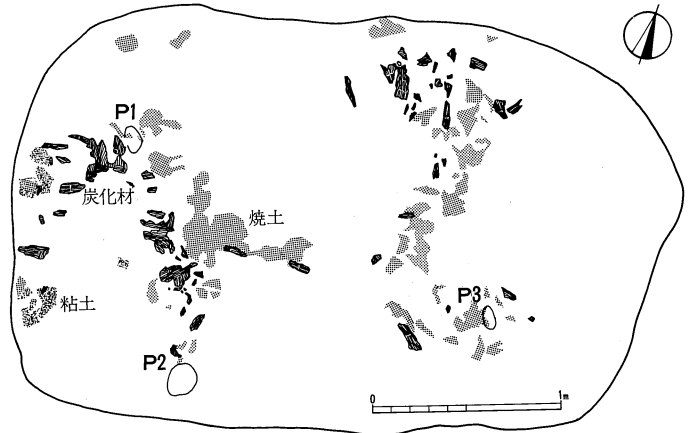
炉は攪乱部分にあったのか検出されなかった。そのかわりといつては変であるが、他の住居址であまり見られなかった鉈2点の発見と粘土塊の多量な遺存は、生産活動を考える上で重要な示唆を与えてくれるであろう。

41号住居址(第8図)

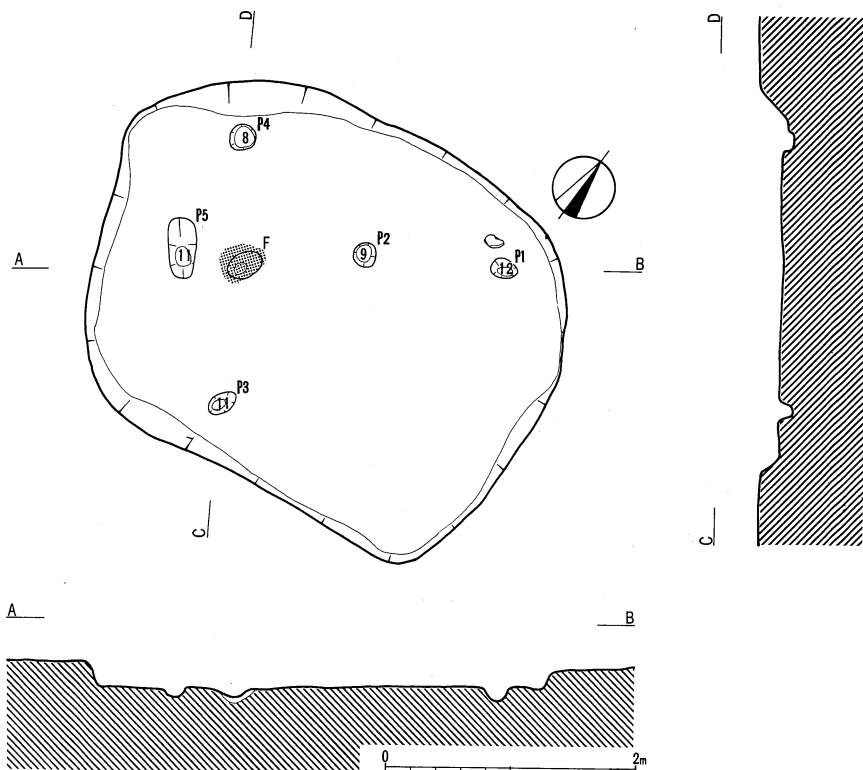
調査の経過 本址はプランの東コーナー上に36住の張床があったほかは、比較的良好な状態で遺構の検出は容易であった。覆土の状態は一般的な堆積を示していた。

遺物は、東壁際の床上4cmから台付甕(223)が1点発見されただけで土器破片も少なかった。

床は、非常に良好であったが壁際になるにしたがい軟らかくなっていた。壁は、北壁があまり明瞭でなかったが、それ以外は10~20cmの高さで全周していた。



第7図 32号住居址焼土と炭化材の出土状態(1/40)



第8図 41号住居址実測図 (1/60)

遺構 主柱穴は $P_1 \cdot P_3 \cdot P_4$ が確認されたが、 P_3 だけが位置的にずれて三本柱の状態であり、疑問が残らないでもない。

床は、すでに述べた通りであるが、最も特徴的なのは住居址の西側で $P_3 \cdot P_4$ 線上よりやや内寄りに切られた地床炉である。炉の西寄りには、長方形のピットがあるが、中央北壁寄りの P_2 とともに性格は不明である。その他、入口部の位置も確認することは不可能であった。

36号住居址 (第9図)

調査の経過 本址は表土を掘り下げていく過程で遺物の出土が多く最初から注目されていた住居址である。

覆土の部分は相当に攪乱されていたが、堅い床も残っており、それを基準にして発掘を進めた。遺物は覆土が攪乱を受けている割には多く、炉の南側付近に集中し、その中に大きな砥石 (198) が置かれていた。また完形の紡錘車 (384) は、南壁際の床面レベルから出土している。

床は黒色土であり、堅い部分と軟らかい部分とがあるが、軟らかい部分は攪乱によるものではない。

遺構 主柱穴をはじめピット類は一個所も検出できなかった。

床は埋甕炉の南側と北側に堅い部分がある。東北コーナーの軟らかい床の部分が屋内倉庫、南西コーナーの軟質床が入口部と想定可能な状態を示している。

炉は埋甕炉(214)であり、壺の頸部を正位に埋没していた。焼土は土器の周囲に5cmの厚さで若干見られた。本址のように炉がプランの中心近くにあるのは例が少なく、これをいずれの壁際に想定しようとしてもプランが成立しない。まだ若干の問題は残るが中央部に堅い床がなく、そこに炉がある住居構造だと断定しておきたい。

54号住居址 (第10図)

調査の経過 53住(平安時代末)の床面調査中に落ち込みが確認され調査したもので、褐色土層に掘り込まれていたため検出はスムーズに行われた。

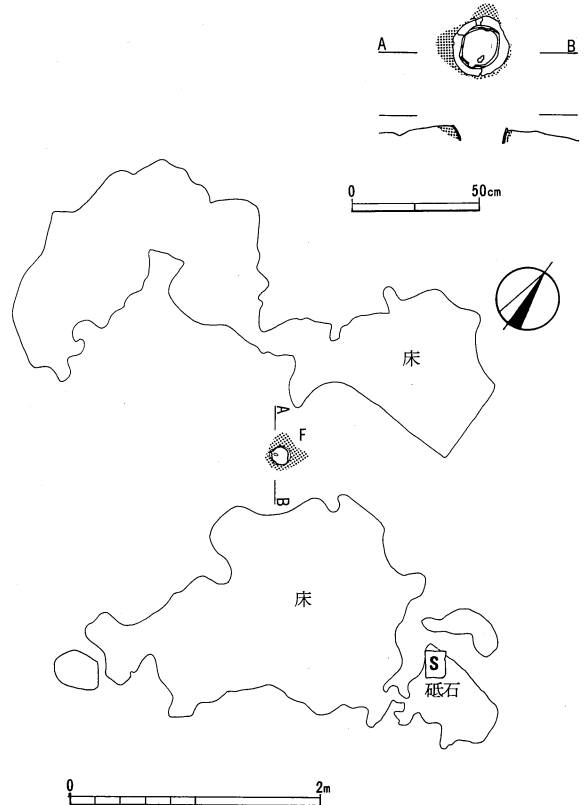
遺物は極めてわずかなため住居址の時期決定にこと欠く状態であった。

床は褐色土であるため容易に判別できたが、調査面積が限られたこともあって支柱穴P₁を検出するにとどまった。

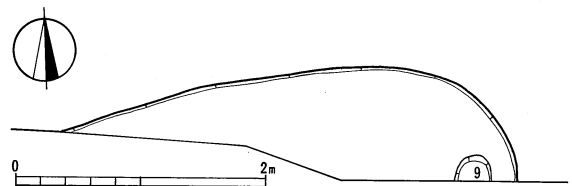
側壁は東西3.5~南0.9mで高さおよそ10cmを確認した。

15号住居址 (第11図)

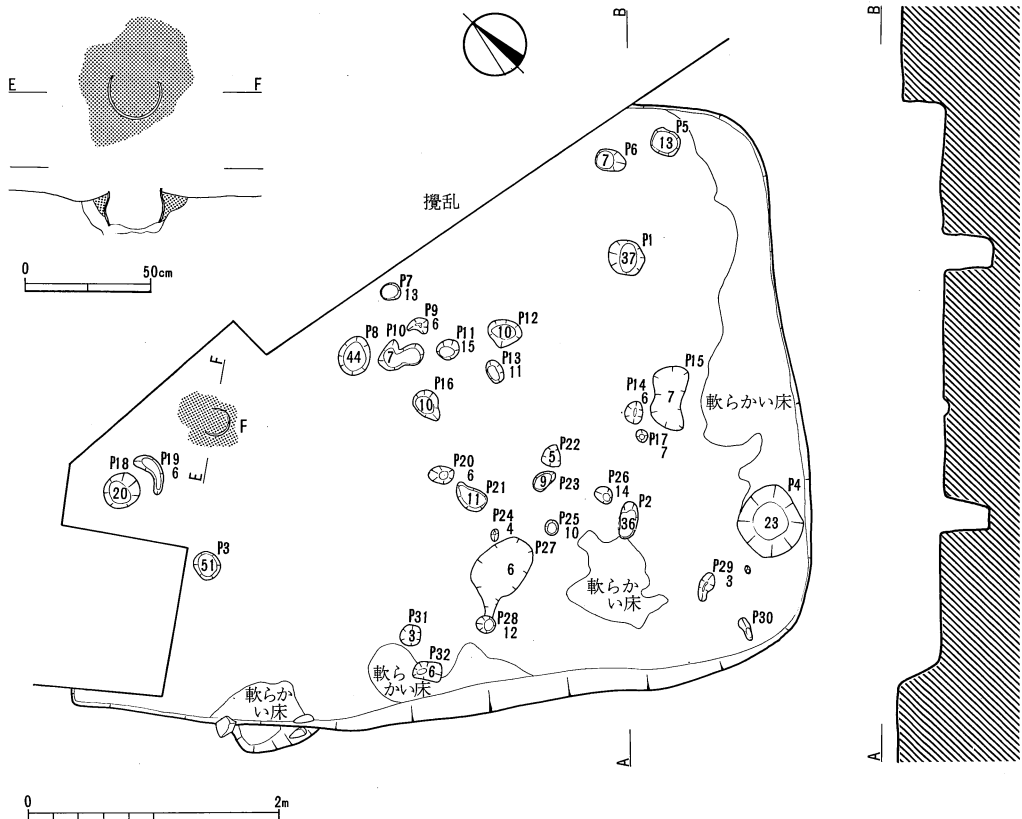
調査の経過 本址の調査は当初、BM・N-53・54グリッドに多量の土器片と一括土器が出土したため、遺物の分布により竪穴の位置を想定して調査した。その結果、東側では若干東方に分布範囲がずれたが南側では竪穴内に集中していた。本址において、遺物の分布範囲により竪穴の存在を想定することの確率度の良さを確認できた。ただし、確認調査の推定位置とは大きなずれが生じてしまった。



第9図 36号住居址実測図(1/60)、埋甕炉実測図(1/30)



第10図 54号住居址実測図 (1/60)



第11図 15号住居址実測図 (1/60)、埋葬炉実測図 (1/30)

南壁側は覆土の掘下げと同時に褐色土層上面で壁の落込みがきれいに検出されたが、北側は宅地造成の時に削り取られていた。

一括土器は、南西コーナーに甕 (86) の口縁の一括破片が、南壁際の中央付近に中型甕 (82) の胴上部が、また、東壁際の中央近くに底部を欠く甕 (81・83) がつぶれた状態で出土した。これらは、床上 50cm の覆土上部に集中し、床面近くにはまとまった土器が遺存していなかった。

床は、褐色土層の下の黒色土中にあり、全体的にやや堅く、主柱穴を除き 27 の大小ピットが南半に集中していた。このことは、間仕切りの存在と屋内倉庫などを考える上で重要な示唆を与えているといえよう。

遺構 主柱穴 P₁・P₂・P₃ は、1ヶ所未確認ながらプランと同じ長方形の配列を示す。床は前述した通りであるが、南壁中央の P₂₈・P₃₁ との間が入口部と思われる。

壁際のピットは南東面に P₄ があり高坏片、土器片、磨製石鏃 (177) などが検出された。また、南壁を削り 3 個の石を配したピット状の遺構は性格が異なるようであった。

炉は埋葬炉であるが、炉の土器 (88) は西側が大きく欠けて、縁が全周しない。焼土は欠けた方向に広く、その方向に床のない部分が続いている。

33号住居址（第12・13図）

調査の経過 31住の発掘中に新たに検出された本址は、北側の炉F₁付近および北東コーナーに多く集中する。炉の南側の床は凹凸が多く黄色土の貼床が存在し、33住がより新しい根拠となった。

西壁は31・33両住居址の重複具合が不鮮明であり、壁際の床も検出できなかった。壁下に粘土塊が置かれている。南側および東側壁は比較的明瞭であったが、東側の31住との重複部分が若干不鮮明であった。東側の床面は良好に検出され、南東コーナーの床面上に小形甕と漆製品と思われる赤色の薄波状の物が床面に貼付いていた。また南壁中央近くでは、当初より炭化物の出土が多く、床面精査の段階で埋甕炉F₂が検出され、南北2基の炉となった。

遺構 支柱穴P₅・P₆・P₇・P₈は不整長方形の配列を示し、P₅以外は長楕円形で2穴の重なりを示している。

床は西側で壁に沿って不規則にぬける。P₈部分の四角な掘り込みは後世のものである。貼床はF₁からF₂の間に西に開くコの字形に巾90～150cmの帯状にあり、F₁やP₅・P₆の上には貼られていない。コの字形の中央部には3本の柱穴が2列に並ぶ（P₁₂・P₁₃・P₁₄とP₁₅・P₁₆・P₁₇）。本址と31住との床面の段差は全くない。

壁際のピットは、西壁際にP₁₉があるが柱穴様であった。

炉は埋甕炉であり、F₁（189・194・197）は、土器の埋設が複雑で焼土も厚く長年月の使用が考えられるが、F₂（193）は埋設してからあまり使用しなかったようである。また、F₂の傍には炭化物を多量に含むピット状の部分があるが、性格は判然としなかった。

31号住居址（第12・13図）

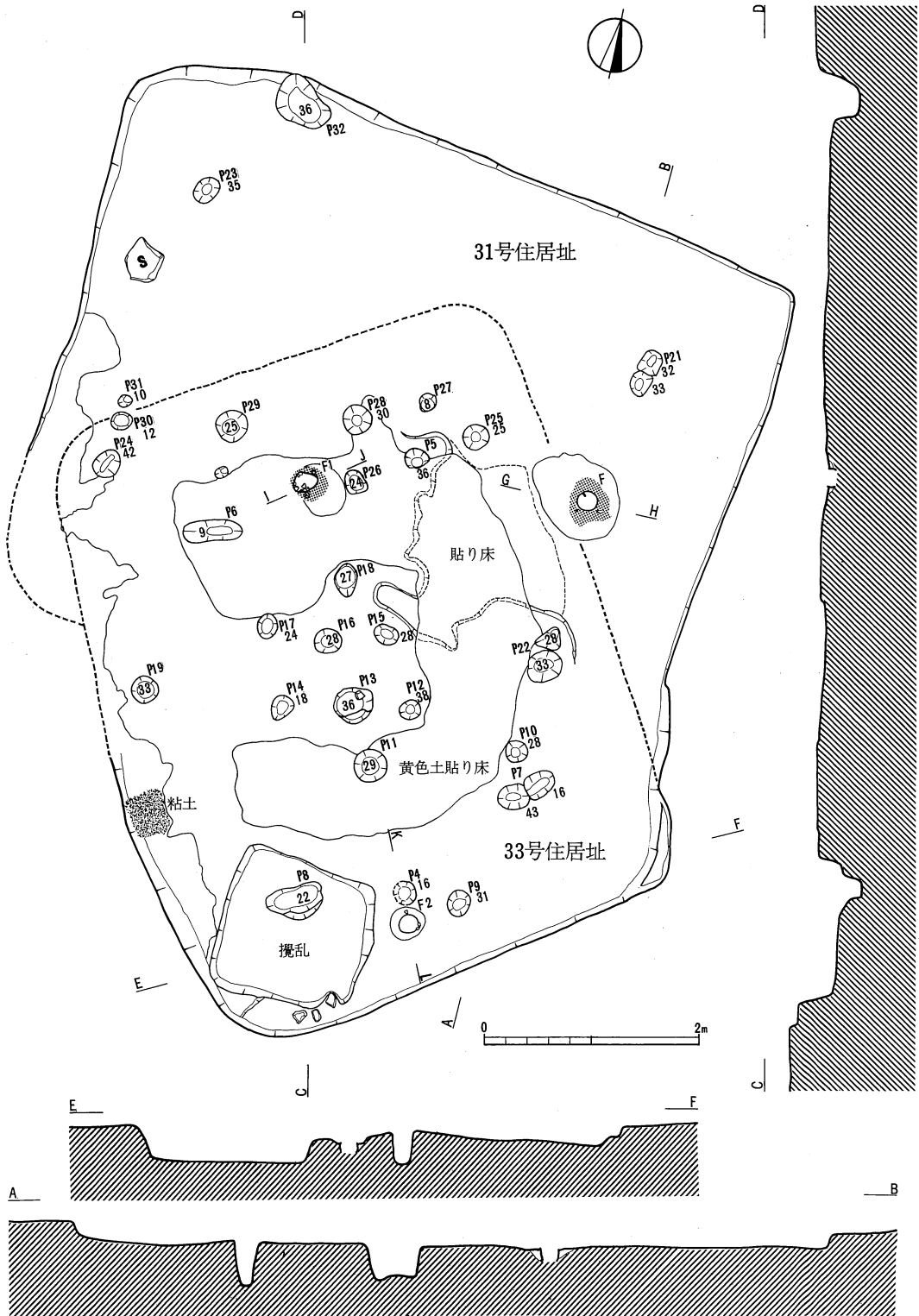
調査の経過 本址のあたりは工場の建物下にあたり相当な攪乱があったため、表土と攪乱層を排除する過程で相当量の土器片が出土している。プランは、黒色土層中に、より褐色の強い覆土の落込みを確認して調査した。調査の途上で、東側壁が直線にならず、また、東壁際の中央部に埋甕炉が検出され、貼床が南側に広くのびるなど、31住に貼床する33住の存在が確認されたため、覆土遺物の処理に若干の混乱を生じた。即ち、中央部から集中的に出土した一括土器と石器類の大半は33住の覆土遺物であろう。

西側の壁は床面近くまで掘り下げても判然としなかった。西壁際の床面から大型の砧石(243)が出土した。堅い床面は全体にあるが、褐色土を削った状態で特に堅緻ではない。

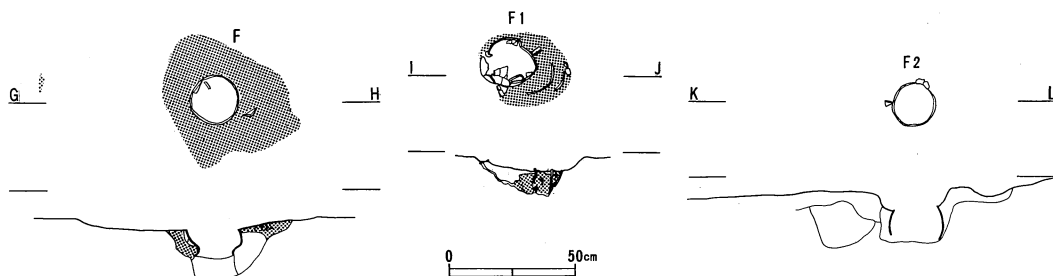
遺構 支柱穴P₂₁・P₂₂・P₂₃・P₂₄は不整長方形の配列を示し、円～偏または長楕円形に掘り込まれ、P₂₁・P₂₂は重複が認められる。

床の中央には間仕切りの柱穴P₂₅・P₂₈・P₂₉が直線的に並ぶ。ただし、主軸とは方向が若干ずれる。壁際のピットは北西コーナーにP₃₂があるが、柱穴様で特殊なものとは考えられなかった。

炉は埋甕炉で甕（176）を逆位に埋め込み、土器の周囲には焼土が厚く詰まっていた。



第12図 31・33号住居址実測図(1/60)



第13図 31号住居址埋葬炉実測図(左)(1/30)、33号住居址埋葬炉実測図(中・右)(1/30)

34号住居址 (第14図)

調査の経過 本址は38住の下にある住居址で、土器片の集中的出土で存在を予想されていたが、38住の床をはぐと床面を思わせる堅い塊がブロック状に散在し、床面かどうか判断に迷わされた。結局これは攪乱坑を先に掘って30 cm下に床面を確認することができたが、このような堅い覆土は他の住居址にもしばしば見られるので、埋没過程に何か特殊な事情があったと想像される。

遺物は内区中央部あたりに石包丁(183)、打製石斧(19)、石鏟(302)が各1点、西壁中央付近に砥石(209)、北東コーナーの壁中に大型打製石斧(18)が各1点、南壁中央下に紡錘車の未成品1点(416)が出土した。比較的覆土上層に多く、石器に対し、まとまった土器の出土は少なかった。

床面付近では北東コーナーのP₁そばに小形甕(201)が床上10 cmから出土しただけである。この近くのP₂内からは土器底部が見つかっている。

遺構 床面は全体に堅く良好であるが、壁近くではやや軟弱になる。

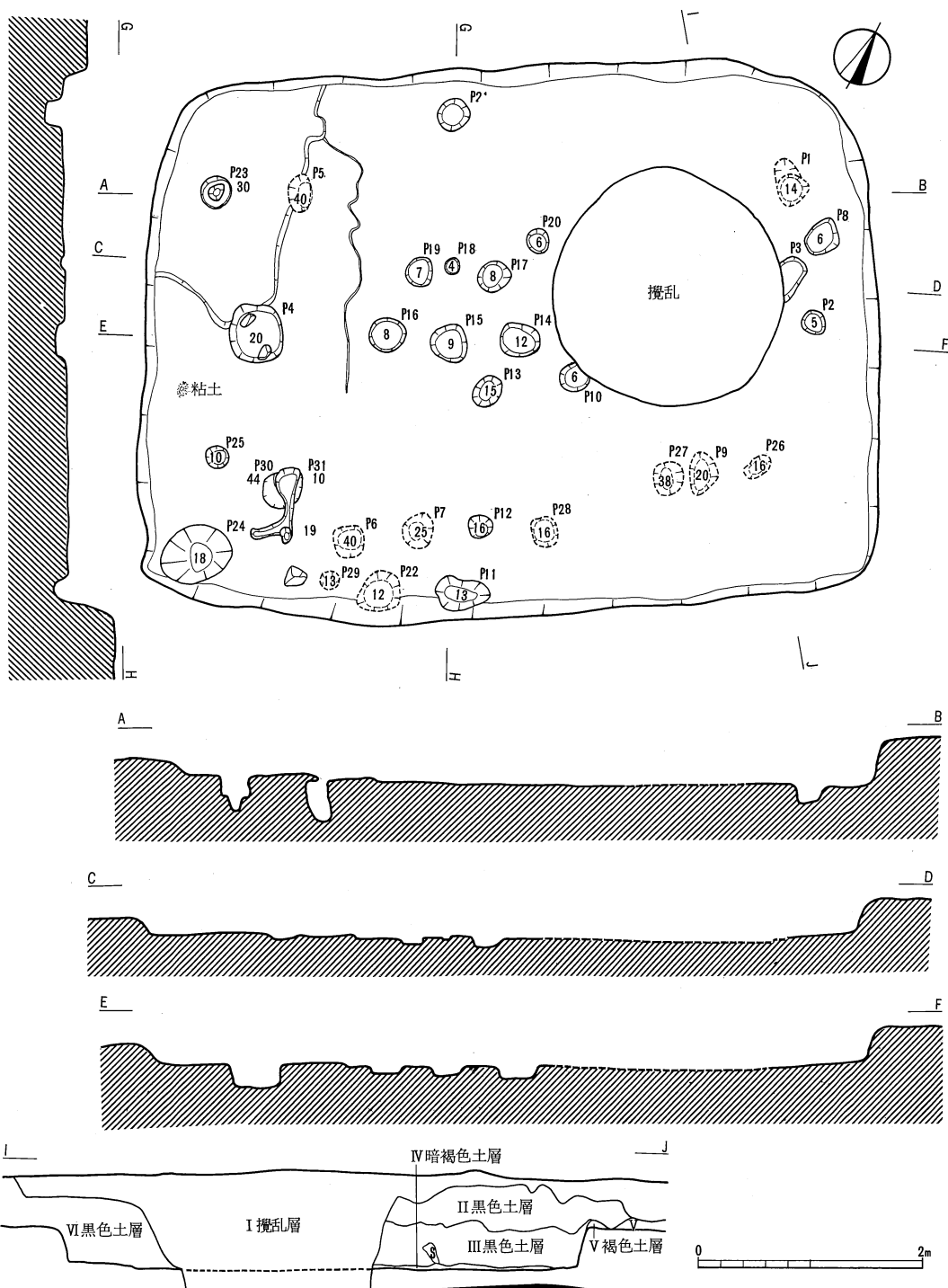
ピットは31個の多き数になったが、支柱穴は、P₁・P₅・P₃₀・P₉としてみたが、P₁は長方形の組み合わせからずれている。多分P₁の内側に存在して、攪乱坑により取り壊されていると考えられる。内区中央の東西方向に並ぶピット列と、南壁際に並ぶピット列は、室内間仕切りあるいは壁際棚状遺構として検討する必要があるだろう。ただし南壁際ピット列P₆・P₇・P₂₆・P₂₇・P₂₈は床下(貼床されていた)にあり、建直しを考えねばならない。

本址の炉は、東側にあったと思われるが攪乱坑で完全に抜かれ、一方西側柱穴間のP₄は、焼土と炭化物の存在することから、埋葬炉の土器を抜いた跡ともみられる。なおこのピットには両側の壁に石がおかれており、埋葬炉が存在したとするならば、注意すべきものである。

北西のコーナーに床面の段が三段検出されている。上段と中段が6 cm、下段と床面とは4 cm全体でも8~10 cmとそれほどの段差ではないが、床面の造り直しによるものか、所謂ベット状遺構と称されるものに近いものか、明確には言明できない。P₅はこの上段の床面で半分貼床されていた。したがってかなり細長い柱材(板材)を想定しなければならない。

この住居址は全体的に炭化物が多く、一部ワラ状炭化物も認められているが、火災にあった

住居址との観方もいま一つ積極的資料に欠ける。



第14図 34号住居址実測図(1/60)

24号住居址（第15・16・17図）

調査の経過 本址は発掘地域内では最も天竜川に近い住居址（現河岸まで37m）であり、最大規模の住居址である。

I区の北西隅は、発掘当初から遺物が多く、とくに土器破片は2住周辺の拡張の際に、27住の土師器片などと共に、多量に弥生土器片が出土し、24住周辺の全面発掘調査の端緒となったほどである。竪穴検出面の段階では24住に重複する27住・26住のカマドと思われる焼土とその周辺から土師器が集中的に出土した。

竪穴は褐色土層を深く切り込んでいたため、南壁と東壁は一早く検出され、しかも覆土は30～16cmと比較的厚く残されていたので、遺物の遺存も良好であろうと期待されたが、残念ながら屋敷の土台などの攪乱が入り、土器片の量の多い割には完形土器は1点もなかった。

遺物は床面近くへ掘り下げるにしたがい多くなり、一括土器類は竪穴の東側に、それも壁際外区よりは内区に集中し、南東コーナー付近にとりわけ多かった。しかしいずれも極度の破損状態であり、1/4～1/2個体分の壺（140・141・142・144）・甕（147・148・152・153・159・160）、とくに甕が多く、押しつぶされたように破片が平たく並んだ状態か、グシャリと一ヶ所に折り重なったような状態で遺存した。炉の周辺からあまり出土していない点はやや異質であろうか。また南東主柱穴の上に高坏の破損品（167）や土器片が散在したが、当遺跡では柱穴の上面に土器が覆さる例がまあり、これら土器と住居址の時間的差を考える上で一つの手がかりとなりそうである。

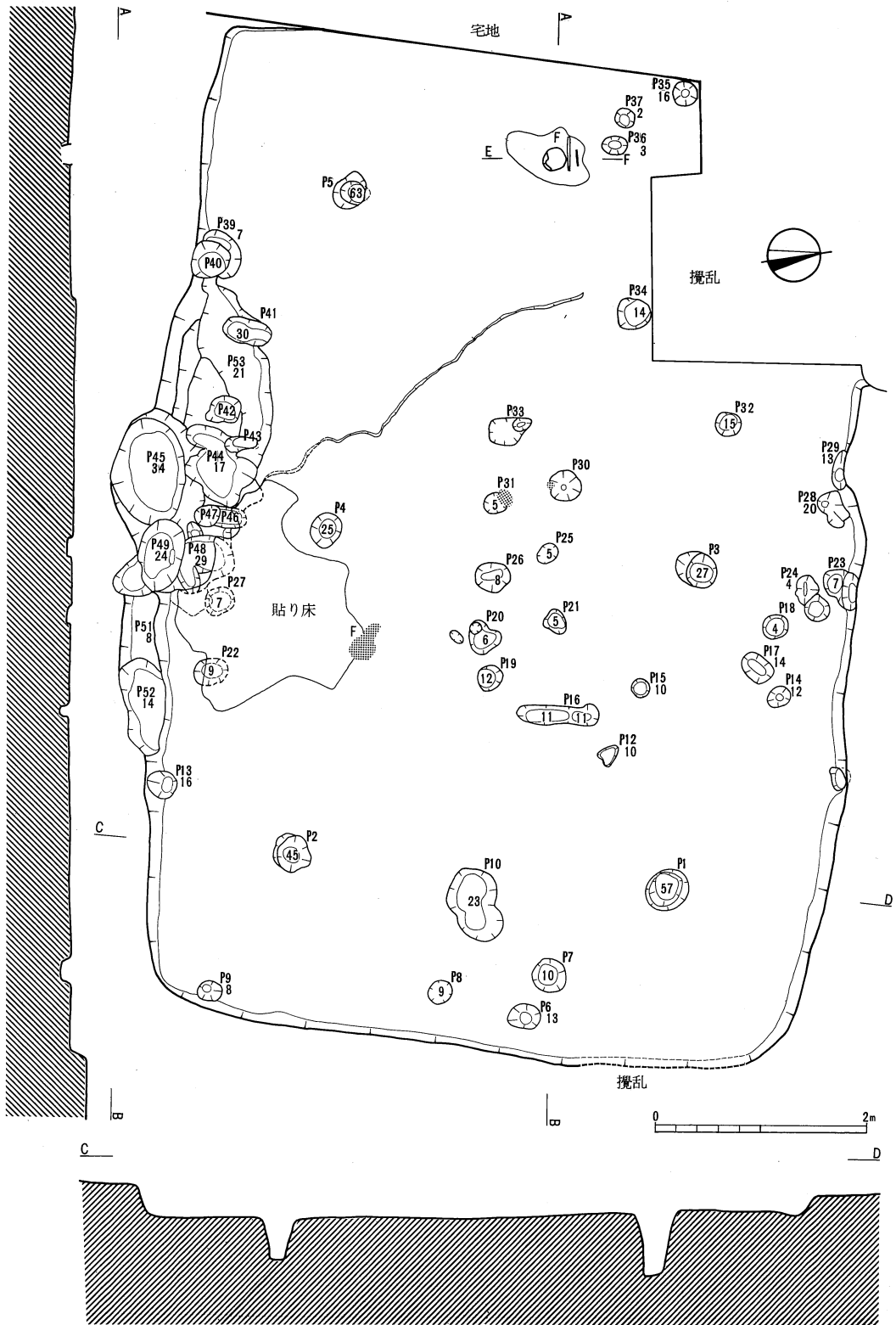
これに対し石器類その他は、一括土器群中にももちろん石庖丁（186・185）などが出土しているが、そこ以外に南壁中央のピット付近や炉の周辺に、砧石・砥石（200・204・205）等が集中している。土器と同じく床面ないし床面近くの出土が多い。

土器の検出中にすでに床面もあらかた精査していったが、遺物の出土が少ない南側東と中の主柱穴の間から南壁際辺りには、床が二重に見られた。

またもう一ヶ所遺物の少なかった南西コーナー付近から南側中の主柱穴と炉を結ぶ斜めの範囲は、若干の段差をもって床が低くなっており、そのため当初は別の住居の重複と錯覚したのであったが（30住はこのため欠番）、西壁が用地境でかろうじて確認されたため、一軒の住居址であると判明した経過がある。南壁際のピット部分の壁も、複雑に重なるピットのため、やや明確さを欠き、また壁際の覆土が非常に堅くて、壁の検出はむずかかった。

遺構 隅丸長方形の竪穴はほぼ東西方向に長く、炉の位置は西側外区に位置する。大きさは長辺9.18m、短辺6.67m、南壁と北壁の中央辺が若干はみ出す。主柱穴の配列は北側西柱穴が攪乱によって未検出ではあるが、きちんとした長方形を成している。

床は褐色土ということもあって、全面に堅い床があり、硬軟の区別ははっきりしない。それでも炉の東側一帯がとくに堅緻なタタキの床であった。南壁中央の壁際から内区にわたる広い範囲に貼り床が見られ、この床は壁際ほどレベルが高く（床上5cm）、内に入るにしたがい低くなってなくなるという状態であった。この床は壁際の小柱穴（P₂₂・P₂₇・P₄₆）やピット（P₄₀）



第15図 24号住居址実測図(1/60)

に覆さっていたが、P₅₁・P₅₂のはみ出しと合わせ考えて、入口の踏みしまり（土間）と考えてよいのではないか。

入口についてはこの南壁中央辺りを除いては、ほかに入口施設とおぼしき痕跡はない。東壁と北壁中央辺りに浅い小柱穴が集中するが、積極的証左に乏しい。

P₄₁・P₅₃の上面は堅い床面が貼られていたので、この付近のピット群が堅穴使用時の状態でないことは言うまでもなく、入口部を何度か作り直していると思われる。

壁際の柱穴ではP₄₀・P₁₃の2本が南壁両サイドにあり、その中央にP₄₇・P₄₈の柱穴があるが、これらの柱が入口施設を構成すると考えたい。なお、この壁際には前述のようにP₄₅とその西側壁中より完形の砥石（荒砥と仕上砥 204・205）と打製石斧（20）、紡錘車（破片、386）が出土している。

内区中央に浅くて底の堅い柱穴が長辺方向に1列並ぶ。一般に言われている間仕切り柱穴なのか、高床施設の支柱穴であるか限定はともかく、P₂₀・P₂₆・P₃₁あるいはP₂₁・P₂₅・P₃₀、また短辺方向ではP₁₄・P₁₅・P₁₉の3本が直線上に並ぶ点で注意される。このような柱穴列は貼床の下に一部が消えるが、P₉・P₂₂・P₂₇・P₄₆・P₄₃・P₄₁は南壁際にあつて棚施設、あるいは壁等に関連するのであろうか。

炉は埋甕炉（158）で西側に1基ある。炉辺石が2枚並べて埋めこまれていた。これは当遺跡では唯一の例であり、特異な存在と言えよう。炉辺石は土器の北側に接して巾広の2枚の鉄平石を縦に二の字に並べてある。伊那谷に見られる通例のものと同類としてよいであろう。この2枚の石は本来は砥石に使われたらしく、磨耗痕が残る（244・245）。また土器に接した1枚は熱を受けて赤化し、一部剥落も見られ、相当に炉で火が燃されたことが明らかである。ただし焼土は土器の西側にわずかに貼り付いていただけであるが、あるいは炉の灰は常に取り出されていたということであろうか。炉の土器周辺は80×52cmの範囲に堅い床がなく、土器下底部には大きな土器片が敷き詰められていた。

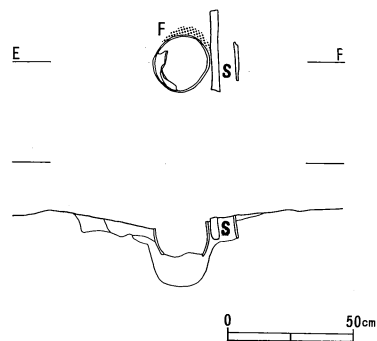
この炉と対になる位置には、炉跡を思わせるピットがあり、若干の焼土が見られたが、土器の埋められた痕跡はなく、炉とするには問題が残る。

壁際のピットは他址の例のように各コーナー付近には見られない。P₄₅・P₄₈・P₄₉がそれに該当しようが、P₄₅・P₄₉は堅穴外に張り出す位置にあり、いささか例外的である。

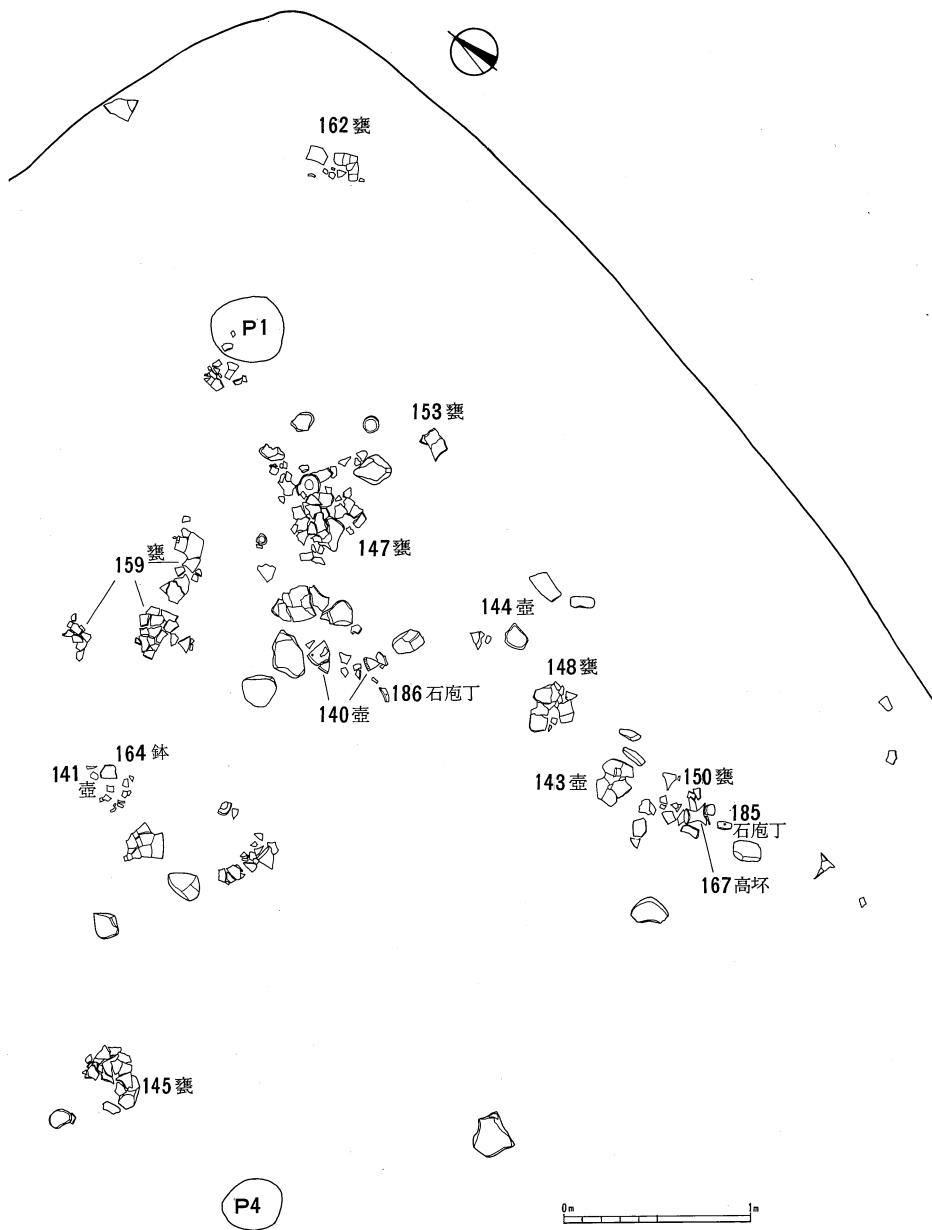
壁際のピットは他址の例のように各コーナー付近には見られない。P₄₅・P₄₈・P₄₉がそれに該当しようが、P₄₅・P₄₉は堅穴外に張り出す位置にあり、いささか例外的である。

出土した遺物 土器は別表のように図上復原できたものだけでも壺7、甕16（小型甕2）、高坏3、鉢1点である。

石器は打製石斧4、石庖丁2、石鏃1、砥石6、砧石3、凹石1、紡錘車3点が出土している。この中では石庖丁2点、砥石4点、打製石斧2点が完形品である。この中で本址を特長づけている砥石は、荒砥と仕上砥が対になってあり、そして仕上砥は極度に使いこなされて、そ



第16図 24号住居址埋甕炉実測図(1/30)



第17図 24号住居址遺物出土状態(1/40)

の研磨痕からは鉄器以外は考えることができない。

土器の量が多いこと、そして砥石が多いことは、規模の最大ということと共に、本址を考える上で大きな要点であろう。これについては集落の項で述べられている。

2号住居址 (第18図)

調査の経過 北西側に黄色土を貼った堅緻な床面を検出したのであるが、表土下60cmと浅い

ため耕作が床面近くに及んでいて極めて保存状態が悪く、住居址全体は全く明らかにできなかった。床面付近からまとまった土器の出土もなく、石器もない。

遺構 壁はかろうじて東壁の一部が褐色土層面において捉えられただけである。床は3.5×2.5mの範囲しか残されていない。したがって埋甕炉も残存せず、柱穴は2本(P₃・P₆)が検出されただけであり、竪穴の形状、規模等は一切明らかではない。

5号住居址 (第19図)

調査の経過 掘り込みが浅く黒色土層中の床である上に、耕作による攪乱が著しくプランを確認することはできなかった。床の範囲や柱穴の位置からプランを推定するにとどまった。

出土した遺物は全体に少なく、床上の一括土器は見られなかった。石器は打製石斧1点(22)が出土したのみである。

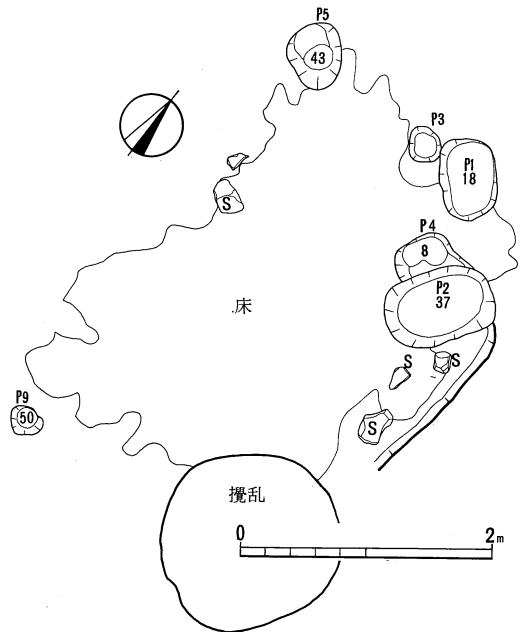
遺構 床は黒色をタタキしめ、ローム粒を含む堅い床面であるが、耕作による攪乱のため破壊されており、部分的に残存する程度である。床に残存している所には床上に2～3cmの黒色土層があり、その上に厚さ5～10cmの焼土が推積している。また竪穴中央やや北側の床上からは萱状の炭化材、南東コーナーの床上からは、木材の炭化材が検出された。これらのことから、この竪穴は火災によって焼失したものと思われる。

主柱穴は、P₁・P₂・P₃・P₄の4本で、配列は長方形である。4本とも円形または楕円形を示す。

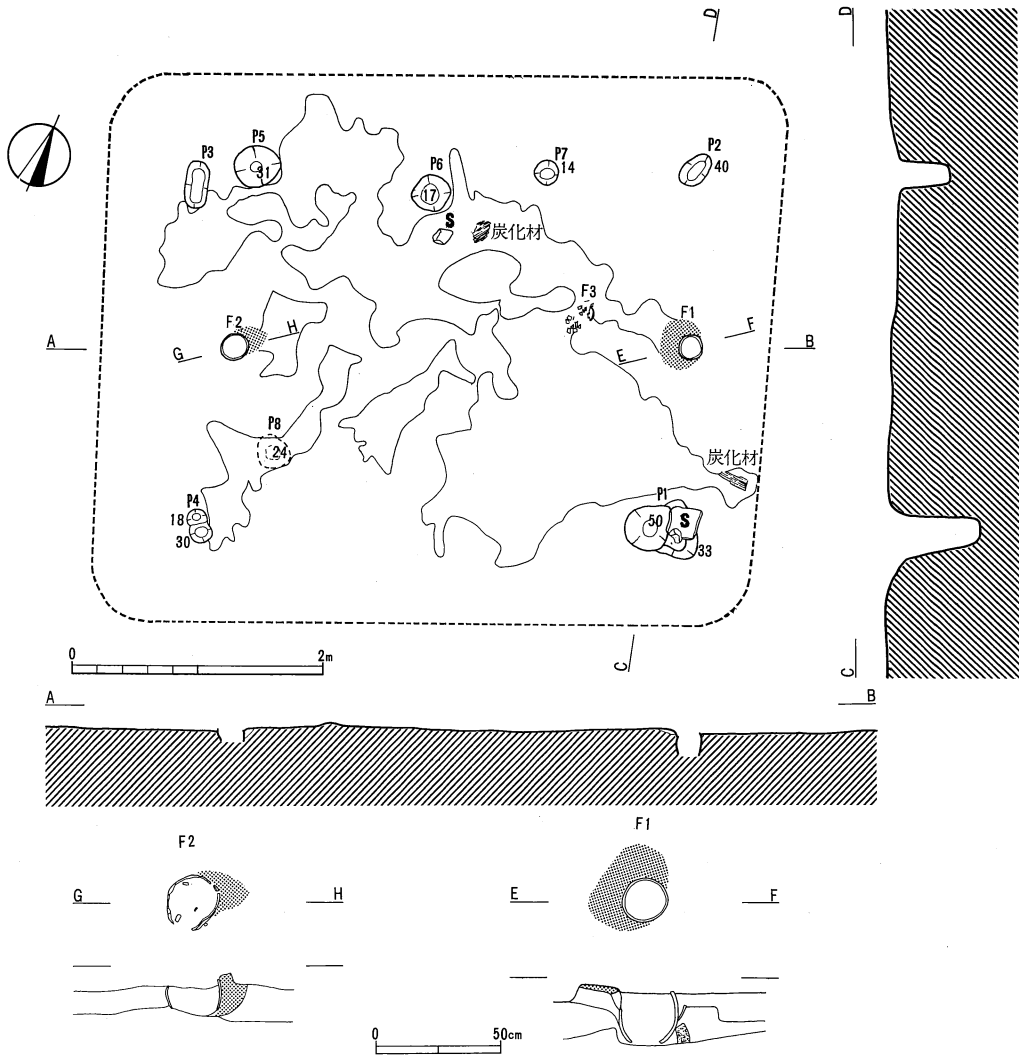
埋甕炉は東(21)・西(22)の両端にある。両方とも口縁部、底部を欠く甕を正位に埋設したものであり、周辺の床のない範囲は広い。また東側F₁は東側に焼土を伴う甕の胴部片が一部床下にかけて検出された。これは埋甕炉が破壊された残存でありこれをF₃とした。このことはF₃を使用した生活面があり、同位置の重複または建替が行われたことを意味するものである。

29号住居址 (第20・21図)

調査の経過 掘り込みが浅く、黒色土層中の床である上に、耕作等による攪乱が著しく、また、北西コーナーは用地外へ延びるためプランを確認することはできなかった。床の範囲、柱穴の位置からプランを推定するにとどまった。



第18図 2号住居址実測図(1/60)



第19図 5号住居址実測図(1/60)、埋葬炉実測図(1/30)

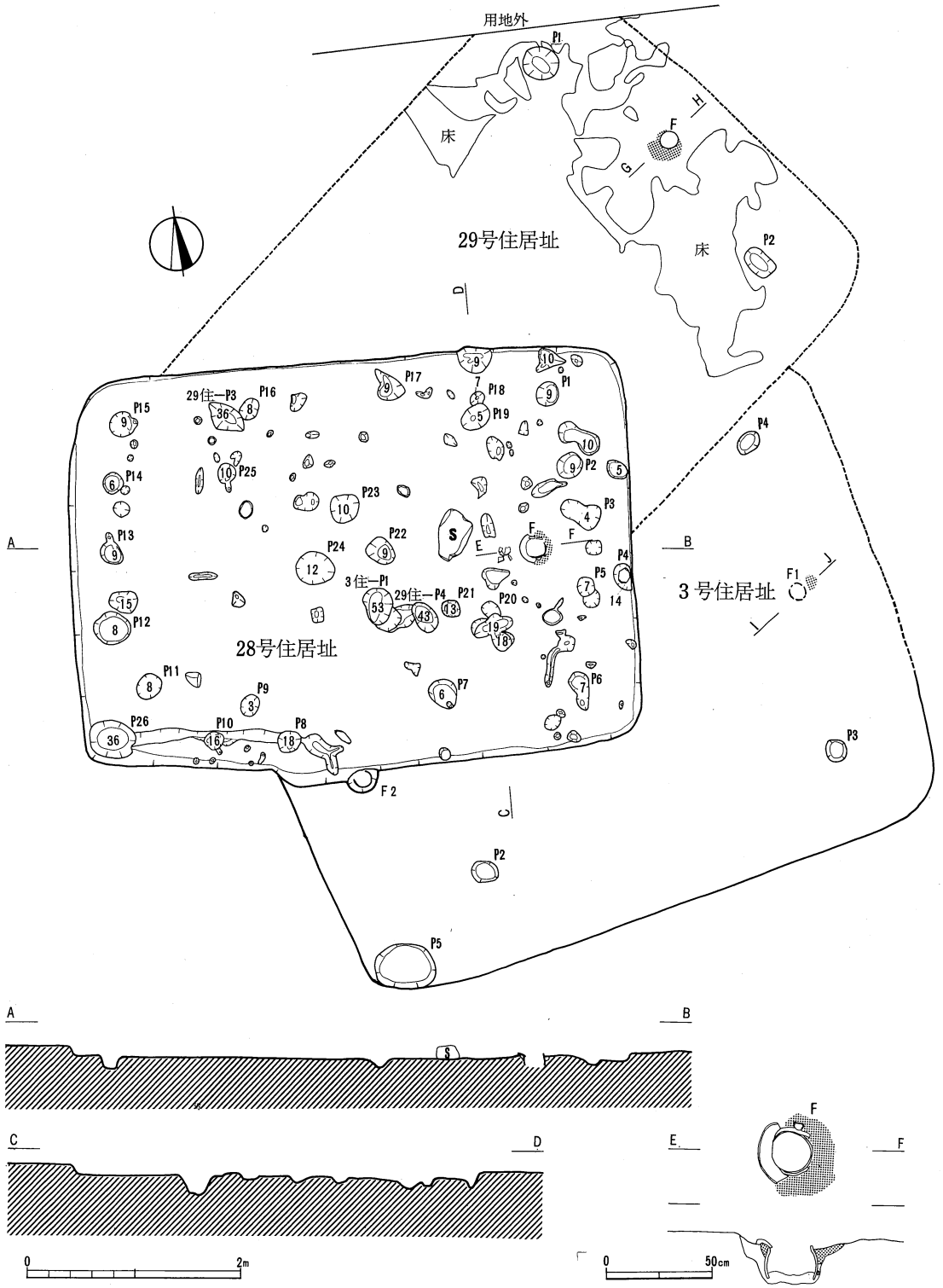
出土した遺物は全体に少なく、床上の一括土器甕片(173)が1個体あるのみである。石器はまったく発見されていない。

遺構 床は黒色土層を堅くタタキしめているが、埋葬炉周辺に残存する程度である。

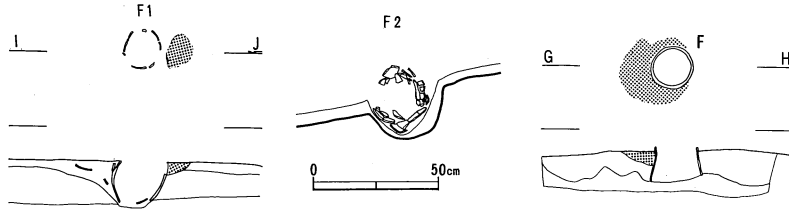
支柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄の4本で配列は長方形である。4本とも円形または楕円形を示し深さも約40~50cmと深い。

埋葬炉は東側に位置し、炉の周辺は広く床が抜けている。炉は口縁と底部を欠いた甕(172)を正位に埋設しており、周囲には焼土が多く存在する。

本址は3・28住と重複しており、3住は28住を貼り、本址は3住にほぼ同じレベルで貼られているため、3住より古く、28住より新しい時期に所属する。



第20图 3·28·29号住居址实测图(1/60)、28号住居址埋葬炉实测图(1/30)



第21図 3号住居址(左・中)、29号住居址(右) 埋糞炉実測図(1/30)

3号住居址 (第20・21図)

調査の経過 ローム層の浅い南側では褐色土を6cm程掘り込んでいるため、プランの検出は比較的スムーズに行われた。北側はローム層が深いため黒色土層中の床面となっており、しかも28・29住と重複しているため、プランを確認することはできず、床の範囲、柱穴の位置からプランを推定するにとどまった。

覆土はローム粒、炭化物を含み全体に褐色をおびた土層であり、掘り込んでいる黒色土層とは容易に区別できたが、重複している28・29住覆土とはほとんど差がなく、その識別はできなかった。

土器片は比較的多く、竪穴全体に分布しているが、床面上の一括土器は少なくわずかに小型糞(6)と小型土器底部(10)が出土したにとどまる。しかし柱穴内、南西コーナーのピット内、埋糞炉等特異な出土を示すものが目立った。

石器は打製石斧1点(28)、石鏃3点(304・305・306)、敲石1点(264)が出土している。

床は南側の一部を除いて黒色土をたたきしめた堅い床で、一部耕作によってうね状に破壊されている。

遺構 主柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄の4本であり、配列は長方形である。P₄では床面より約10cm下ったピットの中央に壺(5)が、口縁と底部を欠損して筒抜けの状態ですべて逆位に直立して出土している。この柱穴の埋没状態は他の柱穴と変わりがなく、この壺が自然転落したものなのか故意に埋められたものなのかは不明である。

南西コーナーの壁直下にP₅があり、このピット内からは壺の口縁から頸部片(2)と小型土器の底部(11)が出土している。また、14×9cm厚さ8cmの偏平な河原石とロームブロックが伴出している。このような壁際のピットは他の竪穴にも見られ、またそこから出土する遺物には小型土器等やや特異なものがあり、共通性を持つものである。このことについては別項にて記述する。

炉は埋糞炉であり東側のF₁(9)は糞を正位に埋設し、口縁と底部を欠いている。周囲には堅い床はなく、炉の周りには厚さ5cmの焼土が堆積している。西側のF₂(7)も同じく糞を正位に埋設しているが、土器は細片化してくずれている。炉の内側には木材の炭化物が多く検出された。炉の囲りは6cm巾で床がなくピット状になっている。また28住の壁上に位置し、壁を壊して設置されている。

入口の痕跡は特に見られなかった。

本址は28・29住と重複していて、28住の床上15cmの所を貼っている。本址の床はほぼ同一レベルで29住の床上に貼っており、したがって本址は3棟の中では最も新しい時期に属す。また29住の覆土上部には平安期に属する25住があり、合計4棟の住居址が重複している。

28号住居址（第20図）

調査の経過 掘り込みが深く、わずかながら褐色土層を掘り込んでいるためプランの確認は容易であった。北側の一部に攪乱が及んでいるほかはほとんど攪乱を受けておらず、良好な状態で検出された。

覆土はローム粒・炭化物を含み全体に褐色を帯びており、重複している3・29住の覆土と近似しているため区別することは困難であった。

土器片は堅穴内全体に分布するが、3棟が重複しているため、覆土が薄く床面上の一括土器はごく少ない。西壁近くの床上に塗彩した大型の高坏の坏部片1点（171）、および内区中央部の床上にペンダント状の有孔土製品1点（444）が出土したのみである。石器類の出土はない。

遺構 床は褐色土を堅くタタキしめていて良好な状態であり、他の堅穴に比して壁近くまでタタキの床が見られる。

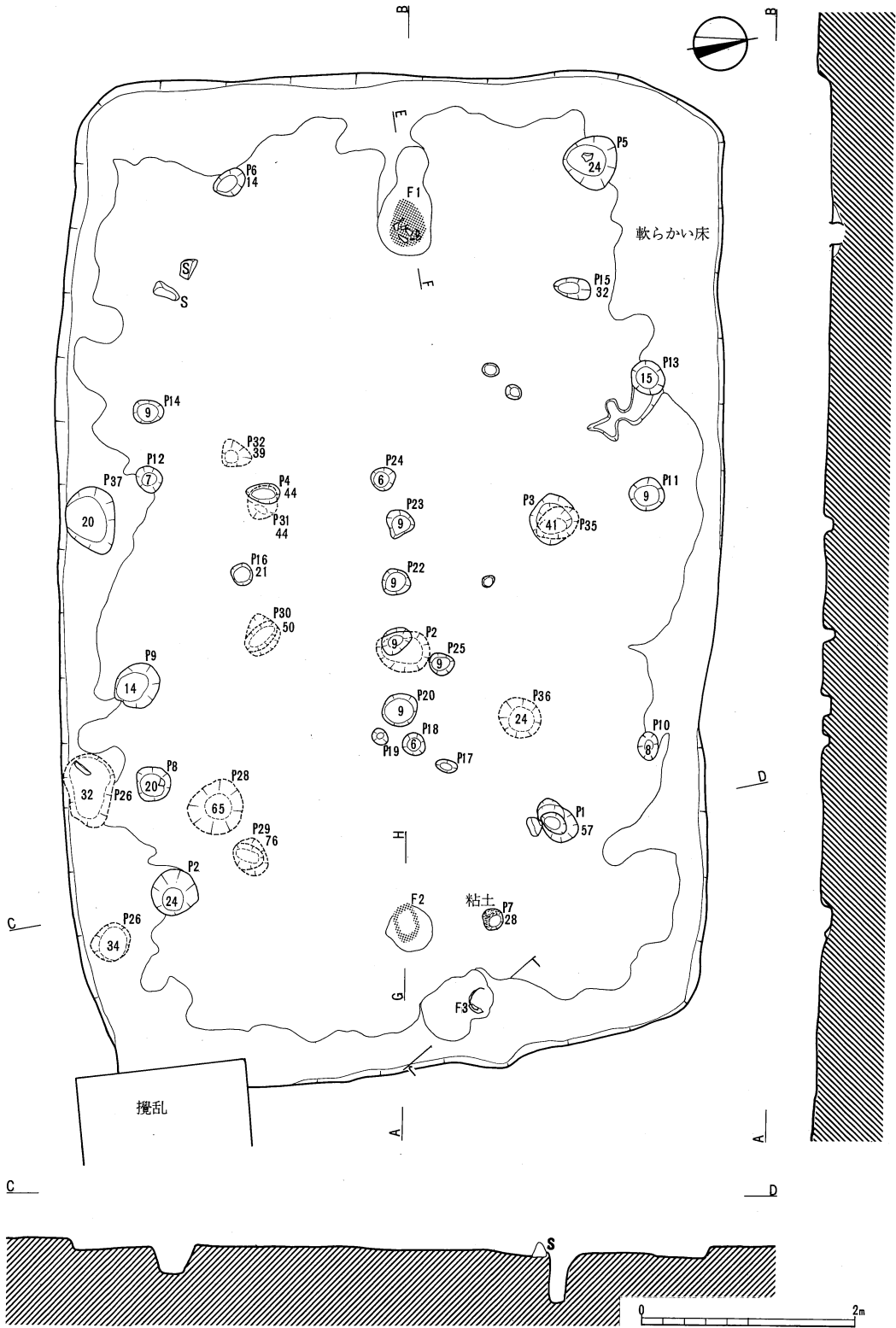
主柱穴は特に検出されなかったが壁際に径15～35cm、深さ4～14cmの鍋底状を呈し、内面全体が堅くタタキしめられた浅いピットが19箇所検出された。堅穴中央部にはやや大きめのピットが3箇所見られる。東壁中央付近の壁直下のP₄は上部に蓋をするように甕の胴部片を置き、ピット内には萱・木材の炭化物が多く検出された。主柱穴を持つ堅穴と違い、本址の家屋構造を考える場合、壁際に並ぶ鍋底状のピットを柱穴と想定する必要がある、これらのピットが重要な意味を持ち、家屋構造が根本的に異なるものと思われる。

南西コーナーの壁直下に検出されたピット底部からは、鉢形の小形手捏土器1点（425）が発見され、他の堅穴に見られるピットと共通する特殊性が見られる。このピットから南壁にそって中央付近まで長さ約2m、巾35cmのタタキの床のない部分が帯状に見られるが、コーナーのピットと関係する溝なのか、周溝のようなものかは不明である。

入口の痕跡は特に見られなかったが、南壁中央付近には、壁がやや張り出しているのが見られるので、入口と何らかの関係があるのではないと思われる。

埋甕炉は口縁部と底部を欠いた甕を正位に埋設し、縁には壺の口縁部を一周させているが、この壺の一部は堅穴の反対側の南西コーナー床上で検出されている。炉の際8cmの所まで堅い床が見られ、床のない範囲はごく狭い。炉の回りには焼土が堆積しているが、炉内部には焼土は見られなかった。炉の西側の床上から大きな平石が検出された。特に使用痕等は見られなかったが、炉を中心とした作業場との関係を想定できるものかもしれない。

主軸上西側中央付近に細長いピットがあり、ここから北側へ90cmの所に直交するように同様のピットが見られ、その位置・配列から間仕切りと関りあるピットと思われる。



第22図 4号住居址実測図

本址は3・29住と重複しており掘り込みは最も深く、その上部を2棟の住居址に貼られているので、3棟の内では最も古い時期に属するものである。

4号住居址（第22・23図）

調査の経過 第I次調査においてBW列のトレンチで床面（東壁側）が確認され、多量の土器片と粘土塊が二ヶ所発見されていた。そのため第II次調査では住居址竪穴を検出するためかなり広範囲に表土を剥ぎ、竪穴落込みの検出に努めたが、攪乱がひどく覆土をなかなか把握できなかった。竪穴は部分的に褐色土層を切り込んでおり、覆土は褐色を帯びた黒色土であった。

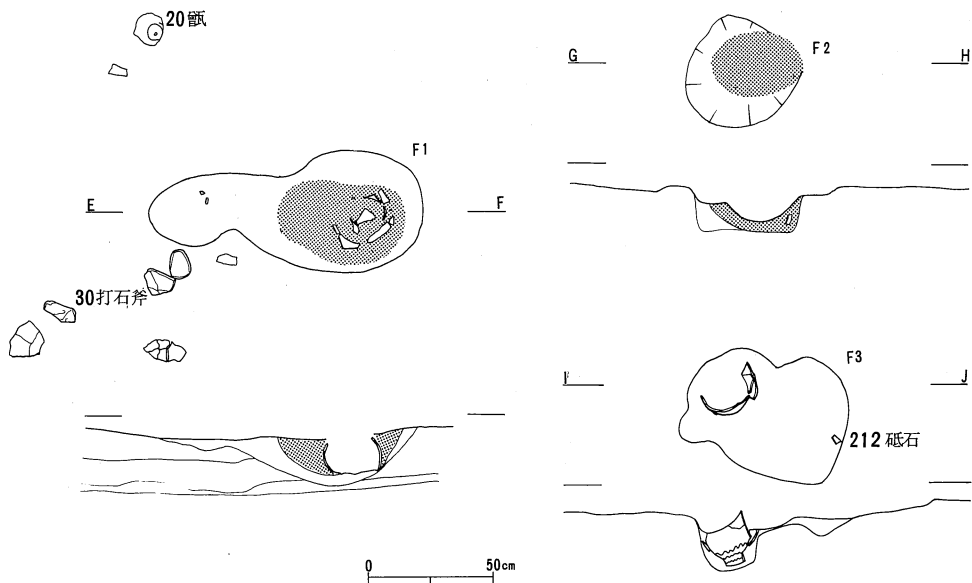
遺物は土器片が南壁側の覆土上面に特に集中したが、これといってまとめて出土するものもなく、石器類も少なかった。

出土した遺物は、東側炉F₃近くから磨製石斧1点（160）、西側炉F₁と壁の間から打製石斧1点（30）が出土、また炉のそばの西壁近くから甑の底部（20）や大きな土器片がわずかながら出土した。

床面は非常に堅緻であり、柱穴・炉の確認もすみやかにできたが、作業終了段階になって東側炉F₂のさらに東北に新たに埋甕炉が検出され、その浅い凹み内から砥石（折損品、212）が1点出土した。

遺構 主軸方向はほぼ東西であり、長辺と短辺の比が1：1.5という細長い竪穴住居である。主柱穴は6本あるが、配列は若干中がくびれ、柱穴間の距離は不揃いで、やや全体に西側に片寄っている。

床は全体に非常に強く、壁際を除いて床のない場所は見当らない。また炉の周囲もあまり広



第23図 4号住居址埋甕炉実測図(1/30)

く床がぬけない。南西コーナー付近に黄色土の貼床が見られた。

入口部は確証をもって限定することはできないが、南壁際の P_{26} と P_{37} を入口の柱と考えられるのではないかと。 $P_8 \cdot P_9$ と $P_{12} \cdot P_{14}$ も位置としてはよいが、やや巾が1mと狭く、むしろこれは北壁際の $P_{10} \cdot P_{11}$ と対にして、 P_{8-10} 、 P_{12-11} 、 P_{14-13} は棚あるいは高床といった住居構造の中で捉えた方がよいであろうか。

壁際のピットは $P_{26} \cdot P_{27} \cdot P_{37}$ の柱穴らしきものを除いては見当らない。間仕切り柱穴と思われるものは内区中央の主軸方向に並ぶ $P_{20} \sim P_{24}$ の5本である。

炉は西側に1基 (F_1)、東側に2基 ($F_2 \cdot F_3$) あり、 F_2 を除いて埋甕炉である。 F_1 (13) は甕上半部を正位に埋めこんでおり、焼土が厚く周囲に詰まる。 F_2 は位置からすると埋甕があってもよいのであるが、円形の掘り方の中に焼土がナベ底状に凹んで厚く堆積し、土器の埋め込まれた痕跡は残っていなかったため、あるいは地床炉であったのかもしれない。 F_3 (14) は柱穴間のやや北側外にはずれ、あまりに壁に近すぎる位置にある。頸部から胴部のそれも半割品を逆位に埋め込んであり、焼土はほとんど見られない。

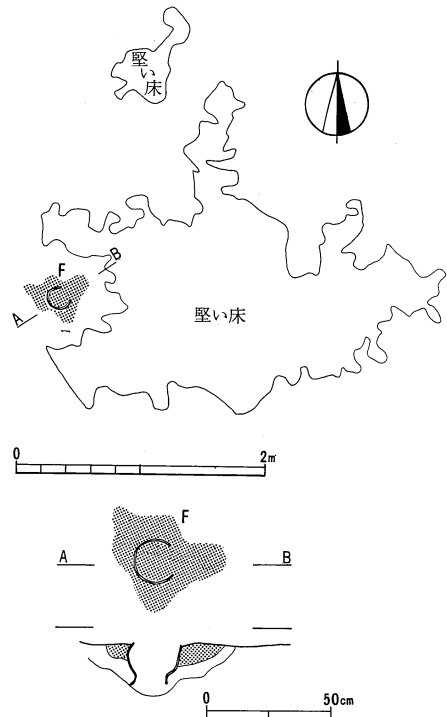
なお、 F_3 に関連して、住居の重複ということも考えられたが、東壁は5~6cmと残存部分が低いとはいえ、切り合うような壁の重なりは見られず、また床面を剥いで若干の柱穴を検出したが、 F_3 を炉とする主柱穴はなく、これを本址から切り離す積極的証拠はない。 F_2 と F_3 の周辺には粘土塊や砥石が出土しており、あるいは F_3 は性格が異なるのではないかとと思われる。

37号住居址 (第24図)

調査の経過 表土層の排土作業中に土器片の集中があり、すぐに西側落込みを確認できたが、堅穴掘り込みが浅いためか、床面までわずかな覆土を掘り下げただけであった。

本址の周辺は攪乱が激しく、東壁と南壁側は耕作土と同じ暗褐色土が広がり、わずかに西側に褐色を帯びた黒色土の覆土が見られただけである。この覆土を中心に甕胴下半部破片 (220)、口縁部破片 (219) がまとまって出土したが、すぐにその下に床面が検出され、結局、壁は全く明らかにできなかった。

床面は $3 \times 3.2\text{m}$ の範囲に大・小二ヶ所、部分的ながら堅い床面が残存した。西側落込みの確認された辺りであり、恐らく住居址西壁側であろうか。床の西端部には焼土塊が散在し、そこから埋甕炉



第24図 37号住居址(1/60)・埋甕炉(1/30)実測図

を検出できたが、柱穴等のピットは全く明らかにできなかった。

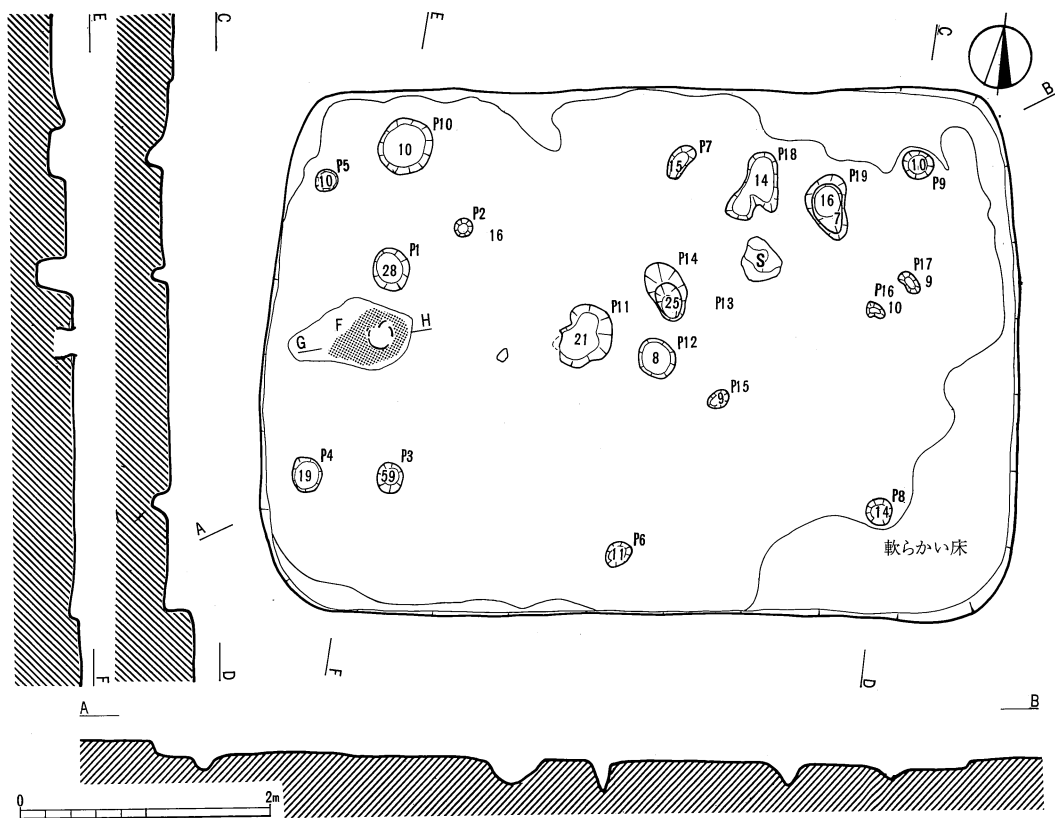
遺構 炉と床の位置から、内区西側に炉のある、およそ5×6m程度の主軸が東西方向の住居址ではないかと推測される。炉の周辺は70×70cmに堅い床がなく、炉の土器(218)の周りには10cm厚の焼土が詰まる。土器は甕胴上半部を逆位に埋めてあった。

35号住居址 (第25・26図)

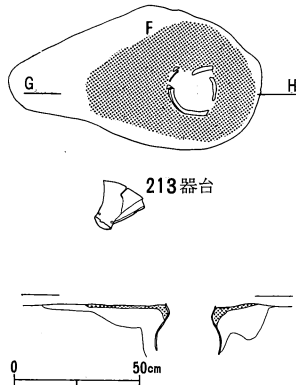
調査の経過 表土から攪乱があるが、ことに南側部分に著しく、竪穴の検出は非常にむずかしかった。したがってサブトレンチを用いて床面の検出を試み、南側において確認することができた。層序は黒色土層の下に、炭化物を含む暗褐色土層があるが、その層が住居址覆土である。

遺物の出土は覆土上層から見られ、石器が多い割には土器の出土は比較的少ない。西側の埋甕炉の南側から、有孔の器台の脚部(213)が出土し、南壁近くに一括の土器(209)があるが、復原にいたる程ではなかった。

石器類の出土は打製石斧4点が内区(34・35)および西壁際(36・33)から、石庖丁は内区中央付近から2点(188・189)が出土。石鏃(312・313)、石錐(372)は内区南側に、また砥石(214)は南東隅から発見された。



第25図 35号住居址実測図(1/60)



第26図 35号住居址埋葬炉周
辺の遺物出土状態実測
図(1/30)

紡錘車(391)は土器片加工のものであるが、埋葬炉の西側から出土し、土製勾玉(449)は北西隅の北壁下にて出土。埋葬炉の中から土玉が発見されている。注目すべき遺物は鉄器片(459)があるが、刀子あるいはヤリガンナの先端部とも観察されるが、きわめて細片のため断定はできない。

遺 構 床面は白色と赤色の粒子を含む褐色土を、強く叩いた状態で全面に認められるが、北東および南東コーナーの壁下に堅い床面のない部分がある。また埋葬炉の周囲も焼土部分および掘り込み部は堅い床面ではなかった。

支柱穴は $P_4 \cdot P_5 \cdot P_6 \cdot P_7 \cdot P_8 \cdot P_9$ の組み合わせとみられるが、配列は不整の長方形で、東側の柱穴が約40cm広がって壁に近い位置にある。また P_6 の位置も P_4 と P_8 の線上から南に張り出

ている。壁際ピットは北西コーナーにあるが遺物はない。

埋葬炉(210)は西壁中央の内側に約85cm入った位置にあるが、土器の周囲に床面のない炭化物などを含む部分が細長くあり、さらにその内側に焼土範囲が 65×45 cmにわたってみられ、焼土の厚さは約5cmである。炉内の土器は口径約40cmと、比較的大型の甕を使用した炉であった。炉の周囲の床のない部分は、ほかの住居址の埋葬炉にも例が多いが、掘り込み部分としては大きすぎる。ほかの何らかの原因があつてのことではないだろうか。

住居址入口部については、明確な構築は認められない。北壁東寄りの P_9 と P_7 の間にあるピットを入口部施設と想定する観察もある。また住居址中央の南北に並ぶ柱穴 $P_6 \cdot P_{12} \cdot P_7$ を間仕切り、あるいは P_{12} を中央の間柱として、南壁東側の $P_6 \cdot P_8$ 間を入口と想定する観方もある。

46号住居址(第27図)

調査の経過 本址は3棟の重複が見られ、48住→44住→46住の順に古期から新期になる。いずれも東側が民有地にかかり、竪穴全体は確認できなかったが、支柱穴 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3$ は確認できたので、隅丸長方形の竪穴規模を推定できた。

覆土中には炭化物の混入が多く、あるいは火災住居との見方もなされたが、確たる証左は検出できなかった。遺物の出土状況は、土器の出土が比較的多いが、まとまったものは外区にあって、内区にはほとんどない。西側外区に大小の甕(247)・壺(244)が、北側外区の P_3 そばに甕(246・253)と壺(240、1/2個体)が、そして南壁中央に片口の鉢(255)が伏した状態で出土した。いずれも床上ではなく、覆土上部であり、大きな破片は多いが、復原できるものは少なかった。

石器類は3点の石鏃を除いて内区に出土した。打製石斧4点のうち2点は完形品(25・27)である。覆土上層から磨製石斧(折損、161)、砧石(247)、凹石(277)、敲石(263)それぞれ1点が床上ないしその近くから出土した。砧石は、一人では容易に動かせない大きな鉄平石で

表裏両面に使用痕が残る。壁側は床上16cm、内側はほぼ床面に接し、あたかもズリ落ちたような傾斜をもって出土した。この北側床上に粘土塊が存在した。また完形の紡錘車(389)が南側外区に出土し縄文時代の土偶も混在していた。

遺構 床面はローム粒を含む黒色土で、上面に粘土を薄く貼って、タタキ床にした堅い床が全面にわたっている。南壁西寄りには、壁にそって溝状の落ち込みがあるが壁際のピットと同じものかと思われる。

埋甕炉は西壁に極めて近い位置にあり、焼土は少なく、掘り方も小規模で、炉の土器(250)は甕頸部を埋設しているだけであった。この土器は44住埋甕炉の甕胴部と同一個体である(接合する)ことが確認されている。

内区中央に主柱穴以外に小ピットが集中するが、他の住居址に比べ、やや深くて北側、あるいは西側に傾斜したピットである。これ以外に南壁際にP₁₃・P₁₄・P₁₅・P₁₆が一直線上に並ぶが、あるいは、住居の入口施設を示すとも考えられる。P₁₅は48住の柱穴という観方もある。

ところで44・46・48住の3棟の重複のうち、48住は面積が小さすぎて考察の対象にならないが、44住と46住については次のように考えられる。竪穴プランが近似していること、埋甕炉土器が同一個体であること、そして両住居址に粘土を保有していることからして、この3棟の住居は、同一家系の建替を示すものと考察できよう。

44号住居址(第27図)

調査の経過 この住居址は東側が民有地、北側を46住に切り取られているため、約1/2程度が残っているだけである。したがって主柱穴や入口等は不明であるが、西側中間部の内側に埋甕炉が発見されたことにより、主軸方向が東西になることが判明した。西壁の状態が比較的良好に残存していたので、住居址プランは隅丸方形になるものと推定される。

遺物は南壁の中央辺りに甕(236)と台付甕(239)が出土したが、台付甕は覆土上層に逆位の状態であった。また南西隅のP₄内からも甕(238)1/2個体分が発見されている。石器では打製石斧(完形、32)、敲石(265)各1点がある。

そのほかに南西隅には粘土塊が置かれていたが、西壁際にも若干あって、土器製作との関連が考えられるし、隣接の後続して作られた46号住居址内にも存在し、その関係が注視されるであろう。

遺構 主柱穴としたのは南西側のP₁であるが、相対する北西側位置は、46号住居址に約20cm切り取られていて不明である。強いて推定すれば46住P₁₅が相当するかもしれない。東側主柱穴は民有地に入るため不明であった。

床面はあまり堅くないが、比較的良好であって、ローム粒、白色粒子と粘土粒を含むもので覆土の炭化物を含む土層とは明瞭に区別ができた。

埋甕炉は西側の壁より内側へ約1mの位置に発見され、埋甕は破碎されて良い状態ではなかった。焼土は約5cmの厚さでみられたが、炉の掘り方が53×40cm範囲に認められた。

住居址入口については不明である。

48号住居址（第27図）

本住居址のプランは、44号住居址の床面まで掘り下げた際、北側において確認された。覆土は白色粒子と炭化物を含む堅い暗褐色土である。北側の大半を46住に切られているから、極めて小面積しか残されていない。したがって主柱穴、プラン、炉、主軸方向などは不明である。残っている床面のうち、東側の民有地に接して壁際に80×70cmのピットが発見されたが、この底部から甑（258）の底部破片が発見されている。

そのほかの出土品は、多頭石斧（折損、375）と石庖丁（187）、および完形の乳棒状石斧が（162）覆土から出土している。

48号住居址は、覆土に炭化物の多いことから、火災に遭遇した住居とも見られるが、確証はない。

47号住居址

6住の南東コーナーに褐色を帯びた黒色土の落ち込み（1×1.5m）を確認し、更に6住の壁に堅い床面を若干検出ただけであるため、詳細は全く不明である。

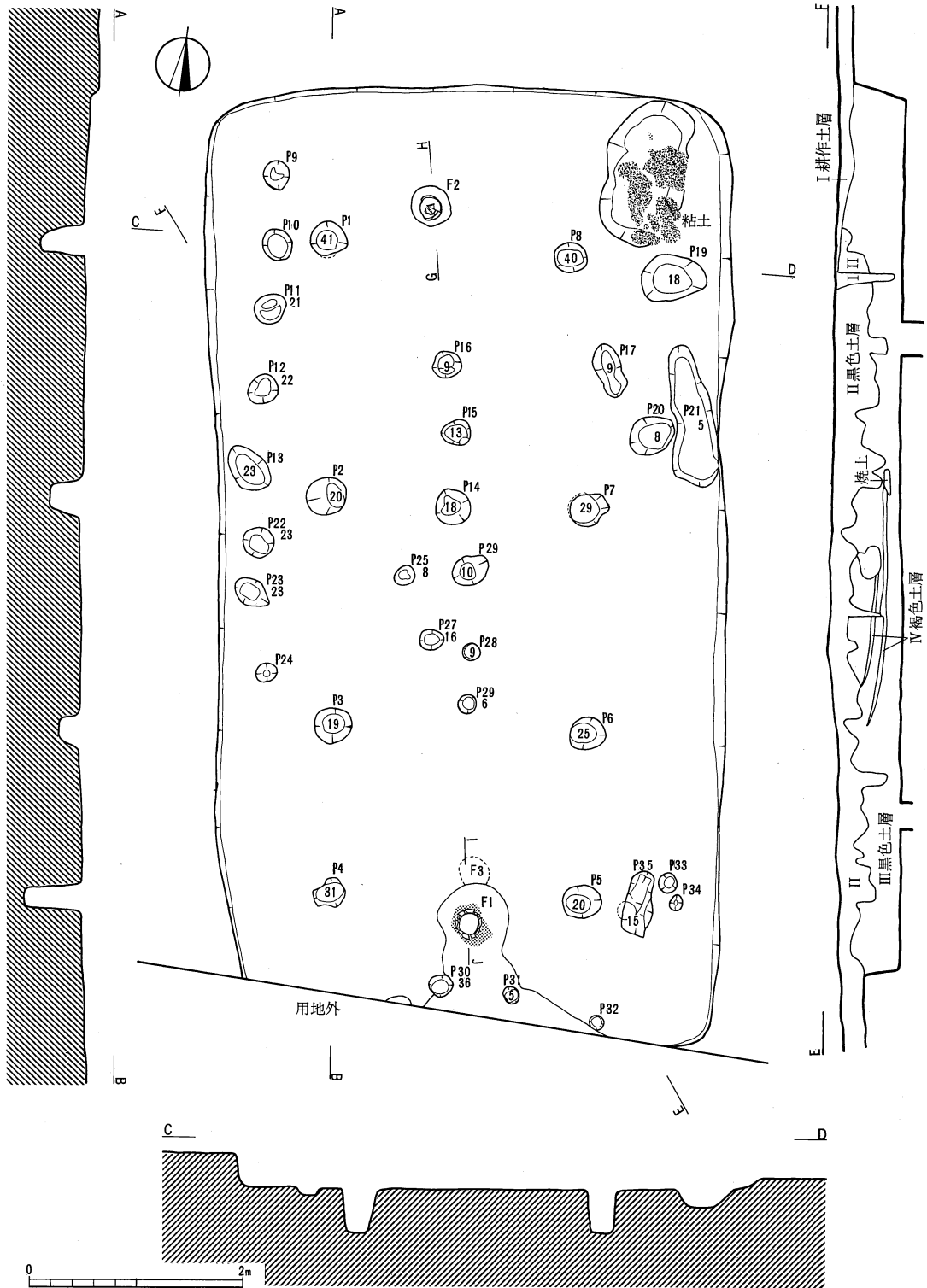
床面は6住床より20cmほど上にあり、6住に切られているので、一時期古い住居址ということになる。大部分は用地外の構造物下に遺存すると思われる。

6号住居址（第28・29図）

調査の経過 本址は第1次調査の折に北東コーナーが確認され、床面とともに粘土が発掘されている。地表の構造物を取り除いてすでに覆土上面で土器片が多量に出土し、遺物を包含する土層も容易に判別がつき表土下の黒色土層において褐色味を帯びた特有の黒色土層の落ち込みを検出し縦穴を確認できた。ただし、当初予想だにできなかった9m近い細長い住居であることがわかり、一時は2基の重複を考えたほどである。このため南壁は用地外にかかるほどであり、あとわずかなのであろうがギリギリいっぱい掘ってあきらめざるを得なかった。西隅に、1基の重複があり（51住）土器片が多量に出土、さらに東コーナーにも1基重複があることがわかった。

覆土上部の縦穴確認時点では土器片の量も多く大きな破片の出土も見られたが、床面に近づくに従い遺物の量は少なかった。セクションベルトの観察では、北壁から中央床面に向って、褐色土のバンドが斜めに傾斜をもって流れこむような状態で2枚認められたが、遺物の出土状態にはとくに、そのような傾向はなかった。床上10cmに焼土ブロックなどもあるが、全体として覆土は同一土層である。

床面の精査では、第1次調査の時よりはるかに堅いしっかりしたタタキ面が全面にわたって検出され、床面上にまとまって遺物が出土した。とくに炉F₁・F₂の周囲に集中しており、F₁南



第28图 6号住居址实测图(1/60)

に2個体(28・29)、F₂から中央部に壺1個体(23)が出土した。また壁際ピットの縁にあった粘土上より小型手捏土器の完形が1点(426)出土し、床面上にあると思われた粘土塊はピット中(P₁₈)に詰まっていることがわかった。

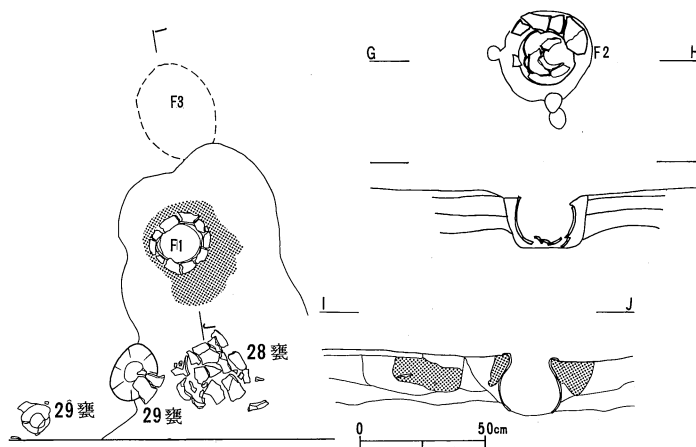
出土遺物は破片の量が多く、大きな破片があるため図上復原のできたものが多い。破片のまとまった出土はF₁・F₂の周辺と中央部の床面上である。とくにF₁の南壁際では、中型甕2点がほぼ完形で出土した。F₂では炉の土器の上および縁周囲の床面上、そして中に多数の破片が出土したが、F₂南床面上の破片は甕1/4個体(31)、上にかぶさった破片はF₁土器の底部に、西側縁に敷き詰められたような破片と中の底の方に落ち込んでいた土器は、中央部床面に散在する土器と接合して完形に近い壺(23)となった。この壺は口を炉の中につこんでこわれたような状態であり、底部だけとばされたといった具合であろうか。その他の土器はいずれも破片の程度であり、出土地点を特定できない。

石器は打製石斧3、石鎌4、砧石2点が出土した。このうち打製石斧は完形品1点が(40)中央西寄りの床上から、石鎌は完形品1点が(316)内区中央付近から、砧石(248・249)はF₂そばの床上からそれぞれ出土した。

遺構 支柱穴は長軸方向の東西壁にそって各4本ずつ、シンメトリーに並ぶ。P₂とP₇の間に、やや浅いが間柱P₁₄が存在し、その結んだ線を境に、南室と北室に分けて考えることができよう。さらに西壁部の柱穴列についても、柱を立て横木をわたして棚あるいは高床の構築が想定できるものである。

床面は黒土中には堅いタタキ状の床が、ほぼ全体にみられ、わずかに炉のまわりに存在しない程度であった。

住居址内には支柱穴のほかに、柱穴列(間仕切り柱穴)とみるものもある。その他は粘土貯蔵穴、さらにピットも数が多いが、機能用途は判別できないものが多かった。



第29図 6号住居址埋甕炉と周辺遺物実測図(1/30)

炉は F₁ が南室に、F₂ が北室にある。いずれも埋甕炉であって、甕だけの埋設であり、炉内および甕の掘りかた部分にかけて、焼土が多くみられた。特に F₂ 周辺には土器破片が多くみられた。

入口については、南北壁に近い位置に炉址があり、また西壁には柱穴列もあることから、東側が考えられる。それも東壁の中間辺か、北東コーナー近くとみられよう。

ところで北室は北東コーナーのピットに粘土が充填されており、西壁直前の柱穴列を棚状の構造と考えると、土器製作作業室とみてもよいだろう。その北室の P₂₁ からは小形手捏土器の出土もあって、土器の製作等を行い、棚にはその土器の乾燥とか、焼成までの保管場所とも考えられる。一方の南室の方は、北室より 3 m² ほど広いが、入口部が東壁に想定され、炉 F₁ 周辺には土器が多く、完形甕の出土もあった。これらのことから、南室は居住用の部屋と考えてよい。

西隣りにある 43 住は、本住居址と同面積に近い大形住居址で、時期は後続するものと観られるが、本住居址とともに注意すべき住居址である。

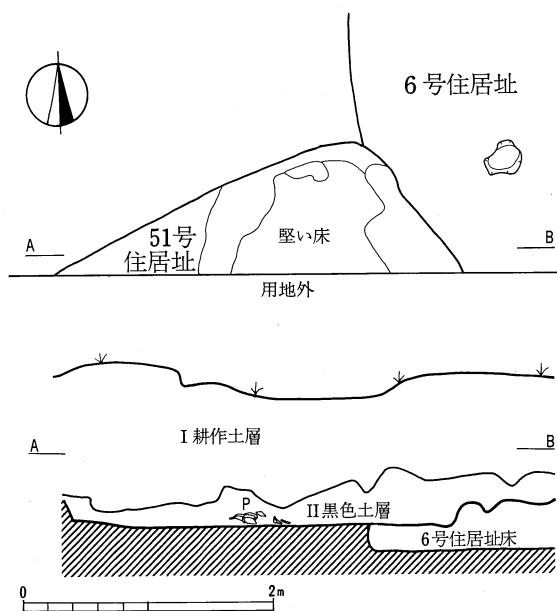
51号住居址 (第30図)

調査の経過 本址は 6 住の竪穴落ち込みを確認する段階において、6 住南西隅から竪穴外に集中的に土器片が出土するため、重複する新たな住居址として確認されたものである。しかしあまりに多量の土器片がかたまっているため、特殊な廃棄坑か土塚墓かとも想像されたが、特殊な遺物が一つとして出土してないこと、6 住竪穴上に貼床が検出されたことにより、住居址として間違いのないものと思われた。隣接する用地外の構造物下に竪穴の大部分がおよぶため、

調査は北東コーナーのわずかな範囲であったが、竪穴は黒色土層を切り込み、20 cm の壁が残存した。

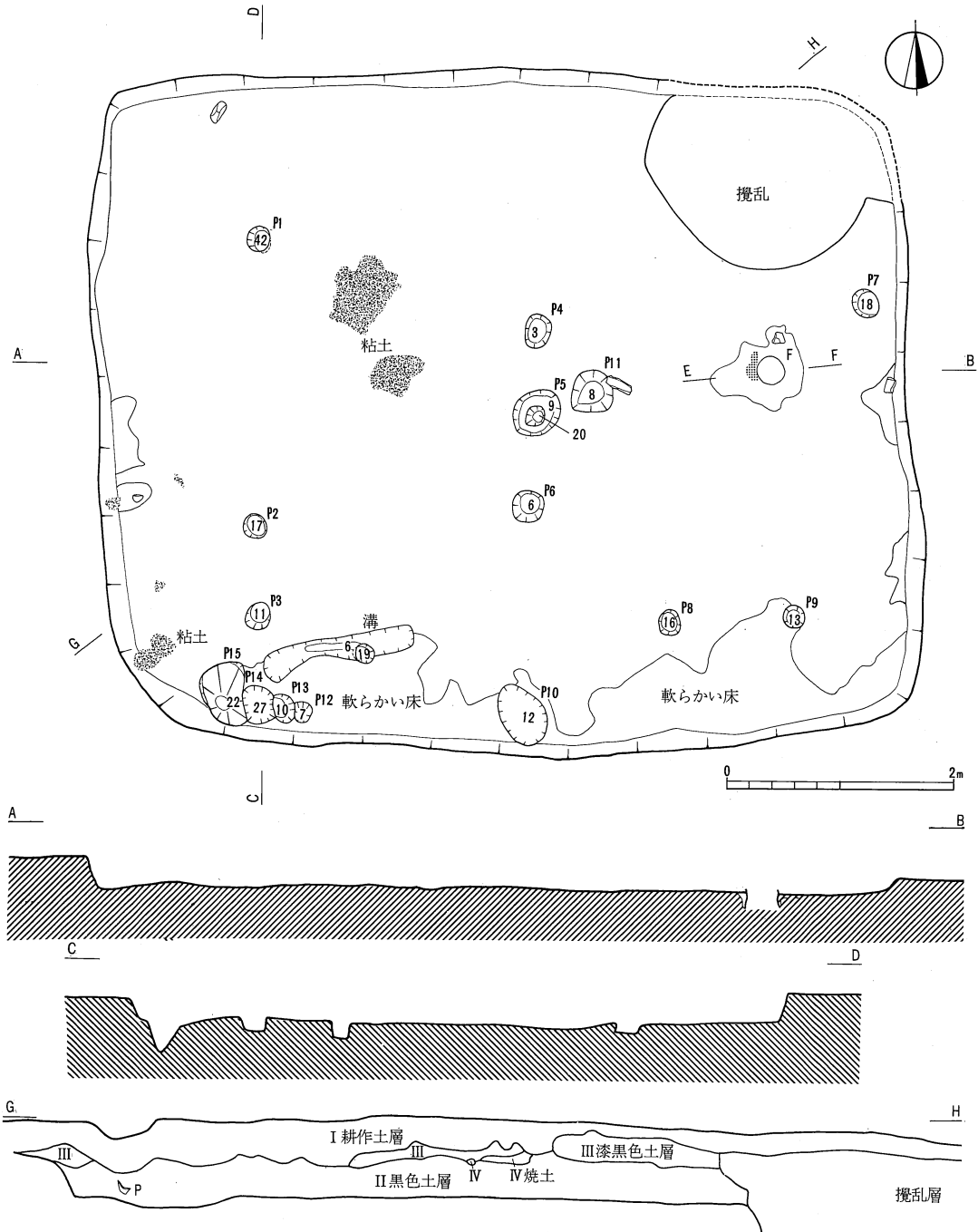
出土遺物はこの狭い範囲に集中して発見された。覆土下部の床面近くに大・小の破片が重なり合っており、とくに竪穴隅から 120×90 cm の範囲に集中的に遺存した。大形の破片が多かったが完形と判るような在り方ではなく、2/3 あるいは 1/2 個体ぐらいのものが多かった。石器は出土していない。

遺構 一部分の発掘で竪穴全体は想像する手立てもない。床面は堅いが西側は壁に近いほど軟弱になっていて、北壁際には堅い床がない。東側にある 6 住の



第30図 51号住居址実測図(1/60)

上面に黄色土で貼床をした良好な床面が検出された。したがって本址は6住より新期になる。
 住居址の北側外区に土器の集中する例は非常に少なく、この土器の出土状態はある種の特別な行為と考えるべきものであり、検討する必要があるとみられる。



第31図 43号住居址実測図(1/60)

43号住居址（第31・32図）

調査の経過 6住周辺の表土剥ぎの中で、6住西側一帯に土器片の集中的出土を見、竪穴を検出した。6住と同様に黒色土層を切り込んでおり、覆土は褐色味の強い白色粒子をあまり含まない黒色土であり、住居址中央部には部分的に漆黒色土が厚くのっていた。覆土を掘り下げると、南西壁際で砥石（220）、凹石（278）と鉄の細片が出土し、南東コーナーから炉の西側にかけて比較的大きい土器が検出されたが、形をなしている状態のものは1点もなく、また床上にも特にまとまった土器はなく、遺物は少なかった。内区の西側中央の床面より二つに折れた敲石（266）が、また南西隅より紡錘車（392）の破片が出土したに過ぎなかった。

遺構 床面は炉の周辺と南側の壁際を除き、非常に強くタタキしめられていた。特に内区の中央付近より西側は堅緻な床であり、5cm位の厚さの粘土が二ヶ所に置かれ、その近くに敲石と乳棒状の細長い石があった。

支柱穴は、攪乱によって1本みつかっていないが、 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_9$ よりおして4本の長方形配列であろう。 P_8 は支柱穴 $P_9 \cdot P_3$ の線上にあり、また P_2 も支柱穴 $P_3 \cdot P_1$ の短辺の直線上にある。どれも穴の深さは支柱穴より深さをもっているので、梁に結び支柱の補強をするか、棚や間仕切りに使われた間柱と考えられる。

$P_4 \cdot P_5 \cdot P_6$ は一線上にあり、その中で最も深さのある P_5 は、横梁か棟木の通る位置にあるので、これも間仕切り柱穴とみてよいだろう。南西壁隅にある P_{14} は、 $P_1 \cdot P_3$ と直線上に並び、やはり間仕切りにしたものと思われる。南東隅にある P_8 と P_9 は、堅い床と軟らかい床との接点にあり、この南側に棚あるいは高床の施設をしたのであろうか。

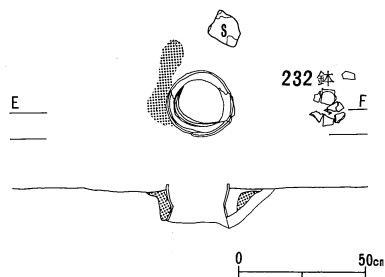
出入口は、南西コーナーにある短い溝および $P_{12} \cdot P_{13} \cdot P_{15}$ が出入口として、充分工作してあるようにみられる。またこの付近より、砥石、紡錘車が出土するなど、入口としての要件を充分にそろえているといえる。

埋甕炉は、甕（224）の口辺部を逆位に浅く埋設してあり、黒色土と焼土で埋められていた。

ところでこの住居址は、 P_5 を中心とする南北（短辺方向）に二分する間仕切りから西方には北西コーナー覆土より甕（233）の土器片をみているが、集中土器類はほとんど出土しておらず、東側に集まっている。これらの点から、ここを日常の生活の場（勝手）と推察できる。これに対し西側は、前記したように粘土が検出されており、土器を専門的に造る工房の土間という色彩が強い。また、砥石4点の出土も注意される。

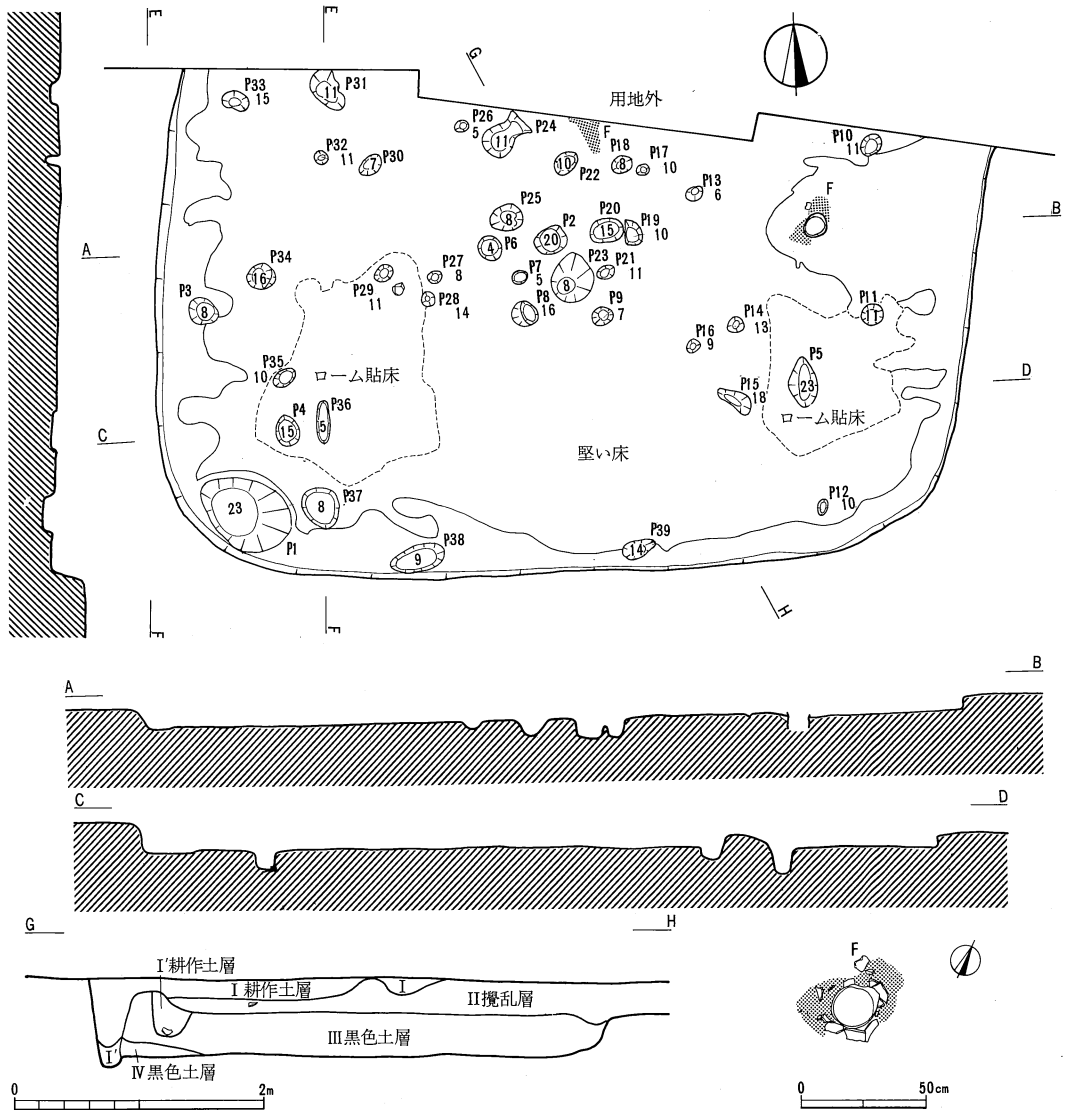
19号住居址（第33図）

本址は53年度の第I次調査において、堅い床面の一部と埋甕炉を確認していたものである。



第32図 43号住居址埋甕炉と周辺の遺物実測図(1/30)

住宅密集地下であるため表土層下まで攪乱が及び、土器片の出土量が多かった。宅地造成の切り盛りで、7住付近の表土が盛られていることも考えられる。覆土は黄色土粒や炭化物を含む黒色土である。遺物はこの覆土全面にわたって見られた。床面上からは東側埋糞炉周辺にかなりまとまった土器（110・116）と小形手捏土器（428）が出土し、また東壁覆土の中から高坏（118）が出土した。全体として土器の出土量は多く、復原された土器は壺・甕・高坏・鉢があるが完形ないしそれに近く復原されたのは高坏（118）の1点だけであった。なお、図上復原された土器は覆土上層に多く、床面に近いほど少なく、内区より外区に多いという傾向がみられた。



第33図 19号住居址実測図(1/60)、埋糞炉実測図(1/30)

打製石斧はいずれも折れているが床上から3点(50・51・53)が出土。磨製石斧(定角式、163)も折損しているが南東コーナーから、磨製石鏟(未製品、178)は住居の内区西側より発見、砥石(222)は内区西端の床上と、南東コーナー竪穴外(221)からも発見された。凹石は(282)住居内区西寄り床上から、また紡錘車(未製品、419)は南東コーナーの竪穴外の位置に出土した。

南東コーナーの竪穴外に遺物の集中するのが注目された。

遺構 住居床面は全体に堅い床であるが、東西の柱穴のまわりにロームの貼床がみられ、また埋壔炉の東辺には床部分がみられず、土器片、炭化物、焼土が入っていて、意識的に堅い床を設けていないと観察されている。

主柱穴は南壁にそって長軸方向2個と、西北隅のP₃₁と考えられる。住居址の1/3が道路下に入っているため北東隅の柱穴は不明である。

主柱穴の形状は、南北方向に長い楕円形であるが、想定される柱は、割材を用いたとみられる。

住居入口については、判然とした施設などが認められないが、炉の位置、土器出土状況などから、南壁の中央あたりと想定される。

壁際のピットについてはP₁が南西コーナーにあるが、特に遺物は出土していない。

炉は東壁側の柱穴のほぼ中央に位置する場所とみられる。炉は壔(109)の頸部から体部上半を正位に埋設し、外側を囲むように、土器片で外護的な方法がとられている。焼土は炉内底部と、炉の外まわりはかなりはつきり残されていた。

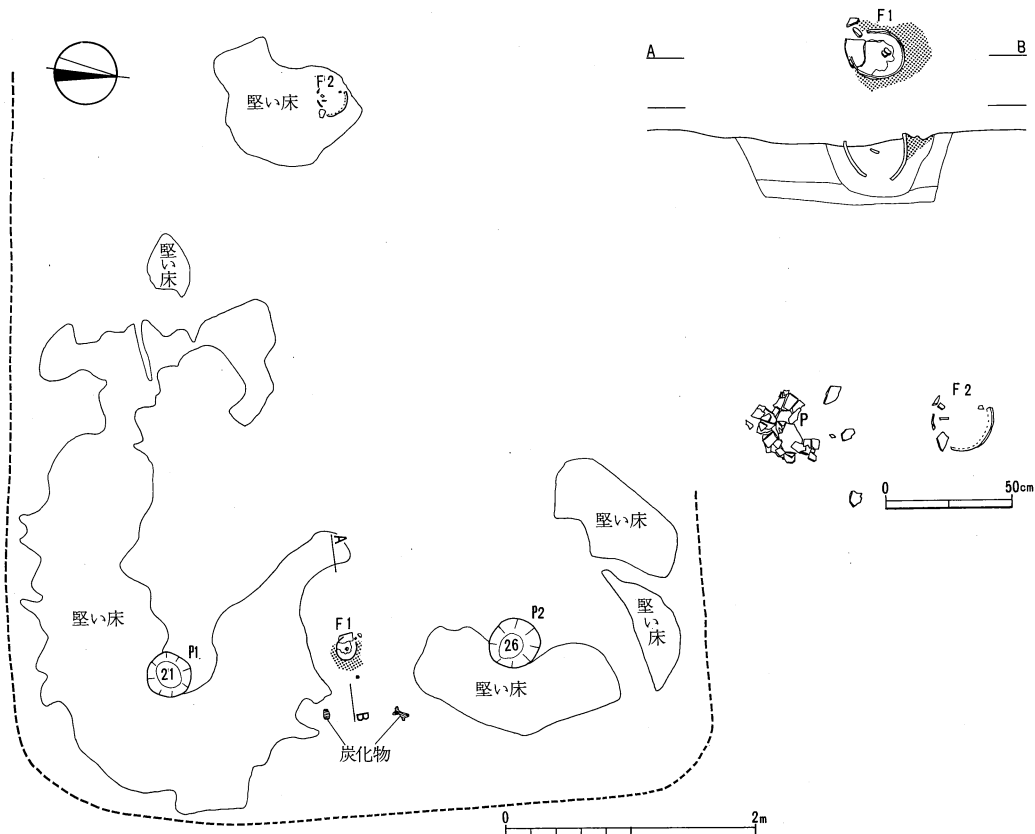
住居址の中央部に小さなピットが集中している。P₆・P₈・P₉は浅くて底が堅く、これらはあまり規則性がみられないが、P₆・P₂・P₂₀・P₁₉は一線上に並ぶ。間仕切りの柱か、棟持柱であろうか。

7号住居址(第34図)

調査の経過 本住居址は表土から住居址床面にいたるまで、耕作と工場跡による攪乱が著しく、床面と壁の立上り部分にまで後世のガラス片などが混在していて、壁は残っていなかった。しかし床面の堅固な部分が存在することをつきとめ床面の広がり追求の結果、東側に2本の柱穴とその中間に埋壔炉F₁を検出した。床面の堅い部分は西側に伸びるが、分断している。

西側の堅い床面の部分と、そのなかの埋壔炉F₂は第I次調査において検出されていたが、地上の構造物を取り除く作業において削られてしまったため十分な調査ができていない。

遺物の出土状況は埋壔炉のほかに、住居址の南東隅の、柱穴P₁の内側部分に比較的大型の壔(46・47・48)、壺(44・45)が出土している。この土器の出土した辺りは、柱穴の外区をとりまくように堅い床面があるが、内区の床面の堅くない部分におもに土器が出土していて、土器の据え置かれている位置を示すものとみられる。本址では外区が比較的良好に踏まれる部分とみてもよいだろう。砥石(223)の出土地点は南壁中央に近いが、入口に想定される位置に近い。



第34図 7号住居址実測図(1/60)、埋葬炉と周辺の遺物実測図(1/30)

また小形手捏土器(429)は完形逆位で、住居址の内区やや南の床面から発見している。一方そこにも大形破片が出土している。

遺構 ローム層ではないが、部分的に堅い床面がはっきり残っている。その部分は東側柱穴の外方を囲むように、またF₁の周囲にもみられる。西側ではF₂の周辺に残されていて、中央部分が軟らかいという状況を示している。

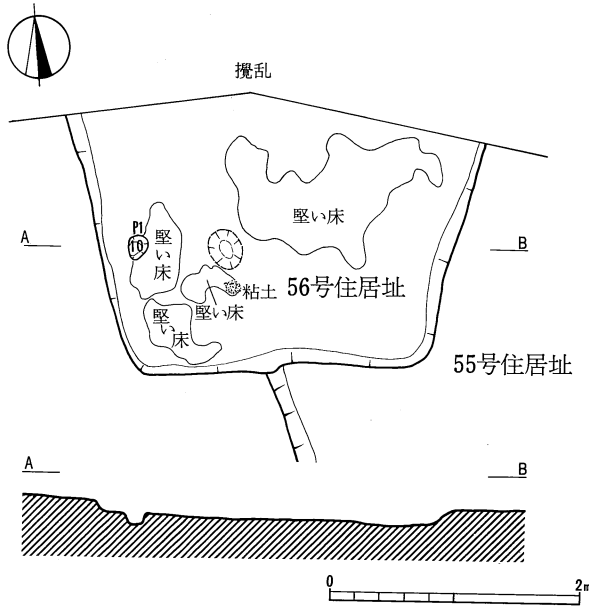
柱穴はP₁とP₂が東側にあり、炉がその中間に埋設されていて、形が整っているから、西側にも同様に存在して、正長方形に配置されたものと思われる。

炉は東側では支柱穴を結ぶ直線上の中央にあり、そこから垂直線を延ばした西方にF₂がある。F₁(49)は頸部と胴部が約2/3残存していて、炉の掘り方部分にも焼土が入っていた。F₂の方は炉の周囲に焼土はなかった。

入口部分は施設的なものの検出はないが、南向きの入口とみられる。

56号住居址(第35図)

調査の経過 本址は55住に接して検出されたのであるが、北側は石垣によって破壊されてい



第35図 56号住居址実測図(1/60)

いるために住居址の全貌を確認することは出来なかった。また、本地域は以前に宅地とされた折に深く攪乱されており、新旧の遺物が逆転して出土している。覆土内には遺物は少なく、堅穴検出には褐色土を排除すると、黒色土に白色粒子の入った堅い壁面が見られ、床面は全体的に軟らかいが部分的にはタタキ状の堅い面を検出した。

遺物は床面上とその近くで少量出土し、石垣付近から甕口縁部(298)が見られた程度で遺物は少ないが、南西隅近くで粘土塊が出土している。

遺構 柱穴は1ヶ所検出されたが、あまりにも浅く支柱穴と見るにはやや難がある。

以上、住居址の概略であるが、残存された遺構から推測すると、北側に向かって開いており、胴部に脹らみをもつ住居址のように思われる。

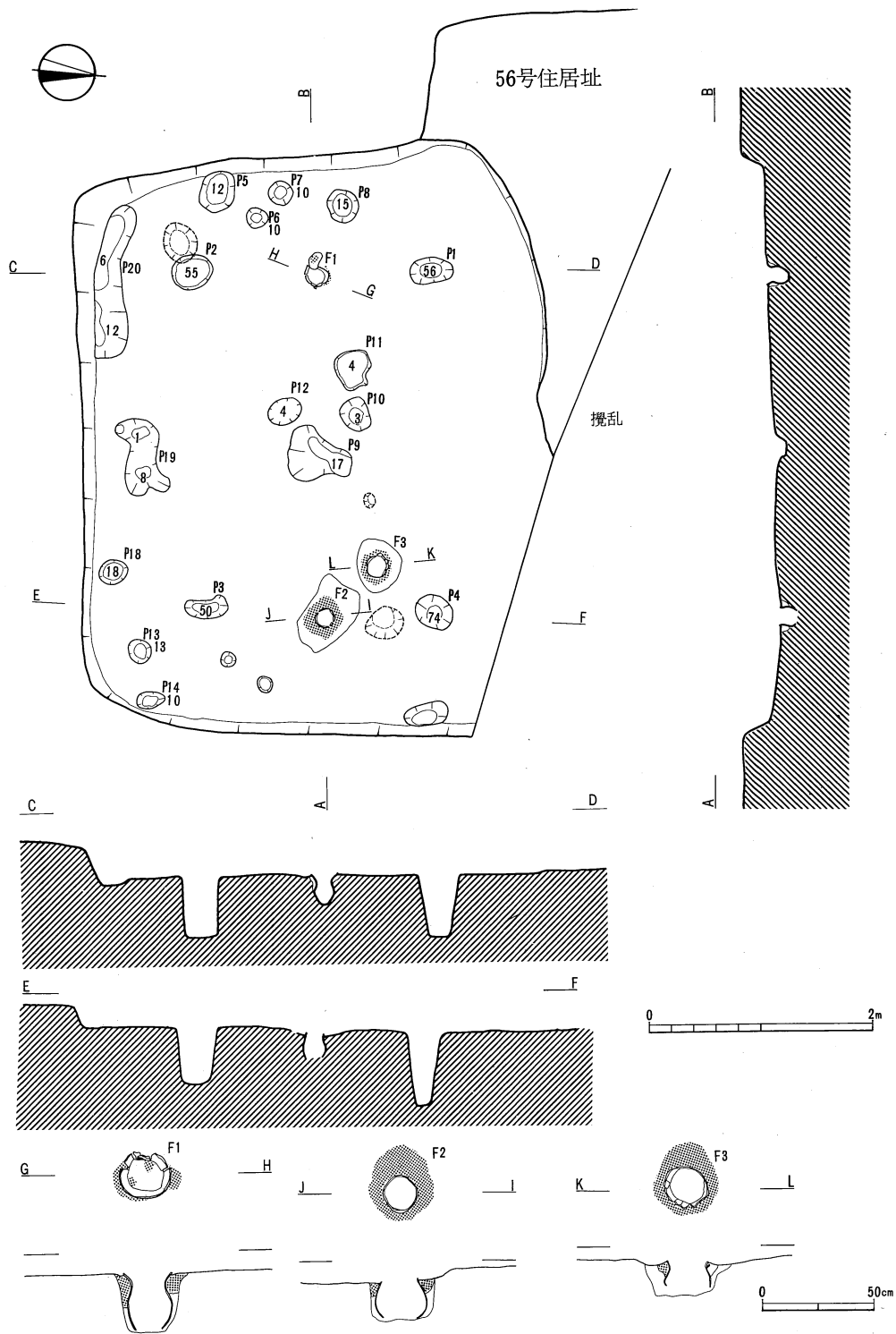
なお、55住との関係については、本址が55号址の壁の一部を切断して構築しているため、55→56(古→新)である。

55号住居址(第36・37図)

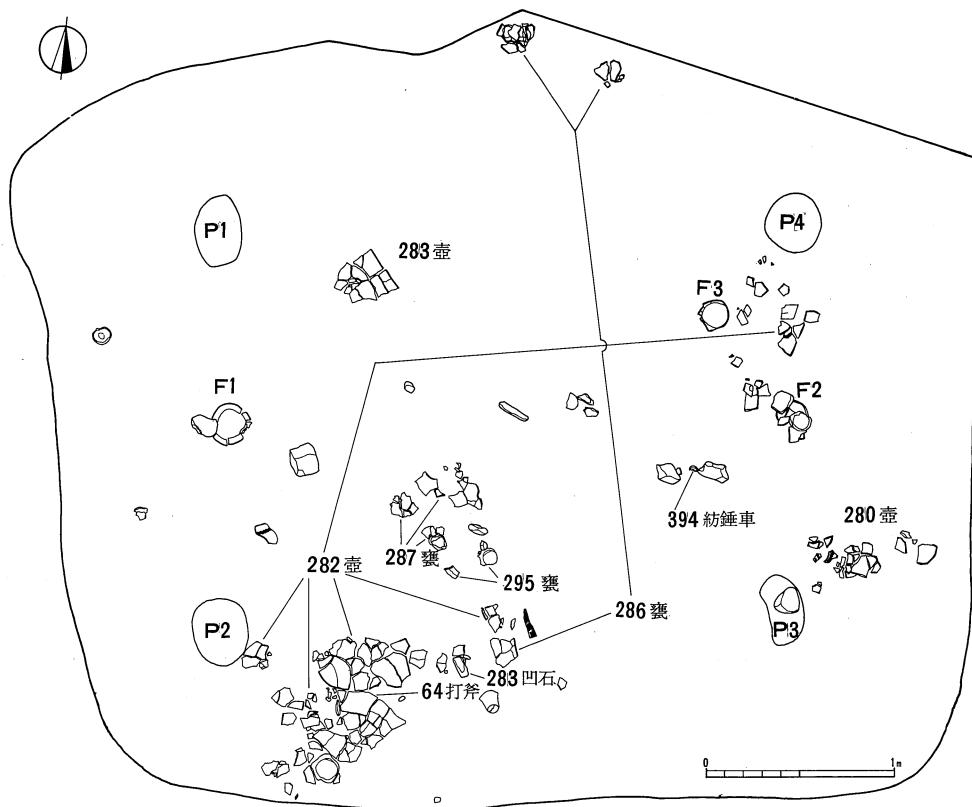
本址は褐色土層を掘り込んでいるためと、床面が堅いタタキ状になっているために検出は比較的容易であった。住居址内での攪乱も少なく、従って遺物の保存状態も良好であったが、住居址の北側壁は石垣によって破壊され、また北西隅は56住が重複しているために壁部分が若干破壊されてはいたが、ほぼ全貌は確認できた。

遺物の出土状態については、床面上かその付近に非常に多く、大型容器の類は床面上に潰された状態で出土している。南西壁付近で出土した大型壺(282)の破片の一部が2.5m離れた東側の炉付近までとんでおり、甕の胴下部が北壁近くに、口縁部が南壁から出土した例もあるなど興味ある出土状態であった。石器はこれら土器群に混在していたが床面上には少ない。全体的な遺物の出土状況からすれば、支柱穴を結んだ内区に少なく、壁周辺の外区からの出土が多いのが特色である。

床面については先述のごとく堅いタタキ状になっているが、それは黒色土と、米粒より小さい花崗岩質の白色粒子、それに若干の黄色土粒によって固めており、検出は容易であった。



第36图 55号住居址实测图(1/60)、埋葬炉实测图(1/30)



第37図 55号住居址遺物出土状態(1/40)

遺構 柱穴は19ヶ所が検出されたが、支柱穴 P₁・P₂・P₃・P₄ で、長方形に近い配列をなしている。4ヶ所ともに楕円形に近い掘りかたで、特に P₃ は長楕円の掘削からして丸太材の使用よりその大割されたものの方が適するように思われる。住居址中央には棟持柱的なものを挿入したと思われる浅い柱穴、それと間仕切りの使用の考えられる柱穴もある。壁際ピットは南西隅に見られたが、径は小さく、浅く、はっきりしない。また南側中央の壁近くに2本の柱穴が対となり入り口の施設とも考えられる。

炉は埋甕炉であり、その位置は支柱穴短辺のほぼ中央の東西 (F₂ (292)・F₁ (289)) にあり、床面の精査中に東側 F₂ の北で貼床の下から埋甕炉 F₃ (293) を検出した。これら3例の新旧については F₁・F₂ は同一の床面に位置し、両者とも内部に土器片を敷くなどしており同時期と思われ、F₃ は貼床下に存在しているので当然に前例より古いと考えられる。炉 F₁ と F₂ の使用度についてであるが、炉外の焼土の厚さでみるならば、F₁ は 15cm、F₂ は 6cm と計測されているところから F₁ の頻度が高かったと言えよう。F₃ はその位置から見て、本住居址の一施設とするには中心部から外れている。そのため F₃ のレベルで床面を追ったのであるが、床はもちろん付随する支柱穴も見当たらないところから重複も考えられず、疑問を残した炉である。

20号住居址（第38図）

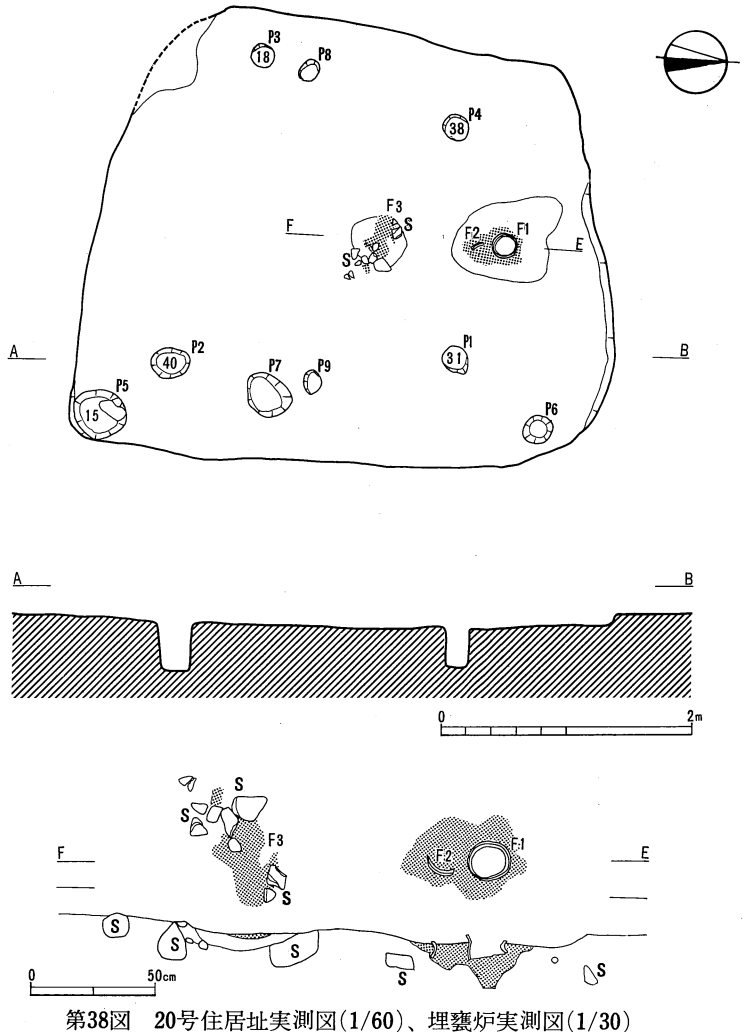
調査の経過 本址の東側一帯は打製石斧や凹石、石鏃、そして土器片が多数出土し、遺構の濃密な分布が予想されたが、結果的にやや小規模な20住1棟の発見に終わった。遺物の分布からすると、もっと東の道路下か南の用地外にある可能性もある。

竪穴は黒色土層から礫層上面まで掘り込んで構築しており、床面は容易に確認できたが壁と覆土については判別がつかず調査は難渋した。

遺物の出土は覆土内では少なく床面上が多い。その出土場所は、土器では大型甕破片が北東隅で2点（123・124）、石器では住居の中心部付近で打製石斧（62）、石鏃（327）の各1点、また北壁近くで磨製石斧（165）凹石（279）それに鉄片（461）が出土したが、遺物の出土分布で見ると、住居址の北側に多く出土している。

遺構 床面については先述のように礫層上面に作られているので礫が頭を出し、小さな凹凸が見られ良好な床面とは言えない状態であった。その面に支柱穴が4ヶ所掘られているが、深さも不統一でP₃は下の礫に止められ穿つことができず18cmの浅さである。支柱穴の配列も南側が開いた台形となっている。したがって住居全体も変形で南側に開き、それにやや南東コーナーの伸びた変形の住居址である。

炉については当初北側に埋甕炉F₁を確認したが、精査した際にそれに続いて南側に甕口縁部1/4程を残した炉F₂を検出した。F₂のレベルは4cmも低い位置にあり、その上に焼土が覆っていたことから、その両者の新旧についてはF₂が古く、それを廃棄してF₁を設置したと思われる。さらに床面を調査したところ住居址の中央よりやや北寄りに床面を若干掘り凹めて作った地床炉F₃を検出した。この炉は焼土の厚さは前二者に比して2cmと薄く長期間使用したとは考えられない。



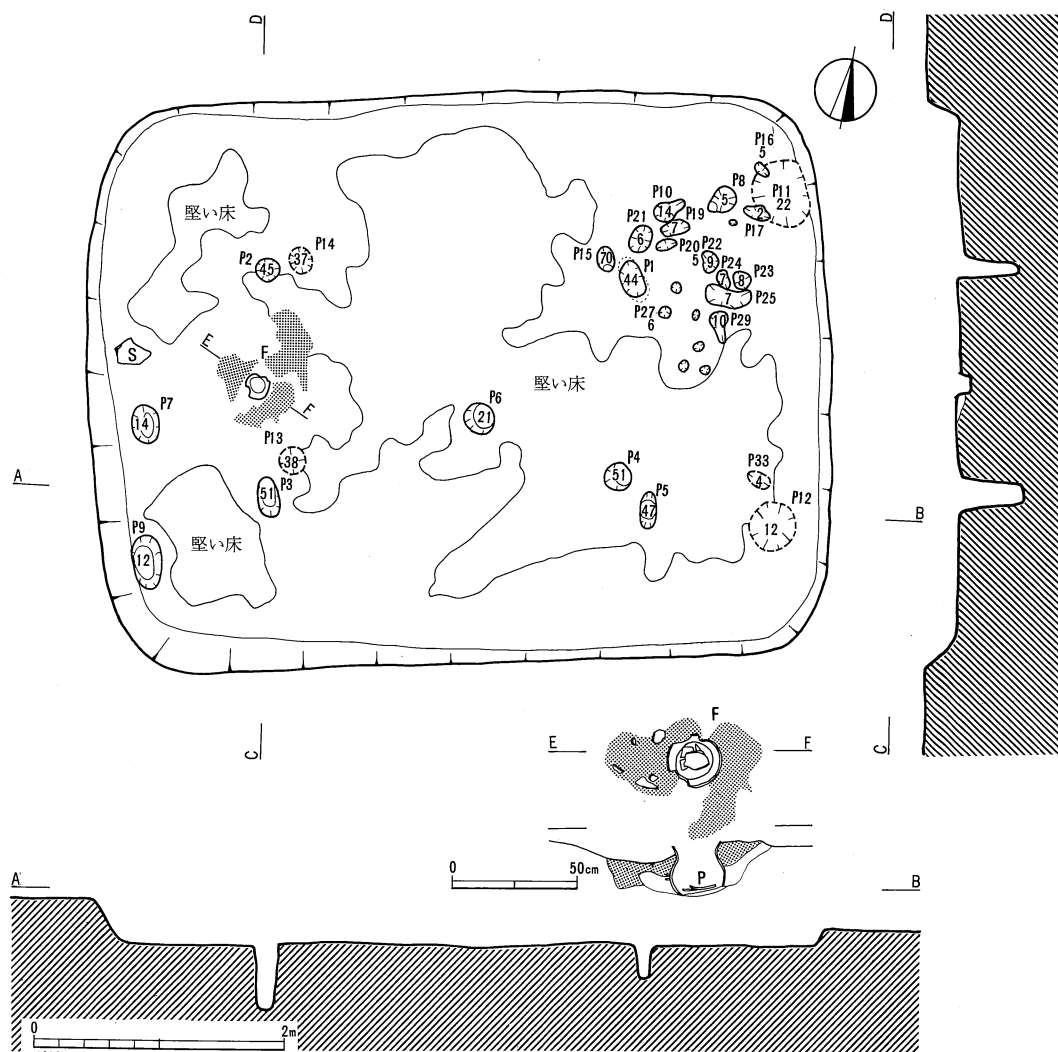
第38図 20号住居址実測図(1/60)、埋甕炉実測図(1/30)

壁際ピットは北東コーナーと南東コーナーに各1ヶ所見られたが、遺物などは出土していない。

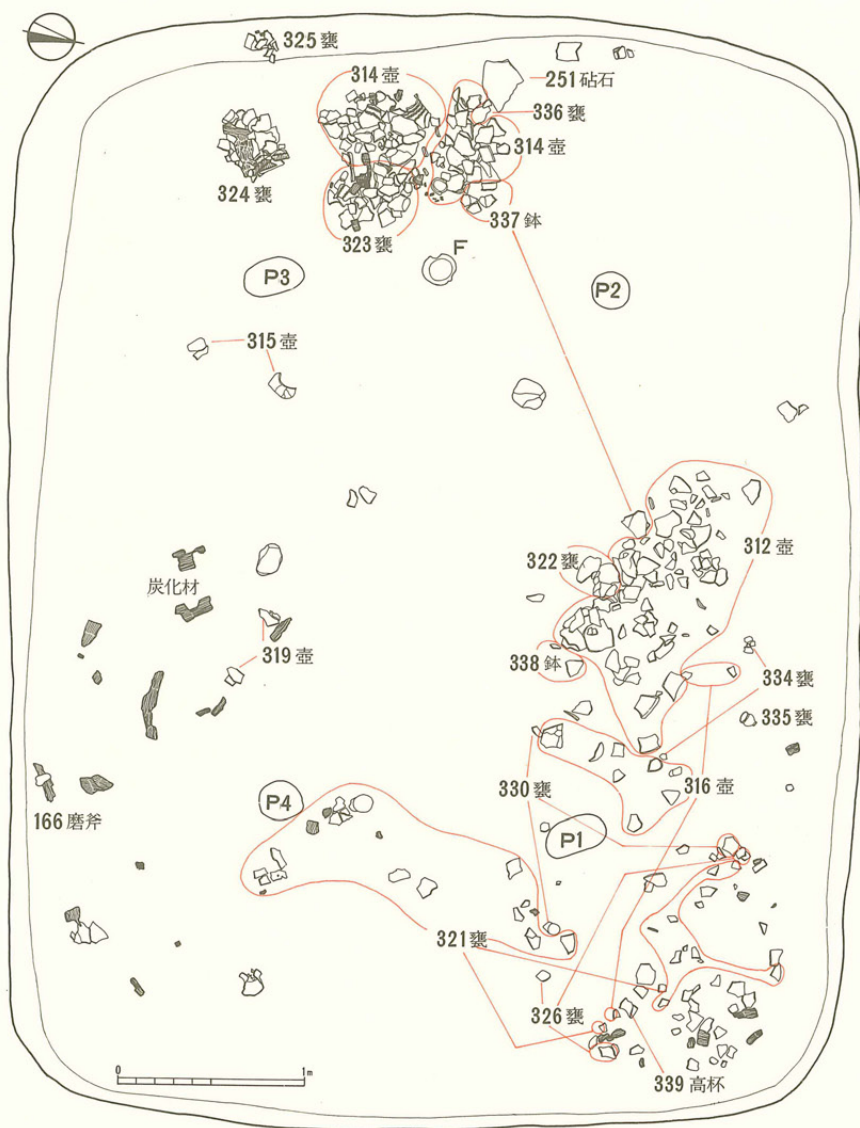
59号住居址（第39・40図）

調査の経過 本址は黒色土層中ではあるが、掘り込みが深く、また工場用地であったため耕作による攪乱がほとんどなく、竪穴の検出はスムーズに行われた。覆土は黄色土粒を若干含み炭化物を含む全体に褐色を帯びた土層であり、焼土が多く見られた。これは32住と近似しており、火災によって焼失した竪穴で、多くの成果を得ることができた。

土器片の出土は覆土全体に及ぶが、覆土上層、下層に特に多く、中層には比較的少ない。完



第39図 59号住居址実測図(1/60)、埋竈炉実測図(1/30)



第40図 59号住居址遺物の出土状態(1/40)

形土器の出土は総て覆土下層であり、その分布は大きく分けて2ヶ所に集中している。

北東コーナー付近には、最大の壺(312)が東西に細長く2.7m×1.4mに散在しており、破片の在り方は口縁部だけ東側にはずれてあり、頸部から底部は西側に集中している。頸部は体部下半～底部の破片の下に発見された。このことは東壁上部にあった壺が、まず口縁が欠損して落下したのち、体部が頭から逆さに落下して散在したものと推定される。

さらに、このコーナー付近には壺1個体分(316)、小型甕完形品3点(333・334・335)、甕4個体(321・322・326・330)、高杯(339)、鉢(338)が交互に散在して発見されている。

埋甕炉西側では大型壺2個体(313・314)、小型甕完形品2点(333・336)、甕2個体(323・

324・325)、鉢1個体(337)が出土している。このうち20の甕と15の鉢は遠く北壁中央付近まで破片が及んでおり、この2点のみが広く散在していることは注目される。

覆土上層部を掘り下げる際に、東壁中央付近の底部を取り上げたところ、内側にこびりつくように炭化米が多数発見され、覆土に多量の炭化米が含まれていることが判明した。このため覆土を総て水洗いし、採集した結果、合計46.8ℓに及ぶ多量の炭化米が検出された。炭化米は竪穴を対角線で切った北東側に多くみられ、その内でも特に北東コーナー付近に集中しておりこの分布は、北東コーナーの一括土器分布と一致する。炭化米は、覆土中～下層の床上10cm位に多く見られ、覆土に混ざる状態で発見された。その中で特に密にある所が4ヶ所見られた。大型壺を中心とする北東コーナーの一括土器の分布と炭化米の分布が一致していることから、壺に入れて桁に吊るして保存されていた米が、火災により、落下し、床上に散在したものと推定される。

竪穴を対角線で切って南西側の床上には多くの炭化材が発見されたが、特に埋甕炉から西壁付近に多く見られる。これら炭化材の上には焼土が5～10cm堆積し焼土に埋れた状態である。炭化材は、丸太材・板材、及び萱状の3つに分類することができる。

丸太材は径4～9cmのものが多く、垂木と思われる。節目の所で屈折しているのが観察され落葉樹を用いていると思われる。残存量はあまり多くないが、ある程度家屋構造を復原できるものである。西壁の北と南のコーナーの丸太材は斜めに竪穴中央部を向いており、西壁中央付近のものは、まっすぐ中央部へ向っていて、竪穴中央部を中心に放射状に見られる。南壁中央付近のものは主軸に対して、ほぼ直角に中央部へ向っている。このことから入母屋風屋根が考えられる。また南西コーナーの丸太材は、壁中段から床面、さらに床上の一括土器を壊すようにその上面に及んでいるのが観察される。このことから垂木が、壁上の地面に直接刺さっていた可能性があり、また一括土器が散在していないことから、垂木が焼け落ちた時に床上の土器を押しつぶしたものと思われる。

この土器とその周辺及び埋甕炉付近には、丸太材を覆う状態で、萱状の炭化材が検出された。この炭化材は丸太材の方向と多くは平行しているが、一部には直交しているのが見られた。径5mm前後で比較的太く萱というよりも、川辺に生えている葦に近いものと思われる。

北壁中央付近には、壁直下から壁の傾斜にそって厚さ約1cm、巾約20cm長さ約40cmの板材が横方向に見られた。また南西コーナー付近の床上にも板上のものが見られた。用途は確定できないが、位置から考えると、壁が崩れないための板か、または、竪穴の掘り込みの壁上に簡単な板壁があって、それが焼け落ちたものではないかと思われる。

南壁中央やや東寄りの壁中からは、炭化材にはめ込んだような状態で、蛤刃形磨製石斧(166)が出土した。この磨製石斧は、全体に煤けて黒くなっているが、体部中程には煤の付着が見られず、ここに柄が付いていたものと思われる。柄と思われる巾と、炭化材の巾がほぼ同じであるので、この炭化材を柄としてはめ込まれていたものが、焼けたと推定される。

磨製石斧の北1mの床上には径25cm厚さ4～14cmに朱のようなものを含んでいる筒所が見

られた。本址からは朱を塗彩した土器は出土していないので、木器に使われた漆の可能性もあるが分析が行われていないので断定できない。

石器としては埋甕炉の西側床上に砧石1点(251)および覆土中からは砥石片1点、石鏃2点(330・331)が出土したのみである。

遺構 主柱穴は P_1 ・ P_2 ・ P_3 ・ P_4 の4本であり、配列は長方形である。4本とも円形または楕円形を示す。 P_2 と P_3 を結ぶ対角線上には間柱と思われる比較的浅い P_6 が見られる。各主柱穴の近くからは、全体に西へ25cmずれて床下に柱穴が検出され、1回以上の建替えまたは重複があったと推定される。

床はローム粒を若干含み、黒色土をタタキしめた堅い床である。壁周辺と埋甕炉周辺および北東コーナーの一角には堅い床はない。南壁中央から内側へ1mの所に径1×1.5mの範囲で床が二重になっているのが見られた。

北東コーナー付近の堅い床のない所には、小ピットがいくつか見られ、ピット内には炭化米が含まれていた。

埋甕炉は主軸の西側 P_2 と P_3 を結ぶ線より外側に位置する。底部を欠く甕(327)を正位に埋設し炉の底部には他の甕の体部破片(329)を敷いている。炉の周囲には床面よりやや低く焼土が見られ、北西側では焼土の切り合いが見られる。切られている焼土内からは甕の体部片が出土したので、埋甕炉が重複していることが確認された。これは床下から柱穴が検出されたことと対応するものである。

入口施設としては特に顕著なものは検出されなかったが、南壁やや西寄りに堅い床が中央部までU字状にない所があり、その奥まった所には前述の二重床が見られる。このことは床のない部分に梯子のような施設を考えれば理解できるものであり、二重床は人の出入の際に持ち込まれた土が踏み固められたものと推定される。

出土した遺物

出土した主な土器は表1のとおりである。壺は大型のものと、小型のものと2つに分類される。甕は口径の大きさによって11cm未満のものを小型、11cm～18cm未満のものを中型、18cm～24cm未満のものを大型、24cm以上のものを超大型と4つに分類した。これらの土器は前述のように炉周辺および北東コーナー付近に集中しており、この2ヶ所からの出土状態は表2となる。貯蔵具としての壺が炉の周辺にあり、日常具である甕が炉周辺よりも貯蔵庫と思われる北東コーナーに多くみられる。これは単に壺を貯蔵具、甕を日常具と考えたのでは理解できないものであり、今後検討すべき問題点と思われる。

大型壺2・3は全体に煤けているが体部には細い帯状に煤けていない部分が見られる。この帯は幅6～8mmの細いものが平行に、3本を1単位とし、この3本の帯が頸部から体部下半まで斜めに格子状に交差しながらめぐっている。これは土器の保護および運搬または吊すために竹のようなものを格子に編んだ籠状の痕跡と思われる。

大型壺(314)は口縁部を欠損しているが、欠損部はやや摩滅していて、この壺が使用されて

いる時点からすでに欠損しており、伝世品を大切に使用していたものと考えられる。

表1 主な土器

	完 形	1/2 以上	1/2 以下で主なもの	計
壺 大型	2 (312・314)	1 (313)	1 (329)	4
壺 小型	1 (316)	0	4 (315・317・319・320)	5
甕 超大型	1 (321)	1 (322)	0	2
甕 大型	2 (323・324)	2 (325・326)	1 (328)	5
甕 中型	2 (330・331)	1 (332)	0	3
甕 小型	3 (333・334・335)	1 (336)	0	4
鉢	1 (337)	1 (338)	0	2
高 坏		0	1 (339)	1

表2 出土地点別

	炉 の 周 辺	コ ー ナ ー 付 近
壺 大型	2 (313・314)	1 (312)
壺 小型	0	3 (316・317・320)
甕 超大型	0	2 (321・322)
甕 大型	3 (323・324・325)	1 (326)
甕 中型	1 (332)	2 (330・331)
甕 小型	2 (333・336)	2 (334・335)
鉢	1 (337)	1 (338)
高 坏		1 (339)

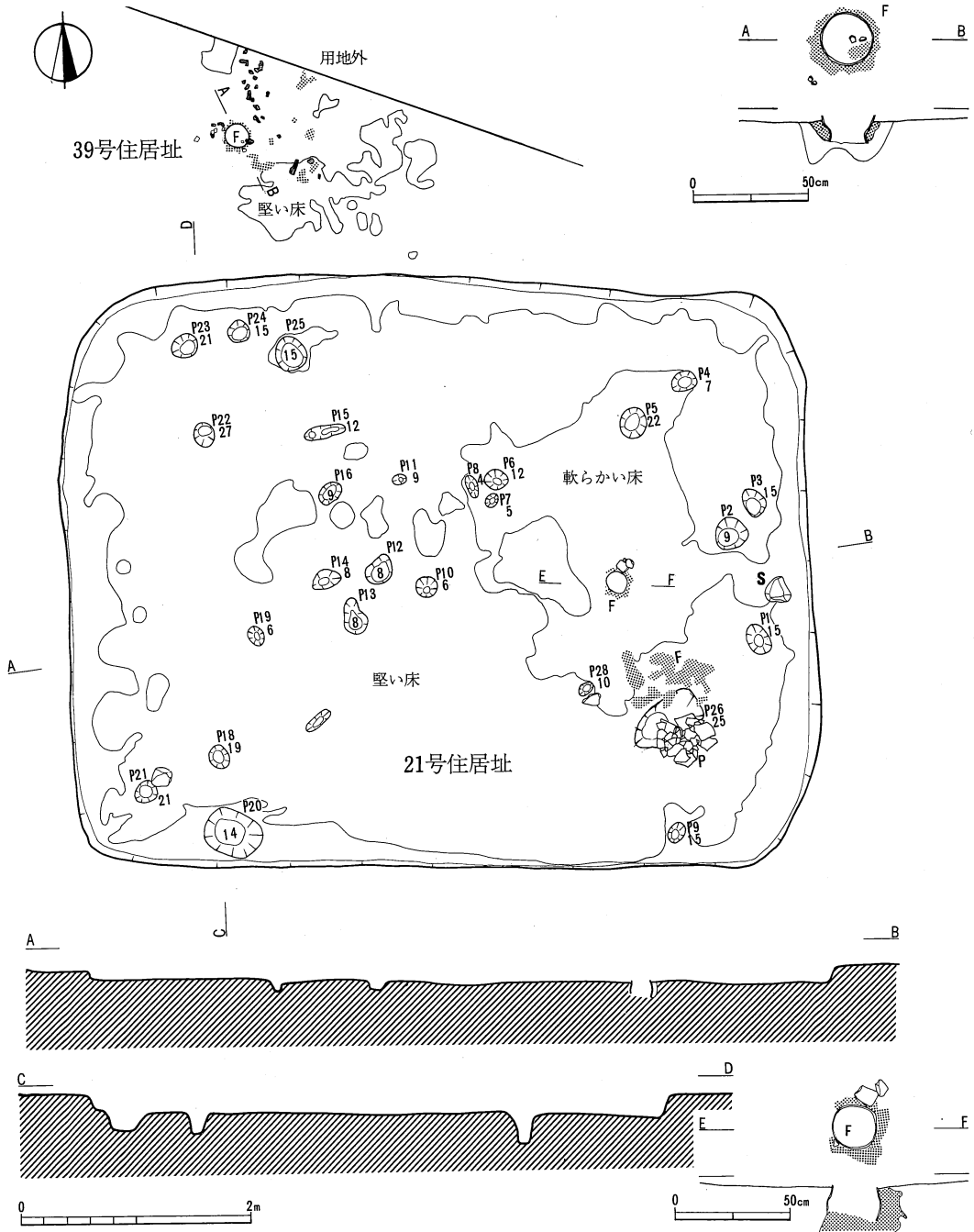
39号住居址（第41図）

本址は、21住の範囲を確認するため周囲を拡張している折に炭化物、焼土等が多量に見られそれが端緒となって発掘されたものである。本地域も以前住宅の造成で上層は攪乱されており、比較的浅いところから打製石斧、打製石斧、磨製石鏃の未製品などが出土した。

覆土中にはほとんど遺物は見られず、床面近くで若干(221)見られた。その床面は、部分的に残っており、タタキシめられて堅いので容易に区別できた。そのタタキ面からやや外れたところに埋甕炉が検出されたが、付近は軟弱で、床面は見られなかった。炉周辺には、焼土、木炭片が広い範囲に点在していた。炉(222)の埋設方法は、甕の肩部よりやや下ったところで切断されたものを逆位の状態で床面に埋め込んで使用している。

発掘の結果からすれば、床面、埋甕炉の検出によって住居址と断定できたが、床面の部分的存在、壁、柱穴など未確認のために、住居址の全体を把握することができなかった。

なお、隣接する21住との床面レベル差は本址が約20cm上位であるが、発掘の所見では、漆黒色の覆土が21住と39住の境付近にみられ、土器片の出土もそこに集中するなど、39住の覆土が



第41図 21・39号住居址実測図(1/60)、埋甕炉実測図(1/30)

21住の上にあると思われた。しかし攪乱が激しく、21住覆中に貼床が認められなかったので、両者の新旧関係は不明としておく。ただし、土器の分類・比較からは39住が新しいという知見を得ている。

21号住居址（第41図）

調査の経過 本址は暗褐色土層を掘り込んで構築されており、そこに黒色土が流入しているために明瞭さを欠いて、発掘は容易ではなかった。

表土から続いて黒色土は相当の攪乱が見られ、遺物も多く出土したがほとんど小破片であった。主な遺物は床面直上から出土しており、大形破片の出土地点を見ると、南東P₂₆の主柱穴の上部と内部に柱穴を覆うような状況で出土している（126）。その他としては北東側壁近くから壺・甕などの比較的大きな破片が見られ、石器その他では、砧石（250）、磨製石鏃（180）が南西隅に、砥石（225）は南壁中央近く、それに紡錘車（395）は北壁際の中央から出土している。以上、主要遺物の出土についてあげたが、小破片までの出土分布をみれば数量的には内区に多く、大形破片や利器はその外側からの出土が多い。

床面については住居全面をタタキしめて保存状態は極めて良いが、炉の周辺と、壁際はタタキ面はなく軟弱であった。

住居址周囲の壁は39住と40住が重複しているために西側は褐色土、北側は黒色土というように一様でなく、壁の上面は相当の攪乱がある。

遺構 主柱穴4本を長方形に配し、その他大小のピットが22ヶ所に及んでいる。その集中箇所を見ると、住居中央部に9ヶ所、北西コーナーに3ヶ所、南西コーナーに2ヶ所、埋甕炉と東壁付近に3ヶ所などであるが、中央部に見られたものは他にも例があり、棟支への柱か、間仕切りの柱とも思われるし、主柱穴に近いものは支柱穴であろうと考えられる。また北西コーナーに見られるP₂₃・P₂₅などは壁から等間隔で両者が対になり、床面の堅さなどを考え合わせると、入口部に想定してもよいではなかろうか。

炉については、東側に位置した埋甕炉であり、周辺は軟らかくタタキ面はない。土器の埋め方は浅く、周辺に厚く焼土が詰められていた。これから取り出された焼土・木炭片が東南の主柱穴と炉を結ぶ中間に散在していた。

また、先述した東南主柱穴を覆う状態で甕などが一括出土しているが、これらは柱の近くに置かれてこのようになったものか、柱の上の桁などに作られたであろう棚などから落下したのか種々の想像ができる出土状態であった。

40号住居址

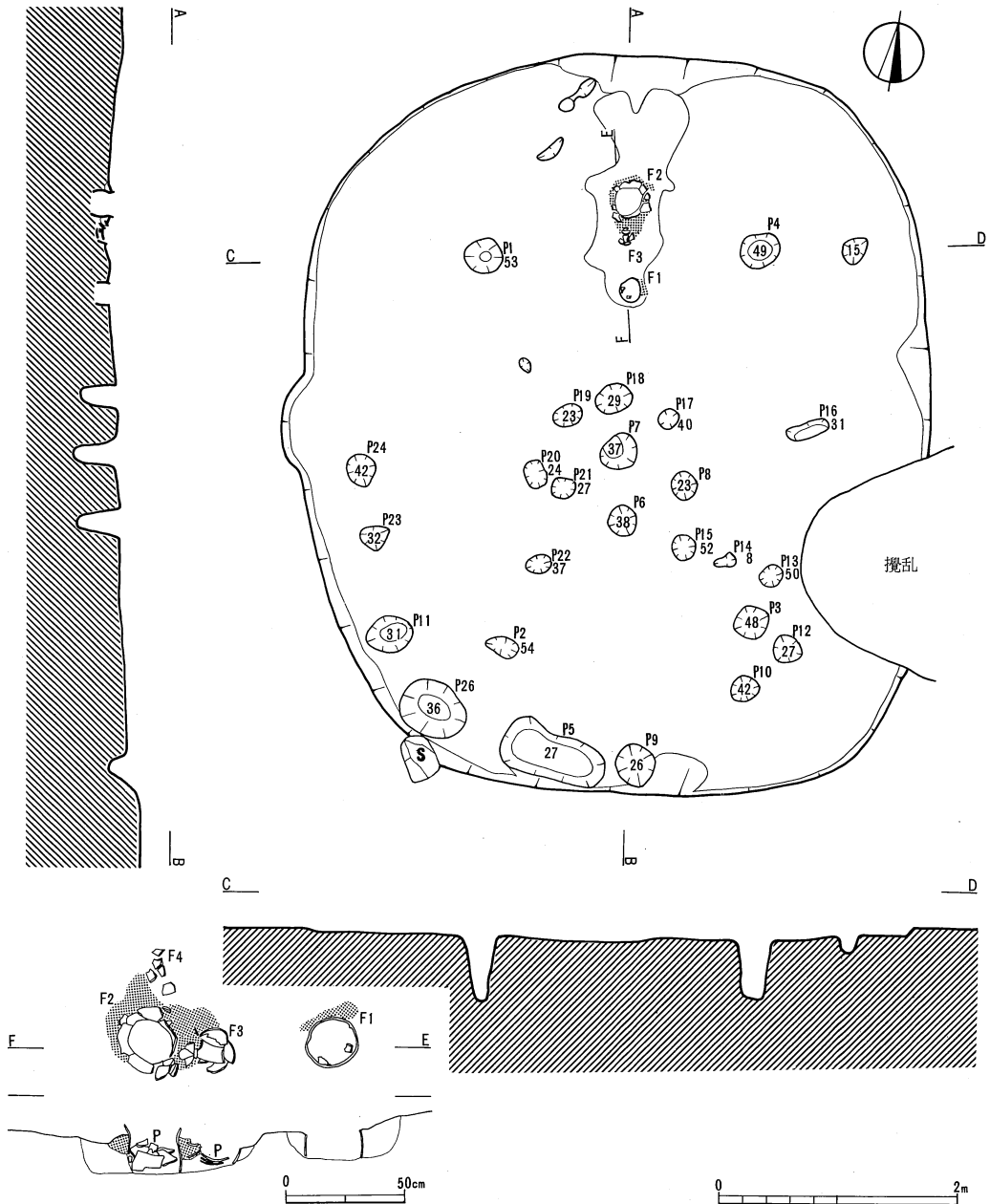
本址は21住を精査中に検出された住居址である。その端緒となつたのは、1 m²にも満たない小範囲の床面であるが、堅くタタキしめられており、またそれらのすぐ西側には同じレベルで焼土と礫群が点在し、焼土中から土器片が出土するなど、住居址としての条件を揃えてはいたものの、相当に破壊と攪乱がされていた。続けて北西側を調査すれば何らかの結論を得られたのであるが、用地の関係で拡張できず、本址の規模、住居の主軸など全く判らないままに終了した。

遺物については焼土中から出土した若干の土器片と、攪乱層からの土錘1点のみである。

なお、21住との重複であるが、床面レベルで見ると、本址の床面は25cmと高く、21住に切られていると思われる。

58号住居址 (第42図)

調査の経過 本址は表土を除去すると、拳大から人頭大の礫群が出土し、それに土器片が入



第42図 58号住居址実測図(1/60)、埋甕炉実測図(1/30)

り込んで攪乱された状況であったが、これらは上部からの押出しであり、それを取り除くと、覆土は褐色の強い黒色土で、北壁側において多量の炭化物が見られた。

遺物の出土状態は、床面とその付近に多く見られ、土器の類は南西コーナーから甕の完形品(303)や破片が多量に出土し、それに混じって紡錘車(396)や小形手捏土器(432)なども検出されている。その他特筆すべき遺物としては、炉址の近くでガラス小玉(454)を発見し、その時点で覆土の総てを水洗いした結果、管玉(453)と炭化米を検出した。石庖丁も北西コーナー(192)、と、南西コーナー(191)の壁下で2点出土し、他には打製石斧4点(いずれも折損品)、石鏃、砥石(227)、敲石(268)各1点と、凹石2点(284・285)が見られるなど特異な住居址であった。

遺構 床面は褐色土に黄色土の粒子を多量に含んでおり、それを堅くタタキしめた床面である。その床に当初2ヶ所に埋甕炉F₁(304)・F₂(305)が検出されていたが、そのF₁を取り上げようとしたところ、その下層部から土器破片が見られたので、それをF₃(307)とした。さらに焼土を除去すると、F₁の炉に並んでその南側に埋甕炉F₄(309)が検出されて、都合炉は4ヶ所となった。

柱穴については26ヶ所が確認されたが、柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄でほぼ円形に近く、深さも50cmと深い。他の柱穴は比較的浅いものが多く、支柱的なものと考えられる。特に住居址の中央付近に多くの柱穴が発見されたが、これは他の住居址にも同様の例がある。数多い柱穴も炉が4ヶ所もあり、何回かの上屋の改築も考えられるところから当然のことと思われる。また、南西コーナーの壁際に4ヶ所のピットが見られるが、類例はあるものの、数多い点に注意したい。

入口部については、南壁中央の壁下が若干高くなっており、これを入口と見るか、西壁中央の壁が張出したところとするか、また、その南側に南北3ヶ所の柱穴が並んでいるが、それを入口とするか、一応3ヶ所が考えられる。

本址を完掘の結果、東南隅に攪乱が見られたものの全貌を明らかにすることができた。そのプランは、隅丸楕円状の長方形の住居址で、本遺跡では他にあまり例を見ない形態である。またガラス小玉の発見によって、覆土および埋甕炉内の土を洗って炭化種子類検出の端緒となるなど、意義深い住居址である。

8号住居址(第43図)

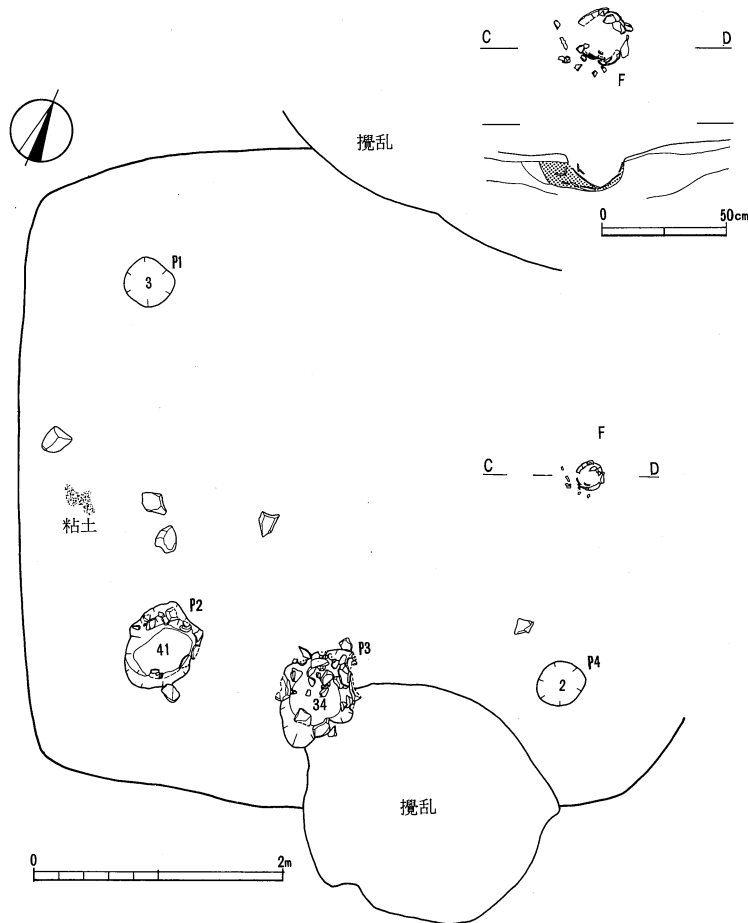
本址一帯は相当の範囲にわたって攪乱されており、当初それらの層から多量の土器片・石器が出土したために発掘範囲を拡張して、竪穴の床面検出を試みた。その結果、黒色土層を掘り込んで壁をつくり、その下層の暗褐色土層上面にタタキ面を作っているために壁の立ち上りなどの確認は困難な状態であった。埋甕炉を検出したことによって、それを基準に床面を追ったのであるが、部分的にはタタキ面が見られるものの、広がりなどは把握できなかった。また、壁際のピットあるいは柱穴らしき小ピットが3ヶ所確認されたので、それらと炉址から壁を想

定して検出を試みたが、確実に把むことはできなかった。

遺物の出土状況については、先述のごとく攪乱層中に多く、床面付近からは P_2 の上面と内部から多数の土器片が出土し、中でも小形手捏土器 3 点 (434・435・436) の出土は注意される。石器では南壁付近から完形の打製石斧 2 点 (70・71) も出土しており、遺物が集中している。中央付近においては紡錘車 (398) 1 点、また西側の壁付近からは高坏 2 点 (55・56) が出土するなど遺物量は多い。なおその付近から第 1 次調査の時に、小形手捏土器 (433) が発見され、粘土塊も出土している。

柱穴は 4 ヶ所検出されたピットのうち、それらの配置からみて P_1 ・ P_2 ・ P_4 が支柱穴をなすと思われる。 P_2 ・ P_3 の柱穴には拳大の礫石が詰められ、また先にも述べたように P_2 の内部、その付近から多量の土器が出土するなど、他の柱穴とやや異ってはいるが、位置から見て支柱穴と見るのが穏当であろう。 P_3 は壁際のピットと思われる。

炉は埋甕炉であり、甕 (53) は底部を持ったものを小範囲に掘って入れてあったが、その下部にも別個体の土器破片が重なり合うような状態で検出されている。したがって古い炉が存在



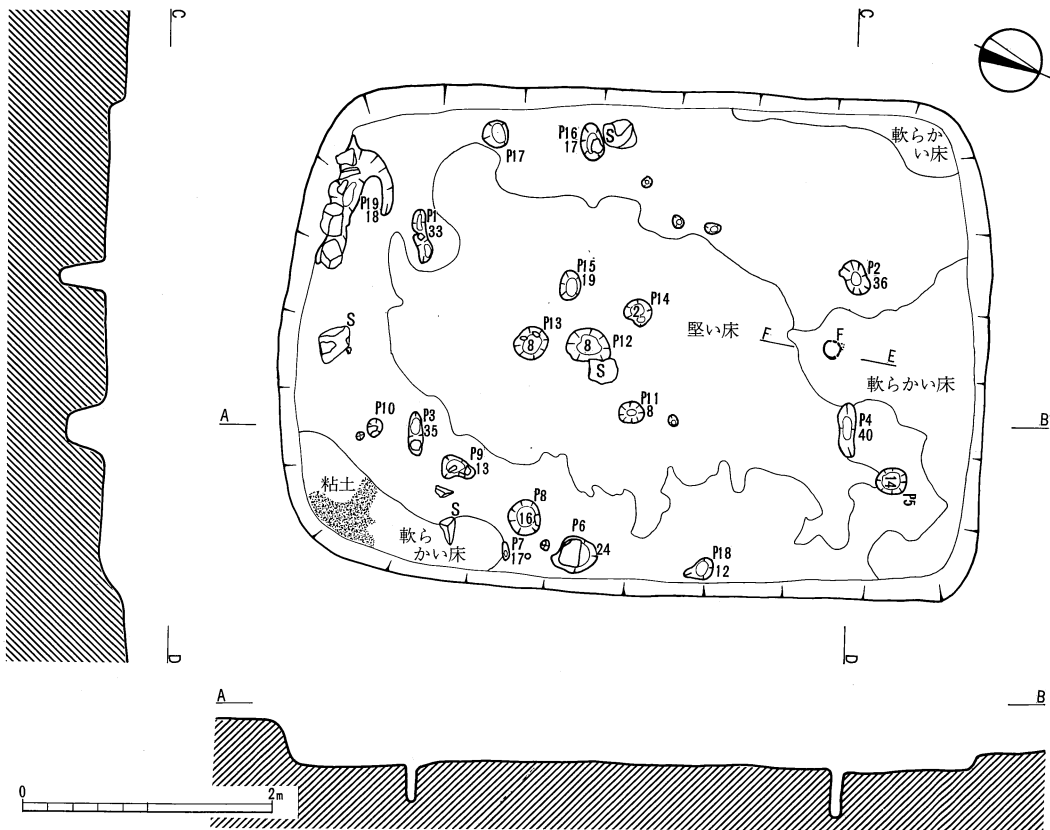
第43図 8号住居址実測図(1/60)、埋甕炉実測図(1/30)

し、再度使用をしていると思われる。

68号住居址 (第44・45図)

調査の経過 本址の一带は、耕作などによって相当深く攪乱されており、土器片とともに現代の物品が出土する有様であった。結果的には住居址の床上 20~30 cm に至って、荒い粒子の褐色を帯びた黒色土の落ち込みが見られ、竪穴の検出は比較的順調に行われた。北壁側はやや不明確であったが、三方の壁は明確に発掘できた。

遺物の出土状態は、上部の攪乱層の遺物は別として、主な遺物は床面とその付近から出土している。その遺物を出土地点で見ると、炉の東側に甕が1個体 (398)、炉の北側壁の近くから甕が2個体 (396・397) と台付甕が1個体 (405)、南東コーナーにも壺 (395)、甕 (401) などが出土している。また石器については、打製石斧 (77) が炉の北側に1点、砥石は内区 (228) と南東コーナー (229) に出土した。全体に遺物は東南隅と南西柱穴近くで見られ、それらの分布からすると、支柱穴の外側、通称外区と呼ばれるところからが多い。さらに注意されることは、住居外の壁上部から5点の打製石斧が出土していることで、これらが本址のものとするれば、



第44図 68号住居址実測図(1/60)

上屋を想定する際に垂木の位置が相当に伸びていたと考えられる。

床面は全体に堅くタタキシめられているが、しいて分別すれば特に堅い面、普通の面、やや軟らかい面とされるが、支柱穴の内側は堅い床面で、壁周辺と埋甕炉付近は軟らかい状態であった。

遺構 支柱穴は $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_4$ で、その配列の形状は超長方形で、短辺の間隔が狭く、また 4 本ともに極端な偏楕円形に掘られている。この形状から、支柱は丸太材などは想像されず、割材でも相当に薄いものを埋め込んだと考えた方が妥当であろう。その他のピットとして 15ヶ所が見られたが、それらは大小あり、深さも浅い凹状のものから 20cm を超えるものもある。

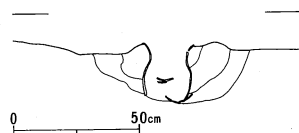
その内から注意されるものとして、住居址中心部に点在する 5ヶ所の浅い柱穴は、他の住居址に見られたものと同様と思われるし、支柱穴に接して掘られたものは当然支柱的な存在と考えられる。また西壁中央部に接して掘られた柱穴は対をなし、21住などと類似しており、入口部の施設とも考えられよう。続いて南西コーナーには不整形な溝状の遺構が見られ、土器数片が出土している。

炉は北側に位置し、埋甕炉 (399) であり、土器底部には 2 枚の土器片 (403) が敷いた状態であった。周辺には床面のない範囲が広く、炉の土器を取り出す折に、甕の周囲と下部から若干の土器片が見られたところから、古い埋甕炉の場所に再度設けられたものであろう。

70号住居址 (第46・47図)

調査の経過 本址一帯は砂に礫の混ざった土層で、南側は礫層を切り込んでいた。そのためか堅穴内にも多量の礫が入り込んでおり、床面近くから出土したたくさんの土器類もこの礫により破壊されたような在り方であった。覆土は部分的に漆黒色土があり、その下は褐色を帯び黒色土であったが、漆黒色土からも土器が多数出土し、黒色土には多量の焼土と炭化材が混在していた。

主な遺物は床面と漆黒色土層中にみられ、遺物の出土状態は、床面に散乱しているという表現が適切であろう。遺物の出土地点の概略は、北西コーナーに壺 3 点 (409・410・411) と、甕 1 点 (415)、南西コーナーに大型壺 (412)、大型甕 (417)、中型甕 (420)、鉢 (424) の各 1 点、南東コーナーに壺 1 点 (408)、甕 2 点 (414・422)、また北東コーナーには甕 1 点 (416) と出土したが、とにかく折り重なるように出土しており、なからの完形品が 1 点のみであったということも不思議である。さらに不思議なことは先の北西コーナーから出土した壺の胴底部破片はそれに続く頸部が南東コーナーに見られ、また甕胴~底部片が北西および南東コーナーに分かれて残存するなど、一個体が同じ住居址内ではあるが約 3 m ほど離れて出土している状態は



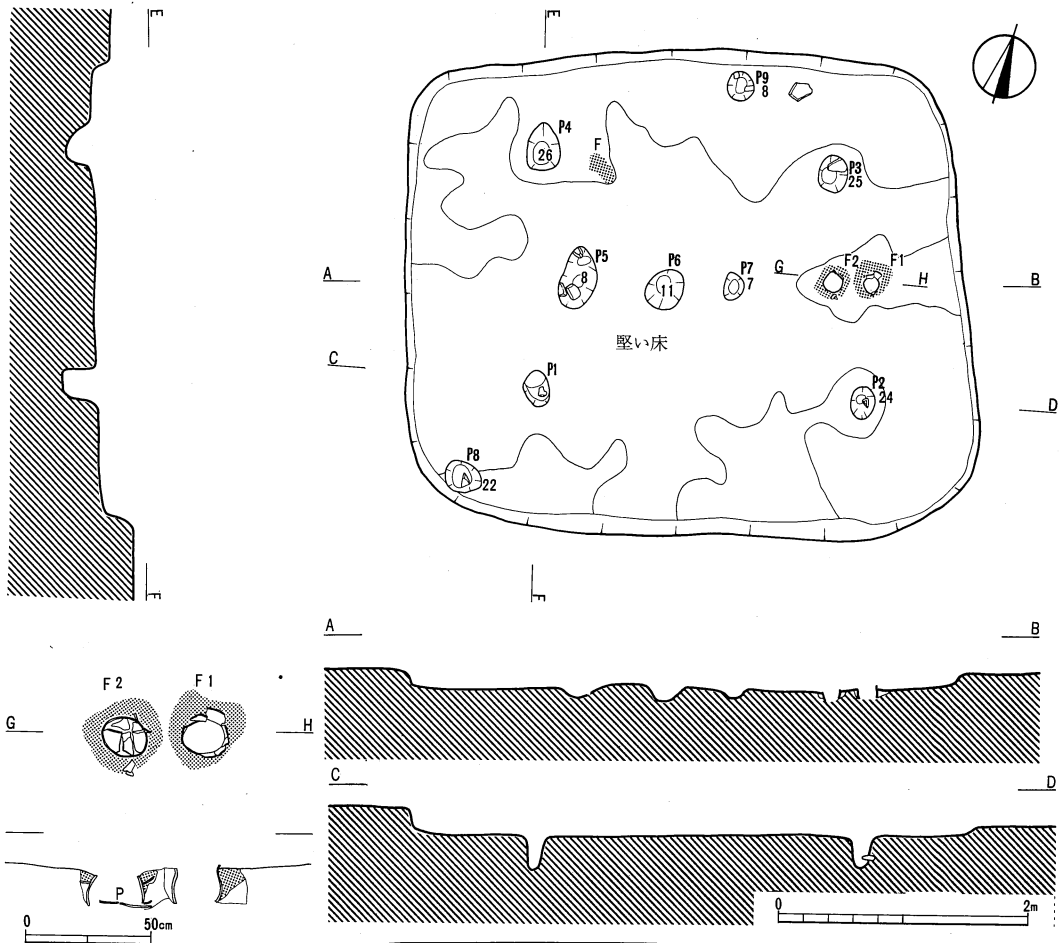
第45図 68号住居址埋甕炉実測図(1/30)

どのように解釈したらよいか、興味深い出土状態であった。石器類も多く出土し、南西コーナーから打製石斧（86）、乳棒状石斧（168）、石鏃（339）各1点が出土し、南東コーナーのピットの縁からは砥石1点（230）も出土している。

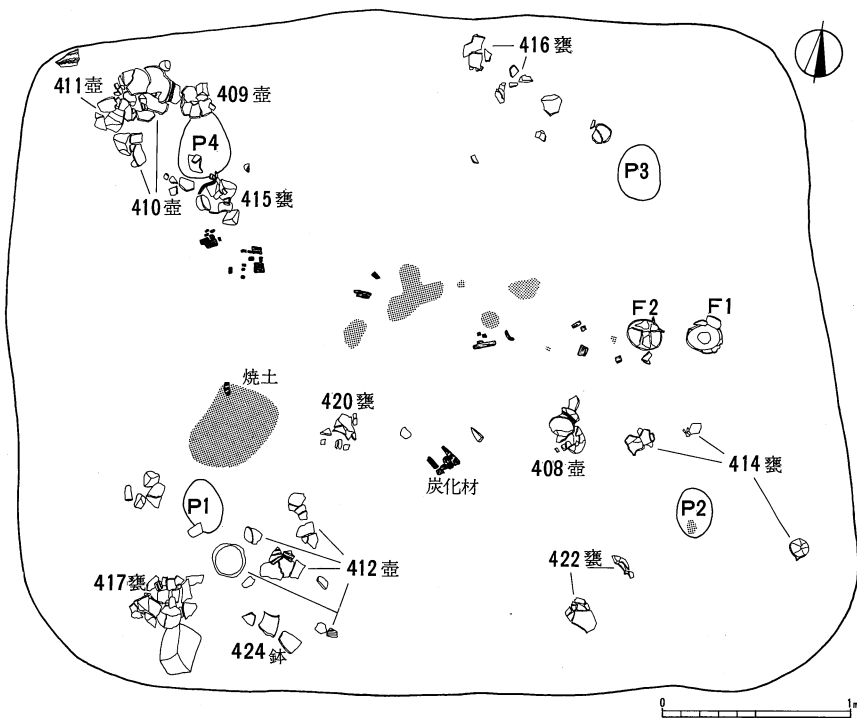
遺構 床面の状態については、支柱穴内は特に堅緻であり、続いて炉の周辺と西壁の中央から南、南壁の中央などが堅く、それに比して北壁側は全般に軟弱であった。

支柱穴は $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_4$ で、その配列形状からすれば長方形となり、その4本ともに楕円形をなす。それも主軸が南北をなし、内部に礫塊を入れたものなどがあつた。また、中央部に3ヶ所並んだ浅い遺構は、掘り方も直径も大小不揃いであるが、その使用法としては、棟支への柱なのか、間仕切りに使用したものか、他の住居址にも例があるのでそれらと合わせて考えたい。その他のピットとしては壁際に $P_8 \cdot P_9$ があり、注意したい遺構である。

炉は、東側中央 F_1 （418）と、それに接して西側に F_2 （421）と、埋葬炉が2ヶ所検出された。両者とも甕胴部を使用していたが、 F_2 の内部には土器片が敷いてあつた。



第46図 70号住居址実測図(1/60)、埋葬炉実測図(1/30)



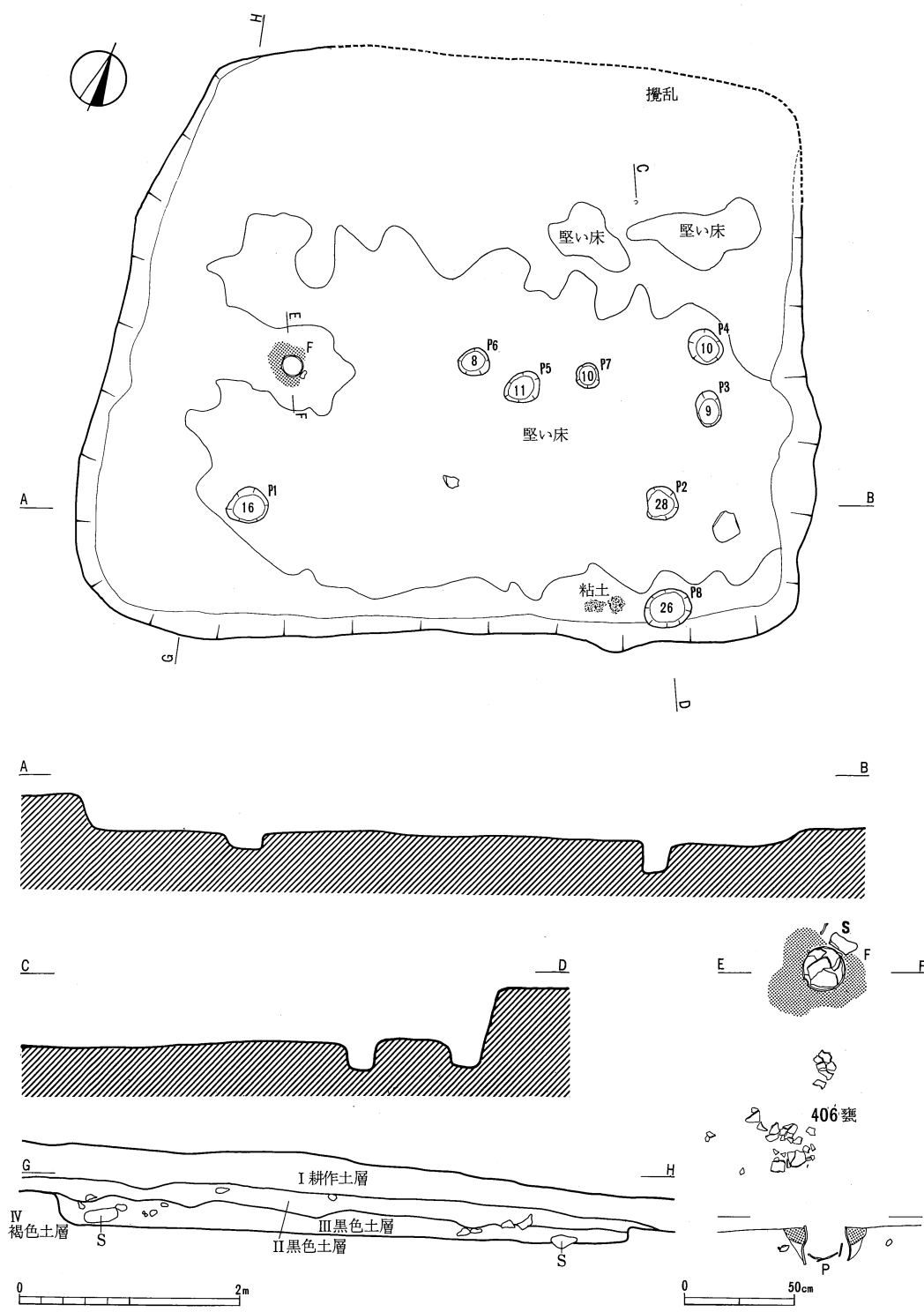
第47図 70号住居址遺物出土状態(1/40)

以上、遺物と遺構について述べたが、覆土中に見られた多くの炭化物、焼土が散乱している状況から火災に見舞われたことが考えられる。さすれば先の遺物出土で述べたように土器の散乱している状態についても解決されるのではなかろうか。

69号住居址 (第48図)

調査の経過 本址周辺は、表土層下の黒色土層に続いて、礫を含む褐色土層があり、その下部が礫層となっている。住居址はその礫を取り除いて構築されているため壁面には多くの礫が見られ、特に南側は40cmの高さの壁であるが、全面に礫が露出していた。南に高い傾斜地に構築されたために北側は低くなるが、本址の場合、北側は攪乱されて住居址の全貌を検出することができなかった。埋没状態を見ると、住居址内に南側から相当量の土砂と礫が流入しているが、それからは遺物はなく、床面上部に見られた漆黒色土層中から検出された。主な遺物は、西側の炉近くで破片(406)、紡錘車(400)が東側から、土玉(447)が南西コーナーの壁近くから出土したが、遺物の出土量は比較的少ない。また、南東コーナーの壁下から拳大の粘土塊が3個出土している。

床面は礫層を削って作り、砂や小さな礫を含んだタタキ面で、あまり良好とは言えない。その床面に8ヶ所のピットが認められたが、南側の円形ピットが主柱穴と思われる。住居中央部にはほぼ一列に並んだ柱穴が見られるなど、他の住居址に共通性のある遺構も検出されている。



第48図 69号住居址実測図(1/60)、埋葬炉と周辺遺物実測図(1/30)

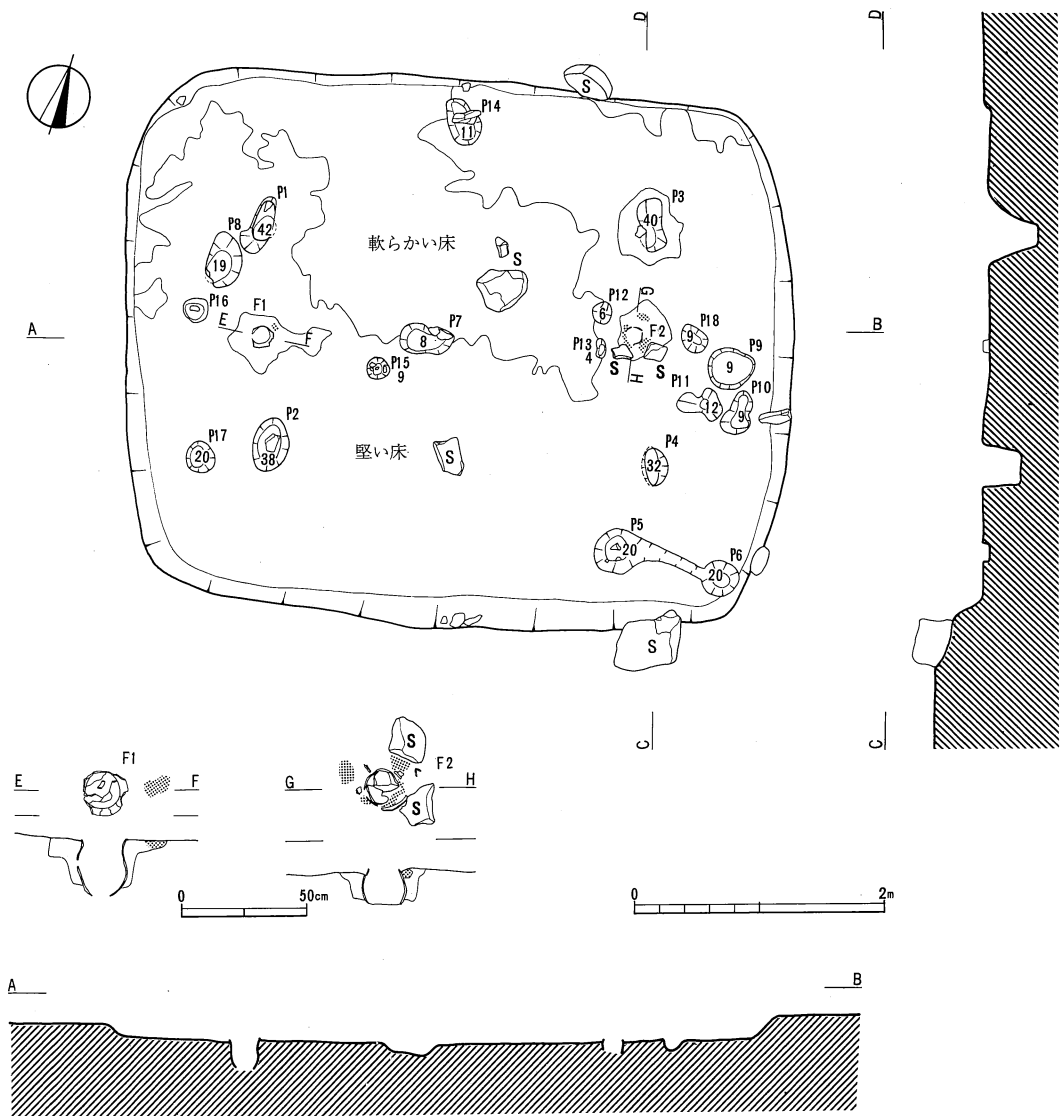
南東コーナーからは楕円形の大形ピットも見られ、底部からは数片の土器が出土するなど、これも他に見られる壁際ピットの一例となろう。

炉は埋嚢炉（407）で底には大きな土器片を敷き詰めた構造となっている。

以上が住居址の概略であるが、発掘結果からすると、北側の約4分の1程度が攪乱された住居址である。

22号住居址（第49図）

調査の経過 本址周辺一帯は黒色土層中に礫が多量に混在することから、遺構の存在する箇



第49図 22号住居址実測図(1/60)、埋嚢炉実測図(1/30)

所にそれが希薄になることを考慮して検出したものである。覆土は炭化物と土器片の混在する黒色土であるが、比較的床面が良好な状況であつその全容を掘むことができた。

主要遺物の出土状態をみると、土器は床面上に少なく覆土にあり、砧石(252)・石庖丁(193)・打製石斧・小形手捏土器(437)・土錘等とともに、堅い床面の広がる範囲内から発見されている。石庖丁は一部欠損しており、東側炉址の床面から出土したが、本住居址より西へ40m離れている第62号住居址内出土の石庖丁と接合する。また大型打石斧2点が遺構検出面のレベルにおいて並んで発見された(112・111)。

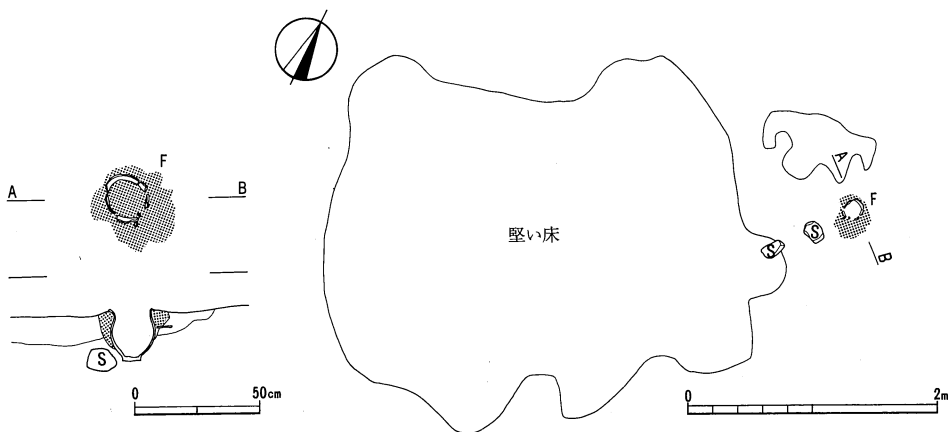
遺 構 壁は全周しその壁高は5～40cmを計り南側が高い。床は北西壁直下から中央部にかけて带状に軟弱な部分があるほかは全面堅い。

主柱穴は4本で3本が偏楕円形を呈し、その掘り方からみて割材の使用が推定されよう。また東側2本の柱穴は東側に傾斜し、南西の柱穴には小石が落ち込んでいた。さらに浅いピットが東西の長軸方向に3本あり補助柱穴の疑いが濃い。壁際ピットとして南東コーナーの2本が注意され、壁直下の平石を足踏台とすれば、この地点の床面が非常に堅いことから入口部を想定できよう。

炉は住居址の長軸の東西にそれぞれ設けられた埋甕炉である。2ヶ所ともに検出時の覆土および埋甕炉の掘り方断面が同一であり、同時に使用され廃絶されたものと考えられる。西側埋甕炉(137)は底部が抜かれているかほぼ完形である。東側埋甕炉(136)は炉の底に地山の石があり、その上に口縁部および胴下半部を欠損した甕形土器を埋設し、その周囲に別個体の土器片を補強している。

9号住居址(第50図)

調査の経過 本址は黒色土層を掘り込んで、黒褐色土層の覆土が散在する住居址である。耕作による破壊攪乱が著しく、平面での住居址検出は困難をきたし、堅い床面確認によりその全



第50図 9号住居址実測図(1/60)、埋甕炉実測図(1/30)

容を把握したものである。

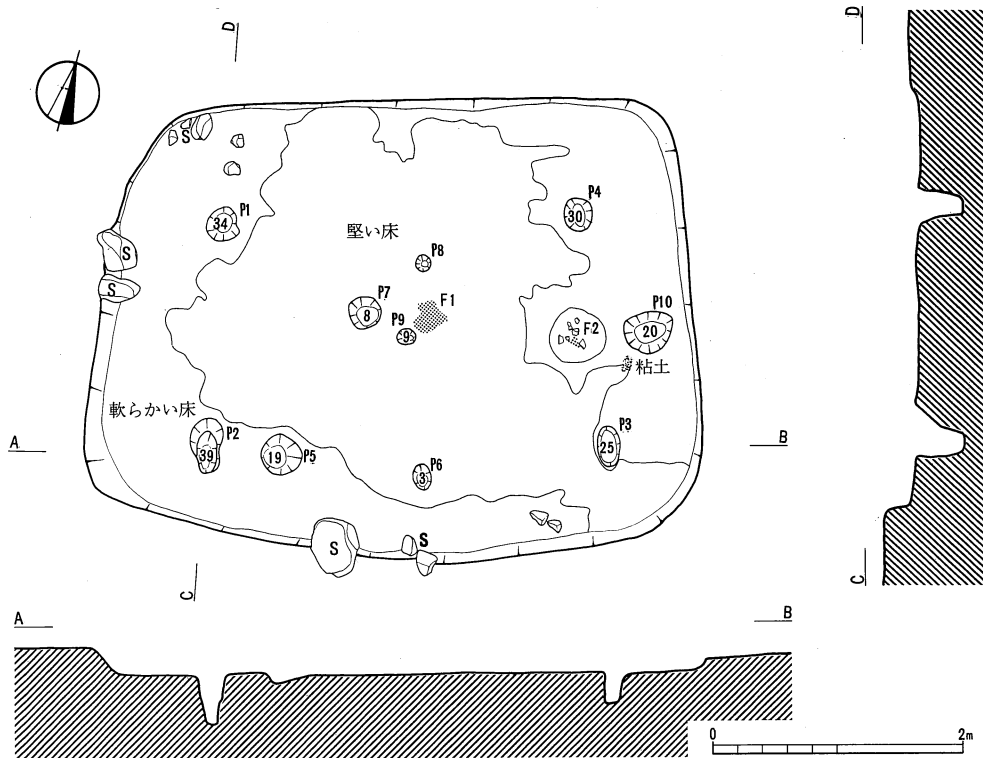
遺物の出土量は極少で甕形土器の小破片が若干あり、他に打製石斧(109)、土玉(448)各1点がみられた。土玉は炉南側のやや軟弱な床面直上から出土している。時期を決定する遺物は埋甕炉のみである。

遺構 攪乱顕著な住居址のため、遺構の掌握は不可能であり、壁・柱穴・周溝等は確認できない。床は炉周辺を除外して西側一面に堅くタタキシめられ、砂や小粒子の小石を含む黒色を呈し、その周囲は軟弱な床面である。

炉は埋甕炉である。焼土が $35\times 33\text{cm}$ の範囲で広がり、炉外の焼土の厚さは 12cm である。炉辺石およびそれを埋設したと思われる痕跡はない。炉の甕形土器は底部から口縁部まで完存したものを使用している。

14号住居址(第51図)

調査の経過 本址は礫を含む黒色土層を掘り込み、炭化物混入の褐色を帯びた黒色土を覆土とする隅丸長方形の住居址である。覆土中の多量の集石は、西側に大きく東側に小さいのがみられたが、床面にまで達してはず、しかも壁外から住居址内に半分落ち込んでいるものもあり、住居址廃絶後流入したものと推定される。



第51図 14号住居址実測図(1/60)

遺物は覆土中に多く、土器の小破片が西側に集中して出土し、また、粘土塊が炉の東側で発見された。

遺構 壁は全周し、残存する壁高5～17cmを計る。床は北壁および南東コーナー以外の壁際30～70cm範囲は軟弱であるが、他は非常に堅く良好である。支柱穴は4本あり深い。他に6個のピットがあるが、一部は補助柱穴としての使用が考えられる。

炉は埋甕炉と地床炉の2つある。前者は東側柱穴の間に位置し、床面と同レベルに置かれた石の下から検出された。直径45cmの円形の凹地内に土器片と焼土がみられ、焼土の厚さは10cmである。すでに土器は抜きとられてなく、廃絶直前の利用はなかったものと推測される。地床炉は住居址中央部の床面上をそのまま使用し、掘り凹めた痕跡はない。堅い床面直上に厚さ1cmの焼土が25cmの範囲であり、短期間の利用を物語っている。

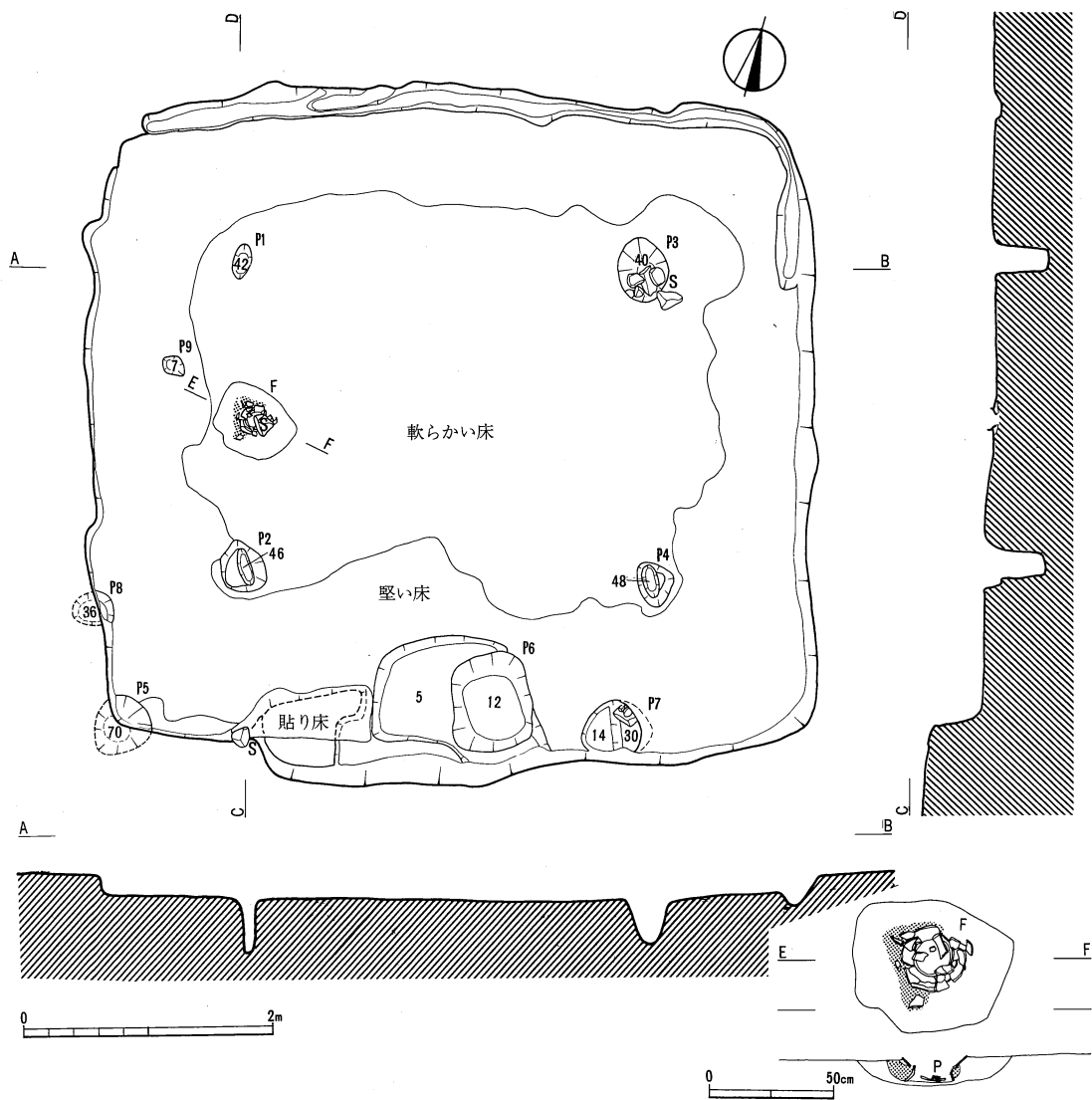
10号住居址（第52・53図）

調査の経過 本址は、旧中央東線切り通しのすぐ土手下の、住居址群中でも最も高所に位置する。第I次調査では、唯一、黄色土層を切り込んだ壁が見つかり、遺構の遺存状態が非常によいのではないかと期待されていたのであったが、地形が南から北に傾斜しているため、南壁は深く黄色土層を切り込み、壁高は54cmほどあるものの、北側は耕作が床面までおよんで全く壁が存在しない状態であった。

隅丸方形に検出された竪穴の覆土は、ドーナツ状に中が漆黒色土で、外に褐色の強い黒色土が堆積していた（漆黒色土の範囲はやわらかい床の範囲とほぼ一致することが後でわかった）。黒色土中には多量の礫と、それに混って若干の遺物が出土した。この大小の礫は南西コーナーから西側外区辺りと内区東側から外区辺りに散乱し、壁際ほど床より浮いて、中央部では床上にあるという、所謂三角堆土面に流れ込んだような状態であった。遺物はこの礫中に混在していたが、とくに主な土器類は南西コーナーに、半人頭大の石と共になだれ込んだような状態で覆土上部に高坏2点（63・64）が、床上に高坏脚部（65）と壺（58）が出土した。壁中に袋状に掘り込んだP₅内に薄手の高坏坏部破片が出土したが、これの脚部は西側外区から出土している。この他に紡錘車（半欠品、404）と打製石斧（126）が北側外区床上から、砧石（254）が北西コーナー床上から出土したが、全体に遺物は少ない。

遺構 床は内区に堅い床が全く見られず、外区だけ非常にタタキしめられた堅緻な床が存在する。支柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄の4本であり、長方形の配列となっている。どれも南北に細長い楕円形の掘り方である。

壁際のピットは南西コーナーの壁下に、袋状に竪穴外に掘り込んだP₅とP₈が特異な存在である。P₈は支柱穴P₂に対する支柱穴とも見てよいのではないか。南壁下には、中央に浅い二段に凹んだP₆と、同じく二段に深く掘られた柱穴様のP₇がある。P₆の西に階段状に張り出した低い段があり、この上を覆うように貼床があったが、あるいはここを入口部と考えてもよいであろうか。この部分とP₇におよぶ南壁は30cmほど張り出す。壁の崩れであろうか。貼床を剥ぐ



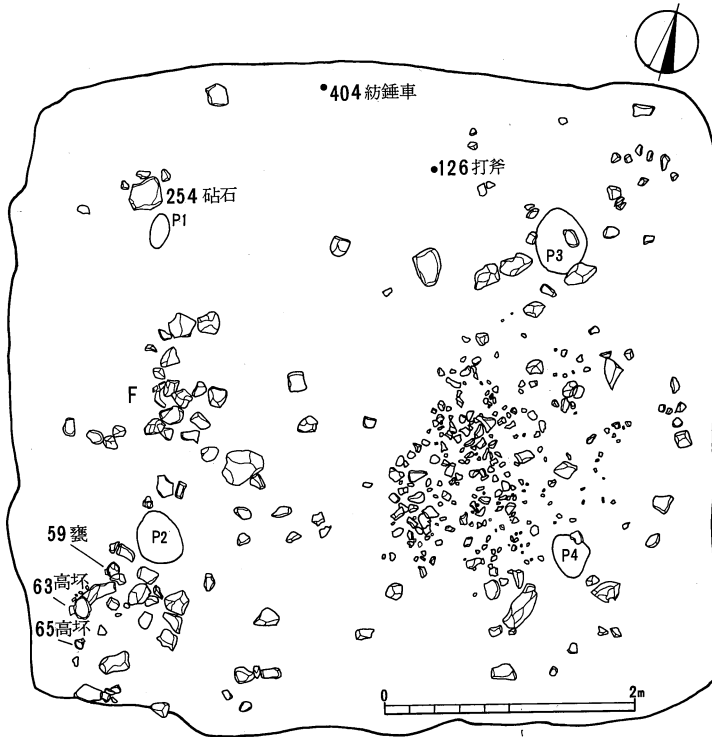
第52図 10号住居址実測図(1/60)

と壁下に沿った溝が見つかっている。土止めの柵を設けてあったのではなかろうか。

同じような溝が北壁全部と一部東壁下まであり、これは小穴が連続するタイプの溝で、明らかに土止め、または壁を設けた痕跡と認められる。

炉は東側の主柱穴間にある。炉の土器(60)は甕胴上半部を逆様に埋め込み、底に土器破片を敷き詰めている。またこの土器に人頭大の礫を置いた(投げ込んだ?)ような状態が見られたが、周囲に同じような礫が多くあるので一概にそのように断定することはできない。

ところで本址のような多量の礫は、南側からの流れ込みか、屋根の上の置石が落ち込んだものか、どちらであろうか。当然、竪穴を掘った時に多量の礫が掘り出されたことは想像に難



第53図 10号住居址遺物の出土状態(1/40)

くないが、竪穴南側に傾斜をならして雨水の流入を防ぐため盛った土砂が、廃屋後に崩れ込んだと考えられるがどうであろうか。

また、高杯、壺が多く甕が少ない点、内区の床が軟らかい点は62号住に酷似する。

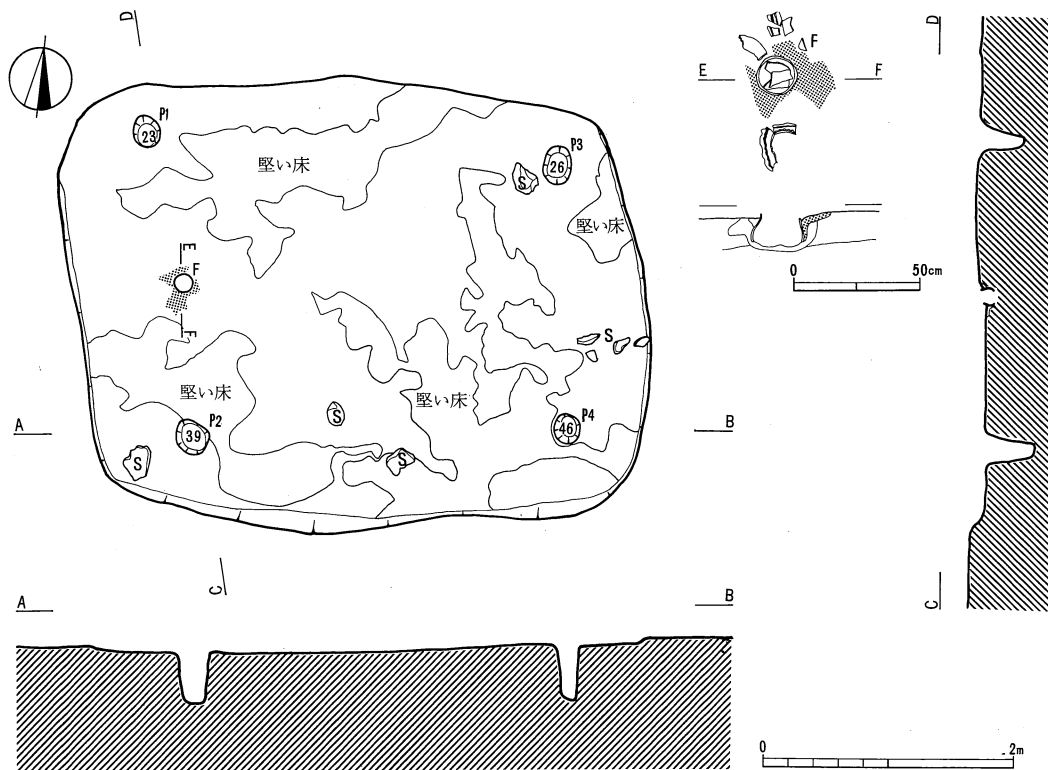
65号住居址（第54図）

調査の経過 本址は周辺住居址と異なり、褐色土を掘り込み検出された。木の根による攪乱が顕著で遺構の残存状態は極めて悪く、壁および床面も明確でない部分が見られる。

遺物の出土量も極少で、土器片も床面より覆土にみられた。

遺構 壁は北側になく三方に残る。その壁高は15cmを計る。床は攪乱が激しいものの、部分的に堅く残存し、中央部と東壁部の床は最初から軟弱である。支柱穴は4本で楕円形である。他にピットはない。

炉は埋甕炉（379）である。口縁部から胴部までを埋設し、その内部に土器片3点を敷く。その周囲30cmの範囲に焼土があり、その厚さは12cmである。炉周辺の土器片は一部炉の土器に接合する。



第54図 65号住居址実測図(1/60)、埋葬炉と周辺遺物実測図(1/30)

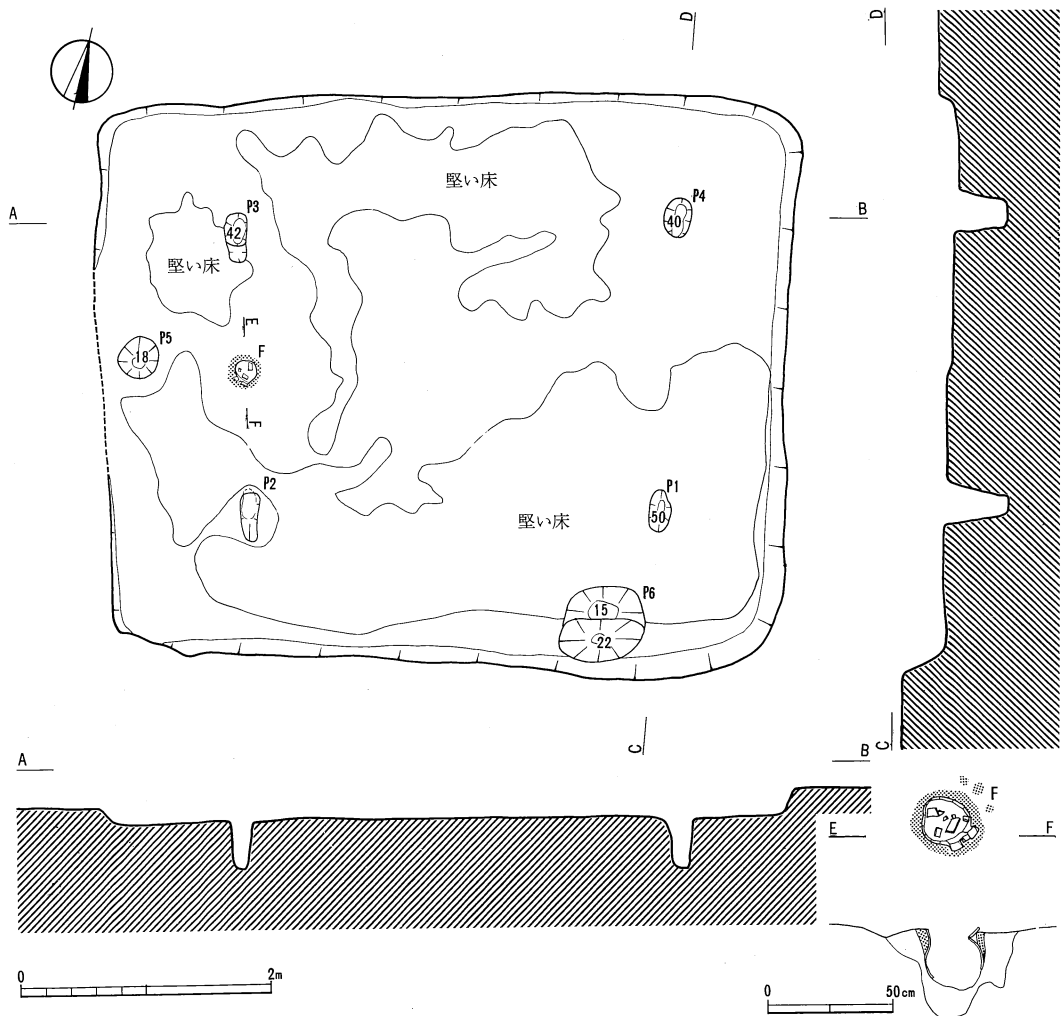
11号住居址 (第55・56図)

調査の経過 本址は黒色土層を掘り込み、白色粒子混入の黒褐色土層を覆土とする住居址である。覆土はⅣ層に分かれ、上層の第Ⅰ層がプライマリーな覆土で、遺物を包含し白色および黄色の小石粒を含む黒褐色土である。第Ⅱ層は根による攪乱層で褐色土がⅠ層より濃い。第Ⅲ層は炭化物混入の焼土層で、Ⅱ層同様部分的に存在する。第Ⅳ層はいわゆる三角堆土である。

主要遺物の大半は、床面直上炉周辺2m以内で発見された一括土器である。例外として、壺形土器1点が南東コーナーにみられた。土器の出土状態は、炉から内区西側の床上に小破片が散乱して、原形を保つものは甕(68・69・70・73・74)と大型壺底部(67)であった。南東コーナーの壺(66)は胴部で上・下2つに分離し、口縁部側は床上に正位に座り、底部側はその横に倒れて潰れた状態であった。石器は南西コーナー床上から磨製石斧(172)の破片が出土し、一括土器群に混在して石鏃4点が見つかっている。

遺構 壁は西壁一部を除き全壁検出された。床は中央部および北東コーナーを除き堅くタタキしめられた床がみられ、さらに炉南側半分はその上に軟弱な貼床を設けていた。

支柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄まで4本ある。いずれも偏楕円形を呈し、その掘り方から支柱は厚味の割材を用いたと思われる。P₁・P₃内からは土器片、P₂内からは小石が出土している。また、



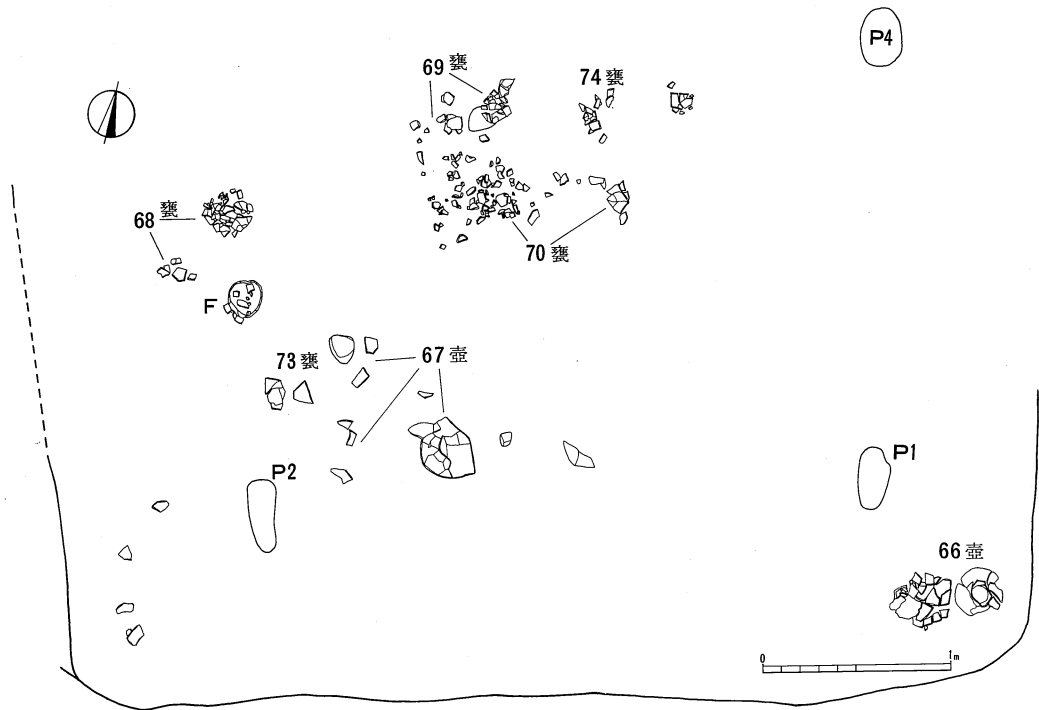
第55図 11号住居址実測図(1/60)、埋甕炉実測図(1/30)

西壁と埋甕炉の間に P₅ が検出され、甕形土器の破片が発見されたが、柱穴としては浅いものである。底に 6 個の石が柱の根石よろしく入り込んでいる。さらに、南壁東側に直径 60 cm の P₆ があり、この地点は床面も特に強く、入口部と想定される箇所である。

炉は埋甕炉 (72) である。黄色土層を掘り込み、甕形土器の口縁部から胴部下半の一部までを埋めている。掘り方からみると底部までの完形品の埋設も可能である。焼土の厚さは 12 cm である。

12号住居址 (第57・58図)

調査の経過 本址は黒色土層を掘り込み、小石粒混入黒褐色土を覆土とする住居址である。東壁南寄りに直径1.7mの井戸様遺構の攪乱があり、床面直上まで達している。また、西壁にて



第56図 11号住居址遺物出土状態(1/40)

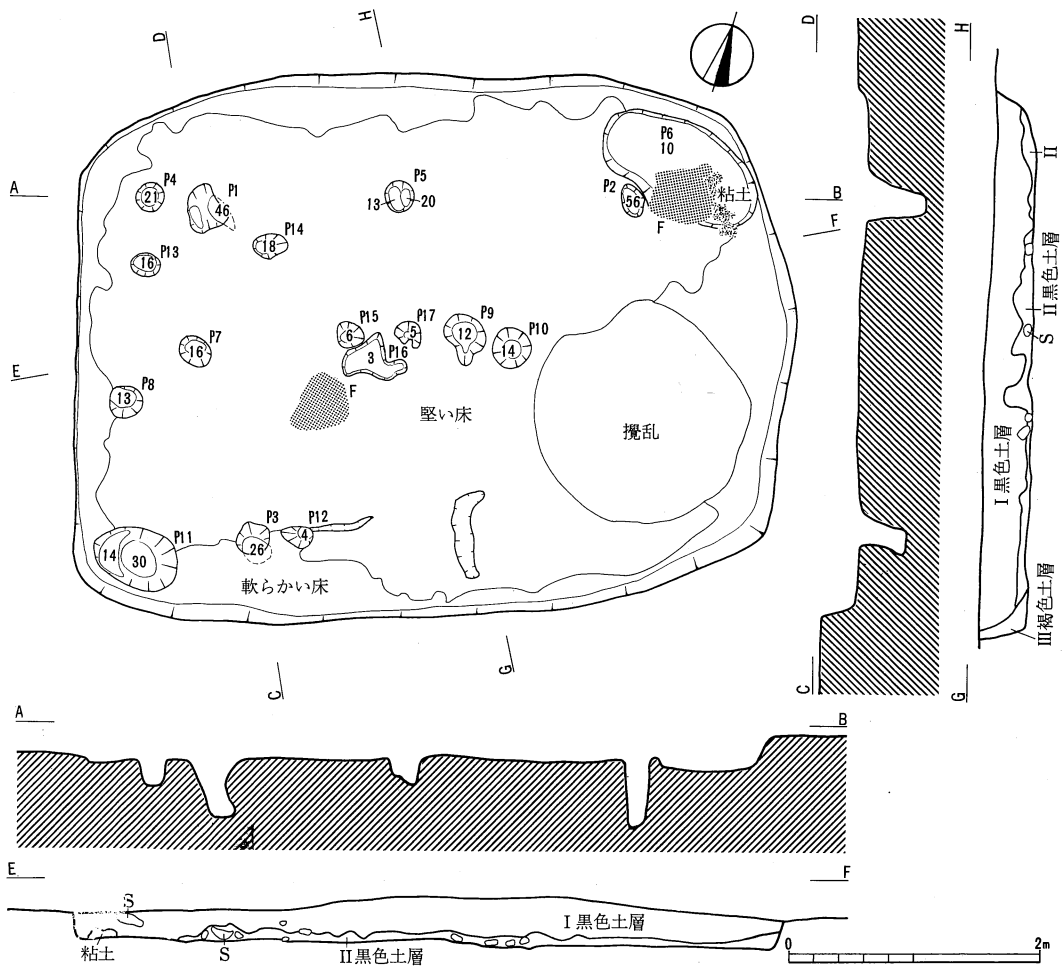
67住を切り、上部に貼床して本址が構築されている。

遺物量は極めて少なく、若干の土器片(75・76)が出土したのみであるが、床面中央部を中心に全体に礫が多棄されており注目された。この礫が散在する範囲内の床面はやや軟弱ないしは床不明箇所である。また、東北コーナーの浅い楕円形状ピット内から、焼土と共に粘土塊が出土している。

遺構 壁は全体を圍繞し、その壁高は10～40cmである。床は全域にわたり検出され、特に西壁寄りに部分的に堅い箇所と貼床部分が認められた。ただ、壁直下と中央部の80×75cmの範囲は床部分がない。また、南壁に平行して浅い周溝が部分的に走る。

主柱穴は破壊攪乱のため3本検出したのみである。P₁・P₃の掘り方は斜傾化し、柱が北側に傾いていたことが推定される。P₆・P₁₁を除き小ピットが住居址中央より西北側に多いのは、補助柱穴の可能性が考えられる。P₆は深さ10cm、直径1.4×0.6mの楕円形を呈するピットで、焼土・粘土塊が多量にあり特記される。P₁₁の内側辺りは比較的堅い床面があり、また周溝もみられ、入口部の可能性がある。

炉は西壁側に検出されず、東壁側は井戸様遺構で破壊されているため確認できないが、相対的にみて東側に位置するものと推定される。西側柱穴にP₇があり、位置的に炉跡とも見られるが、焼土は検出されていない。



第57図 12号住居址実測図(1/60)

66号住居址 (第59図)

調査の経過 本址は黒色土とローム層を一部掘り込み、褐色を帯びた黒色土を覆土とするやや小ぶりの住居址である。東壁南側にて67住を切り、東南隅を最新の遺構により破壊されている。

小型住居址ではあるが遺物は豊富である。東壁側の炉址を中心にその周辺一帯の覆土から床面直上にかけて、多量の土器が横位の状態で一括発見された。炉のすぐ南および東にあった甕4点はほぼ完形であるが、小型甕は、1点が床上18cm (381) に対し、1点は床上 (382) と、その在り方は対照的である。同様に中型の甕も1点は床上 (384) に対し、もう1点は床上16cm (383) であった。床上に浮いた土器は三角堆土状の出土である。これに対し鉢 (388) は中央床面にバラバラと散乱した状態であった。また、南壁西寄りに砧石 (255) があり、その傍に紡錘車の破片1点 (405) が出土している。炉の南西床上にも砧石 (256) が出土している。



第58図 12号住居址覆土中の礫出土状態(1/40)

遺構 壁は南東コーナーの攪乱部を除き全壁確認された。床は褐色土であり、西北側および北壁側には床面がなく軟弱である。また炉址東側の一括土器出土箇所も床面は軟らかい。これに反し、南側は強く、特に中央部はタタキ床となっている。

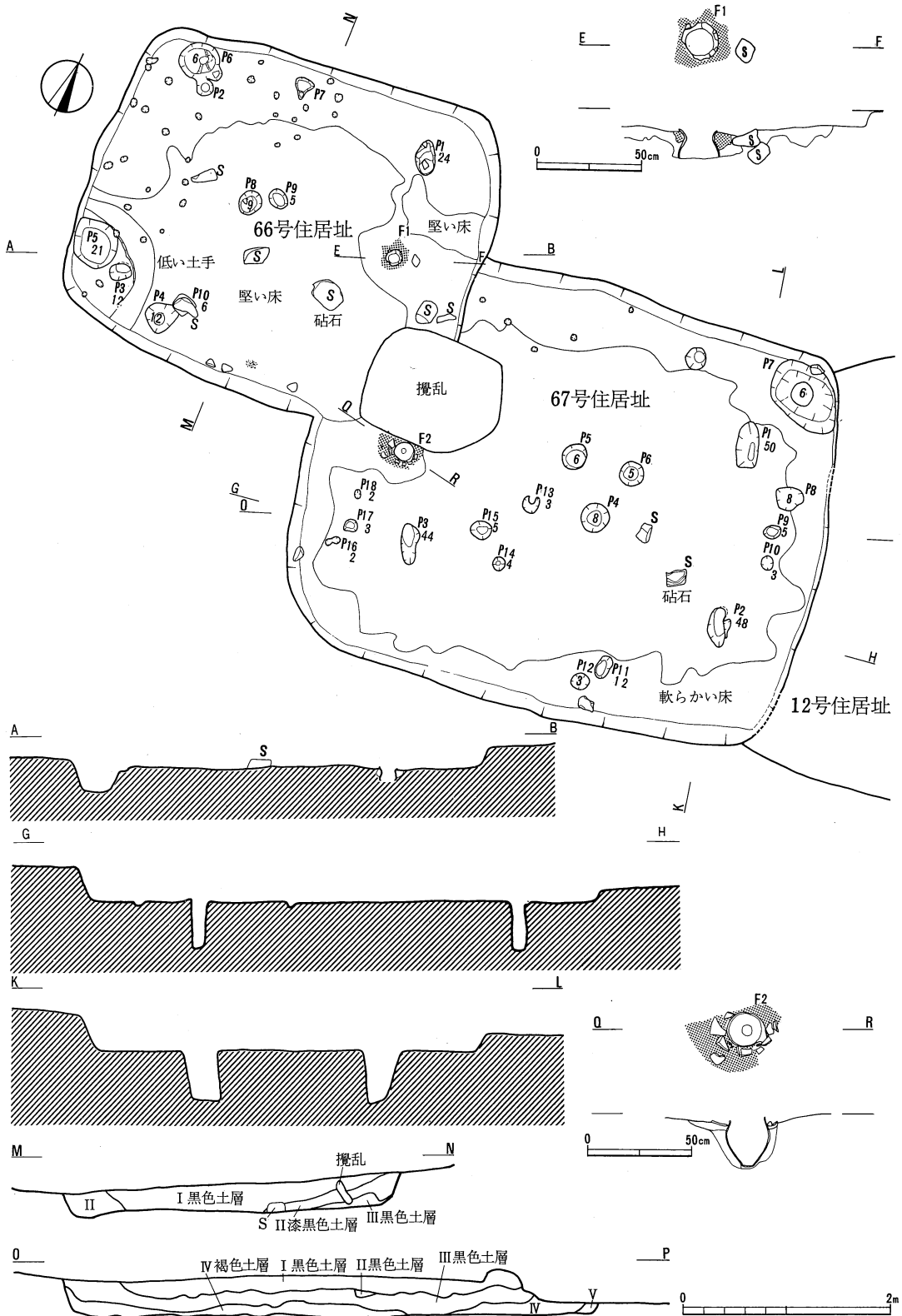
主柱穴は一部床面破壊のため3本検出されたが、いずれも浅く、P₃は外向きの斜傾柱穴である。P₄・P₅・P₆は壁際に位置するが、中でもP₅は南西コーナーにある。これを圍繞する形で幅20cm、高さ6～8cmの土手がみられ、周辺の床面は強く特殊施設と推定される。また、直径5cm前後、深さ5～15cmの小ピット31個が住居址中央部より西側一帯に検出されたが、規格性もなく性格不明である。

炉は埋甕炉である。炉の甕形土器(385)は口縁部から胴部上半が埋設されている。炉の周辺50cm未満に多量の炭化物と焼土が散在し、炉に接した焼土の厚みは18cmである。

67号住居址(第59図)

調査の経過 本住居址は黒色土層とローム層を掘り込み、白色および黄色の小石粒を含む褐色を帯びた黒色土層を覆土とする。長軸を東西にもつ本址は、東側にて12住に、北西側にて66住に切られ、さらに西側を一部、最新の遺構で破壊されている。東側の12住床面は、本址床面直上20cmに貼床されて55cm幅で重複する。また66住床は、本址の堅い床面を切り12cmの深さにある。

遺物は炉の周辺および北西コーナー付近に集中し、土器は小型甕(389)が炉西の床上から、



第59図 66・67号住居址実測図(1/60)、埋葬炉実測図(1/30)

甕(394)が炉東の内区床上に20cm浮いて出土さらに北壁際床上に甕上半分(391)が正立した状態、また内区東側床上に完形の甕(390)が潰れた状態で出土した。鉄製品(462)は東側柱穴間の床上8cm地点で、砥石(233)は南壁側と北壁直下で発見されている。

遺構 壁は西壁が一部ないほか全周する。床は壁周辺10~50cmを除外して、全面堅いタタキ床である。

主柱穴は破壊のため3本残存し、深くて偏楕円形を呈する。その掘り方から厚味のある木材の使用が推測される。他に間仕切り用柱穴と想定される浅いピットや、北東コーナーの不整形ピットなどがある。

炉は埋甕炉(392)である。甕形土器の底部のみ抜かれたものを使用し、その補強のため周辺に小石と土器片を埋設している。焼土の厚さは4.5cmである。

64号住居址(第60図)

調査の経過 本址は、南壁は褐色土層まで切り込んでいるので確認は容易であったが、北側は黒色土層に切り込んでおり、壁の確認は困難であった。床面近くに焼土が散在したが、炭化物は少なく、床上6~10cm浮いて厚さ6~10cmであり、主として外区北側に多く、内区には見られなかった。また南側には三角堆土が見られ、覆土の流入の状態がよくわかった。

主な遺物は、覆土上部では砥石(236)が西側外区に、北東コーナーに打製石斧(128)、内区東に砧石(257、焼土と同レベル)が出土。床上からは炉の西に鉢2/3個体(378)が、南東コーナーの壁下には完形に近い甕(372)が潰れて出土した。また紡錘車(406)が内区東の床上から発見された。

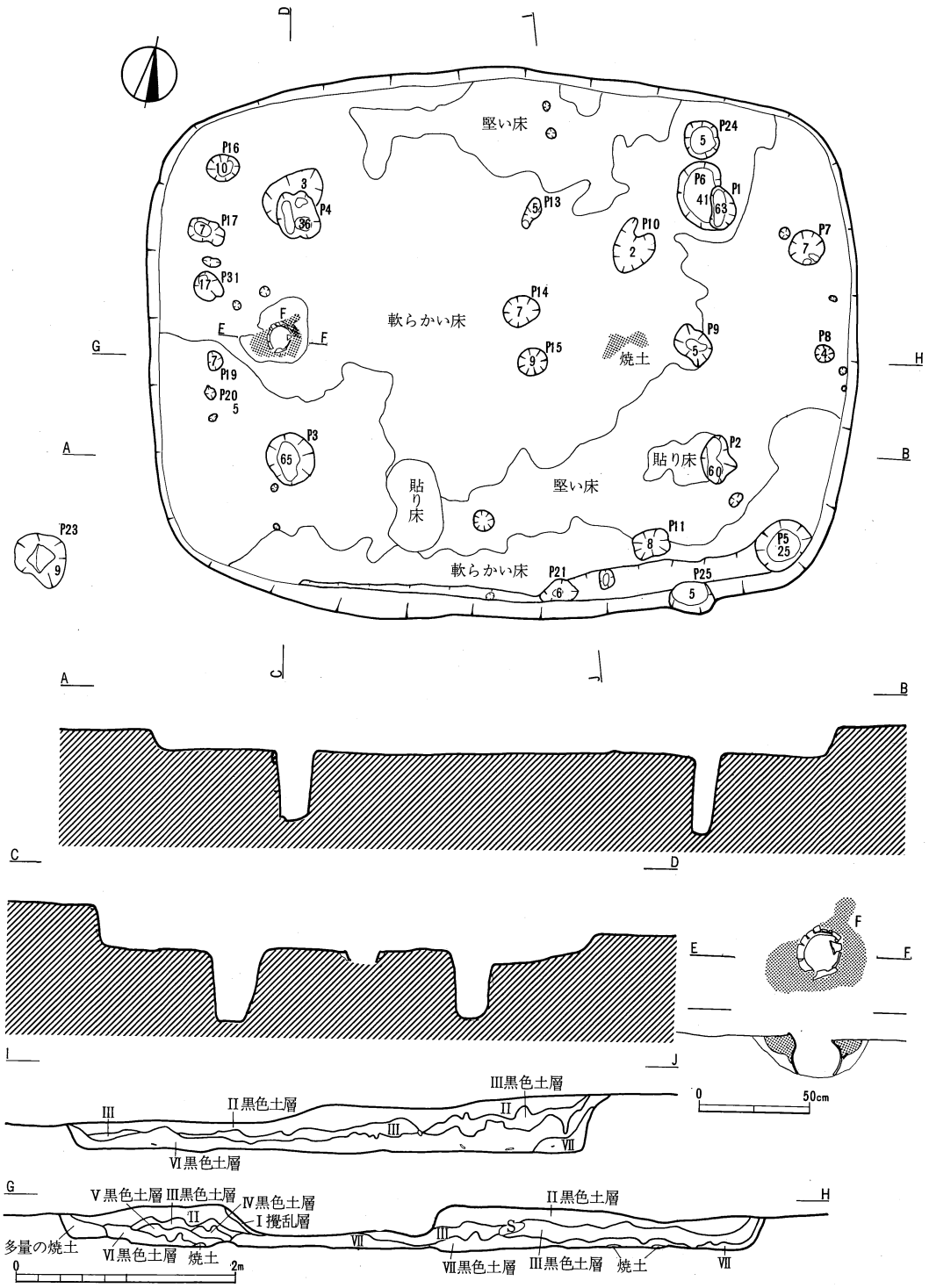
遺構 床面は、ロームをタタキしめた床と、黒色土をタタキしめた床であった。住居址の中心部と北西コーナー付近には、堅い床面はなかった。南壁下には周溝があり、また、南側の床上には部分的に貼床が認められた。

主柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄の4本で、いずれも偏楕円形に掘られており、深さは共に50~60cmと例外的に深い穴であった。P₁とP₄は柱穴の重複が認められる。

床面の中心部に堅さがなかったが、中心の間仕切り柱穴と思われるP₁₄・P₁₅の底は、床面と同じ堅さをもっていた。これは、梁を支える柱と間仕切りと兼用の柱痕であると考えられる。西側の埋甕炉と壁の間にはピットが並列しているが、この並列には主柱も利用して、棚等がつくられていたのではないだろうか。この付近から出土した鉢はこの棚から落下したものと想像できる。間取りの関係や床の状態から、入口は堅い床の上に貼床の見られる南西コーナーのや東寄りか、土止めの壁をしっかりと設けた南東コーナーP₂₁・P₂₅のあたりと思われる。

炉は、西側柱穴間にある。炉の土器は、底部を欠く甕(373)を正位に埋めている。焼土は(西側の棚をよけるように)東側に多く検出された。東側柱穴間にピットがあり、位置的には炉であってもよいが、焼土は検出されていない。

壁際のピットは南東コーナーにあり、底から土器の底部ばかり3点が並んで出土、2点は小



第60図 64号住居址実測図(1/60)、埋甕炉実測図(1/30)

型の土器の底部である。

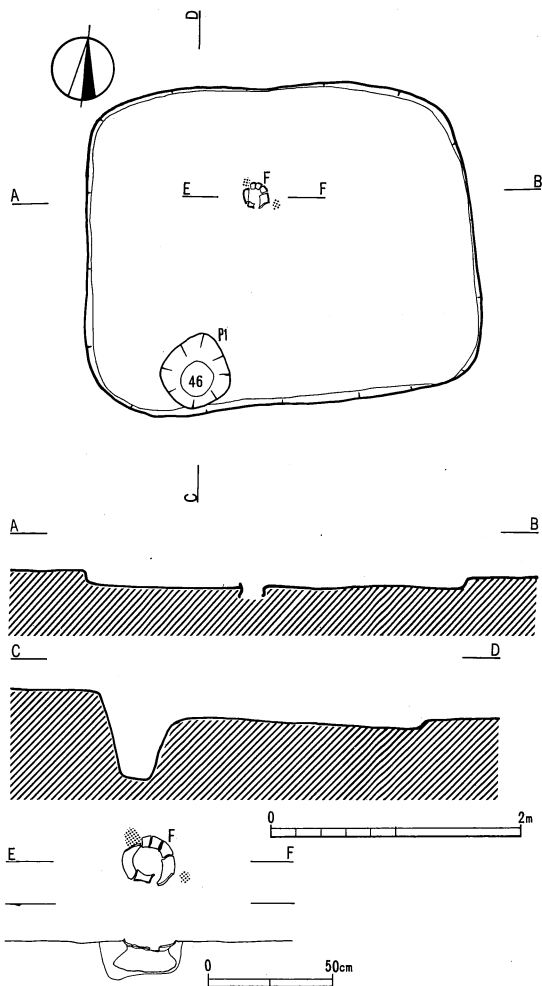
さて、本址を語る上で重要な遺構は、竪穴外の P₂₃ ではないだろうか。4本の支柱は深さをもっているものの、柱穴の形状が割材を使った可能性があり、割材の力関係（南北には強いが、東西には弱い）で西に傾き、P₂₃ はそれに支柱（突っ支棒）をした跡ではないだろうか。竪穴南西コーナーの外側約1mより検出された。ピットは竪穴に向って斜めに掘られ、鉄平石が穴の底より家の方に向って斜めに立ててあった。この石は、突っ支柱を支う石であろう。P₂₃ は家屋の倒壊を支える跡として注目したい。

63号住居址（第61・62図）

調査の経過 本址は小規模な住居址で、残存壁も低く、覆土を掘り下げたところすぐ下より埋甕炉が出土した。タタキ床がないことがわかったので、壁を出していたところ、北東の壁に完形品の小形手捏土器（441）の出土をみた。床は一部褐色の漸移層で軟らかく、床面には1本の柱穴もみつけれなかった。次に遺構外を精査したが、柱穴らしいものを検出することはできなかった。

遺物は甕（365）および壺（364）が潰れた状態で炉北側の中央付近から出土し、北西の隅から鉢（368）が横に倒れた状態でみつき、南壁中央から高坏の坏部（369・370）が2ヶ並ぶように検出された。他に石器類の出土はなくほとんどの土器類は中央より西側から出土している。

遺構 柱穴は竪穴の内にも外にも検出されず、規模からみて柱のない住居構造と思われる。入口部は、東壁の中央近くに平板の石が立てかけた状態であり、その近くに大石が2ヶあることから、入口の踏石としたとも考えられる。埋甕炉との位置関係からしても、入口は東壁の中央付近より南側であると思われる。南西コーナー壁際に隅丸方形のピットがある。



第61図 63号住居址実測図(1/60)、埋甕炉実測図(1/30)

埋葬炉(366)は北寄りの中央に位置し、甕口縁部が浅く埋められている。口縁近くに少し焼土が見られただけである。

遺物は非常に少ないが、甕より高坏、鉢の多い住居址の一つである。

60号住居址(第63・64図)

調査の経過 本址はローム層を深く掘り込んでいるため、竪穴の検出は比較的スムーズに行われた。そのため覆土は南側で40cmほどもあり、攪乱も少なかったため遺物の保存状態は良好と期待されたが、竪穴検出面で多量に出土した土器片は、覆土内においては非常に少なかった。覆土の堆積状態は、褐色味の強い黒色土が全体を覆い、壁際にはローム粒を多量に含む暗褐色土があり、土砂の流れ込みがよく観察された。

主な遺物は床面上およびその近くで発見された。まず北壁際東寄りの小柱穴の上に甕上半部(340)が正位の状態で出土、砥石(238)と打製石斧(131)が南壁際から、また内区東寄りの床上から砥石兼敲石(237)が出土した。土器はこの他にまとまった状態で出土していない。

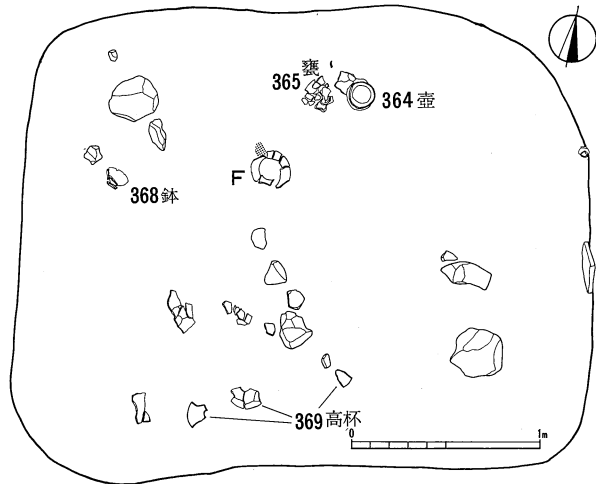
床は褐色土であるため、柱穴、壁際のピット、間仕切り柱穴の検出、床面の硬軟等の精査は本遺跡では最も良好な条件にあったが、発掘時の特筆する観察結果はない。

遺構 主柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄で、正長方形に近い配列であり、4本とも偏楕円形に検出されたが、掘り方はこれより楕円形に近い。P₃・P₄は第64図のように褐色土をつめている状態がよく残されており、これによると板材を用いて柱としていることが明らかである。

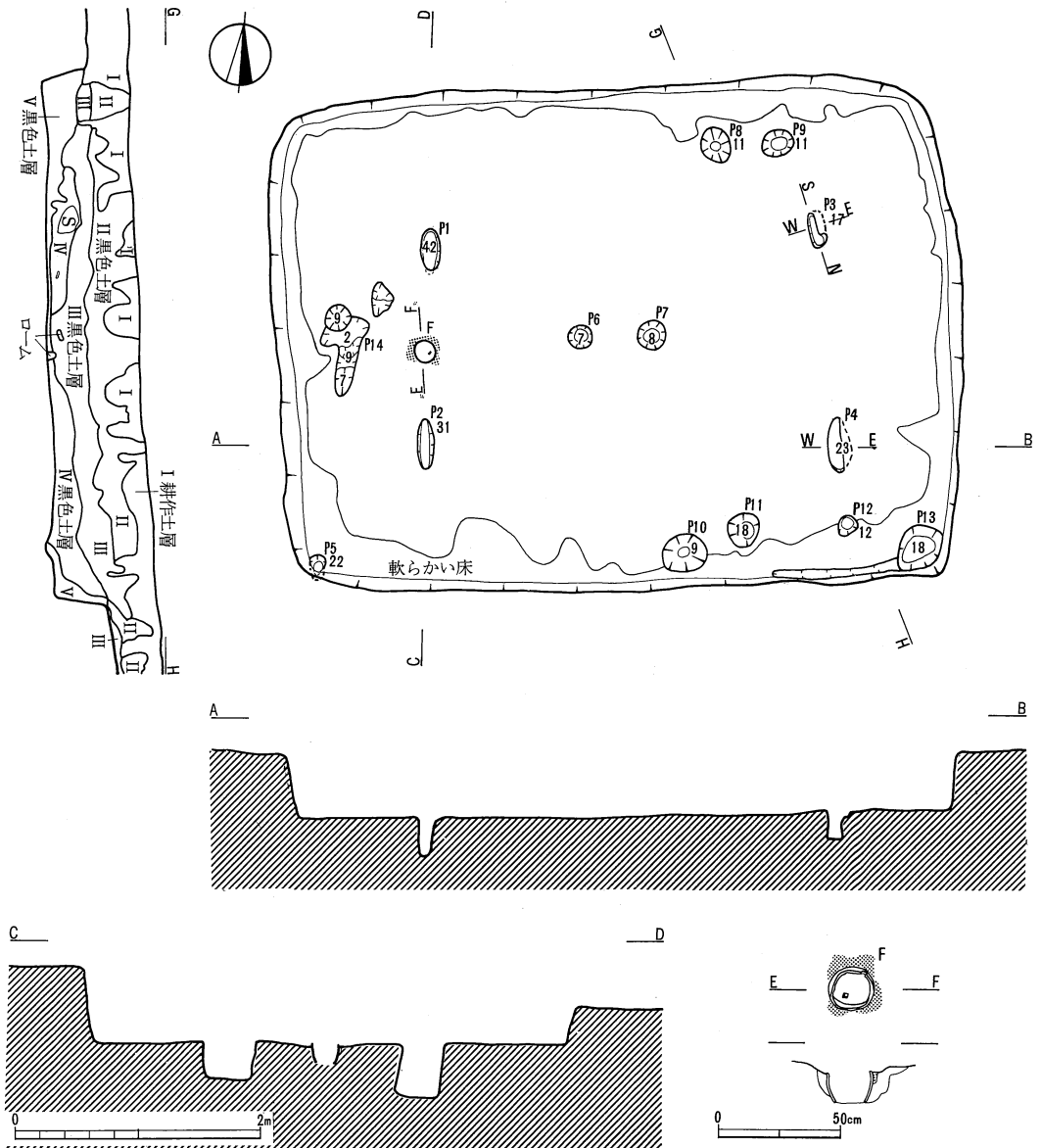
床は中央の浅い柱穴をなからの境として、南側半分の内区から外区が特に堅い床となっており、これに対し、北側外区、北東コーナー、北西コーナーには堅いタタキ面が見られない。北壁際の東寄りに柱穴が2本並び、その部分に向かって堅い床がのびている。またその向いの南壁際東寄りに柱穴が2本並び、その際まで特に堅い床が広がる。いずれかを入口部と考えてよいだろう。

壁際のピットは南東角にP₁₃があるが、南壁中央のP₁₀は同じ性質のピットではないと思われる。南西角のP₅は斜めの深い小穴であり、炉の西のP₁₄・P₁₅は浅いはっきりしない凹みである。

炉は埋葬炉(343)であり、周辺の床のない範囲は広く、土器を埋める掘り方は浅く小さい。周囲には焼土が詰まっている。



第62図 63号住居址遺物出土状態(1/40)

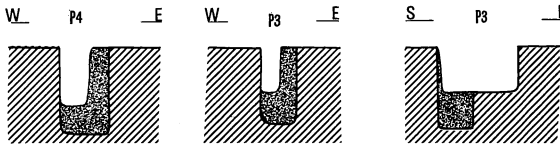


第63図 60号住居址実測図(1/60)、埋糞炉実測図(1/30)

61号住居址 (第65・66図)

調査の経過 本址は、他住居址に比べて最も褐色味の強い、ローム粒を含む暗褐色土が竪穴内に堆積していた。そのため竪穴覆土のセクションでは、逆三角堆土の暗褐色土の下に黒色の三角堆土がきれいに観察された。

遺物は床面付近に集中し、内区中央に糞胴下半部(353)が伏せた状態で、また壺2ヶ(345・347)は床面の上で故意に石塊か何かでおし潰されたような状態で検出された。石器は、内区



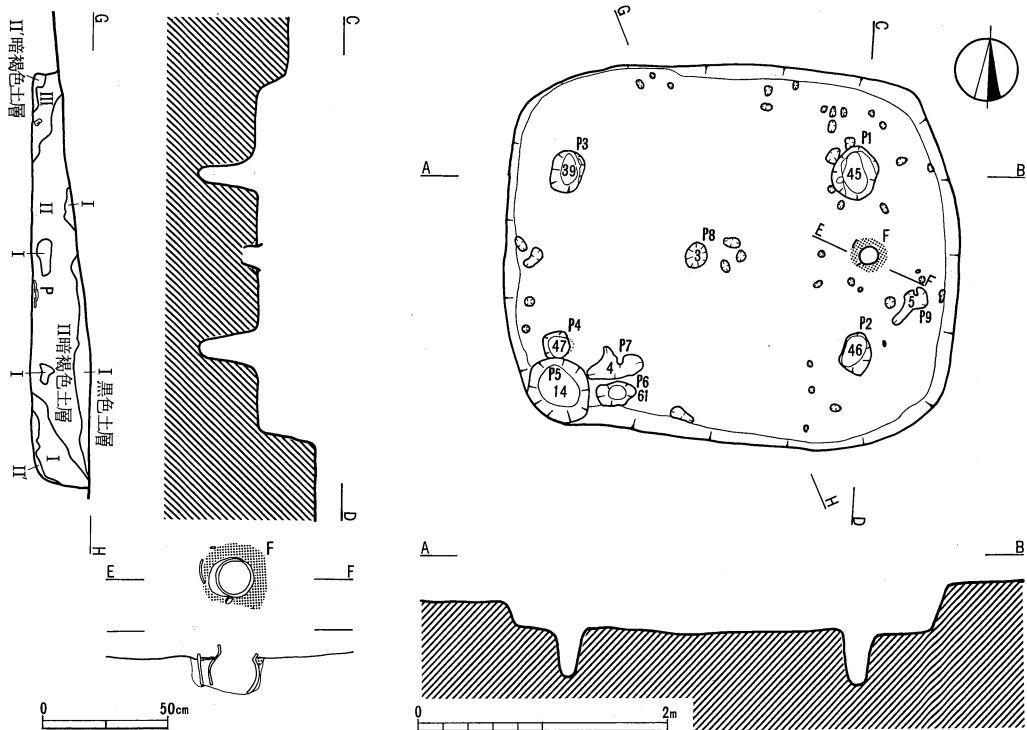
第64図 60号住居址柱穴断面図(1/30)

中央やや西寄りで砥石(259)が同じような大きさの平石と共に出土した。このような平石は、埋糞炉の上にも人為的に置かれた状態であった。

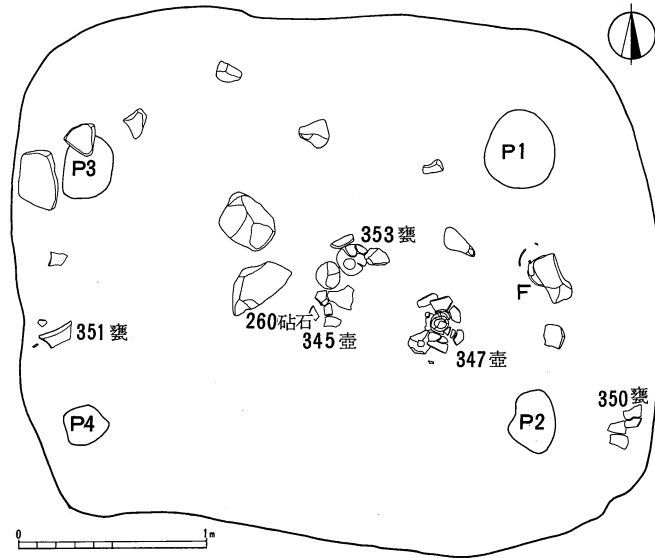
遺構 床面は全体に堅く、東側の外区と内区の一部の床面に小さな穴が点々とあるが、規則性がないので自然の所作と思われる。主柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄で正長方形に近い配列であり、どれも40cm～47cmの深さをもち、床面に垂直に掘られている。穴の形は長楕円形のものが見られる。P₆は主柱穴より深い60cm余の深さをもっており、穴は内側に向いている。支柱であろうか。

内区の略中心点に浅い凹みがあるが、間仕切り柱穴であろうか。埋糞炉(349)は東側主柱穴間にあり掘り方は浅く小さい。糞は東南にやや傾いており、片側に他の大きい胴部の土器片が立った状態で検出された。

入口部は確証がないが、住居の間取りと出土遺物によって考察してみた。北西隅より砥石(240)の出土をみ、また竪穴外ではあるが、このコーナーの際より土器片でつくった紡錘車(407)の検出をみた。現在でも農家では、砥石は農作業に欠くことのできぬものとして、土間等の出



第65図 61号住居址実測図(1/60)、埋糞炉実測図(1/30)



第66図 61号住居址遺物の出土状態(1/40)

入口に置くことを慣例にしている。また紡錘車は、当時女性が必要の品として常時所持していたものであろう。この北西コーナー辺りを出入口とするにやぶさかでないと思われる。

17号住居址（第67図）

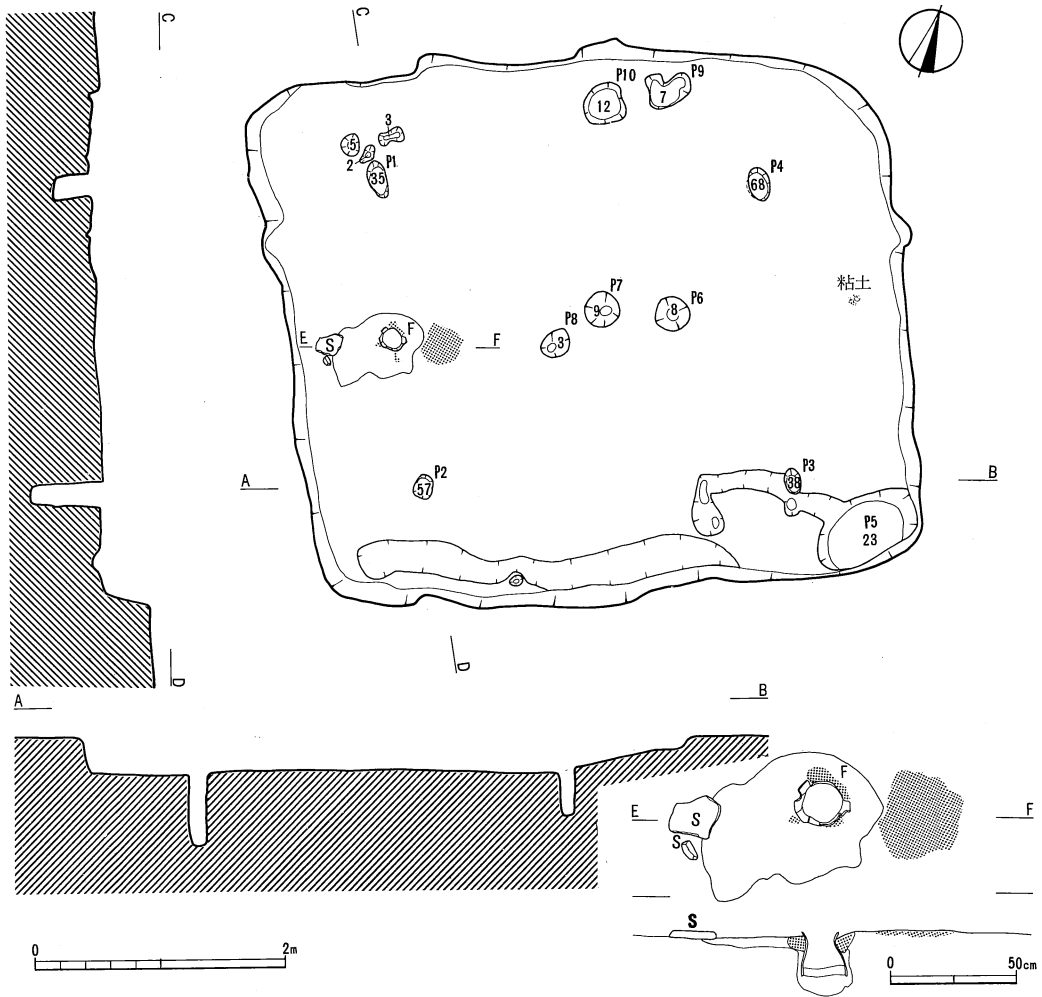
褐色土層を切り込んでいるため、竪穴落込みはすぐに検出されたのであるが、この付近は長芋耕作が深くまで入り、加えて傾斜面であるため、北壁側は耕作が床面までおよび、北壁と北東・北西コーナー壁は非常に乱れていた。

竪穴覆土は褐色を帯びた黒色土であり、遺物はこの覆土上部に少なく、床上において石器や復原可能な土器が発見された。遺物の出土状態は、炉の西床上に壺の破片2個体（97・98）と甕胴上半部2個体（99・104）が散乱し、そこに砧石（261）と敲石（272）が据え置かれたようになり、南東コーナーのピット内には甕胴部（102）が平たく潰れて、その西傍の床上にも甕1/3個体（100）が同じように潰れて遺存した。また南西支柱穴の縁には磨製石鏟（完形、181）もあり、北東コーナーの攪乱から出土した磨製石斧（174）を除いて、主な遺物はすべて床上、あるいはピット内から出土している点は注意される。

遺構 床は褐色土であるためか、全体に堅い床面が検出されたが、内区中央部は特に堅緻であり、水洗いしても崩れないほどであった。炉の周囲に若干床のない部分がある。

支柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄の4本であり、配列は正長方形に近い。内区中央に浅いピットが並ぶが直線上に位置しない。壁際のピットは南東コーナーにあり、そこから壁と平行に溝が1mほどのびる。その切れる辺りから南壁下には南西コーナーまで溝が走る。

炉は西側支柱穴間の中央にあり、甕上半部（101）を正位に埋めている。その東の床面から、



第67図 17号住居址実測図(1/60)、埋葬炉実測図(1/30)

35×30cmの範囲に3cmほどの厚さで赤く焼けているが、地床炉であろうか。ただし凹んではない。

入口は南東コーナーの短い溝を、何らかの入口施設と推察するが確証はない。

この他に床面に多数のピットがあり、棚、間仕切りの間柱等の柱穴を推定できるのであるが、長芋が入り込んだためなのか、ピット内の埋土は非常にやわらかく（P₅の場合も土器片が存在するものの、攪乱塚と間違っほどであった）、選択にやや問題が残るため、住居構造については十分な考察ができない。

62号住居址（第68図）

調査の経過 16住のプランを確認しているときに検出された住居址である。16住を深く切っ

ており、また、南西コーナーにあるロームマウンドの炭化物を含む漆黒色土をも深く切っている。竖穴覆土は、検出面で土層の平面的な広がりを見て同心円状に以下の4層を識別できた。Ⅰ—中心部の軟らかい漆黒色土層、Ⅱ—黒色土層、Ⅲ—ローム粒を含む暗褐色土層、Ⅳ—ローム粒を多量に含む暗褐色土層、以上の4層であるが、これはあとでセクションを観察した結果セクション図の土層と平面の土層との色目が若干異なり、平面図とセクション図はやや合わないが、各土層細分Ⅰ～Ⅳはそのまま対比できる。

覆土の除土はこの平面土層に従って、層序別に発掘を行った。漆黒色土層にはほとんど遺物の出土はなく、この下の黒色土にはやや多く出土したが、遺物の多くはⅢ・Ⅳ層以下であった。Ⅲ・Ⅳ層は所謂逆三角堆土であり、南側支柱穴の中間あたりより紡錘車の完形1点(409)、また南西コーナーより、くずれ込んだ状態で壺(354)の完形に近いものが壊れて、砥石(242)や石塊と共に出土し、北東支柱穴付近より完形の磨製石鎌1点(182)が出土した。また、西側柱穴の間より高坏の脚部(361)、南西コーナー壁下より高坏の坏部(360)、北側支柱穴間より坏部(362)、北西柱穴西よりは器台(363)等、西側で高坏4点が、同じ暗褐色土層より検出されている。床面付近からは、南西コーナー床面上より石庖丁(194)および粘土塊が検出され、南壁下(Ⅴ層)に完形の紡錘車(410)が出土した。なお、石庖丁は半欠品であり、22住出土の半欠品と接合する。

床面の中央部は、セクション図Ⅳ層の暗褐色土が床面レベル下まで続いていて、全体が不明瞭であった。床面の堅さを、特に堅い部分、普通に堅い部分、軟らかい部分、タタキの床の全くない部分、に5区分して精査した。内区の中心部には床のない部分があり、南側は堅い床の一部が内区に入っているが、ほとんど外区に堅い部分がある。さらに南側外区には堅い床の上に貼床があり、同じように北西側外区にも貼床が見られた。

遺 構 支柱穴は $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_4$ の4本で、略正方形に近い配列である。支柱穴間の距離は、竖穴の長軸方向が短く、短軸方向が長い。壁との距離も他に比べて隔りを大きくもっている。中央部 P_6 は円い凹みであるが、上から力を加えられたように底面が堅い。 P_5 はバケツ状であり、内部より壺の破片が出ている。これに接続して溝が1本南壁に平行に走り、南壁中央で直角に曲る。 P_{11} と溝の東側は貼床の下になるので、すべて同時に存在したとは言えないが、何度か造り直した入口施設の跡と思われる。この他に P_1 から西壁下の細い溝に直角につきあたる溝は、貼床を除去したときに検出されたものである。床が貼られる以前は高床の根太、あるいは間仕切り等に丸太材を埋め込んだ跡であろうか。

北壁下の西半分には、貼床を除くときに検出された狭いテラス状の段がある。何か意味があると思われるが、その両側にある $P_{13} \cdot P_{19}$ の小さな穴はそれに付随する柱穴と思われる。

壁際のピットは、 P_5 の外には北東コーナーに三角形の浅いものがある。

埋甕炉(357)は東側支柱穴間にあり、甕の胴部下半分を欠いて、逆さに伏せて埋めている。

本址は、中央の床が軟らかいという当集落の中では数少ない例である。また、溝や細長い段など特異な部分が多い。出土遺物もこれに相応して甕が少なく、壺、高坏、器台があり、大型

紡錘車の完形品が3点、そして磨製石鎌も出土するなど極めて特殊である。祭祀的性格が強くと感じられるが、紡錘車を女性の具とすれば、女性の色彩が強いのであり、祭祀を司る女性一巫女の館とするのはいささか想像が過ぎるであろうか。

16号住居址（第68図）

調査の経過 本址一帯の広い面を削り下げ、黒色土の落ち込みを検出した。この時点では、一辺7m余の大きな住居と考えられていたが、東壁を確認している最中に、異常に高いレベルの床に完形甕が出土するに至って、2基の住居が重複していることが判明し、深い落ち込みを62住とした。16住はこの62住に西側の半分以上を切られており、また残り東側の床面の大半は削られているので充分の調査はできなかった。地形は南より北東に傾斜をもっており、南東コーナーは黒褐色土層の中に比較的明瞭に良好な壁が見られたが、北に向うにつれて不明瞭になった。

主な出土遺物は、甕(93)1点が南東コーナーの柱穴付近よりつぶされた状態で検出されただけである。

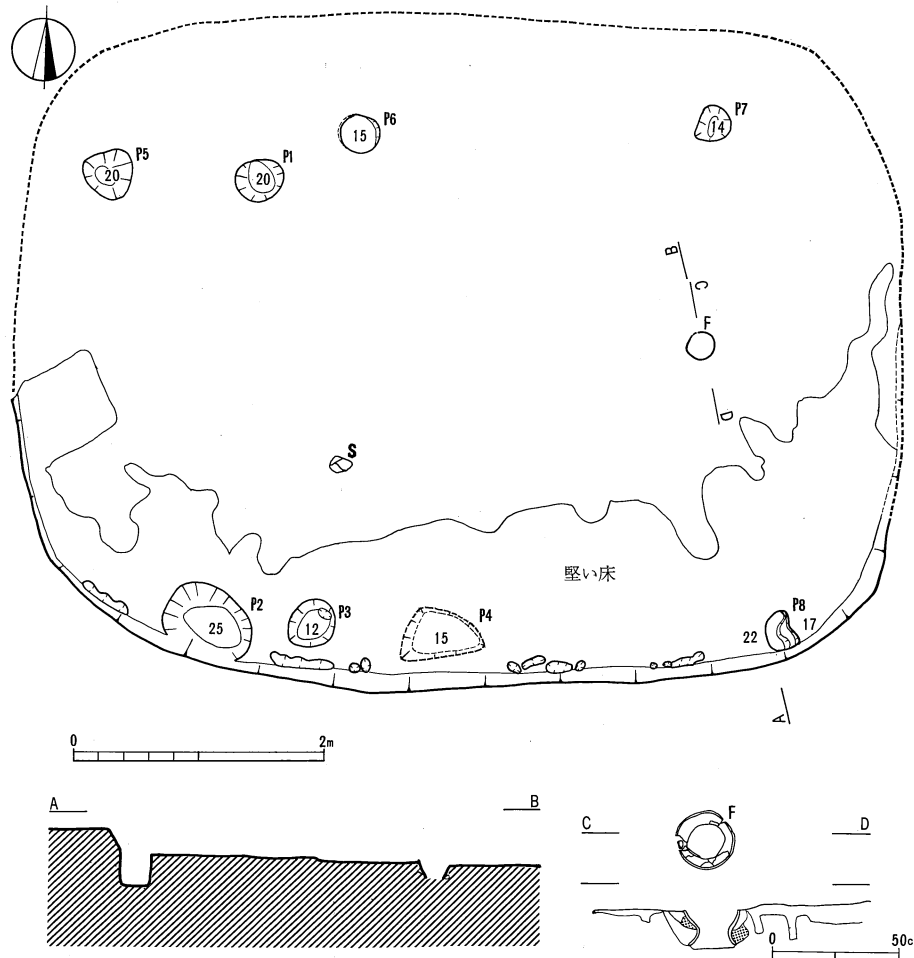
遺構 残存する南側の床面は、中央部にかけてかなり堅くタタキシめられた床があり、その周りから壁にかけて軟弱になる状態が認められた。主柱穴は3ヶ検出されたが、P₆は割材の柱らしく南北に長さをもっている。南西コーナーの袋状に壁内に入っているピットは、どういう性格のものかよくわからない。P₁は二段状になっているところより添柱をしたものと考えられる。東壁下の柱穴P₃・P₄は棚あるいは入口の柱なのであろうか。いずれにせよ62住に大部分を切られ詳細は不明であり、したがって埋甕炉は発見されていない。

57号住居址（第69図）

調査の経過 黄色土(砂質ローム)を掘り込んだ住居址であったので、南壁落ち込みはすぐに確認されたものの、表土は50cmと黄色土層面まで浅く、傾斜面ということもあって、竪穴の半分は長芋掘り取りの溝で痕跡すらとどめない状態であった。

竪穴の覆土は漆黒色土が竪穴中央付近に見られ、北壁側半分は耕作の攪乱により土器片が掘り上げられているらしく、甕口縁～胴部破片(299・300)が黄色土層の長芋溝中などから集中的に出土した。南壁側の覆土もやはり耕作の攪乱が部分的には深く入り込んでいた。南西柱穴付近(推定)に高坏の坏部破片(302)や壁際から紡錘車の破損品(413)や石槍の破損品(369)が、いずれも床面近くから出土した。

遺構 床は黄色土のため堅緻な床面があるにはあるが、南壁際と西壁・東壁際南半分までが回廊式に検出されただけで、内区には全く見つからない。床面レベルは漸移層面になるらしく、堅い床のない部分は黒色土と黄色土がまだらに見える攪乱されていない土層であり、長芋耕作は少なくとも炉を境にした南半分はおよんでいないことが確実であるので、中央に土間を持たない住居と考えてよいであろう。北側床は攪乱により定かではない。



第69図 57号住居址実測図(1/60)、埋葬炉実測図(1/30)

主柱穴はそれらしき位置に2本見つかったが、床のはっきりしている南側には掘り込みの痕跡がないので、主柱は埋め込みではないと思われる。柱の位置はP₇・P₁と相対する位置の床の凹み部と推定される。

炉は埋葬炉(301)であり、甕上半部を逆位に埋めている。周辺床面まで攪乱が入っていて焼土ははっきりしなかったが、土器の周囲と下底部には厚く(10cm)詰っていた。

壁際のピットは南西コーナーの南壁下に1基あり、石槍はこの上面の出土になる。ピット内からは土器底部破片などわずかに出土したのみである。また南壁下に周溝のような溝や小穴がわずかに見られたが、細く浅いため断定はできない。入口も同様に限定できないが、P₃の辺りと推定される。

第3表 弥生時代住居址一覧表

住居址No	○遺構図 ○遺物出土図 ○遺物分布図	○竪穴平面形 ○長軸方向(略方向) ○規模(m)	主柱穴 ○本数 ○柱穴間距離(m) ○形状	炉 ○形態 ○位置と数 ○炉の土器の底他	○主柱穴と壁の距離(m) ○竪穴面積 ○坪	○床の状態 ○壁際のピット ○入口の位置	中央部の小柱穴	時期区分
1	第5図					一部に堅い床が残存		?
50	第5図	隅丸方形 N 88°E(東西) (4.55)×4.35	(1) 円形		— (20.68m ²) (6.3坪)	東半分に堅い床が残存		III
49	第5図	隅丸方形 N 73°E(東西) 5.70×5.45	6本 1.77×2.88 楕円形	埋糞炉 東(外)1、 (内)1 底部あり(F ₁)	1.2 : 1.0 31.07m ² 9.4坪	全体に堅い床が残存 南西コーナー2、 南壁中央1		II
32	第6図 第7図	隅丸長方形 N 70°E(東西) 6.82×4.38	(3) (3.86×2.10) 長楕円形		1.11 : 1.32 29.87m ² 9.1坪	北西・北東隅に堅い床なし 西北西か西壁南隅	中央に柱穴1本あり	III
41	第8図	隅丸不正長方形 N 81°E(東西) 3.8×3.0	3 2.34×2.13 楕円形	地床炉 西1	0.29 : 0.66 10.2m ² 3.1坪	全体に堅い床が残存なし	柱穴1本あり	III
36	第9図	(長方形) (N 80°E)(東西) (6.0×4.8)		埋糞炉 中央1	— (28.8m ²) (8.7坪)	炉を中心に南北に分かれて堅い床が残存		IV
54	第10図	隅丸長方形 (N 85°W)(東西)	1 楕円形		(0.89×0.3)	堅い床が残存		?
15	第11図 第144図	隅丸長方形 N 51°W(東西) (6.00)×4.43	(3) 3.25×2.10 円形、楕円形	埋糞炉 西1	(1.23 : 1.21) (26.58m ²) (8坪)	全体に堅い床が残存 南東コーナー1 南壁中央か西隅	(長軸方向、短軸方向に並ぶ)	I
33	第12・13図	隅丸長方形 N 29°W(南北) (5.80×4.75)	4 3.33×2.07 円、長楕円	埋糞炉 北(内)1、南(外)1	(1.10 : 1.21) (27.55m ²) (8.3坪)	貼床あり 東壁中央か北隅	長軸方向、短軸方向に並ぶ	III
31	第12・13図	隅丸長方形 N 80°W(東西) 6.44×(5.34)	4 4.38×2.57 円、長楕円形	埋糞炉 東(内)1	(1.04 : 0.83) (34.38m ²) (10.4坪)	全体に堅い床が残存 北西コーナー1	中央に柱穴あり	II
34	第14図	隅丸長方形 N 63°E(東西) 6.35×4.62	3 3.66×2.58 楕円形		1.0 : 1.28 29.34m ² 8.9坪	全体に堅い床が残存 南西コーナー1 南壁西隅	長軸方向、短軸方向に並ぶ。	II
24	第15・16図 第17図 第146図	隅丸長方形 N 78°W(東西) 9.18×6.67	6 3.06×3.55 円形	埋糞炉 西(外)1 土器片を敷く、 炉辺石2枚	1.30 : 1.54 61.23m ² 18.6	全体に堅い床が残存 南壁中央に多数あり 南壁中央	長軸方向に2列並ぶ。 中の主柱穴間に間柱あり。	II
2	第18図	(南北)	(2) (3.83) 円形			北側の一部に黄色土の堅い床が残存。		?

住居址No.	遺構図 ○遺物出土図 ○遺物分布図	○竪穴平面形 ○長軸方向 (略方向) ○規模(m)	主柱穴 ○本数 ○柱穴間 距離(m) ○形状	○形 態 ○位置と数 ○炉の土器 の底他	○主柱穴と壁 の距離(m) ○竪穴面積 ○坪	○床の状 態 ○壁際のピット ○入口の位置	中央部の小柱穴	時期 区分
5	第19図	隅丸長方形 N 67° E (東西) (5.2×4.4)	4 3.76×2.82 楕円形、 ヒョウタン形	埋甕炉 東(内)1、東(外)1、 西(内)1	(0.78 : 0.78) (22.88m ²) (6.9坪)	内区に部分的に堅い 床が残存。 なし		?
29	第20・21図	隅丸長方形 N 52° E (東西) (6.0×4.25)	4 4.47×2.68 楕円形	埋甕炉 東(外)1	(0.7 : 0.8) (25.2m ²) (5.8坪)	西半分に部分的に堅い 床が残存。		II
3	第20・21図 第 図	隅丸長方形 N 77° E (東西) (5.90×4.60)	4 3.7×2.9 楕円形	埋甕炉 東(外)1、西(外)1	(0.75 : 1.1) (27.14m ²) (8.2坪)	内区に堅い床が残存 南西コーナー1		III
28	第20図	隅丸長方形 N 85° W (東西) 5.15×3.72	? ———— ————	埋甕炉 東1	———— 19.16m ² 5.8坪	全体に堅い床が残存 南西コーナー1 南壁中央か西隅	中央に柱穴が集中 する	I
4	第22・23図 第 図	隅丸長方形 N 77° W (東西) 9.22×6.07	6 3.23×3.26 円形	埋甕炉 東(外)2、西(内)1	1.35 : 1.36 55.97m ² 17.0坪	全体に堅い床が残存 南壁中央1	長軸方向に1列並 ぶ	I
37	第24図	不 明 (東西) 不 明		埋甕炉 西1		炉の東に部分的に堅い 床が残存。		III
35	第25・26図	隅丸長方形 N 83° E (東西) 5.98×4.13	6 2.34×2.74 2.34×2.74 円形	埋甕炉 西(外)1	0.68 : 0.49 24.7m ² 7.4坪	全体に堅い床が残存 北西コーナー1	中央主柱穴間に間 柱あり。その他、 中央に柱穴あり。	III
46	第27図 第146図	隅丸方形 N 73° E (東西) (6.3)×5.1	(3) (4.27×2.42) 円形	埋甕炉 西(外)1	(1.2 : 1.0) (32.0m ²) (9.8坪)	全体に堅い床が残存 南西コーナー1 南壁中央か西隅	中央に柱穴が集中 する	III
44	第27図 第146図	(隅丸方形) (東西) ————	(1) ———— 不整形	埋甕炉 西1	(1.08 : 1.00) ———— ————	堅い床なし 南西コーナー1		I
48	第27図 第146図					堅い床なし 南壁中央1		II
6	第28・29図 第144図	隅丸長方形 N 9° W (南北) 8.80×4.70	8 2.31×2.02 円形、楕円形	埋甕炉 北(外)1、南(外)1 土器片を敷く	1.22 : 1.42 41.36m ² 12.5坪	全体に堅い床が残存 北東コーナー2 東壁中央か北寄り	長軸方向に2列並 ぶ。中央の主柱穴 間に間柱がある。	I
51	第30図					土器集中部分に堅い 床残存		II
43	第31・32図 第144図	隅丸長方形 N 88° W (東西) 6.95×5.62	(3) (4.68×3.26) 円形	埋甕炉 東1	1.08 : 1.15 39.06m ² 11.8坪	全体に堅い床が残存 南西コーナー1 南壁西隅	短軸方向に1列並 ぶ	III

住居址No.	遺構図 遺物出土図 遺物分布図	○竪穴平面形 ○長軸方向 (略方向) ○規模(m)	主柱穴	○本数 ○柱穴間 距離(m) ○形状	炉 ○形 態 ○位置と数 ○炉の土器 の底他	○主柱穴と壁 の距離(m) ○竪穴面積 ○坪	○床の状 態 ○壁際のピット ○入口の位置	中央部の小柱穴	時期区 分
19	第33図 第145図	(隅丸長方形) N 87° E (東西) 6.32×(5.0)	(3) (4.15×2.72) 楕円形	埋甕炉 東1 ——	(1.21:1.15) (31.6m ²) (9.6坪)	全体に堅い床が残存 南西コーナー1 南壁中央か西隅	中央に柱穴が集中 する。(長軸に1列、 短軸に2列並ぶ)	I	
7	第34図	隅丸長方形 N 82° E (東西) (7.0×6.5)	(2) ?×(2.72) 円形	埋甕炉 東(内)1、西1 ——	(1.23:1.3) (45.5m ²) (13.8坪)	外区に堅い床が残存 —— ——		I	
56	第35図 第147図	隅丸方形 (南北) ——	(1) —— 楕円形			南西コーナーと内区 に堅い床が残存 —— ——		IV	
55	第36図 第37図	隅丸長方形 N 82° E (東西) 4.87×3.88	4 3.01×2.07 楕円形	埋甕炉 東(内)1、東1、西1 土器片を敷く(F ₁ 、F ₂)	0.92:0.96 18.9m ² 5.5坪	全体に堅い床が残存 南西コーナー1 南壁中央か西隅	中央に柱穴が集中 する	I	
20	第38図 第148図	隅丸台形 N 4° E (南北) 4.17×3.59	4 2.18×1.94 円形	埋甕炉、地床炉 北2、中央1 ——	0.63:0.92 14.97m ² 4.5坪	全体に堅い床が残存 南東コーナー1 東壁南隅か		II	
59	第39図 第40図	隅丸長方形 N 80° E (東西) 5.70×4.30	4 2.82×1.66 円形、楕円形	埋甕炉 西(外)2 土器片を敷く	1.28:1.36 24.51m ² 7.4坪	炉の周辺、北東隅に 堅い床なし なし 南壁中央か	中央に柱穴1本あ り	I	
39	第41図			埋甕炉 位置不明1 ——		部分的に堅い床が残存 —— ——		III	
21	第41図 第147図	隅丸長方形 N 89° E (東西) 6.35×5.06	4 3.82×2.81 円形	埋甕炉 東(内)1 ——	1.05:1.23 32.1m ² 9.7坪	全体に堅い床が残存 南西コーナー1 ——	長軸に2列並ぶ	I	
40						部分的に堅い床が残存 —— ——		I	
58	第42図 第147図	隅丸長方形 N 8° W (南北) 5.90×4.99	4 3.18×2.18 円形	埋甕炉 北(内)1、北(外)3 炉底に土器片を 敷く	1.23:1.31 29.44m ² 8.9坪	全体に堅い床面が残存 南西コーナー2 西壁中央か南壁中央	長軸方向に並ぶ	II	
8	第43図	隅丸方形 N 71° E (東西) (5.2×5.1)	(3) 3.2×2.9 円形	埋甕炉 東1 ——	(1.08:1.05) (26.52m ²) (8.0坪)	堅い床なし 南壁中央1 ——		IV	
68	第44・45図 第148図	隅丸長方形 N 21° W (南北) 5.37×3.76	4 3.42×1.30 偏楕円形	埋甕炉 北(内)1 土器片を敷く	1.16:0.90 20.19m ² 6.1坪	全体に堅い床が残存 —— 東壁南隅か西壁南隅	中央に柱穴が集中 する	I	
70	第46図 第47図	隅丸長方形 N 78° E (東西) 4.37×3.64	4 2.45×1.79 楕円形	埋甕炉 東(外)1、 東(内)1 土器片を敷く(F ₂)	0.88:0.94 15.91m ² 4.8坪	全体に堅い床が残存 南西コーナー1、 北壁中央1 ——	長軸方向に1列並 ぶ	I	
69	第48図	隅丸長方形 N 68° E (東西) 6.08×(5.2)	(2) (3.72×) 楕円形	埋甕炉 西(中央)1 土器片を敷く	(1.23:0.99) (31.07m ²) (9.5坪)	中央部に堅い床面残存 南東コーナー1 ——	中央に柱穴が集中 する	II	

住居址No	○遺構図 ○遺物出土図 ○遺物分布図	○竪穴平面形 ○長軸方向(略方向) ○規模(m)	主柱穴 ○本数 ○柱穴間距離(m) ○形状	炉 ○形態 ○位置と数 ○炉の土器の底他	○主柱穴と壁の距離(m) ○竪穴面積 ^{○m²} ○坪	○床の状態 ○壁際のピット ○入口の位置	中央部の小柱穴	時期区分
22	第49図 第145図	隅丸長方形 N 73° E (東西) 5.10×4.04	4 3.05×1.76 偏楕円形	埋竊炉 東(内)1、西1	1.09 : 0.97 20.6m ² 6.2坪	北西壁際から中央にかけて堅い床なし 南壁東隅	中央に柱穴2本あり	I
9	第50図	(隅丸長方形) (N 63° E)(東西)		埋竊炉 東1 底部あり	不明	炉址西側に堅い床が残存		III
14	第51図	隅丸長方形 N 76° E (東西) 4.51×3.41	4 3.02×1.85 円形	埋竊炉、地床炉 東(内)1、中央1	0.72 : 0.76 15.38m ² 4.7坪	内区に堅い床が残存なし (北壁か南東隅か)	中央に柱穴3本あり	II
10	第52図 第53図	隅丸方形 N 79° E (東西) 5.65×5.34	4 3.22×2.44 楕円形、円形	埋竊炉 西1 土器片を敷く	1.28 : 1.18 30.17m ² 9.1坪	中央部に堅い床なし 南西コーナー2、 南壁中央2 南壁中央		IV
65	第54図	隅丸長方形 N 87° E (東西) 4.50×3.45	4 3.14×2.25 楕円形	埋竊炉 西(内)1 土器片を敷く	0.52 : 0.59 15.52m ² 4.7坪	不規則に堅い床が残存		III
11	第55図 第56図	隅丸長方形 N 76° E (東西) 5.35×4.40	4 3.39×2.24 偏楕円形	埋竊炉 西1	1.00 : 0.95 23.54m ² 7.1坪	中央部と北東コーナーに堅い床なし 南壁東1		I
12	第57図 第58図	隅丸長方形 N 82° E (東西) 5.62×4.19	3 3.26×2.70 楕円形	地床炉 中央西1	0.81 : 1.12 23.5m ² 7.1坪	中央のピット周囲に堅い床なし 南西コーナー1、 北東コーナー1 南壁西隅	長軸方向に1列並ぶ	II
66	第59図	隅丸長方形 N 85° E (東西) 3.64×2.97	(3) (2.20×1.88) 楕円形	埋竊炉 東(内)1	(0.44 : 0.54) 10.81m ² 3.3坪	北西・北東隅に堅い床なし 南西コーナー1、 北西コーナー1	中央に柱穴2本あり	II
67	第59図	隅丸長方形 N 85° E (東西) 4.91×3.87	3 3.08×1.64 偏楕円形	埋竊炉 西(外)1 底部あり	1.02 : 0.83 19.00m ² 5.6坪	全体に堅い床が残存 北東コーナー1	中央に柱穴が集中する	I
64	第60図	隅丸長方形 N 79° E (東西) 6.22×4.36	4 3.84×2.23 円形、不整形	埋竊炉 西(外)1	1.04 : 1.12 27.12m ² 8.2坪	中央部に堅い床なし 南東コーナー1 南壁西寄りか東隅	中央に柱穴2本あり	I
63	第61図 第62図	隅丸長方形 N 79° E (東西) 3.04×2.44		埋竊炉 中央北寄り1	7.42m ² 2.2坪	堅い床なし 南西コーナー1		IV
60	第63図	隅丸長方形 N 84° E (東西) 5.32×3.96	4 3.23×1.66 偏楕円形	埋竊炉 西1	1.11 : 1.05 21.07m ² 6.4坪	全体に堅い床が残存 南東コーナー1 南壁、東壁	中央に柱穴2本あり	II
61	第65図 第66図	隅丸長方形 N 90° E (東西) 3.42×2.77	4 2.32×1.42 偏楕円形	埋竊炉 東(外)1	0.63 : 0.50 9.47m ² 2.9坪	全体に堅い床が残存 南西コーナー1 北壁西隅か	中央に柱穴1本あり	II

住居址No.	遺構図 ○遺物出土図 ○遺物分布図	○竪穴平面形 ○長軸方向 (略方向) ○規模(m)	主柱穴 ○本数 ○柱穴間 距離(m) ○形状	炉 ○形態 ○位置と数 ○炉の土器 の底他	○主柱穴と壁 の距離(m) ○竪穴面積 ○坪	○床の状態 ○壁際のピット ○入口の位置	中央部の小柱穴	時期区分
17	第67図 第145図	隅丸長方形 N 81° E (東西) 4.75×4.23	4 2.97×2.40 楕円、偏楕円	埋竊炉 西(外) 1 ——	0.81 : 0.89 20.1m ² 6.1坪	全体に堅い床が残存 南東コーナー1 南壁東隅	長軸方向に並ぶ	III
62	第68図 第148図	隅丸長方形 N 74° E (東西) 5.34×4.70	4 2.37×2.45 円形、楕円形	埋竊炉 東(外) 1 ——	1.14 : 1.45 25.1m ² 7.6坪	中央部に堅い床なし 北東コーナー1、 南西コーナー1 南壁中央から西隅	中央に柱穴1本あり	IV
16	第68図 第148図	隅丸長方形 (N 15° W)(南北) (5.3×4.1)	(3) (3.88×2.74) 楕円形		(0.51 : 0.65) (23.37m ²) (7.9坪)	—— 南西コーナー1 ——		III
57	第69図	隅丸長方形 N 88° W (東西) 6.65×(5.20)	2 3.57×? 円形	埋竊炉 東1 ——	—— (34.58m ²) (10.5坪)	中央に堅い床なし 南西コーナー1 南壁中央西寄り		?

(表説明)

○〔住居址竪穴の規模〕 長辺×短辺、最大巾。()は推定値。黒色土層に掘り込まれた竪穴が大部分であるため、竪穴平面形が非常に不明確であったので、残存壁の縁ではなく、下端の平面形において計測している。

○〔主柱穴〕 本数は攪乱、重複により柱穴が不明、不確定の場合は現存地を()で示した。主柱穴間距離は、竪穴の長辺×短辺に対応する主柱穴の間隔であり、柱穴下端の中心を結んだ距離の平均値である。

○〔炉〕 炉の位置の(内)、(外)は、主柱穴間の線上より内側か、外側(壁側)かということを示している。

○〔主柱穴と壁の距離〕 主柱穴と長辺側の壁下端との間隔：主柱穴と短辺側の壁との間隔。主柱穴を結んだ線の延長上で計測するようにしたが、コーナーの円味を考慮してあまり徹底していない。各主柱の平均値である。主柱穴数が確定していないものは()で示した。

○〔竪穴面積〕 面積は推定値による計算には()を付した。

○〔床の状態〕 堅い床というのは、タタキしめられた堅緻な床面のある場合であるが、多分に感覚的な把握であることは否定できない。

なお、出土遺物については遺物一覧表(第10・12表)を参照されたい。住居址の順序は集落全体の分布状態に主眼をおくため、読みにくいがあえて東から分布の順に並べた。集落内の住居址分布に、いくつかの傾向を読みとることを、意とすところをくみ取っていただきたい。

2. 溝

溝 2 (第70図)

II区CL 48からCY 45に検出され、全長28mにおよぶ。大きく弧を描いて西へ傾斜を持ち、そのまま用地外へ続く。東端では深さ4cmと浅く幅も25cmと狭いが、西側では深さ80cmと深く幅も1m30cmと広がる。褐色土層を掘り込み西側ではローム層まで達している。断面はU字状を呈し、土層は自然堆積を示す。底部には水が流れたと思われる薄い砂質の層が見られる。西側6mの底はローム層を堅くタタキしめており、堅穴の床状を呈している。

当初、遺構の検出を行っている際に、CW 46付近に遺物が集中しているため、堅穴の存在を予想し13住としたが、堅穴の落ち込みおよび床面の検出ができなかったため、これを欠番として堅穴を抹消した。

遺物はあまり多くないが、西側6m付近に集中していて出土位置は遺構検出面に見られるのみである。中・下層からの出土は見られなかった。主な出土遺物は甕5点(425・426・427・428・429)、小型甕2点(430・431)、紡錘車1点(401)、打製石斧2点(99・100)、石庖丁1点(195)である。

溝はII層の褐色土層を掘り込んでいるが、この褐色土層は住居址覆土には見られないものであり、弥生期と同時期またはそれ以前のものと思われる。また溝の時期は弥生時代に属するものと思われる。

溝の性格を特定とすることは、現段階では無理であるが、微高地である東側から西側の低地へ向って規模を増していること、底部に水が流れたと思われる砂質の層があること、溝の内外ともに、柱穴列のようなものが見られないことなどを考慮すれば、排水路としての性格が最も強いと思われる。

溝 3 (第70図)

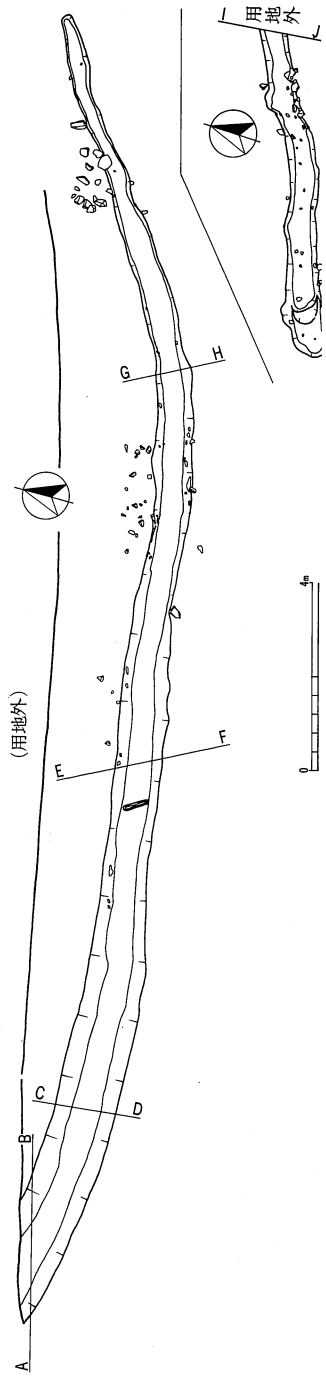
溝2の東端から北へ3mを西端として、東西にほぼ直線的に検出され、東側は用地外へ続く。検出部分は長さ7m、幅50~60cmを計測し、深さは30cmである。西端は表土が薄く耕作による攪乱のため立ち切れの状態である。

溝は礫を多く含む褐色土層を掘り込んでおり、ローム層まで達していない。覆土は黒色土で拳大から人頭大の礫を多量に含み礫中に一括土器が出土している。主な出土遺物は甕4点(433・434・435・436)、壺1点(432)、凹石1点(291)である。

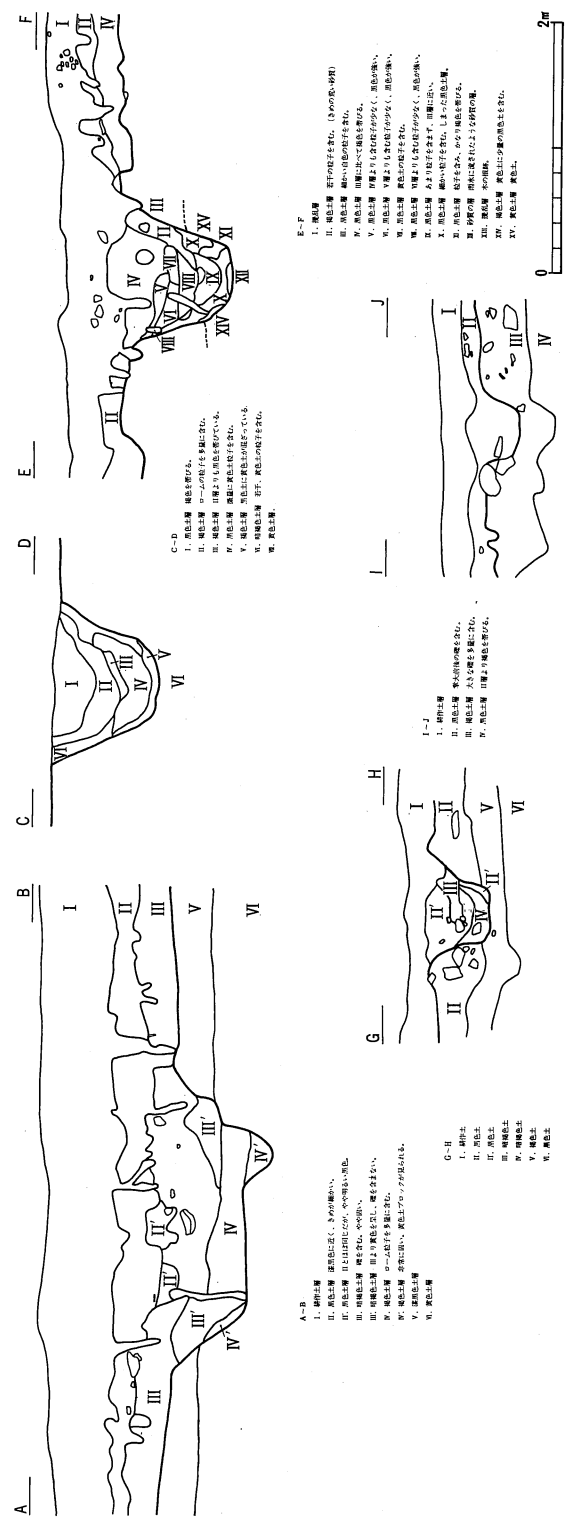
溝内から出土する土器は総て、弥生期のものであることから、この溝の所属期は弥生時代後期と考えられる。

溝2と比較すると幅・深さとも一定していて、直線的であり、出土土器は溝の中から出土していること、弥生期に属する遺物が多いことがあげられる。

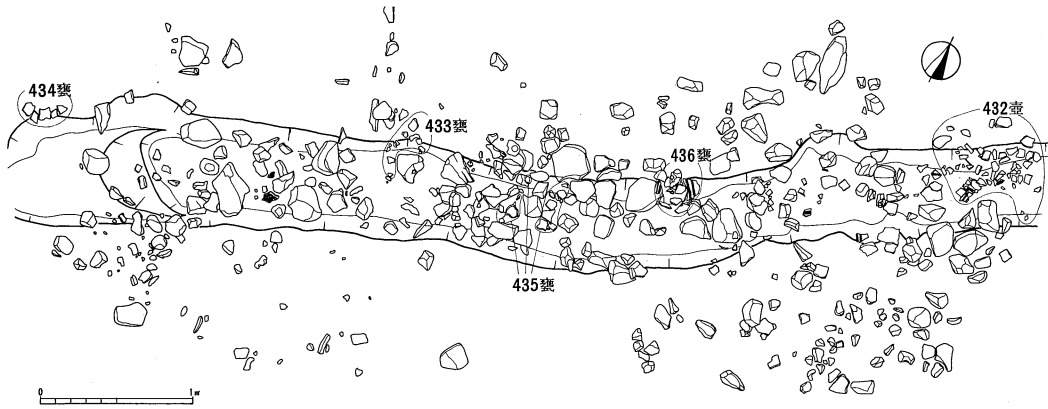
また、この溝の延長線上に当る、BX列では溝らしき遺構が発見されておらず、この間の民



第70図 溝2、溝3実測図 (1/80)



第72図 溝2、溝3土層断面実測図 (1/60)



第71図 溝3上面の土器と礫の出土状態実測図(1/50)

有地で屈曲している可能性が強い。

溝3の周辺は竖穴がないにもかかわらず、遺構外に多量の遺物の分布が見られ、当遺跡の中でも特異な状況を示している。

調査範囲が狭く十分な資料が得られていないので、その性格については、推定の域を出るものではないが、前述のことを総合すると、溝の東側は民有地で北に屈曲し、西側は耕作による攪乱および平安末期の18住によって切られていて確認できないが、西側は若干延長後北へ屈曲する可能性があり、方形周溝墓を想定することも可能と思われる。

3. 集石址 (屋外炉) (第73・74図)

調査の経過 本址は、天竜川に近い住居址群の6住南に発見されたマルメロ形の土壇を中心とする集石である。(遺構Noは7号集石址)

この付近は、橋原遺跡でも特に住居址の密集する地点であるが、35・4・46・6・43の各住居址に囲まれた部分は、一つの空白部を形成する。その一角に南北9.2m×東西6.8mの範囲にわたって、大・中・小の円礫、角礫(割れた礫)が集中的に発見された(第73図)。出土層位は、表土層(耕作土ないし宅造による盛り土)下の礫を含まない黒色土層である。西北西に緩傾斜しているため、厚い黒色土層内のレベルでは、あまり比較にならないが、周辺の住居址が竖穴を掘り込んでいる黒色土層の上部である。

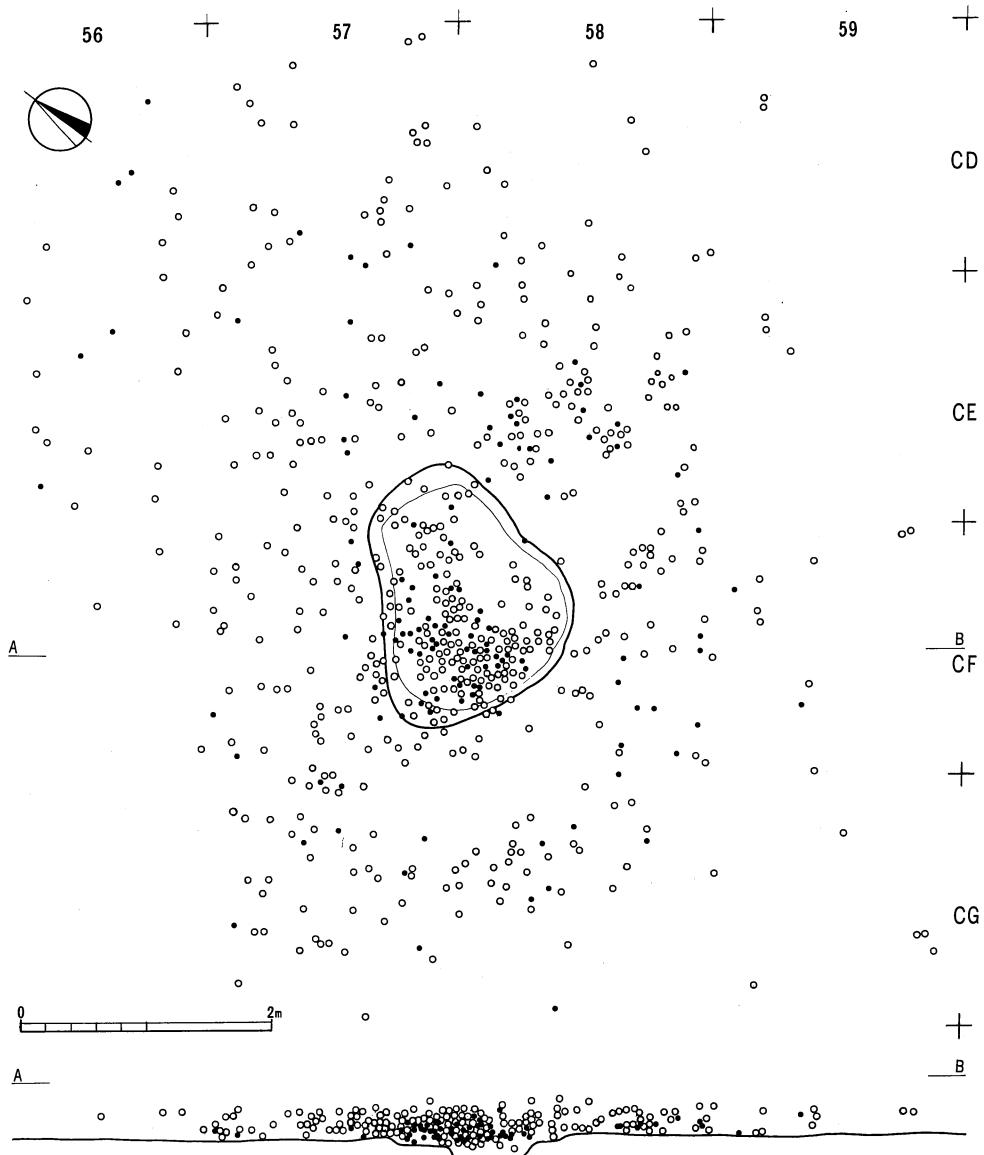
礫はおよそ823点余が、規則性もなく、無雑作に散乱するといった状態で出土した。中心部では、礫の集中する狭い範囲に、まだらなしみ状の漆黒色土の落ち込みが検出されるのであったが、部分的であったり、判別できにくい部分もあるなど、はっきり落ち込み部を限定できずにいた。しかし、下部に掘り下げると、焼土と炭が多くなり、マルメロ形の浅い土壇を確認できた。またその中にさらに円形状の小ピットがあり、特にそこには礫が並ぶように重なって出土した。



第73図 7号集石址実測図(1/40)と集石下の土坑実測図(左上)(1/80)

礫の出土状態と土坑 マルメロ形の土坑は $190 \times 166\text{cm}$ を測るが、浅くて形状は実際のところはっきりしない。小ピットのある南側壁は 7cm ほど残存するが、北側壁はわずかに壁を確認したという程度であり、グラグラとしてはっきりしない。中心となる小ピットは $75 \times 69\text{cm}$ 、深さ 14cm のやはり浅い、不整形を呈する(第73図上)。

礫は小ピット上面およびその周囲に特に多く出土したが、小ピット内には 14 個ほどが出土しただけであり、それも底面からかなり浮いていた。全体に土坑内の礫は坑底より $10 \sim 15\text{cm}$ 浮いたレベルに集中的にあり、土坑中央辺りには、 20 個余りがきちんと並べたような状態で検出された。覆土内には炭化物が非常に多く、焼土粒も多量に混在したが、焼土の塊りは 1 ヶ所にわずか見られただけである。



(垂直分布は CF 列のみ示す) (●=炭化物の付着した礫 ○=その他)

第74図 7号集石址礫分布図(1/60)

次に土坑も含めた全体の礫散布状態について見ると(第74図)、土坑を中心に四方に拡散している状態がよく判る。便宜的にグリッド別個数を出してみたが、やや南側に多いということは言っても、それほどの差ではない(第4表)。これらの礫はどれも、多小にかかわらず赤色を帯びたり、黒色のタール状の付着物があったり、あるいは割れた状態であり、混在する焼土や炭化物とともに、火との関わりが顕著であった。なかでも割れた状態の礫が圧倒的に多いことは、礫を加熱していることを意味し、本址を焼き石炉と位置づける大きな根拠となった。

礫の観察 採集した礫は、大・中・小823点に達したが、このうち原形を保つものはわずかに

166点であった。まず、これらについて大きさを見ると、小児頭大、拳大、それ以下の、大・中・小に区別される（第5表）。大礫が23個、中礫が23個、小礫が106個、この他に極小が14個ある。これらは安山岩のやや大きな角礫を除いて、大・中・小とも角がとれた、円味のある垂角礫で、一定の形態もなく、ほとんどが水流に洗われた河原石である。岩石の種類は砂岩、礫岩、結晶変岩、安山岩であり、近くの天竜川河床より採集することができる礫である。

第4表 7号集址グリッド別礫の出土個数

グリッド番号	石1個数	備考	グリッド番号	石1個数	備考
CF 57	225ヶ	弥生土器片出土 土壇あり	CD 57	34ヶ	
CF 58	208ヶ	"	CE 56	18ヶ	
CE 58	123ヶ	"	CD 58	17ヶ	
CE 57	74ヶ	"	CG 59	15ヶ	
CG 57	56ヶ		CF 59	13ヶ	
CG 58	52ヶ		CE 59	2ヶ	合計 823ヶ

第5表 7号集石址の礫の大きさ

区分	タテ cm	横 cm	厚ミ cm	備考
大	9.4~17.0	6.5~12.0	4.0~10.0	小児頭大前後
中	7.7~15.0	6.0~10.6	2.7~ 7.0	大人の拳大前後
小	5.3~11.7	3.0~ 7.7	2.5~ 5.3	小児の拳大以下

第6表 7号集石址の炭化物の付着した礫の個数（煤ケタ礫も含む）

石の区分	大	中	小	備考
完全な礫	3	6	29	
割れた礫	17	8	71	剥片23を除く

次に割れた礫の状態について観察してみると、原形を保つ礫を除いた残り657点は、ほとんど半割れから1/3、1/5位に割れており、中には石質や原形の全くわからないものもある。割れた礫は石質にもよるであろうが、赤味を帯びており、割れ方は角張った角礫状であり、剥片状のものは極めて少ない——以下、割れ石と便宜的に呼称する。熱を加えた度数の多いものほど、細かく割れ、赤色を帯びたということであろう。これらは土壇内のピット付近に多く、149個を数える。

原形のままの礫および加熱により割れた礫の両者の中に、炭化物の付着した例が多く見られる（第6表）。煤けた状態に薄く付着する例、タール状に厚くこびり付く例とあり、炭化物の付着後に割れた——再度加熱されたと見られるものもある。完形の礫は比較的鮮明に付着が認められる。

この炭化物は何か焼いた、即ち調理の痕跡と考察されるが、これらの分布は、中心部より土壇外に赤味を帯びた焼石に混じって散在していた（第74図）。

割れ石の接合 71個の割れ石を接合できた。これだけの数では十分とはいえないが、これらの出土位置を見ると、同一グリッドの出土は少なく、散在している例ばかりである。その場で割れたのではないのであるから当然のことではあるが、割れ石を散播したものと推察される。

さて、割れ石657個のうち24個が接合したのであり、やや危険ではあるが、この割合から完形礫の数を推測してみた。71個の割れ石が接合して24個の礫に復原できた。この割合でいくとおよそ657個の割れ石は222個の完形礫である。大・中・小の割合で見ると166個の完形礫と合わせて大51個、中54個、小283個となる。

以上はあくまでも概数であるが、焼き石炉に使われた礫の数である。これからすると、小礫は、大・中礫の5倍以上使用されていることが窺われる。この焼き石炉の特長の一つとってよい。

所属時期と性格 集石の上面、表土層中では弥生土器に混在して縄文土器(前期末諸磯C式)の破片が若干出土している。しかし、全体に表土層下は土器破片の出土がほとんどなく、集石の中心部である土壇面の集石とともに7片の弥生土器破片が出土しており、明確に礫と伴出する土器片は、これがすべてである。東南方にやや離れて(6m)縄文土器の破片が3片ほど検出されているが、この付近には土層の攪乱があった。また北方9mに縄文中期中葉の後田原期の住居址(42住)があるが、集石内はもちろんその周辺にも全く該期の土器破片が出土していない。またすぐ東に構築された平安期の52住とは位置的に近すぎるし、52住の床面レベルが高すぎて層位が付合しない。したがって、位置的にも、層位的にも、そして遺物上からも弥生時代の焼き石炉——屋外炉とすることになんら異論はないであろう。

では本址の使用目的はなんであったのだろうか。炉の熱を長く保持するためには、薪の炭火とともに、小礫を混ぜておいた方が効果的である。炭火はそのままではすぐ灰になってしまうが、大礫よりも小礫を多く使用することによって熱効率をよくして、食料となるものを焼いたのであろう。一度、礫を焼いて使用してしまうと、焼け石を四方に拡散して、次回の使用に備え、礫が小片に割れると、新たな礫を逐次補充していったものと思われる。

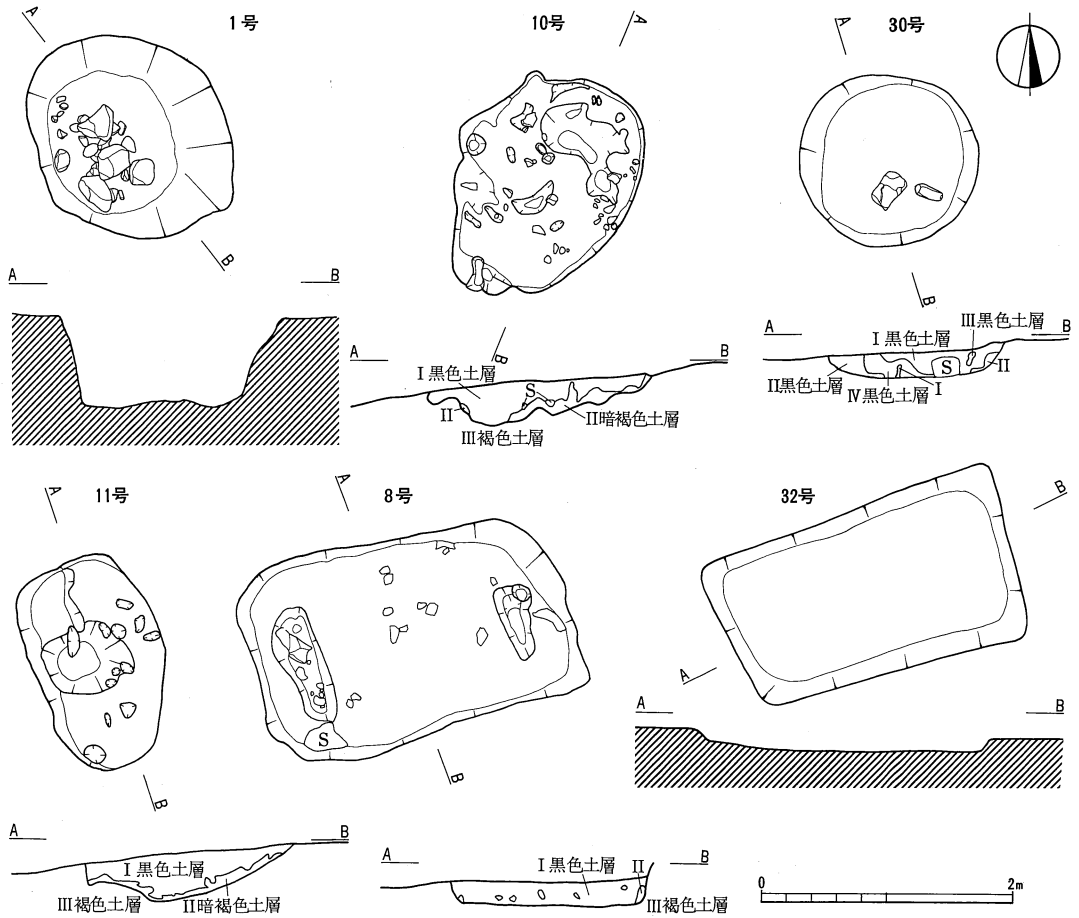
集落内の位置については冒頭において述べたように、35・4・46(44・48)・51(6・47)、43号の各住居址に囲まれた空間にある。9棟すべて同一期の集落ではないので、それについてはここでは論じないが、いくつかの住居に囲まれた広場の一角にあることは否定できない事実である。そこで考えられることは、各住居の共同施設としての屋外炉——魚あるいは獣の肉を焼くための焼石炉であるということである。いわば「共同飲事の場」であることが推察される。

4. 小 豎 穴 (第75図)

総計29基を発掘したが、1・30・32号小豎穴を除いて、その他は集落の西方高所に集中する。

1号小豎穴は発掘区的最東端、現天竜川に最も近い位置にある。32号小豎穴は住居址群の中ほど、68住の東に、30号小豎穴は集落の西端に近い17住の南にある。

集落の西側に位置する小豎穴群は、発掘区内では最も高所にあたり、表土の黒色土層下に褐色土層(砂質のローム層)が見られ、それだけ遺構検出が容易であったことも事実である。したがって、住居址群中に全く小豎穴がなかったと断定することはもちろんのことできない。し



第75図 1・8・10・11・30・32号土坑実測図(1/60)

かし、小竪穴が住居址覆土と同じような覆土であったなら、住居址竪穴の周囲には恐らくなかったと確信をもって考えている。これは62住周辺のよう褐色土層面の精査においても全く遺構が検出されていないことでも証明されよう。

該期の小竪穴は土坑墓の例が多いが、中野市安源寺遺跡や諏訪市荒神山遺跡のように多量の土器片や完形土器を伴う場合は、遺物の存在によってある程度推定できる。本遺跡でも遺物分布図に見られるように、住居址周辺に遺物の散在する例が多いため、かなり意識的に遺構の検出に努めたが、何一つ見出すことはできなかった。

以下、本遺跡の小竪穴について、その性格等を推察して若干説明を加えておきたい。

人為的に掘られた土坑と見なされるのは、1・8・10・11・25・30・32号の7基である（以下土坑と称す）。

1号土坑はどういう目的で掘られたものか、また所属時期についても不明である。この周辺にも褐色土層（礫を含む）が見られ、溝や不整形な掘り込みが重複していたので、あるいは弥生時代以降の新しい時代の所産であるかもしれない。

32号土壇は、覆土内から3点の石器が出土し、その周辺にも石器類が集中しており、わずか4mの近く（西側）にある68住との関係を考えずにはおけない。

25号土壇は、推測の域を出ないが、完形甕（437）を伴う長方形土壇であり、土壇墓ということも考えられる。

8号土壇は小竪穴群中であって、唯一整った長方形を呈し、やはり打製石斧の出土を見る。32号土壇と異なる点は壇底の両脇に細長いピット状の凹みを有することである。住居址群から離れた位置にある点から使用目的を考える必要がありそうである。

10・11号土壇は周辺の小竪穴に比べ、形状、壇底が整っているため区別したが、どういうものかはっきりしない。

30号土壇は円形を呈し、底から砧石と砥石が出土したが、これについては後述する。

これらの土壇からは弥生時代の石器や土器片が出土しているので、それ以降の土壇であることは明らかであろうが、土層断面の観察では耕作土、表土の落込みは全く見られないので弥生期に該当させておきたい。

その他の小竪穴の形状は極度に不整形であり、壇底に多数の小穴があるか、凹凸がひどく、ロームマウンドのような土盛りのある例が多く、これらは倒木あるいは伐採、立枯の木の株痕ではないかと推察される。ロームマウンドのとくに大きく盛り上った例は、5・31・34号がそうであるが、34号は62住に切られており、この大樹は弥生時代末期にはすでに存在していなかったことになる。これから想像して、この地は集落が営まれる以前は、かなり大きな森林であったようである。これは第Ⅲ区天竜川河床出土の大樹類と符号する。

さて、最後に、最も特異な存在であった30号土壇について考察を述べておきたい。

本址は褐色土層を正円形の丸底状に掘られ、床や壁面はタタカれた様に締められており、その底部より砧石（258）と砥石（241）が出土している。砧石は摩擦されたように全体にスベスベして、イネ科植物を扱う道具に通有の光沢を帯びた、ツルツルの部分もある。相当量、作業に使用された様相と見られ、これはこの土壇を中心として、その周囲において何らかの作業をしたことが推察できよう。事実、本址は17住の東にあって、60住・66住・61住・16（62）住に囲まれた一つの空間を擁しており、共同作業に関わる施設としての存在意義を有している。

水田や畑作が行われた弥生時代末期の生活の営みとして、この土壇が稲の脱穀、調整等の作業に使われたのではないかとと思われるのである。ちなみに、この土壇の東北辺には焼土の出土もあり、集落内の共同広場の一施設と捉えておきたい。

小竪穴一覧表

第7表 小 竪 穴 (土坑)

(単位は cm)

番号	位 置	平 面 形	断面形	壁	床	口 径	底 径	深 さ	小穴	遺 物
1	18 I AR52 AQ52	不正楕円形	浅鉢状	外傾	平 担	180×155	113×95	60.5		
	西側の壁は急に床面に下がり、東はやや緩かに壁をつくっている。覆土はローム粒を含む黒色土で下層は礫を混える。坑底には 30 cm × 30 cm 程度の石が四個重なる様に並んでいた。西側の床はやや凹み壁際に小礫が多くあった。石塊の外遺物なし。									
5	18 II EA52・53 EB52・53	不正楕円形	不正形		凹凸あり	289×226		33.5	多数	
	略中心部にマウンドの土層があり、北側には黒色と褐色のブロック堆積が円錐状に、深さ 33.5 cm を測る。またマウンドの南側には深さ 16 cm の黒土の堆積がみられる。両凹みには木の根が入り攪乱の状態がみられ、底部は凹凸が多い。									
6	18 II DY50・51 EA50・51	弦 月 形	盆 状	稍斜	凹凸あり	355×110	354×109	19	多数	打製石斧
	褐色土層に弦月状に落ち込み、深さ 19 cm より 9 cm を測る。弦月の中ほどに 2ヶ所凹みがあり、その周囲に小穴がいくつもある。全体に坑底は凹凸が多い。覆土中より折損した打石斧 (142) が出土。									
7	18 IIDX53	卵 形	盆 状	外傾	平 担	108×82	90×73	12	多数	
	褐色土層面にある。覆土の暗褐色土層の中に黒色土が落ち込む。坑底には中央より少し東南に 15 × 13 cm に深さ 7 cm を測るやや大きなピットがあり、この他に小さな穴が多数ある。									
8	18 II DV54・55 DW54・55	長 方 形	盆 状	外傾	平 床	252×168	230×152	33	8	打製石斧 土 器 片
	褐色土を掘り込む。覆土は黒色土に褐色の塊が混る。中央部より西側で坑底より約 5 cm 程上に 3 cm 位の堅い土層がみられた。西側壁近くに細長い不整形のピットがあり (90×37 cm、深さ 14.5 cm)、低部には大小 10 個の礫がみられた。また東側壁近くにも細長いピット (59×30 cm、深さ 29 cm) がある。土坑を掘った土は壁外に持ち出したらしく、穴のある両方の壁上の土層には、掘った覆土を積んだらしい土層がある。他に柱穴らしい穴は見られないが小穴が多数ある。西側壁近くで打石斧 1点 (141) を、また中央床面近くより弥生土器片が検出された。中央部に踏まれた様な固い土層がある点等、何か生活に使用された弥生時代の遺構と考えられる。									
9	18 II DV51・52 DW51・52	不 整 円 形	盆 状	外傾	凹凸あり	370×354	357×350	25	多数	な し
	褐色土層面にあり、略中央部にある暗褐色土および褐色土層を抱える様に周囲に黒色土層があり、その底部には多数の小穴がある。中でも大きいものは 11 個を数える。中心部の暗褐色および褐色土はマウンドとみられる。									
10	18 II DS55 DT56	楕 円 形	鍋底状	外傾	凹凸あり	193×147	165×137	20		打製石斧
	褐色土層に掘り込まれる。坑底は少し凹凸がある。覆土は黒色土が上に、下の中央部に 10 cm 位の暗褐色の土層があり拳大の石が数個混じる。底は礫を混えた褐色土であった。東側壁より打製石斧 1点 (140) が出土。									
11	18 II DS55 DT55	不 整 楕 円 形	不 整 形	外傾	凹 凸	173×105	162×94	42	11	
	褐色土層面にあり、北西側に高さ 12.5~32 cm の壁があるが、東側は壁がなく、グラグラと底の凹みに達している。最深部は中央より西側にあり、暗褐色土が 8~3 cm の厚さで残っている。									
12	18 IIDW53	不 整 円 形	クライ状	外傾	凹凸あり	132×110	125×80	26	6	
	表面 95 × 53 cm の石の根元の褐色土層面にある。覆土は暗褐色土で低部に凹凸が一部あるがそれほど深い凹みはない。									
13	18 IIDW50	不 整 楕 円 形	鍋底状	外傾	凹凸あり	83×73	75×64	20	7	
	褐色土層面にあり、20 cm 前後の小穴が 7ヶ所、中央より周囲にかけてある。覆土は黒色土で北側最深部に暗褐色土がある。底に大小の礫が散在した。									

番号	位置	平面図	断面図	壁	床	口径	底径	深さ	小穴	遺物
14	18IIDO55	不整楕円形	皿状	外傾	凹凸	140×100	135×95	8		
	東側に近接してピット15がある。褐色土層面にあり、覆土は黒色土である。下底部にはうすく褐色土層があり、 坑底はかなり凹凸があるが特に深い穴はみられない。									
15	18IIDN ⁵⁶ DO ⁵⁶	不整楕円形	階段状	外傾	凹凸あり	110×95	93×75	42	8	土器片
	褐色土層面にある。坑底の西半分が鍋底状に大きく凹む。覆土は殆ど黒色土で中に一部暗褐色や褐色混りの土 が壁や底部に見られた。底面近くに弥生土器片1点出土。									
16	DN57 DN58	(未発掘)								
	土抔の北側に50×53cmの隅丸三角形の褐色ロームのマウンドがある。その南側にそって8.5cmの深さを測る 落ち込みがあり、覆土は白色粒子を含む黒色土である。低部にローム混りの暗褐色土があり凹凸が多い。									
17	18IIDP57	小判形	鍋底状	外傾	凹凸あり	75×不明		12	多数	
	用地外の為南側半分以上が未掘であり、全体は不明。坑底には小穴が多数あって凹凸が著しい。形状は比較的 整った小判形を呈す。覆土は黒色土の下に暗褐色土が入る。									
18	18IIDP ^{56・57} DQ ⁵⁶	不整円形	鍋底状	外傾		105×88	99×78	26	6	
	褐色土層面にある。中心より西方の部分は13cm程度鍋底状に凹む。覆土は白い粒子の混じった黒色土であった。 東側は緩かに低部に下り10～15cmの礫と拳大の小石2個があった。									
19	18IDP56	楕円形	不整形	外傾	凹凸あり	50×65	45×61	12		
	褐色土層面にあり、黒色土の覆土である。低部の凹凸は、それ程高低はない。									
20	18IIDP ⁵⁵ DQ ⁵⁵	不整楕円形	盆状	外傾	平坦	110×95	105×92	13	13	
	褐色土層面にある。覆土は黒色であり、中心より東側に小穴が集中する。極く浅い土坑。									
21	18IIDQ ⁵⁵ DR ⁵⁵	不整楕円形	不整形	外傾	凹凸あり	97×80	97×93	7	10	
	東側に一部突起状に張り出す。それほど極端ではないが凹凸があり、全体に浅い。覆土は黒色土でピット20に 同じ。									
22	18IIDR55	不整楕円形	皿状	外傾	平坦	85×40		10	2	
	中央より北側に10～15cm位の口径で深さ8cmの小穴がある。10cmの深さをもつ小土坑である。覆土は黒色土。									
24	18IIDE58・59	不整形	鍋底状		凹凸あり	128×44		22.5	5	
	細長い極めて不整形なピットというよりは溝とした方がよいような形状を呈す。底面は凹凸があり、縁から底 までグラグラと下る。覆土は黒色土とその下に褐色土と黒色土の混じった土層が入る。									
25	18IIDE58	長方形?	盆状	?	平坦					完形の甕
	63住の西南の黒色土中に小さな完形の甕が1点発見された。セクションベルト内であり、褐色土層まで掘り込 んでいないため、堅穴の形状、規模は不明。わずかに残されたベルト内において、平行する黒色土落ち込みを確 認したので、方形の堅穴であったことは間違いなく、32号と同規模程度と推測される。土器は横倒れになってい たが、潰れずに原形を保っていた。なおすぐ東に24号小堅穴があるが、これとは関係しないと思われる。									
26	18IIDF59	不整形	不整形		凹凸あり	93×95			1	
	褐色土層面にある南側半分は柱穴状に深く落ち込む。底面はやや凹凸がありグラグラと壁につながる。覆土は 黒色土。									

番号	位置	平面図	断面図	壁	床	口径	底径	深さ	小穴	遺物
27	18II ^{DF57・58} DG57・58	不整形	不整形						10	
	褐色土層面にある。150×70cmのマウンド（褐色土に黒色土がまだらに入る）があり、その周囲と北側に浅い凹みが廻る。北側の不整形な凹み内には、根の張った様な小さな穴がある。									
28	18II ^{DJ58・59} DK58	不整形	不整形			230×245				
	暗褐色土のマウンドの南側を除く三方に黒色土の落ち込みがアメンバー状に広がる。底面は凹凸があり、マウンドの下が最深部となる。									
29	18IIDJ59	楕円形	不整形	外傾	凹凸あり	105×不明	80×不明		8	
	褐色土層に検出された。南側半分は未発掘のため全体は不明。									
30	18IID ^{DG50} DH50	円形	鍋底状	外傾	平坦	14.2×14	10.8×12.5	21		砥石 1 砧石 1
	17住南の褐色土層を掘り込む。覆土は自然埋没と思われる。坑底や壁面はタタキしめられたように堅い。砥石（239）と砧石（258）が底近くから出土。2点とも完形品で、砧石は角柱状で坐りよく、磨かれたように光沢となめらかさを持ち、全体にススけたように黒い。砥石は大きい乳棒状で種状に擦られた面をもつ。なおこの土坑東側に焼土が検出されている。									
31	18IID ^{DD54・55} DE54・55	不整形				360×300		87		
	略楕円形であるが、褐色土層の落ち込みの輪郭は凹凸がひどい。中央に褐色土の低いマウンドが細長く南北方向にあり、それををさんで土坑状の凹みがある。マウンド上には、拳大の礫が散らばる。									
32	18IIB ^{BQ49} BR49	長方形	盆状	外傾	平坦	234×140	214×107	20		磨製石斧1
	覆土は68住とよく似た黒色土であった。壁は斜めで、床はなから平坦で堅い。遺物は覆土中から蛤刃形石斧（完形、167）が出土している。									

第3節 平安時代以降の遺構

今回の調査で検出された平安時代以降の遺構は、住居址9棟、竪穴状遺構2基、土坑1基である。住居址1棟を除き全て第I地区で検出されたものである。住居址の形状・規模等については第8表を参照されたい。

1. 住居址（第8表）

第8表 古代・中世住居址一覧表

住居址	形状	遺構			構				柱穴・ピット	周溝	備考
		規 模	主軸方向	カマド	炉	位置	素材	位置			
		長径×短径m	面積m ² (坪)		位置	素材	位置	素材			
18号	隅丸長方形	3.20×2.80	8.96(2.7坪)	N 81°E	無	(—)	東壁側中央部	地床炉(60×40cm)	無	無	地床炉の焼土下に凹地あり
23号	(—)	(5.95×4.65)	(27.66(8.4))	N 14°W	(—)	(—)	南壁側中央部	焼土(76×65)	(—)	(—)	
25号	(—)	(3.70×3.70)	(13.69(4.1))	N 5°W	南壁	火床・支脚のみ焼土(1.0×0.9m)	(—)	(—)	(—)	(—)	
26号	(—)	(4.95×2.45)	(12.12)(3.7)	N 2°W	北壁	(石組粘土)石が散乱	(—)	(—)	(—)	(—)	灰落し穴(0.7×0.6m)カマド左側
27号	(—)	(2.90×1.50)	(4.35(1.3))	N 63°W	(—)	(—)	東壁側	焼土(90×55)	(—)	(—)	
38号	(—)	(4.10×2.75)	(11.27(3.4))	N 3°W	北壁	(石組)石が散乱	(—)	(—)	北壁側P ₁ ~P ₃	(—)	
45号	(—)	(3.60×2.80)	(10.08(3.1))	N 31°W	北壁	火床焼土(1.0×0.7)	(—)	(—)	(—)	(—)	
52号	(—)	(2.85×1.50)	(4.27(1.3))	N 80°E	(—)	(—)	西壁際	焼土(95×80)	小ピット(-25cm)	(—)	
53号	(—)	(3.30×2.10)	(6.93(2.1))	N 73°W	東壁	石組粘土	(—)	(—)	(—)	(—)	一部未発掘火災

《(—)……は不明、なし。(数字)……現時点での調査結果数値。》

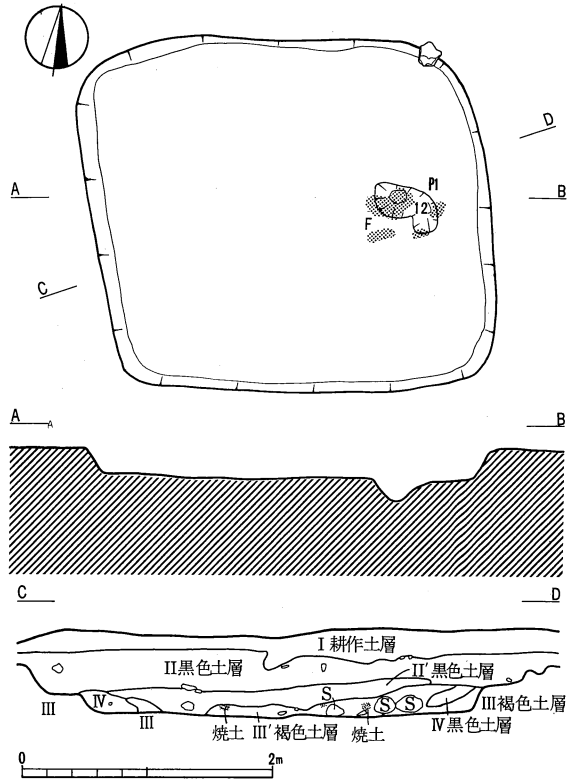
18号住居址 (第76・77図)

調査の経過 本址は多量の荒い小礫混入褐色土層を掘り込み、黑色土層を覆土とする隅丸長方形の住居址である。覆土から床面直上5cmまでに大小の礫が散乱し、住居址廃絶後流入した疑いが濃い。

直接本址に関係する遺物は少なく、土器片・土錘のほか、炭化米が出土している。炭化米は東壁側中央地点の地床炉と想定される焼土中およびその周辺50×30cmの範囲に散在する。また焼土中より灰釉陶器片1点が出土した。

遺構 壁は明確に検出され壁高20cmを計る。壁外および床面はともに軟弱である。柱穴およびそれに準ずるピットも皆無であり、周溝もない。

東壁側のほぼ中央部に60×40cmの範囲で焼土があり、その下から直径40cm、深さ16cmのピットが検出された。わずかではあるが焼土もみられ、地床炉と考えたい。



第76図 18号住居址実測図(1/60)

23号住居址

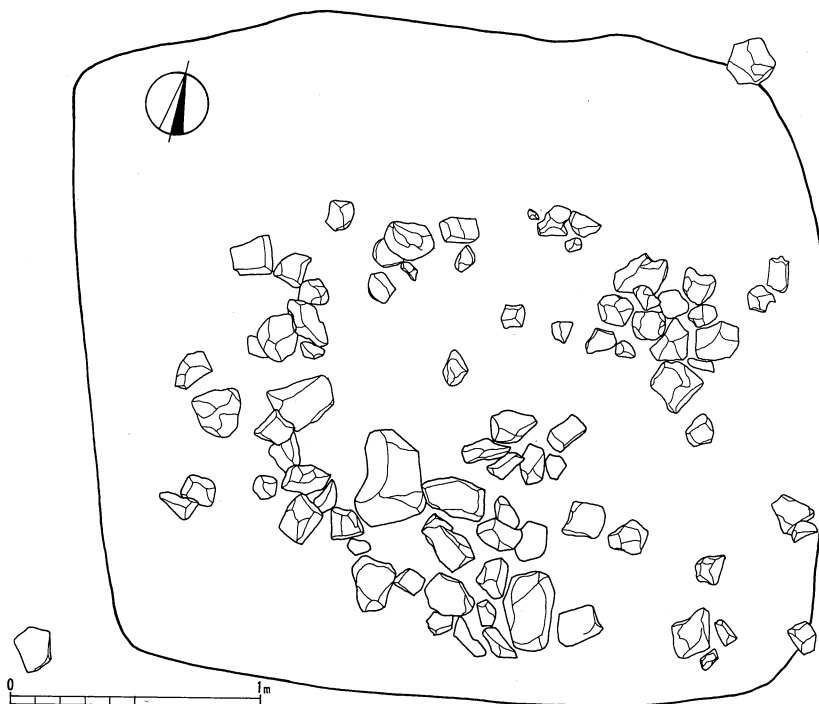
調査の経過 弥生時代の2住周辺拡張の際、BS51グリッドを中心に土師質のカワラケ等が出土し、遺構の存在が期待された。しかし、長芋耕作による攪乱が激しく、住居址の全容を掴むまでに至らなかった。

遺物は北側の楕円形土壇内とその周辺に散乱してみられた。

遺構 壁は確認ができないが、部分的に残存する堅い床面の精査から、遺構は長方形を呈する住居址である。北側に1.05×0.75m、深さ10cmの楕円形状の土壇があり、南側に75×65cmの範囲内で焼土がみられる。焼土は床面上に薄くのり、その周辺の床面は特に堅い。落込みもなく地床炉というより移動式のカマドを想定したい。柱穴・周溝はない。

25号住居址

調査の経過 本址はBX・BY-47・48グリッドの黑色土層中に、焼土及び支脚が検出されたことから、周辺一帯を拡張精査し確認したものである。床面検出レベルが表土下64cmのこともあり、耕作による破壊や家屋建築の際の攪乱等が顕著のため、遺構は一部発見したに過ぎ



第77図 18号住居址覆土中の礫実測図(1/40)

ない。

遺物の出土量は少ないが、支脚周辺より土師器甕形土器破片が出土した。

遺構 住居址の破壊攪乱が激しく壁は不明である。床は黒土をタタキしめた堅い床面が部分的に残存する。柱穴・周溝等はない。

火処は南側にあり、 $1.0 \times 0.9\text{m}$ の範囲で焼土がみられ、その厚さは20cmである。火床中央に支脚石が残るが、破壊されたカマドの石組等はない。主軸は焼土のあり方から $N5^\circ W$ を示す。

26号住居址

調査の経過 本住居址は弥生時代の24住確認中、その覆土中に堅い床面らしきタタキ面と焼土がみられたため、周辺一帯を精査し検出したものである。特にBQ46グリットにおいて、石の散乱と焼土が若干発見されたことから、石組粘土カマドの破壊されたものと断定した。

主要遺物はカマドに近接した残存床面上に、耳皿をはじめとする多量の土師器が一括出土したほか、カマド除去の際に灰釉陶器破片が出土している。

遺構 黒色土中でしかも床面直上まで、耕作による攪乱があり、壁は不明である。床はカマドの近辺と南側に一部検出され、堅いタタキ面を残す。下層の24号住居址との床面格差は南側で34cm、カマド前で24cmである。柱穴・周溝等はないが、カマド西側1mの地点に、直径65cm、深さ13cmの浅い円形土壇がある。土師器及び灰釉陶器破片の若干の出土がみられ、灰落し穴と考えられる。

カマドは北側に位置し、礫の散乱状況から石組粘土カマドが想定される。火床部は焼土の集中範囲から南北 65cm、東西 25cm である。

27号住居址

調査の経過 本址は弥生時代の2住覆土の褐色土層上面にて、焼土と堅い床面が一部発見されたことにより検出した住居址である。表土下の黒色土層中に構築された本址は、耕作による破壊攪乱も加わり、遺構の一部を確認したにすぎない。

遺物の出土状況は、床面及び焼土周辺から、中世陶器片と土師質土器が全体にわたって散布し、内耳土器が2m範囲内に集中して発見された。

遺構 壁は不明である。床面は堅く東西に長く残存する。下層の2号住居址床面との格差は8~10cmである。4本の小ピットが規格性もなく焼土の西側に集中する。

残存床面の東側に隣接して、東西90cm、南北55cm、厚さ10cmの範囲で焼土がみられる。周囲に残石もなく常設カマドとは考えられず、地床炉あるいは移動式のカマドが想定される。

38号住居址

調査の経過 本址は黒色土層中に堅い床と焼土が存在したことから、拡張し検出したものである。耕作による破壊が床面直上あるいは直下までおよび、遺構の全容を知る術はなかった。

出土遺物は少なく、軟弱な床面上に発見された土師質土器のみである。

遺構 壁はない。床面は非常に堅い貼床で部分的に残存する。小ピットが焼土と床面の途切れた北側に2本並列するが、本址に伴うか否か問題である。また焼土の西側に深さ35cmの柱穴がある。

住居址の火処は北側にみられ、焼土が40×25cmの範囲で残る。その周辺にカマドの石組と想定される石が散乱している。

45号住居址

調査の経過 弥生時代の43号住居址確認中、西側上層部分において、堅い床面と焼土を一部検出した。しかし耕作による破壊が床にまで達し、さらには道路敷き箇所もあり全容を掴むまでに至らなかった。

遺物量は極少で、焼土及びその周辺に土師質の土器と弥生時代の土器片が出土し、相当攪乱していることが判明した。

遺構 壁は不明である。床は硬い粒子を含む堅い床面で、部分的に残存する。

火処は残存床面の北側にあり、多量の焼土が1.0×0.7mの範囲でみられた。堆積した焼土と床面に一部配列された石が検出され、石組カマドの残骸と推定される。火床部と石組のあり方から主軸はN 31°Wである。

柱穴・周溝・灰落し穴等は不明である。

52号住居址

調査の経過 本址は黒色土層中にあり、しかも耕作による破壊により、床面と焼土を確認したに過ぎない。

遺物は焼土中より出土した土師質の坏片およびカワラケと須恵質土器片のみである。

遺構 床面は堅くたたきしめられた貼床で、部分的に残存し、その上に焼土及び炭化物がのる。直径15cmのピットが堅い床面の焼土に隣接しており、その深さは25cmを計る。

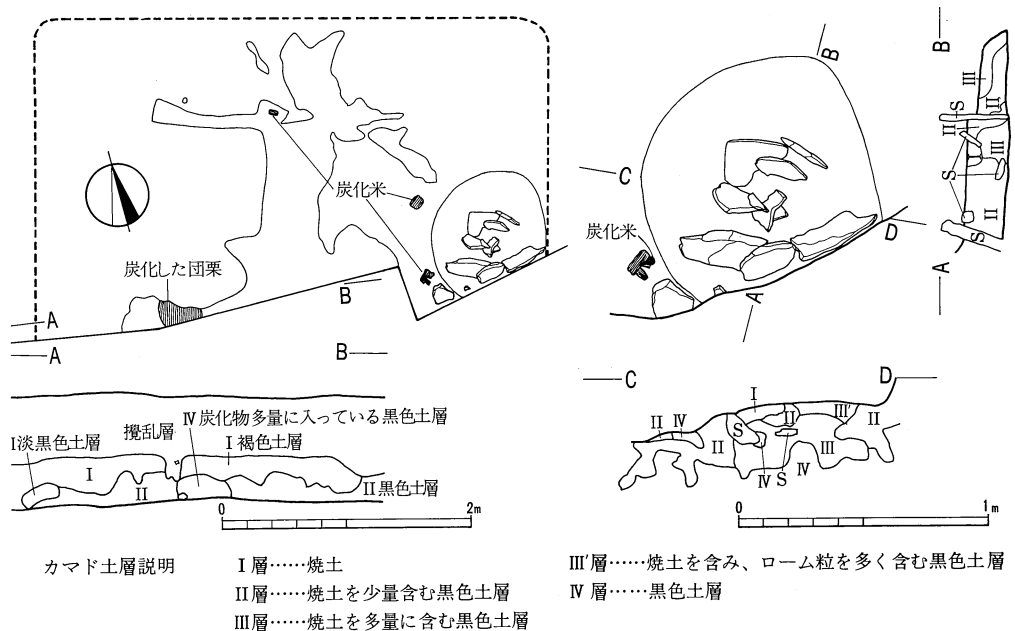
焼土は95×80cmの範囲に円形状を呈して残る。焼土下にピットもなく、カマドを想定させる残石や火床部分のあり方からみて、地床炉あるいは移動式のカマドを想定したい。

53号住居址 (第78図)

調査の経過 本址は弥生時代の54住上層に貼床され、石組カマドを伴う住居址である。南側は道路敷であり、また耕作による破壊も加わり、遺構の一部を検出したにすぎない。

住居址床面までの層序は、耕作土層下に小石粒子を多量に含む褐色土層があり、その下に粒子少量含有の黒色土層が続く。その直下に堅い床面がある。

本住居址は火災にあい土師質土器と共に炭化した自然遺物が出土した。先ずカマド西北方2.5m地点の床面上に、玄米あるいは粳らしき炭化米の塊2ヶが、また、同所西方2m地点の床面にてドングリと粟の混在した炭化物がまとまって出土した。さらにカマド火床部中よりドングリ



第78図 53号住居址実測図(1/60)、カマド実測図(1/30)

りおよび炭化米が団子状にて検出されているほか、住居のはりの一部と想定される炭化材などもカマド付近にみられた。

遺構 壁は不明である。床は硬い小石粒混入の黒色を呈する堅い床面である。柱穴・周溝等はない。

カマドは東側に位置する石組粘土カマドである。両袖ともにハの字状に残存し、鉄平石を使用している。右袖は平石を3個使用し、外側に粘土で補強している。天井部・煙道は耕作により破壊されている。支脚はない。火床部は70×50cmで、焼土の厚さは20cmである。

2. 竪穴状遺構

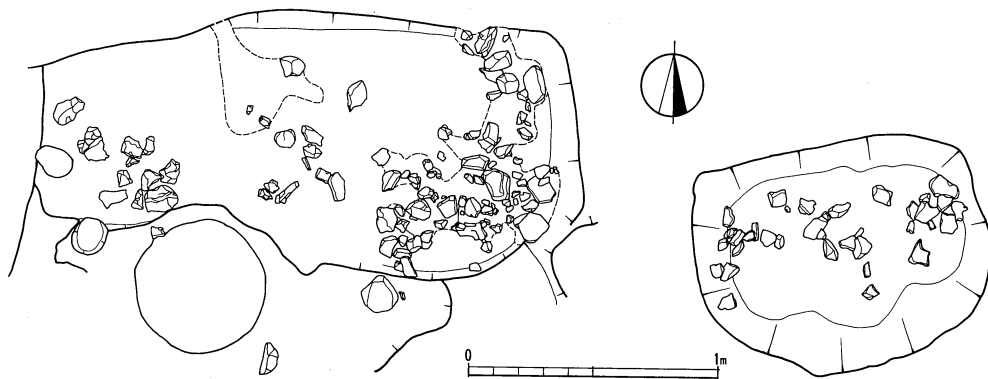
1号竪穴状遺構（第79図左）

本址は第I区内BQ・BR・BS-52 BQ・BR-53グリッドにかけて、黒色土層を掘り込み検出されたものである。

遺構は東西4.30m、南北2m、壁高は東側にて16cm、北側6.5cmを呈し、床面までは鍋底状に緩傾斜をもって達する隅丸長方形の竪穴状遺構である。床面も壁も堅く締り、凹凸はみられない。柱穴・ピットもなく、火処とみられる焼土も検出されていない。

遺構東側の壁寄りおよび中央部より北西の一部に黄色を呈する粘土がある。粘土上には15～40cmの大小の安山岩が45個あり、崩れた様に散在し、粘土中に埋没しているものもみられた。また、西側コーナーと中央部に30～40cm大の石が集石した状態にあり、何か造る目的のためかと推定され、工房址が想定される。

遺物は床面や集石中にみられた内耳土器片や瀬戸系陶器のほかに、中央床面上および粘土上より3点の砥石が発見されている。



第79図 1号(左)、2号(右)竪穴状遺構実測図(1/40)

2号竪穴状遺構（第79図右）

本遺跡は1号竪穴状遺構の東側13mのBL-57・58グリット内の黒色土層を掘り込み、暗褐色土を覆土として検出されたものである。

規模は東西径2.35m、南北径1.80m、壁高18cmを測る、隅丸長方形の竪穴である。壁はやや堅く、床面上まで緩傾斜でなだらかに続く。床面は鍋底状で堅いがピット等はない。

床面には34個の拳大から人頭大の石が散乱し意識的な配列はないものの、東西壁に集中する。遺物は床面上の石の間に、内耳土器片や土師質の坏破片がみられた。

33号土壇

本土壇は第I区内BI・BJ-59、BI60グリット内に位置し、黒色土層を掘り込み、覆土中に集石がみられたのを検出したものである。

土壇は東西径1.10m、南北径1.08m、深さ11.5cmを測るタライ状の浅い円形土壇である。壁は一部が堅く、軟弱な部分もみられ、北西部の壁のない箇所は緩傾斜のまま底に至り、その周辺部は堅い。

土壇内には集石がみられ、その検出状況から乱雑に投石したものではなく、意図的に配石したことが知られる。すなわち、土壇に薄く覆土し、頭大の石を中心部よりやや南側に置き、その両側にやや小さ目の石5個を並べ壁のない側に拳大の石3個を置く。さらに、その間に小石を立てた状態に詰め、土を覆い、中心部に15cm大の平石を目印として配している。

遺物は集石の下部より出土した仏具の供献用陶器片と茶碗の破片のみである。ちなみに遺構に接した隣接グリットからは寛永通宝9枚が出土しており、本址と関係する遺物と推定される。

第4節 第Ⅲ区低地の調査（第80図）

調査の経過 遺跡の西端にあたり、住居址群の最も西に発見された57住から西へ160m以西の位置である。ここは諏訪湖から西方に向かって流れ出る天竜川が、やや南方に流れを変えはじめる辺りで、崖錘地形の西縁部が入江状に山側に100mほど入り込み、Ⅲ区の大部分は近年まで低湿地であったところである。現在は、埋め立てにより崖錘地との比高差はわずかに残る程度であるが、この低地と崖錘地との境には古い道筋が当時の地形の名残りをとどめている。この道筋を山裾にたどると旧線路に分断されているが、由緒深い洩矢神社があり、天竜川を隔てて対岸の藤島神社とともに建御名方命の入諏伝説の地でもある。また近世になって土砂の押し出しがあり、相当数の家屋が流出したことが言い伝えられている。

第I次調査では、高地には弥生期集落の西端が、低地には水田址が発見されることを期待したのであるが、高地ではⅢCJトレンチにおいて石庖丁を1点発見したにとどまった。低地では2mにおよぶ黒色土層の堆積と、その下には累々たる天竜川の河床礫が発掘されたにすぎなかった。ただし、崖錘地から河床にいたるⅢCP～CV62トレンチでは、黒色土層下の漆黒色土層に

弥生土器片を検出し、その下に植物体を多量に含む砂層があり、縄文時代のチャート製の石匙と打製石斧を発見することができた。また、Ⅲ CT 48・49トレンチでは地表下2mの漆黒色土の上面から江戸時代初期の施釉陶器が出土し、言い伝えとして残る土砂の押し出しを立証することができた。

これらの調査結果から、Ⅲ区の低地については、(1)、厚い黒色土層は背後の山から押し出された土砂であり、その下の漆黒色土層以下に水田址の埋没している可能性が強いこと。(2)、天竜川河床の砂層上、および砂層中に見られる植物体は弥生時代以前の流木(天竜川の流れに運ばれて漂着した)であると思われ、植物の種類を同定することによって当時の自然環境が復原できることの2点が注意されたのである。

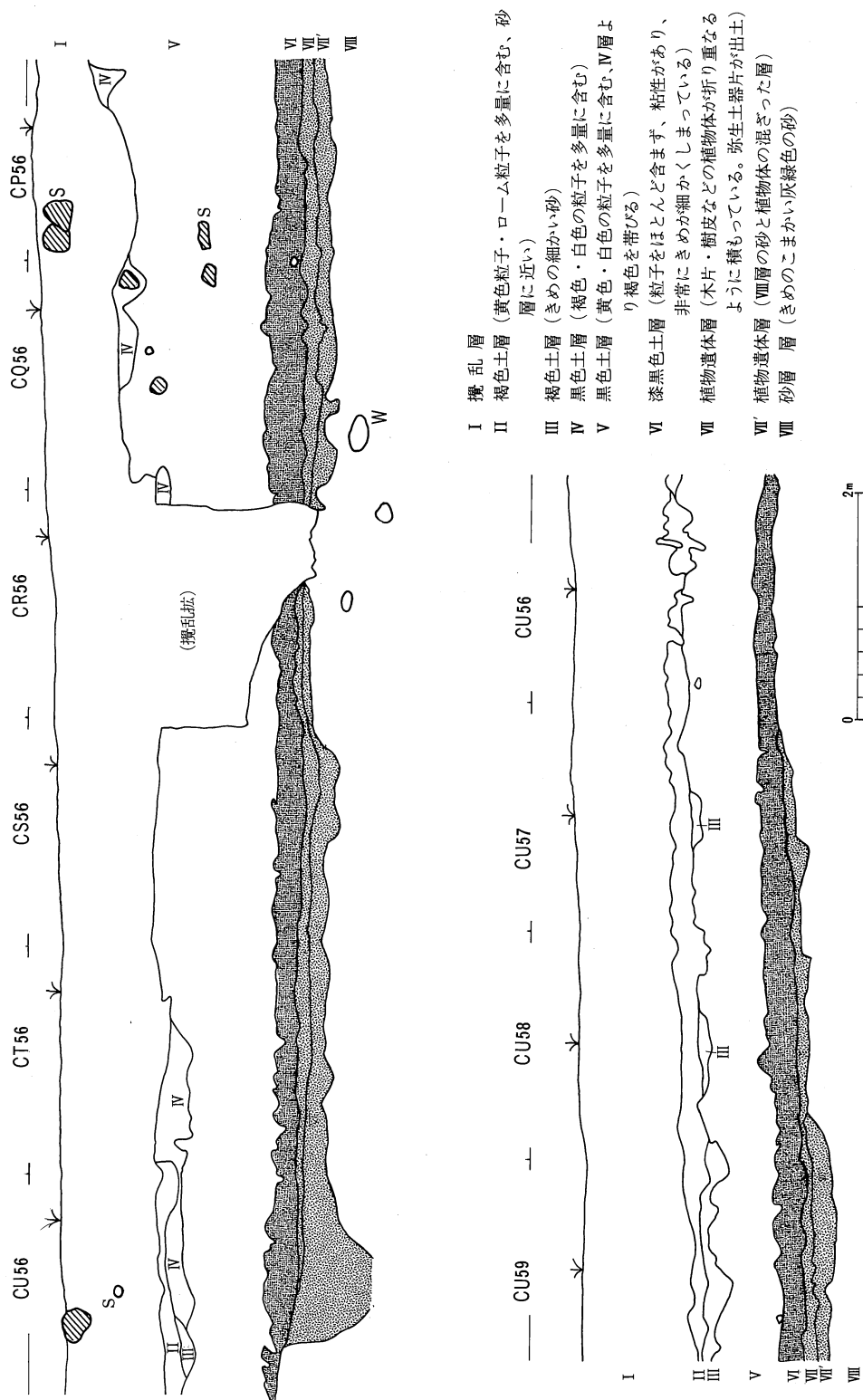
第Ⅱ次調査では上記の2点について、再度調査するために、最も山裾に近いⅢ CP～CU・56～59の24グリットを全面にわたって掘り下げた。その結果、良好な植物遺体層が存在し、多量の植物体をサンプリングできたが、砂層上面に弥生中期の壺口縁部が一括つぶれた状態で出土し、この低地が弥生期にはまだ、天竜川の河床であった可能性が強く、水田址の発見は果たせなかった。

第Ⅱ次調査地点の土層と遺物 6×4グリット、南北8m、東西12mの範囲を発掘した。南壁下は地表下2.2mで植物遺体層に、西壁下は2.1mで砂層に、北壁下は3.0mで植物遺体層にそれぞれ達している。層序は第80図のとおりである。Ⅲ区全体は第Ⅴ層黒色土層が第Ⅵ層漆黒色土層の上に厚く堆積している。ほとんど遺物を含まないが中間の層位で踏石状に列石が発見されている。CQ 56～59にわたり平石6個が検出された。人為的なものと思われるが、弥生期以降のものであるので、ここでは省略する。また須恵器、土師器のほかに磨滅した縄文土器片が出土したがどれも流れ込んだ土砂に含まれてきたものであろう。

黒色土層の下には第Ⅴ層漆黒色土層が20～30cmの厚みで、ほぼ平坦に堆積する。下部から植物遺体層にいたる部分にはまこも・よし等の繁茂した痕跡が一様に認められた。

CV 56・57グリットは植物遺体層がなく、漆黒色土層下はすぐに砂層に変わる。CV 57グリットの北隅からは、この砂層の上面に、弥生中期土器の口縁部が出土した(第116図442、写真74)。砂層面は平坦ではなく、土器の出土した位置は最も高所にあたる。これより東の方に植物体が厚く広がり、CS・CRのグリット列は厚さを増す。特に南側の発掘区壁に沿ってCR 59・CS 59・CT 59グリットは植物体が厚く層をなし、砂層まで掘り切ることができなかったほどである。これからすると、砂層面にはかなりの凹凸があり、凹部に植物が厚くたまっているということであろう。

植物体は樹木が倒れ重なり合った木質部と思われるものが多く、また樹皮部の部分が平に押しつぶされたような状態にあった(写真73)。この植物体層上部には桃の実が多く見られ、中層以下には胡桃、栃の実、ハシバミ、ドングリ、トウヒの実の核等が見られた。栗の倒木が多かったにもかかわらず、栗の実は1点出土しただけである。栃の実は実の皮部が多かったが、あるいは食用に利用されたあとの皮であったのだろうか。その他種子類もかなり採集できたが、



第80図 第III区低地発掘グリッド土層断面図(1/60)

それらについては同定を依頼しているのでここでは詳しくふれないでおく。

倒木と思われる木の巨根が砂層深く埋まり、中空状態になっていたものがあったが、この狭い範囲に実に6本の巨木を発掘できた。全体を出すことはできなかったし、また根から幹、梢まですべて残っているものもなく、あるいは幹でなく枝部分であるかもしれなかったが、これらはなから一定の方向を示していた。N40°Wが4本、N45°Wが1本で、N75°Wが1本あるのみであった。

樹種は広葉樹が大部分であり、1本だけ針葉樹と思われるものがあった。これは割り材のようにも見えたが、それほど生々しい遺存状況になく、断定はできない。また、これらに混ざって木製品あるいは加工痕ある樹木、さらに丸木舟の発見を期待して発掘したが、木器らしきもの数点を検出しただけであった。なお全体に炭化物（炭）が非常に多く見られたが、焚火の跡などはなく、どういう性質の炭か疑問が残った。

植物体の年代測定 砂層中の在り方からみて、天竜川の流れによって運ばれ漂着した流木やゴミであることに異論はあるまい。また川辺に茂った広葉樹類の風倒木であることも考えられる。弥生土器の出土状況からみて、縄文時代末に、かなり天竜川の氾濫が大規模にあり、砂と流木を入江状の河畔においていったことが想像される。弥生時代中期にはまだ砂層凹地に流木がたまったまま氾濫原であったと思われる。弥生時代後期以降、自然堤防が形成され、湿沼地化し、腐食土が堆積しはじめたのであろう。

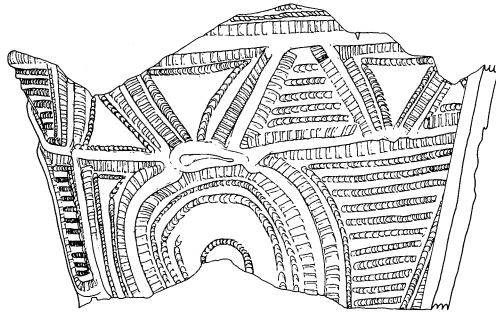
砂層から出土した植物の14C年代測定は2660年±100（710B.C.）である。このまま当てはめると縄文時代末に相当する。

第IV章 遺物

第1節 縄文土器

縄文土器の破片は散発的に検出されているが土器全体を窺い知れるものではなく、42住の埋葬炉の土器と、32住東に出土した晩期最終末の土器がややまとまっている程度である。この他に8住南に押型文土器や中期初頭土器が数点、7号集石址近辺に前期末（諸磯C式）土器が数点、22住から18住にわたる礫層上に縄文後期、晩期土器が若干出土している。量的に少ない上に、細片である為、詳しい説明は省略する。

42住埋葬炉の土器（第81図）は胴部のみ残存しており、バケツ様に立ち上る円筒形の深鉢形土器と推測される。口頸部には押引文を付けた巾広なキャタピラ文で縁どりをした隆帯によって、三角形の区画文様をめぐらせてある。そのキャタピラ文の縁を三角押引文が併走している。三角形の区画文は横位文様体で14に割りつけられており、素地が空白の区画文と横方向の三角押引文が5～6条施されている区画文とが不規則に並列されている。胴下部は、わらび手状の隆帯文が三分割する位置に配され、その縁に連続キャタピラ文と、三角押引文が2～3条併走している。隆帯文の間は横方向の三角押引文が下方まで施されている。隆帯区画文には要所にタコの吸盤風装飾が施されている。胎土は砂粒を少し含み、焼成は良好である。以上、文様モチーフから見て、新道式に相当する中期初頭土器であり、湖北地区では後田原式に比定される。



第81図 42号住居址埋葬炉の土器

第2節 弥生土器

器種

器種は、壺・甕・台付甕・鉢・甑・坏・高坏・器台があり、甕が最も多い。

壺は大型壺と小型壺に分けられ最大のものは、59住の大型壺（312）で、口径 19.9cm、体径 38.2cm、底径 13.8cm、器高 54.2cm である。口縁部に折立する段部を持つものと、持たないものがあるが、特に時間差は見られず、大型壺・小型壺ともに見られる。大型壺の胎土は砂粒および 2～5mm の小石を多く含み、比較的きめが荒い。また内面は剥落して原形をとどめていないのに対して、小型壺の胎土は、小石が少なく、比較的きめが細かく、焼成もしっかりしていて、内面の剥落もあまり見られない。

大型壺の出土状態は、住居址内に広く散布し、壁際にその中心となる主体部分が見られる。これは、桁に吊されてあるいは棚におかれて保存されていたものが、罹災時（火災）に落下して散在したものと思われ、大型壺による保存方法の一端を示すものと思われる。

甕は、当遺跡でセット関係をとらえることのできる最も良好な59住によって、口径 24cm 以上のものを超大型甕、18cm～24cm 未満のものを大型甕、11cm～18cm 未満のものを中型甕、11cm 未満のものを小型甕の4種類に分けることができる。口縁の外反に比して、体部の張り出しが強く、また体径に比して、器高が短く、どちらかといえば、ずんぐりとした器形である。これは、当遺跡と同時期に比定される伊那谷の座光寺原・中島期および北信の箱清水期のものとも異なり当地方独特のものと言える。

台付甕は5点が出土しているが、器形を復元できるのは、わずかに3点のみである。このうち223・239は胎土も精選され焼成も良好で、口縁が急激に外反し、体部が張るため肩の張った器形となり、体部下半は、直線的に底部へ向う。これは伊那谷の中島期と共通するものである。405の胎土は砂粒を含み、焼成もあまりよくなく、口縁は大きく外反し、体部の張りは比較的ゆるやかで、全体に円味を持つ、当地方の器形である。台部と体部下半には、煤の付着や火を受けた痕跡はほとんど見られず、煮沸具として使用されたものなのか疑問である。

鉢は合計16点出土し、最大は64住の378で口径 20.4cm、器高 14cm を計測し、最小は19住の117で口径 11.2cm、器高 7.7cm を計測する。内外面ともヘラミガキされ、胎土もある程度精選され、焼成も良好である。46住の255は片口となっており、内外面とも朱が塗彩されて、特異なものである。

甑は合計6点出土し、完形品は、わずかに1点と少ない。大型と小型に分類され、小型は完形品の183のみであり、口径 10.0cm、器高 5.6cm を計測する。これは実用品としては、あまりにも小さく非実用品とも考えられる。孔はすべて円孔で、焼成前の穿孔であり234を除いて、単孔である。234は2孔を穿つ。

高坏は、I～IV期全般にわたって見られ、古い時期よりも新しい時期に多い。古い時期のも

第9表 弥生時代住居址出土の形態別土器個数 (1/3個体以上)

住居址号	壺		甗	小型甗	台付甗	鉢	甑	高坏	器台	坏	住居址号	壺		甗	小型甗	台付甗	鉢	甑	高坏	器台	坏	
	大型	小型										大型	小型									
3		2	2								35			1								(朱) 1
4			2				1				37			2								
5			2								39			1								
6		1	5								41				1							
7			3								43			2								(朱) 1
8			1			1					44			1	1							
9			1								46		1	3		(片口朱) 1						
10			2					(朱) 3			49			2								
11		1	6								51			4	1							
14			2								55		1	6			1					
15			1								57			1	1					1		
16			1								58			4								
17			4			(朱) 1					59	3	1	9	4		2					
19			6			1		(朱) 1			60			2								
20			1								61		1	2	1							
21		1	1								62		1	2						1		1
22			3								63			1	1		1			(朱) 2		
24			3			1					64			2			1					
28			1					(朱) 1			65			2								
29			1								66			5	1		1					
31			2								67			3	1					1		
32		(朱) 1					1				68			4		1						
33			3	1							69			2								
34			2		1						70	1	2	9								

のは、坏部が直線的に広がり、新しい時期のものは、坏部がくの字状に屈曲し、口縁が外反するか、または椀状に丸くなる傾向にある。Ⅳ期には、椀状に丸くなるものが圧倒的に多くなる。脚部には、円・三角形の窓を3～4個持つものが見られる。朱の塗彩は14例あり、くの字状に屈曲するものに多く用いられている。くの字状に屈曲し、口縁部が大きく外反する高坏は、朱の塗彩を多用する箱清水期に近いものである。椀状に円味を帯び朱を用いない高坏は伊那谷の中島期に近いものであり、双方の影響を受けているものと思われる。

器台は、わずかに3点あるのみである。このうちⅡ期に属する2点(184・213)は、大型の高坏の脚部を再使用したものである。孔は2次的に穿たれたものであり、外面には朱の塗彩が見られる。Ⅳ期に属する363は、前者に比してやや小型で孔は焼成前のものであり、朱の塗彩は見られない。

文 様

文様の種類は波状文・簾状文・斜走短線文・円弧文・T字文・刻目文・横走文・縦走文がある。最も多用される文様は波状文であり、続いて簾状文・斜走短線文である。この3種が施文の主体となっている。T字文・横走文・縦走文は壺のみに見られ、刻目文は甕にのみ見られる文様である。円弧文は壺に多く用いられる。波状文と簾状文の組み合わせは23例、波状文と斜走短線文の組み合わせは15例、波状文・簾状文・斜走短線文の組み合わせは4例ある。文様の組み合わせは、古い時期ほど密に見られる。

波状文はⅠ～Ⅲ期を通じて全般に見られるが、斜走短線文はⅠ期のみみにみられる。簾状文はⅠ期を主体とし、Ⅱ期では半数程度と激減し、Ⅲ期になると消滅する。変わって、簾状文を省略化したと思われる横走文が用いられるようになる。無文土器は全期を通じて見られるが、Ⅰ期ではその割合は少なく、Ⅱ・Ⅲ期と除々に多くなり、Ⅳ期になると施文は行われず、すべてが無文となる。

これらのことは、波状文・簾状文・斜走短線文を多用するⅠ期から、すべてが無文化するⅣ期への過渡期に当るⅡ・Ⅲ期において、まず、斜走短線文が消滅し、次いで簾状文が消滅し、波状文が残存し、やがて無文化するⅣ期へ移行していく時間的過程を示しているものと思われる。

波状文は、すべてが右回りに施され、断絶が1回のみの畿内型と、途中何回もの断絶を持つ中部高地型とが見られる。この二つの技法は、Ⅰ期にはほぼ同率で用いられるが、Ⅱ期になると畿内型は半数以下と激減する。Ⅲ期になるとさらに減少し、主体は中部高地型となる。この畿内型の減少は簾状文の消滅とほぼ一致している。Ⅰ期から引き続き用いられた畿内型がⅢ期においてほとんど用いられなくなり、中部高地型が主体となっていく時間的過程を示すものであろう。畿内型は伊那谷の座光寺原・中島期に多く用いられ、北信の箱清水期には中部高地型が主として見られるものであり、橋原遺跡の弥生土器が両文化の影響を受けて成立したことを物語っていると思われる。

制作方法

土器の破損状態を見ると、2～3.5cmの帯状に破損しているものが見られ、輪積みによって、製作されたことを知ることができる。前述のように波状文の断続状態は何回かの断絶を持つ中部高地型と、1回の断絶を持つ畿内型が見られる。畿内型は明らかに回転台を使用したものであり、土器製作においても回転台が用いられたことは明らかである。

施文は、ハケ整形後に行われ、口縁から体部上半に施される。ヘラミガキは施文後、体部中・下半に行われ、文様を切っている例が多く見られ、ハケ整形→施文→ヘラミガキの順となる。この順序のはっきりわかるものについては、表中に記した。

[土器観察表]

1. 最初の覧の上段は、実測図、写真番号と共通する番号であり、これは住居址順に通し番号とした。中段の〔 〕内は実測図の所載図版番号を示す。下段は土器台帳の遺物番号を示す。
2. 法量覧は、第1段が口径、第2段が器高、第3段が体径、第4段が底径を示し、破片のため計測できないものは—で示した。高坏の体径は脚部と坏部の接点であるくびれ部の最小値を計測した。
3. 土器図の縮尺は、おおむね1/12とし、大型のものは1/16としたが、必ずしも一定しない。
4. 文様覧は、櫛状工具による文様は単に「波状文」「簾状文」と記した。2種類以上の文様がある場合は、上部から下部の順に列記した。
5. 技法覧は、「横方向のヘラミガキ」等は単に「横ヘラミガキ」と記した。

記入例


19号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
通し番号	← 107	18.1	→ 口径			
所載図版番号	← []	26.9	→ 器高			
遺跡番号と 発掘地区	←18II	17.6	→ 体径			
台帳番号 (グリッド・ 遺物番号)	←AT44 104	7.0	→ 底径			

弥生土器観察表






第10表 弥生土器観察表

1号住居址



	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
1 [82] 18 I BL64 2外	甕	— — — 7.0		不明	体部、縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。







3号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
2 [82] 18 I CA47 8外	壺	14.3 — — —		頸部、5条の波状文2帯以上。 右回り断絶1回、回転台使用。	口縁、横ナデ、横ハケ整形、雑な横ヘラミガキ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、横・斜めハケ整形。 縦ヘラミガキ、波状文を切る。 内面、口縁、横ハケ整形、横ヘラミガキ。頸部、横ヘラミガキ。 体部、横ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒、白色粒子を含む。 焼成良好。 P ₅ 内。
3 [82] 18 I BY46 75	壺	14.8 — — —		頸部、波状文。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、斜め・縦ハケ整形。 内面、横・斜めハケ整形。 ハケ目、きれいに残す。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
4 [82] 18 I BW47 16	壺	20.5 — — —		口縁、波状文。1帯。頸部、8条の大きな波状文1帯。9条の波状文2帯。10条の簾状文2帯以上。 内面、文様が見られるが、剥落のため不明。	口縁、横ハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 内面は剥落。
5 [82] 18 I BW47 15	壺	— — — 13.8		頸部、8条の横線文2帯。 体部、8条のJ字状文1帯。	口縁、横ハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 体部上半、斜めハケ整形。 体部下半、縦ヘラミガキ。 内面、口縁、頸部、斜めヘラミガキ。体部、横ハケ整形。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒・白い粒子を含む。 焼成良好。体部に煤付着。 外、内面は剥落。 P ₄ 内。
6 [82] 18 I BY46 37	甕	13.4 — — — 11.9		頸部から体部上半に5条の波状文2帯。右回り。断絶2回以上、中部高地型。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、横ハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、横・斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 体部に煤付着。
7 [82] 18 I BY46 117	甕	— — — — 17.0		頸部から体部に6条の波状文2帯以上。	頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 頸部、体部に煤付着。 埋甕炉F ₂ 。



8 [82] 18 I BW 47 4	甗	— — 22.6 —		頸部から体部に 8条の波状文3 帯以上。	頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦ヘラミ ガキ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。
9 [82] 18 I BW 47 16	甗	— — 20.8 —		頸部から体部上 半に5条の波状 文3帯以上。	頸部、縦ハケ整形。 体部、縦・斜めハケ整形。 縦ヘラミガキ、波状文を切 る。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガ キ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。 ハケ目をきれいに残す。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。 体部下 半に煤付着。 埋甗炉F ₁ 。
10 [82] 18 I BY 47 86	甗	— — — 3.4		不明	外面、指オサエ、ナデ。縦ヘラ ミガキ。 底部、ヘラミガキ。 内面、ナデ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。
11 [82] 18 I CA 49 9	甗	— — — 3.6		不明	外面、縦ハケ整形、縦ヘラミガ キ。 内面、ナデ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。 P ₅ 内。
12 [82] 18 I BX 47 61	高坏	— — 4.8 —		不明 脚の内面を除き 朱の塗彩。	坏部、内面、横・斜めヘラミガ キ、外面、縦ヘラミガキ。 脚部、内面、横ハケ整形。 外面、縦ヘラミガキ。	赤色。砂 粒を若干 含む。焼 成良好。

4号住居址

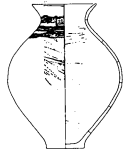

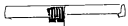

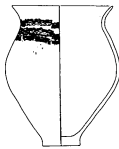
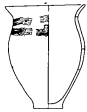


	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
13 [82] 18 I BY 55 13	甗	23.5 — 21.5 —		頸部から体部上 半に5条の波状 文4帯。右回り 断絶4回以上。 中部高地型。	口縁、横ナデ、斜めハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦ヘラミ ガキ、波状文を切る。 内面、横・斜めハケ整形、雑な 横ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。 体部下 半に煤付着。 埋甗炉F ₁ 。
14 [82] 18 I BV 57 8	甗	— — 20.9 —		頸部から体部上 半に8条の波状 文4帯以上。右 回り。断絶2回 以上。	頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦・斜め ヘラミガキ、波状文を切る。 内面、横ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。 埋甗炉F ₃ 。

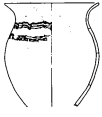



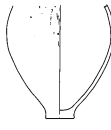




15 [82] 18 I BY55 12外	甕	17.0 — — —		頸部から体部上半に6条の波状文1帯。8条簾状文1帯。6条の波状文2帯。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、斜めヘラミガキ。 内面、横・斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤附着。
16 [82] 18 I BX54 6外	甕	— — 17.0 —		頸部から体部上半に9条の波状文3帯以上。	頸部、横ハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。頸部から体部に煤附着。
17 [82] 18 I CA55 7外	甕	— — — —		不明	体部下半、縦ヘラミガキ。 内面、縦・斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤附着。
18 [82] 18 I BX55 5	甕	— — — 1.6		不明	外面、縦ヘラミガキ。 底部、ヘラミガキ。 内面、ナデ、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
19 [82] 18 I BW56 4	甕	— — — 5.4		不明	体部下半、縦・斜めハケ整形。 内面、ナデ。	褐色。砂粒、白色粒子を含む。焼成良好。
20 [82] 18 I BY54 6	甗	— — — 5.8		不明	体部下半、縦ヘラミガキ。 内面、横・斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。底部中央に大きい円孔を1個穿つ。

5号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
21 [83] 18 I BU50 38	甕	— — 21.8 —		不明	体部、縦・斜めヘラミガキ。 内面、横・斜めヘラミガキ。	赤褐色。砂粒、白色粒子を含む。焼成良好。埋甕炉F ₁ 。
22 [83] 18 I BU50 38外	甕	— — 20.7 —		不明	体部、縦・斜めヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。埋甕炉F ₂ 。

6号住居址



	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
23 [83] 18 I CF64 17外	壺	13.8 30.8 24.4 8.2		頸部に7条の波状文3帯、右回り、断絶1回、回転台使用。	頸部、横ハケ整形。 体部、斜め・横ハケ整形。 体部下半、縦ヘラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 外面一部に煤付着。
24 [83] 18 I CE65 5	壺	18.4 — — —		不明	段部、横ハケ整形。 段部下、斜めハケ整形。 内面、斜めハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
25 [83] 18 I CD63 1	壺	25.1 — — —		段部にハケの押圧による縦の沈線文。	外面、横ハケ整形。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
26 [83] 18 I CG64 7外	壺	— — — —		頸部に8条の波状文3帯。右回り。	頸部、斜めハケ整形。 体部、雑な斜めヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
27 [83] 18 I CG65 13	甗	21.6 29.9 24.5 8.1		頸部から体部上半に10条の波状文3帯。右回り、断絶2回。	口縁、横ハケ整形、横ヘラミガキ。 体部、縦・斜めヘラミガキ、波状文を切る。 内面、横ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 内、外面体部に煤付着。 埋瘻炉F1。
28 [83] 18 I CF66 7	甗	17.2 21.9 16.4 6.4		頸部に6条の波状文3帯、右回り、断絶1回。回転台使用。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、縦ハケ整形。 内面、横・縦・斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 外面全体に煤付着。
29 [83] 18 I CF65 18外	甗	15.4 13.5 13.3 6.4		頸部に11条の波状文1帯。右回り、断絶1回。回転台使用。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦ヘラミガキ。 底部、横ハケ整形。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 外面全体に煤付着。
30 [84] 18 I CG65 12外	甗	16.2 16.0		頸部に10条の波状文4帯。 口唇部に刻み目文。	口縁から頸部、横・斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦ヘラミガキ、波状文を切る。 内面、横ハケ整形、横・斜めヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ	茶褐色。 砂粒を含む。 焼成良好。 外面に煤付着。

31 [84] 18 I CE65 8外	甕	20.1 — 20.0 —		頸部に5条の波状文2帯、右回り。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、縦・斜めへらミガキ。波状文を切る。 内面、横へらミガキ。 ハケ整形→施文→へらミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面に煤付着。
32 [83] 18 I 18 I CG65 13	甕	17.4 — — —		頸部に7条の波状文4帯以上、右回り。	口縁、横ナデ。 頸部、斜め・横ハケ整形。 内面、横・斜めハケ整形、雑な横・斜めへらミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面に煤付着。
33 [83] 18 I CD62 2	甕	19.6 — — —		口縁から頸部に8条の斜走短線文2帯。簾状文1帯。右回り。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 内面、横へらミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
34 [83] 18 I CE64 7	甕	14.2 — — —		頸部に8条の波状文1帯以上。右回り。	口縁、横ナデ。 頸部、縦・斜めハケ整形。 内面、横・斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
35 [84] 18 I CE62 9	甕	— — 22.9 6.1		不明	体部、斜めハケ整形、縦へらミガキ。 内面、横・斜めハケ整形、縦へらミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内外面体部下半に煤付着。埋甕炉F ₂ 。
36 [83] 18 I CE63 9外	甕	— — — 7.1		不明	体部、縦へらミガキ。 底部、へらケズリ。 内面、雑な斜めへらミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
37 [83] 18 I CE63 11	甕	— — — 8.6		不明	体部、縦へらミガキ。 内面、横・斜めへらミガキ。	褐色。砂粒・雲母を含む。焼成良好。
38 [84] 18 I CG65	台付甕	— — 3.8 7.9		不明	体部、丁寧な縦へらミガキ。 内面、横ハケ整形。	茶褐色。砂粒・雲母を含む。焼成良好。
39 [84] 18 I CG65 10	鉢	16.9 — — —		無文	口縁、横ナデ。 体部、縦・斜めハケ整形、雑な縦へらミガキ。 内面、横・斜めハケ整形、雑な横へらミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。

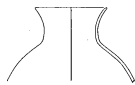


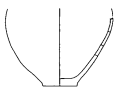


40 [84] 18 I CF64 17外	高坏	— — — 9.2		不明	体部、雑な縦へラミガキ。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
41 [84] 18 I CG64 2外	高坏	— — — 8.2		不明	体部、縦へラミガキ。 内面、縦・横・斜めハケ整形、 雑な斜めへラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
42 [84] 18 I CE62 7	坏	9.1 — — —		無文	体部上半、横へラミガキ。 体部下半、横へラケズリ、斜め へラミガキ。 内面、横へラケズリ。	茶褐色。 砂粒を含む。 焼成良好。


7号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
43 [85] 18 II AW53 1	壺	13.3 — 15.75 —		頸部から体部上半に8条の波状文1帯。6条の円弧文2帯。	口縁、横ハケ整形。 頸部、縦・斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦へラミガキ。 内面、横へラミガキ。	褐色。砂粒、2～3mmの小石を含む。 焼成良好。 外面は剥落。
44 [85] 18 II AU54 13外	壺	— — 21.3 —		不明	頸部、縦へラミガキ。 体部、縦へラミガキ。 内面、斜めハケ整形、横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
45 [85] 18 II AV54 20	壺	— — — —		不明	体部、斜めへラミガキ。	赤褐色。 砂粒、3～4mmの白色の小石を含む。 焼成良好。 内面は剥落。
46 [85] 18 II AU54 2外	甕	11.0 — 11.0 —		口縁から体部上半に10条の波状文1帯。10条の簾状文1帯。10条の波状文1帯。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、横ハケ整形。 体部、横へラミガキ。 内面、横へラミガキ。	茶褐色。 砂粒を含む。 焼成良好。
47 [84] 18 II AU54 12	甕	24.0 — 25.3 —		頸部から体部上半に7条の波状文3帯。9条の簾状文1帯。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、斜めへラミガキ、波状文を切る。 内面、横・斜めへラミガキ。 ハケ整形→施文→へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。

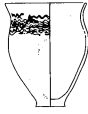
48 [84] 18Ⅱ AV54 19	甗	24.5 — 28.1 —		頸部から体部上半に6条の波状文4帯。	口縁、横ナデ、横ハケ整形、横ヘラミガキ。 頸部、横ハケ整形。 体部、横・斜めヘラミガキ。 内面、横・斜めヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
49 [84] 18Ⅱ AU53 3外	甗	— — 21.8 —		頸部に間隔の狭い6条の簾状文1帯以上。4条の波状文1帯以上。	頸部、縦ハケ整形。 体部、縦ハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、斜めハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 体部に煤付着。 埋甗炉F1。

8号住居址






	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
50 [85] 18Ⅱ BM57 116外	壺	15.3 — — —		無文	口縁、横ナデ、雑な横ヘラミガキ。 頸部、縦ハケ整形、雑な横ヘラミガキ。 体部、斜めハケ整形、雑な斜めヘラミガキ。 内面、斜めハケ整形。横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
51 [85] 18Ⅱ BM57 128	甗	20.8 — — —		無文	口縁、横ナデ。 頸部から体部、雑なヘラミガキ。 内面、雑な横・斜めヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
52 [85] 18Ⅱ BM57 5	甗	16.1 — — —		無文	口縁、横ヘラミガキ。 頸部から体部、雑な斜めヘラミガキ。 内面、口縁、横ナデ。 頸部から体部、雑な斜めヘラミガキ。	黒褐色。砂粒を含む。 焼成良好。外面に煤付着。
53 [85] 18Ⅱ BK57 63	甗	— — 23.0 7.3		不明	底部立ち上り部、横ハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。 底部、ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 埋甗炉。
54 [85] 18Ⅱ BK58 68	鉢	— — — 4.3		無文	口縁、横ヘラミガキ。 体部、縦ヘラミガキ。 底部立ち上り部、ハケの押圧痕。	赤褐色。砂粒を含む。 焼成良好。焼成むらあり。
55 [85] 18Ⅱ BM57 3	高坏	26.5 — 21.4 —		無文。 内、外面とも朱の塗彩。	内、外面とも口縁から段部に丁寧な横ヘラミガキ。 段部下方、縦ヘラミガキ。	赤色。砂粒を含む。 焼成良好。 外面に煤付着。




56 [85] 18 II BM57 138	高坏	— — — —		不明	外面、縦ヘラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形。	漆褐色。 砂粒を含む。焼成 良好。脚 部に円孔 を3方に 穿つ。
---------------------------------	----	------------------	---	----	----------------------------	---

9号住居址

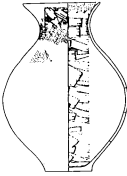

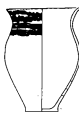

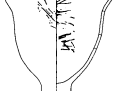
	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
57 [86] 18 II CM61 6外	甕	17.2 21.9 16.9 6.2		頸部から体部上 半に5条の波状 文5帯	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ、波状文を 切る。 内面、横ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。 体部に煤 附着。 埋甕炉。


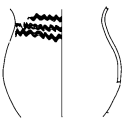
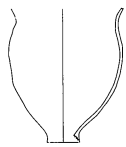

10号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
58 [86] 18 II CX63 2	壺	12.5 — — —		無文	口縁、横ナデ、横ハケ整形、雑 な横ヘラミガキ。 頸部、横ハケ整形、雑な横ヘラ ミガキ。 内面、横ハケ整形、雑な横ヘラ ミガキ。	赤褐色。 砂粒を含む。焼成 良好。
59 [86] 18 II CY62 16外	甕	— — 13.8 6.9		不明	頸部、斜めヘラミガキ。 体部、横・斜めハケ整形、斜め ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂 粒、白色 粒子を含 む。焼成 良好。
60 [86] 18 II CY61 9	甕	18.5 — 25.8 —		無文	口縁、横ナデ、横ヘラミガキ。 頸部、斜めヘラミガキ。 体部、斜めヘラミガキ。 内面、横・斜めヘラミガキ。	赤褐色。 砂粒を含 む。焼成 良好。口 縁部に煤 附着。 埋甕炉。
61 [86] 18 II CW63 3	甕	— — — —		不明	体部、縦・斜めヘラミガキ。 内面、斜めヘラミガキ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。
62 [86] 18 II CY62 9外	高坏	13.3 — 3.1 —		無文	口縁、丁寧な横ヘラミガキ。 体部、丁寧な横・斜めヘラミガ キ。 脚部、丁寧な縦ヘラミガキ。 内面、丁寧な横・斜めヘラミガ キ。	赤褐色。 砂粒を含 む。焼成 良好。脚 部に円孔 を3方に 穿つ。

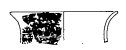

63 [86] 18II CY62 12外	高坏	19.0 — 3.5 —		無文 内、外面、脚の内面を除いて朱の塗彩。	口縁、丁寧な横へらミガキ。 体部、丁寧な横へらミガキ。 脚部、丁寧な縦へらミガキ。 内面、丁寧な横へらミガキ。	赤色。砂粒を含む。焼成良好。
64 [86] 18II CY61 8外	高坏	19.5 — 10.6 —		無文	口縁、丁寧な横へらミガキ。 体部、丁寧な縦へらミガキ。 脚部、丁寧な縦へらミガキ。 内面、丁寧な縦へらミガキ。	赤褐色。砂粒を含む。焼成良好。脚部に円孔を穿つ。
65 [86] 18II CY62 18外	高坏	— — 3.3 10.0		不明	脚部外面、縦へらミガキ。 脚部内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。脚部に円孔を4方に穿つ。

11号住居址


	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
66 [86] 18II CU54 4外	壺	16.3 31.0 26.5 10.0		頸部から体部上半に刺突文。 口縁内側に刺突文。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、斜めへらミガキ。刺突文を消す。 内面、斜めハケ整形。 ハケ整形→施文→へらミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤附着。
67 [87] 18II CW54 12	壺	— — — 13.0		不明	体部下半、横ハケ整形、斜めへらミガキ。 底部、外面、横へらミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内面は剥落。
68 [87] 18II CW53 16外	甕	17.7 21.9 16.2 7.0		口唇部、4条の波状文。 口縁から頸部に7条の波状文2帯、簾状文1帯、波状文1帯。	口縁、横ハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦へらミガキ。 底部、縦へらミガキ。 内面、横・斜めへらミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
69 [87] 18II CW53 21外	甕	18.8 27.0 18.8 6.8		口縁から体部上半に8条の波状文4帯。	口縁、横ナデ。 体部、縦・斜めハケ整形、縦へらミガキ。 底部、へらミガキ。 内面、斜めハケ整形、横へらミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。頸部から体部上半に煤附着。
70 [86] 18II CW53 2外	甕	23.3 20.9 18.6 6.4		無文	口縁、横ナデ、斜めハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 体部上半、斜めハケ整形。 体部下半、斜めハケ整形、雑な縦へらミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤附着。


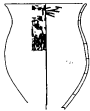

71 [86] 18II CW53 23外	甕	19.5 — 17.4 —		無文	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形、横ヘラミガキ。 体部、斜めハケ整形、縦・斜めヘラミガキ。 内面、斜めハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤附着。埋甕炉内土器。
72 [87] 18II CW53 24	甕	— — 25.1 —		頸部から体部上半に6条の波状文3帯、断絶1回。回転台使用。	頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。 内面、斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤附着。埋甕炉。
73 [87] 18II CW54 7外	甕	— — 24.0 6.9		無文	頸部、横ハケ整形、斜めヘラミガキ。 体部、縦ヘラミガキ。 内面、縦・横・斜めヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤附着。
74 [87] 18II CV53 11外	甕	18.2 14.0 13.3 6.0		無文	口縁、横ナデ、斜めヘラミガキ。 頸部、縦・斜めヘラミガキ。 体部、縦・斜めハケ整形、縦ヘラミガキ。 底部、斜めハケ整形。 内面、斜めハケ整形、横・斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤附着。

12号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
75 [87] 18II CV51 2	甕	22.9 — — —		頸部に9条の波状文4帯以上。	口縁、横ナデ、斜めハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒、3~4mmの小石を含む。焼成良好。
76 [87] 18II CW50 2	甕	16.9 — 14.6 —		無文	口縁、横ナデ。 体部、斜め・横ハケ整形、縦ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤附着。

14号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
77 [88] 18II CQ62 1	壺	24.7 — — —		口縁に8条の波状文。 頸部に波状文。	口縁、横・斜めハケ整形、横・斜めヘラミガキ。 頸部、横・斜めハケ整形、横ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。 ハケ目きれいに残す。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内面は剥落。


78 [88] 18 II CR61 2外	甗	15.1 — 14.5 —		頸部から体部上半に3条の波状文1帯。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、横・斜めハケ整形、縦・斜めへラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形、縦・横へラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。頸部から体部に煤付着。
79 [88] 18 II CR61 8外	甗	17.4 — 17.6 —		無文	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、横ハケ整形。 体部、横・斜めハケ整形、縦へラミガキ。 内面、横・縦へラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤付着。
80 [88] 18 II CS61 11外	甗	18.7 — 17.0 —		頸部から体部上半に6条の波状文3帯。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、縦へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤付着。




15号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
81 [88] 18 I BN54 7外	甗	14.1 — 13.1 —		頸部に4条の波状文2帯、6条の波状文1帯。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、横・斜めハケ整形。 体部、縦へラミガキ、波状文を切る。 内面、横・斜めへラミガキ。 ハケ整形→施文→へラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。
82 [88] 18 I BM55 7外	甗	15.9 — 13.9 —		頸部に8条の波状文3帯、右回り断絶3回、中部高地型。施文順、下段→上段。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦へラミガキ、波状文を切る。 内面、横ハケ整形、横へラミガキ。 ハケ整形→施文→へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
83 [88] 18 I BN53 13	甗	17.6 — 18.7 —		頸部から体部上半に9条の波状文3帯。	口縁、横ナデ、斜めへラミガキ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦へラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形、横へラミガキ。 ハケ目きれいに残す。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤付着。
84 [88] 18 I BL55 6	甗	22.4 — 19.0 —		頸部から体部上半に4条の波状文1帯、6条の波状文2帯。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。 内面、横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から頸部に煤付着。
85 [88] 18 I BN54 12	甗	23.9 — 19.9 —		頸部から体部上半に8条の斜走短線文1帯。波状文1帯、斜走短線文2帯。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。 内面、横ハケ整形、横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤付着。






86 [88] 18 I BM55 9	甕	22.2 — — —		頸部から体部上半に8条の斜走短線文1帯、5条の波状文1帯、8条の斜走短線文2帯。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁に煤不着。
87 [88] 18 I BM53 8	甕	21.9 — — —		口唇部に刻目文。頸部に波状文。	口縁、斜めハケ整形。	褐色。砂粒、雲母粒子を含む。焼成良好。埋甕炉内。
88 [88] 18 I BM53 8	甕	— — 23.7 —		不明	頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。 内面、斜めハケ整形。	褐色。砂粒、雲母粒子を含む。焼成良好。体部に煤付着。埋甕炉。
89 [88] 18 I BL55 7	甕	— — — 5.8		不明	外面、縦ハケ整形。 内面、横・斜めハケ整形。	褐色。砂粒、雲母粒子を含む。焼成良好。体部下半に煤付着。
90 [88] 18 I BN55 8	高坏	— — 4.8 —		不明 外・内面、朱の塗彩。	外面、丁寧な縦ヘラミガキ。 坏部内面、横ヘラミガキ。 脚部内面、横ハケ整形。	赤色。砂粒を含む。焼成良好。
91 [88] 18 I BM55 15	高坏	— — — 5.8		不明	外面、丁寧な縦ヘラミガキ。 内面、丁寧な横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
92 [88] 18 I BL55 5外	高坏	24.7 — — —		無文 外・内面、朱の塗彩。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 体部、横・縦ヘラミガキ。 内面、横・斜めヘラミガキ。	赤色。砂粒を含む。焼成良好。




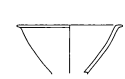
16号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
93 [89] 18 II DI54 22	甕	14.3 13.9 13.4 6.8		無文	口縁、横ナデ。 頸部、横・斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。 内面、横・斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤付着。




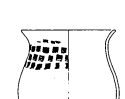
94 [89] 18II DH54 4外	甗	— — — 6.8		不明	外面、縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
95 [89] 18II DH54 5	甗	— — — 5.0		不明	外面、縦ヘラミガキ。 内面、縦・斜めハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
96 [89] 18II DI55 3	甗	— — — 7.7		不明	外面、縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。





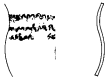




17号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
97 [89] 18II DI48 19	壺	20.9 — — —		口縁段部にハケの押圧による縦方向の沈線。頸部に8条の波状文1帯以上。	口縁、横ハケ整形。 頸部、縦・斜めハケ整形。 内面、横・斜めハケ整形。	褐色。砂粒、白色粒子を含む。 焼成良好。
98 [89] 18II DJ48 8外	壺	12.6 — — —		頸部に10条の波状文3帯以上、右回り断絶3回以上。中部高地型。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
99 [89] 18II DJ48 9	甗	14.0 — — — 12.6 — — —		頸部に6条の波状文2帯、右回り断絶5回以上。中部高地型。	口縁、横ナデ。体部体部、縦ヘラミガキ、波状文を切る。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 頸部から体部に煤附着。
100 [89] 18II DH49 11外	甗	16.5 — — — 15.9 — — —		頸部から体部上半に8条の波状文3帯。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、雑な縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 口縁から体部に煤附着。
101 [89] 18II DI48 18外	甗	20.3 — — — 23.25 — — —		頸部に7条の波状文2帯、右回り断絶6回。中部高地型。	口縁、横ナデ、雑な横ヘラミガキ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めヘラミガキ、波状文を切る。 内面、横ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 体部下半に煤附着。 埋甗炉。








102 [89] 18Ⅱ DH49 12外	甕	— — 21.6		不明	体部、縦ヘラミガキ。 内面、縦・横・斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤付着。南東コーナーのビット内。
103 [89] 18Ⅱ DI48 13	甕	13.6 — 12.3		無文	口縁、横ナデ。 頸部、縦・斜めハケ整形。 体部、縦・斜めハケ整形、雑な縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。頸部から体部に煤付着。
104 [89] 18Ⅱ DI48 18外	甕	— — 16.7		頸部から体部上半に5条の波状文2帯以上。	体部、横・縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤付着。
105 [89] 18Ⅱ DH49 10外	鉢	22.7 — — —		無文 内・外面、朱の塗彩。	口縁、横ナデ、横ハケ整形、横ヘラミガキ。 体部、縦ハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。

19号住居址

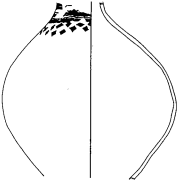







	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
106 [89] 18Ⅱ AT43 95	壺	17.1 — — —		段部に5条の波状文1帯。頸部に8条の波状文1帯以上。	頸部上半、横ハケ整形、ハケ目はきれい。 内面、横・斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
107 [90] 18Ⅱ AT44 104	甕	18.1 26.9 17.6 7.0		頸部から体部上半に8条の波状文2帯。右回り、断絶1回。回転台使用。	口縁、横ナデ。 頸部から体部上半、斜めハケ整形。 体部下半、縦ヘラミガキ。 内面、雑な横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面片側に煤付着。
108 [90] 18Ⅱ AR45 68外	甕	17.1 17.3 15.0 5.2		頸部に7条の波状文2帯。右回り。断絶2回以上。	口縁、横ナデ。 頸部から体部上半、横・斜めハケ整形。 体部下半、縦ヘラケズリ。 内面、横・斜めハケ整形。	黒褐色。砂粒をあまり含まない。精選されている。焼成良好。外面体部上半に煤付着。
109 [90] 18Ⅱ AR44 202	甕	20.2 — 21.8 —		頸部から体部上半に短線文4帯。	体部上半、斜めハケ整形。 体部下半、縦方向ヘラミガキ。 内面、横・斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面体部下半と内面口縁から頸部に煤付着。埋甕炉。


110 [89] 18II AR45 121外	甗	14.3 — 13.2 —		頸部から体部上半に6条の波状文2帯。	口縁、横ナデ。 頸部から体部上半、斜めハケ整形。 体部下半、縦ヘラミガキ。 内面、雑な横・斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面体部に煤付着。
111 [89] 18II AT44 237外	甗	11.4 — 12.2 —		頸部に7条の斜走短線文1帯、波状文1帯、斜走短線文1帯。	口縁、横ナデ。 頸部から体部上半、斜めハケ整形。 内面、横・斜めハケ整形、わずかにヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面全体に煤付着。
112 [89] 18II AT44 262外	甗	17.5 — 12.5 —		頸部から体部上半に4条の波状文3帯。右回り。断絶3回以上。中部高地型。	口縁、横ナデ。 頸部から体部上半、斜めハケ整形。 体部下半、縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	灰褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面全体に煤付着。
113 [90] 18II AT44 143外	甗	13.7 — 12.4 —		無文	口縁、横ナデ。 頸部から体部、横・斜めハケ整形。一部に縦ヘラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形。	茶褐色。砂粒、金雲母を含む。焼成良好。外面片側に煤付着。
114 [90] 18II AR44 193外	甗	— — 21.2 —		頸部から体部上半に6条の波状文3帯。	頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。斜めヘラミガキ。波状文を切る。 内面、横ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。埋甕炉の縁に敷いてあった土器。
115 [90] 18II AQ44	甗	— — 7.7 —		体部上半に5条の波状文1帯以上。	体部、雑な縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形。ハケの押圧痕あり。 全体、指で整形した時の凹凸が残存。	黒褐色。砂粒、金雲母を含む。焼成良好。外面に煤付着。
116 [89] 18II AR45 231外	甗	— — — 9.1		不明	体部、雑な縦ヘラミガキ。 内面、雑な横ヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面全体に煤付着。
117 [90] 18II AS45 7	鉢	11.2 — 7.7 — 5.0		無文	口縁、横ナデ。 体部、斜めハケ整形。縦ヘラミガキ。一部にハケ目を残す。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。焼成むらあり。
118 [90] 18II AT44 224外	高坏	13.5 — 13.1 — 4.2 — 10.1		無文 脚内側を除き全面に朱の塗彩。	口縁、丁寧な横ヘラミガキ。 脚部、丁寧な縦ヘラミガキ。 脚端部、横ヘラミガキ。 坏内面、丁寧な横・斜めヘラミガキ。 脚内面、縦ハケ整形。	赤色。砂粒を含む。焼成良好。

20号住居址






	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
119 [90] 18II BB60 6外	壺	20.0 — — —		頸部に10条の波状文3帯、10条の簾状文1帯、10条の波状文2帯。右回り。	頸部、横ハケ整形。 体部上半、斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
120 [90] 18II BA60 4	壺	18.2 — — —		段部に縦沈線文。波状文1帯、頸部T字文。	段部、横ハケ整形。 頸部、斜め・横ハケ整形。 内面、横ハケ整形・横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内面口縁に煤付着。
121 [90] 18II BA60 10	甕	16.8 — 16.7 —		頸部に8条の波状文3帯。右回り。断絶6回、中部高地型。	口縁、横ナデ。 頸部、横・斜めハケ整形。 体部、縦・横ハケ整形。縦ヘラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形。雑な横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内面口縁に煤付着。埋甕炉F ₁ 。
122 [90] 18II BA60 11	甕	18.4 — — —		頸部に8条の簾状文2帯以上。右回り。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 内面、横・斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を少し含む。焼成良好。内・外面の口縁に煤付着。埋甕炉F ₂ 。
123 [90] 18II AY60 7外	甕	— — — 7.6		不明	体部、縦ヘラミガキ。 内面、斜め・横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面に煤付着。
124 [90] 18II AY60 6	甕	— — — 6.6		不明	体部、縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内・外面全体に煤付着。
125 [90] 18II BA60 2	甕	— — — 6.4		不明 内、外面に朱を塗彩。	体部、ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	赤色。砂粒を少し含む。焼成良好。

21号住居址

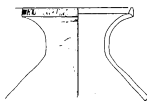
	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
126 [91] 18II BB48 75外	壺	— — 31.5 —		頸部から体部上半に6条の波状文3帯以上、6条の斜走短線文2帯。	頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。	褐色。砂粒、雲母、2mmの石英を含む。焼成良好。内面は剥落。
127 [91] 18II BB47 116外	甕	20.4 — 18.9 —		頸部から体部上半に6条の波状文2帯。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、横ハケ整形。 内面、横・縦・斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤附着。
128 [91] 18II BB47 139外	甕	20.1 — 20.2 —		無文	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、斜めヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。頸部から体部に煤附着。。
129 [91] 18II BB47 174	甕	— — 22.3 —		頸部から体部上半に波状文、9条の斜走短線文1帯。	頸部、横ハケ整形。 体部、縦・斜めハケ整形。 内面、横・斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤附着。埋甕炉。
130 [91] 18II BA46 18	甕	— — — 7.0		不明	外面、斜めハケ整形。 内面、斜めハケ整形。 底部、木葉痕あり。	褐色。砂粒、雲母、1~2mmの石英を含む。焼成良好。
131 [91] 18II BA47 63外	甕	— — — 9.0		不明	外面、斜めハケ整形。 内面、斜めハケ整形。	赤褐色。砂粒、2~3mmの石英を含む。焼成良好。体部に煤附着。
132 [91] 18II BB47 57外	甕	— — — 7.4		不明	外面、斜めハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、斜めハケ整形、斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒、雲母、2mmの石英を含む。焼成良好。
133 [91] 18II BD47 2	甕	— — — 6.8		不明	外面、縦ヘラミガキ。 内面、斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。


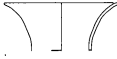




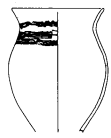
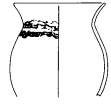

134 [91] 18II BC46 2	鉢	— — — —		無文 内・外面、朱の 塗彩。	口縁、丁寧な横へらミガキ。 体部、丁寧な縦へらミガキ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。
-------------------------------	---	------------------	---	----------------------	--------------------------------	------------------------










22号住居址


	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
135 [91] 18II CO58 11外	甕	12.1 15.8 13.1 5.9		頸部から体部上 半に9条の波状 文2帯。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦へらミ ガキ。 内面、横へらミガキ。	茶褐色。 砂粒を含 む。焼成 良好。口 縁から頸 部に煤付 着。
136 [91] 18II CM57 88外	甕	16.7 17.0		頸部から体部上 半に6条の斜走 短線文2帯、7 条の波状文2帯。 断絶1回、回転 台使用。	口縁、横ナデ、雑な横へらミガ キ。斜走短線文を消す。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜め・縦ハケ整形。 内面、横ハケ整形。 ハケ整形→施文→へらミガキ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。 体部下半 に煤附着。 埋甕炉F ₂ 。
137 [92] 18II CO57 8	甕	18.9 20.0		頸部に7条の斜 走短線文2帯。 7条の波状文2 帯。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、斜め・縦ハケ整形。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。 体部下半 に煤附着。 埋甕炉F ₁ 。
138 [91] 18II CO58 10	甕	— — 6.0		不明	外面、縦へらミガキ。 内面、横へらミガキ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。
139 [91] 18II CO57 6	甕	10.8 — —		無文	口縁、横ナデ。 体部、縦へらミガキ。 内面、横へらミガキ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。

24号住居址





	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
140 [92] 18 I BQ47 341外	壺	23.2 — — —		口縁段部、縦へ ら描き沈線文。	口縁、横ナデ。 頸部、縦・斜めハケ整形、雑な 縦へらミガキ。 体部、縦・斜めハケ整形、雑な 縦へらミガキ。 内面、横ハケ整形、雑な横へら ミガキ。 ハケ目をきれいに残す。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。

141 [92] 18 I BQ47 337	壺	9.4 — — —		不明	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
142 [92] 18 I BR48 53外	壺	24.5 — — —		頸部に波状文。 内、外面、朱の塗彩。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形、斜めヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ、剥落。	赤褐色。 砂粒、2~3mmの小石を含む。
143 [92] 18 I BQ48 204外	壺	— — — 12.4		不明	外面、斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 内面は剥落。
144 [92] 18 I BQ48 206	壺	— — — 13.4		不明	外面、縦・斜めハケ整形。 内面、斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 内面は剥落。
145 [92] 18 I BR47 163外	甕	— — — 21.5		無文	頸部、縦・斜めハケ整形。 体部、縦・斜めハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 頸部から体部に煤付着。
146 [92] 18 I BQ46 126	甕	11.2 — — 8.8		頸部から体部上半に8条の波状文3帯。 施文順、下段→上段。	口縁、横ナデ、横ヘラミガキ。 体部上半、斜めハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、横・斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 口縁から頸部に煤付着。
147 [92] 18 I BP47 193外	甕	19.8 — — 21.4		頸部から体部上半に7条の波状文1帯、9条の籬状文1帯、7条の波状文1帯。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ、波状文を消す。 内面、横・斜めヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 口縁から体部に煤付着。
148 [92] 18 I BQ48 95外	甕	19.7 — — 21.0		頸部から体部上半に8条の波状文1帯、8条の籬状文1帯、8条の波状文1帯。 右回り断絶5回以上。中部高地型。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、横・斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 口縁から体部に煤付着。
149 [92] 18 I BR46 172外	甕	12.9 — — —		口唇部、刻目文。 頸部から体部に7条の波状文5帯。	頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、斜めヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 口縁から体部に煤付着。



150 [93] 18 I BQ48 111外	襖	22.6 — — —		頸部から体部上半に10条の波状文4帯。	口縁、横ナデ。 頸部、縦ハケ整形。 体部、縦ハケ整形、斜めヘラミガキ。波状文を切る。 ハケ目をきれいに残す。 内面、横ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 口縁から頸部に煤付着。
151 [93] 18 I BR45 47	襖	17.7 — — —		頸部から、体部に7条の波状文3帯以上。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 内面、横・斜めハケ整形、横、斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 埋甕炉F ₁ 直下。
152 [92] 18 I BP47 50	襖	20.5 — — —		頸部に、4条の波状文6帯。	口縁、横ナデ、斜めハケ整形。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒・2mmの小石を含む。 焼成良好。 口縁から頸部に煤付着。
153 [93] 18 I BP47 198	襖	16.7 — — —		頸部から口縁に波状文6帯。	口縁、横ナデ。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 口縁から頸部に煤付着。
154 [93] 18 I BQ48 122	襖	16.5 — — —		無文。	口縁、横ナデ。 頸部、縦ハケ整形。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	茶褐色。 砂粒を含む。 焼成良好。口縁から頸部に煤付着。
155 [93] 18 I BO47 19	襖	16.5 — — —		頸部に8条の波状文2帯以上。	口縁、横ナデ、縦ハケ整形。 頸部、縦ハケ整形。 内面、横ヘラミガキ。	茶褐色。 砂粒を含む。 焼成良好。
156 [93] 18 I BQ48 45	襖	20.8 — — —		無文	口縁、横ナデ。 頸部、横・縦ハケ整形。 内面、横ハケ整形、横・斜めヘラミガキ。 ハケ目をきれいに残す。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 口縁から頸部に煤付着。
157 [93] 18 I BQ49 45外	襖	26.1 — — —		無文	口縁、横ナデ。 頸部、横・縦ハケ整形、雑な横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 頸部に煤付着。
158 [93] 18 I BR45 46	襖	— — 22.2 —		不明	体部、縦ヘラミガキ。 内面、縦・斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 埋甕炉F ₁ 。

159 [93] 18 I BP47 203外	襷	— — 27.6 —		不明	体部、斜めハケ整形、縦・斜め へラミガキ。 内面、横・斜めへラミガキ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。 体部に煤 附着。
160 [93] 18 I BQ47 134外	襷	— — 17.3 —		頸部から体部に 9条の横線文2 帯以上。	体部、縦へラミガキ、横線文を 切る。 内面、縦・斜めへラミガキ。	茶褐色。 砂粒を含 む。焼成 良好。
161 [93] 18 I BR46 171	襷	— — 19.1 —		頸部から体部上 半に8条の波状 文3帯以上。	体部、縦へラミガキ。 内面、横へラミガキ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。 頸部から 体部に煤 附着。
162 [93] 18 I BO47 21	襷	— — 26.3 —		頸部から体部上 半に簾状文1帯、 13条の波状文1 帯。	頸部、斜めハケ整形。 体部、縦・斜めへラミガキ。 内面、横へラミガキ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。 体部下半 に煤附着。
163 [93] 18 I BS45 35	襷	— — 15.7 —		無文	頸部、縦ハケ整形、縦へラミガ キ。 体部、縦へラミガキ。 内面、横へラミガキ、	茶褐色。 砂粒を含 む。焼成 良好。頸 部に煤付 着。
164 [93] 18 I BQ47 337外	鉢	— — 5.9 —		円弧文。	外面、横ハケ整形、雑な横・斜 めへラミガキ。 内面、横ハケ整形、雑な横へラ ミガキ。	褐色。砂 粒・0.1~ 1mmの白 色粒子・ 1~2mm の小石を 含む。焼 成良好。 焼成むら あり。
165 [93] 18 I BQ47 270	高坏	28.6 — — —		無文 内・外面、朱の 塗彩。	外面、丁寧な横へラミガキ。 内面、横へラミガキ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。
166 [93] 18 I BQ47 31	高坏	— — 15.5 —		不明 外面、朱の塗彩。	外面、丁寧な横へラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。
167 [93] 18 I BQ48 202	高坏	— — 5.4 —		不明 坏部内面、外面、 朱の塗彩。	外面、丁寧な縦へラミガキ。 坏部内面、剥落。 脚部内面、斜めハケ整形。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。


28号住居址






	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
168 [94] 18 I BY45 37外	壺	16.0 — —		頸部に9条の波状文2帯以上。	口縁、横ナデ、斜め・横ハケ整形。 頸部、横ハケ整形。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒・2～3mmの小石を含む。焼成良好。内面は剥落。
169 [94] 18 I BX46 131外	壺	27.2 — —		口縁、7条の波状文1帯。 頸部、9条の大きな波状文1帯。 内面、8条の波状文2帯、10条の縦直線文。	口縁、横ハケ整形。 頸部、横ハケ整形。 内面、横・斜めハケ整形。 ハケ目をきれいに残す。 口縁直下に補修孔2対がある。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内面は剥落。頸部上半に補修孔を2対穿つ。埋甕炉。
170 [94] 18 I BX46 131	甕	— — 22.6 —		頸部から体部上半に9条の波状文7帯以上。右回り断絶5回以上、中部高地型。	体部、斜めハケ整形、縦ヘラミガキ、波状文を切る。 内面、雑な斜め・横ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤附着。埋甕炉。
171 [94] 18 I BY45 93外	高坏	23.8 — —		無文 内、外面、朱の塗彩。	口縁、横ヘラミガキ。 体部、丁寧な縦ヘラミガキ。 内面、丁寧な横・縦ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。

29号住居址

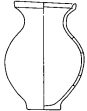


	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
172 [94] 18 I BV45 13	甕	— — 19.4 —		頸部に9条の波状文1帯以上、9条の簾状文1帯、9条の波状文1帯。波状文は右回り、断絶1回、回転台使用。	体部、雑な縦ヘラミガキ、波状文を切る。 内面、横ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒・3～4mmの小石を含む。焼成良好。体部に煤附着。埋甕炉。
173 [94] 18 I BV46 1	甕	— — 17.7 —		頸部に6条の波状文2帯以上。	体部、縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。頸部に煤附着。



31号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
174 [94] 18 I BQ53 21外	壺	— — — 5.5		不明。	外面、縦ハケ整形。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。体部に煤附着。


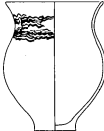




175 [94] 18 I BQ54 13外	壺	16.9 — 16.4 —		頸部に9条の波状文3帯、右回り断絶3回以上。中部高地型。施文順、上段→下段。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤付着。
176 [94] 18 I BP56 18	甗	18.3 — 20.5 —		頸部から体部上半に5条の波状文3帯、右回り断絶4回、中部高地型。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、斜めハケ整形、雑なヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁に煤付着。埋甗炉。
177 [94] 18 I BQ54 21	甗	16.1 — — —		頸部から体部上半に6条の波状文3帯。	口縁、横ナデ、斜めハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。頸部から体部に煤付着。
178 [94] 18 I BQ54 14	甗	— — — 7.1		不明	外面、縦ヘラミガキ。 底部、ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒・2〜3mmの小石を含む。焼成良好。
179 [94] 18 I BQ54 17	甗	— — — 8.1		不明	外面、縦ヘラミガキ。 内面、雑な横・斜めヘラミガキ。	赤褐色。砂粒・1mmの白色粒子・2〜3mmの小石を含む。焼成良好。









32号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
180 [94] 18 I BD59 14	壺	13.0 22.8 16.8 7.2		無文 外面、朱の塗彩。 内面、口縁から頸部に朱の塗彩。	口縁、剥落。 頸部、丁寧な横ヘラミガキ、剥落。 体部、丁寧な縦ヘラミガキ。 内面、体部、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内面の口縁から頸部は剥落。
181 [94] 18 I BO60 1	壺	— — — 13.3		不明	外面、縦・斜めハケ整形。 内面、ハケ整形。	褐色。砂粒・1〜3mmの小石を含む。焼成良好。
182 [94] 18 I BN59 12外	甗	17.2 — 17.5 —		頸部に4条の波状文2帯。	口縁、横ナデ、横ヘラミガキ。 頸部、横ハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤付着。







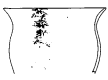

183 [95] 18 I BO59 13	甗	10.0 — — 4.7		無文	口縁、横ナデ。 体部、縦へラミガキ。 内面、横ハケ整形、雑な横へラミガキ。	褐色。砂粒・白色粒子を含む。底部の中心から少しはずれて円孔を1個穿つ。
184 [94] 18 I	器台	— — 5.2 16.4		不明 外面、朱の塗彩。	外面、丁寧な縦へラミガキ。 内面、脚部、縦・横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。



33号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
185 [95] 18 I BP55 17	甗	13.2 15.6 12.0 6.1		頸部に8条の波状文2帯、右回り断絶6回、中部高地型。	口縁、横ナデ、斜めハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦へラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形、横へラミガキ。	赤褐色。砂粒を含む。焼成良好。焼成むらあり。頸部に煤付着。
186 [95] 18 I BP56 29外	甗	20.8 27.2 21.8 8.8		頸部に7条の波状文2帯。右回り断絶3回以上、中部高地型。	口縁、横ナデ、横へラミガキ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦へラミガキ。 内面、横ハケ整形、横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤付着。
187 [95] 18 I BP57 15	甗	10.2 — 11.2 —		頸部から体部上半に7条の波状文2帯、右回り断絶5回、中部高地型。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦へラミガキ。 内面、横へラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤付着。
188 [95] 18 I BQ55 8	甗	14.1 — 13.0 —		頸部に波状文2帯。	口縁、横ナデ、縦・横ハケ整形。 頸部、横ハケ整形、雑な横へラミガキ、波状文を切る。 体部、縦ハケ整形、雑なへラミガキ、波状文を切る。 内面、雑な横・斜めへラミガキ。 ハケ整形→施文→へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤付着。
189 [95] 18 I BQ55 16	甗	17.9 — — —		頸部に5条の波状文3帯以上。	口縁、横ナデ。 頸部、横・斜めハケ整形。 内面、横・斜めへラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。埋甗炉F ₁ C。
190 [95] 18 I BQ55 7外	甗	15.4 — — —		頸部に8条の波状文3帯。 施文順、上段→下段。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 体部、斜めへラミガキ。 内面、横・縦へラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤付着。


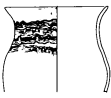



191 [95] 18 I BP55 4外	甕	14.7 — — —		頸部に6条の波状文3帯以上。	口縁、横ナデ、縦ハケ整形。 頸部、縦ハケ整形。 内面、横・斜めハケ整形、雑なヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
192 [95] 18 I BQ56 22外	甕	16.4 — — —		頸部に7条の波状文3帯。	口縁、横ナデ。 体部、斜めヘラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形、横・斜めヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤付着。
193 [95] 18 I BQ57 8	甕	— — 20.0 —		体部上半に波状文。	体部、斜めハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、雑な縦・横ヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤付着。埋甕炉F ₂ 。
194 [95] 18 I BQ55 14外	甕	— — 19.8 —		頸部から体部上半に6条の波状文3帯以上。	頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、雑な縦ヘラミガキ。 内面、斜めハケ整形、横・斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒・2~4mmの小石を含む。焼成良好。体部に煤付着。埋甕炉F _{1A} 。
195 [95] 18 I BQ57 4	甕	— — 16.3 —		体部上半に波状文6帯以上。	体部、斜めハケ整形。縦ヘラミガキ。 内面、斜めハケ整形、雑な横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
196 [95] 18 I BP55 15	甕	— — — 7.5		不明	外面、縦・斜めヘラミガキ。 底部、ヘラミガキ。 内面、雑な縦ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
197 [95] 18 I BQ55 15	甕	— — — —		不明	体部、縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。焼成むらあり。埋甕炉F _{1B} 。
198 [95] 18 I BQ55 10	高坏	— — 6.4 14.2		不明 外面に朱を塗彩。	外面、丁寧な縦ヘラミガキ。 内面、斜め・横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。脚部に三角状の大きな孔を穿つ。

34号住居址


	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
199 [95] 18 I BR60 10外	壺	12.8 — —		不明	口縁、横ナデ、縦ハケ整形、縦ヘラミガキ。 頸部、縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
200 [95] 18 I BU61 5外	甗	11.5 8.5 8.3 3.4		口唇部に刻み目文。	口縁、横ナデ、雑な横ヘラミガキ。 頸部、横ハケ整形、雑な横ヘラミガキ。 体部、縦・斜めハケ整形、横・縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤付着。
201 [95] 18 I BR59 10外	甗	13.3 14.0 10.9 6.6		頸部から体部上半に9条の波状文2帯、断絶5回、中部高地型。施文順、下段→上段。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、縦ハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、斜めハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。頸部から体部に煤付着。
202 [95] 18 I BR60 6外	甗	18.1 — —		頸部に12条の波状文1帯以上。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から頸部に煤付着。
203 [95] 18 I BS59 8外	甗	21.8 — 19.4 —		頸部に8条の波状文2帯。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。頸部から体部に煤付着。
204 [96] 18 I BS60 3外	甗、	19.1 — —		口縁から体部に8条の波状文8帯。	口縁、横ナデ。 体部、斜めハケ整形。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	茶色。砂粒・1mmの小石を含む。焼成良好。口縁から体部に煤付着。
205 [96] 18 I BS59 8外	甗	24.5 — —		頸部に7条の波状文2帯以上。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から頸部に煤付着。
206 [96] 18 I BT59 6	甗	17.5 — —		頸部に6条の波状文2帯。	頸部、斜めハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、雑な横ヘラミガキ。	褐色。砂粒・0.1mmの白色粒子を含む。焼成良好。



207 [96] 18 I BR60 17	甕	— — — 10.0		不明	外面、縦へらミガキ。 内面、横へらミガキ。	赤褐色。 砂粒・0.1 mmの白色 粒子を含 む。焼成 良好。 P ₂ 内。
208 [96] 18 I BS59 5外	台付甕	— — —		不明	外面、縦へらミガキ。 内面、横へらミガキ。	赤褐色。 砂粒を含 む。焼成 良好。内 面に煤付 着。

35号住居址


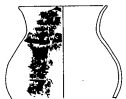

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
209 [96] 18 I CC54 17	壺	14.7 — — —		頸部から体部上半に、5条の波状文1帯、6条のJ字状文1帯、6条の波状文1帯以上。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、横・斜めハケ整形。 内面、横ハケ整形、雑な横・斜めへらミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
210 [96] 18 I CD54 18	甕	21.9 — 22.7 —		頸部から体部上半に8条の波状文4帯、右回り。1段から3段まで断絶4-8回、中部高地型、4段目、断絶1回、回転台使用。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、縦ハケ整形。 体部、横ハケ整形、雑な縦へらミガキ。 内面、横へらミガキ。 ハケ目、きれいに残す。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤付着。埋甕炉。
211 [96] 18 I CD54 12外	甕	13.7 — 14.8 —		頸部から体部上半に5条の波状文2帯。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、横ハケ整形。 体部、縦へらミガキ。 内面、横ハケ整形、雑な横・斜めへらミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
212 [96] 18 I CC55 8	甕	15.8 — — —		頸部から体部上半に8条の波状文3帯。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、縦ハケ整形。 体部、縦ハケ整形、雑な縦へらミガキ。 内面、横ハケ整形、斜めへらミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤付着。
213 [96] 18 I CE54 18	器台	— — 5.8 15.7		不明 外面、朱の塗彩。	外面、丁寧な縦へらミガキ。 脚部内面、縦・横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。脚部に円孔を3対穿つ。

36号住居址


	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
214 [96] 18 I BO62 8外	壺	— — — —		無文	頸部、縦へらミガキ。 体部、横へらミガキ。	褐色。砂粒・白色粒子を含む。焼成良好。内面は剝落。埋甕炉。


215 [96] 18 I BO63 2	甕	— — 6.6 —	(1)	無文	体部、縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
216 [96] 18 I BO62 5外	甕	14.8 — — —		無文	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、横ハケ整形、斜めヘラミガキ。 体部、横ハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 口縁から体部に煤付着。
217 [96] 18 I BO63 11外	高坏	14.4 — 2.8 —		無文 坏部内面に朱を塗彩。	口縁、横ナデ。 外面、横ハケ整形。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 焼成むらあり。

37号住居址


	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
218 [97] 18 I CC50 7	甕	18.0 — 20.6 —		頸部から体部上半に6条の波状文3帯。断絶7回以上。中部高地型。	口縁、横ナデ、雑な横ヘラミガキ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、雑な縦、横ヘラミガキ、波状文を切る。 内面、横ハケ整形、斜めヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 口縁から頸部に煤付着。 埋甕炉。
219 [96] 18 I CB51 8外	甕	18.8 — 24.7 —		頸部から体部上半に波状文4帯。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、横ハケ整形。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 口縁から体部に煤付着。
220 [96] 18 I CC50 3	甕	— — 12.3 6.2 —		頸部から体部上半に8条の波状文3帯以上。	頸部、横ハケ整形。 体部、斜め・横ハケ整形。縦ヘラミガキ。 内面、斜めハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 頸部から体部に煤付着。

39号住居址


	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
221 [97] 18 II BC45 12外	甕	13.0 — — —		体部上半に刺突文1帯。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、横ハケ整形。 体部、横ハケ整形。 内面、横ハケ整形。	茶褐色。 砂粒、石英粒子を含む。 焼成良好。 口縁から体部に煤付着。

222 [97] 18 II BB45 22	甗	17.4 — — —		頸部から体部上半に10条の波状文3帯、1帯目、右回り断絶6回、2、3帯目、右回り断絶4回、中部高地型。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、横ハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦・斜めヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	赤褐色。砂粒・白色粒子・3~4mmの小石を含む。焼成良好。口縁に煤付着。埋甗炉。
---------------------------------	---	---------------------	---	---	--	--

41号住居址


	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
223 [97] 18 I BP61 8	台付甗	15.0 — 15.0 —		無文	口縁、横ナデ。 体部、横・縦ヘラミガキ。 台部、縦ヘラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形、横ヘラミガキ。 台部内面、斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。焼成むらあり。体部に煤付着。




43号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
224 [98] 18 I CH61 10	甗	22.9 — 24.3 —		頸部から体部上半に7条の波状文4帯。右回り。断絶5回。中部高地型。	口縁、横ナデ。 頸部、縦ハケ整形。 体部、横ハケ整形。 内面、横ハケ整形。 ハケ目はきれい。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。埋甗炉。
225 [97] 18 I CI60 2外	甗	15.5 — 14.8 —		頸部に楕描き横線文。 内、外面、朱の塗彩。	内、外面、雑な横ヘラミガキ。	赤色。砂粒を含む。焼成良好。外面体部に煤付着。
226 [97] 18 I CI61 6	甗	— — 29.0 —		頸部に7条の波状文2帯以上。	体部上半、斜めハケ整形。 体部、斜めヘラミガキ。 内面、雑な横ヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面全体に煤付着。
227 [97] 18 I CI61 11外	甗	19.1 — 20.8 —		頸部から体部上半に5条の波状4帯。右回り。断絶4回以上。中部高地型。	口縁から体部上半、斜めハケ整形、波状文を切る。 体部下半、縦ヘラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形。雑な横ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面体部下半に煤付着。
228 [97] 18 I CI62 10	甗	— — — 7.8		不明	体部、縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形。雑な横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。

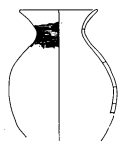




229 [97] 18 I CK60 10	甗	— — — 9.6		不明	体部、ハケ整形。縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形。一部ヘラミ ガキ。 ハケ目をきれいに残す。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。
230 [97] 18 I CI61 3外	甗	— — —		頸部に6条の波 状文3帯。	外面、斜めハケ整形。 巾約2cmの輪積み痕あり。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。 内面は剥 落。
231 [97] 18 I CI61 19	甗	— — —		頸部に5条の波 状文5帯以上。 右回り。	体部、縦・横ハケ整形。 内面、縦・横ハケ整形。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。
232 [97] 18 I CH61 9外	鉢	11.9 (8.0) — (6.2)		無文	口縁、横ヘラミガキ。 体部、密な縦ヘラミガキ。 内面、雑な横・斜めヘラミガキ。	赤褐色。 砂粒を含 む。焼成 良好。
233 [97] 18 I CI60 7	甗	— — — 6.8		不明	体部、縦ヘラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。 焼成むら あり。底 部の中央 に円孔を 1個穿つ。
234 [97] 18 I CJ59 3	甗	— — — 6.1		不明	体部、縦ヘラミガキ。 内面、ハケ整形。雑な斜めヘラ ミガキ。	赤褐色。 砂粒を含 む。焼成 良好。底 部に円孔 を2個穿 つ。
235 [97] 18 I CI62 14外	高坏	28.2 (21.1) — 12.2		無文 脚部内面を除き 全面に朱を塗彩。	口縁近く、横ハケ整形。 体部、丁寧な縦ヘラミガキ。 脚部先端、横ヘラミガキ。 口縁端部から内面上半、横ヘラ ミガキ。 内面下半、斜めヘラミガキ。	赤色。砂 粒を含む。 焼成良好。 脚部の4 方に三角 状の大き な孔を穿 つ。



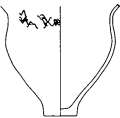






44号住居址





	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
236 [98] 18 I CA64 5	甗	18.0 — —		無文	口縁、横ナデ。 頸部から体部上半、斜めハケ整 形。雑なヘラミガキ。 体部下半、雑な縦ヘラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形。	茶褐色。 砂粒を含 む。焼成 良好。外 面に煤付 着。

237 [98] 18 I CB63 7外	甗	21.9 — — —		無文	口縁、横ナデ。 頸部、横・縦ハケ整形。 内面、雑な横・斜めヘラミガキ。	黒褐色。 砂粒を含む。 焼成良好。
238 [98] 18 I CB64 6	甗	— — 18.3 —		無文	頸部、体部上半、横ハケ整形。 雑な横・斜めヘラミガキ。 体部下半、縦ヘラミガキ。 内面、雑な横・斜めヘラミガキ。	黒褐色。 砂粒を含む。 焼成良好。外面に煤付着。
239 [98] 18 I CA64 4	台付甗	10.1 — 10.5 —		無文	口縁、横ナデ。 頸部から体部上半、縦ハケ整形。 体部下半、雑な縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、雑なヘラミガキ。	茶褐色。 砂粒を含む。 焼成良好。外面体部下半から口縁に煤付着。


46号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
240 [98] 18 I BX61 7	壺	16.7 — 23.0 —		頸部に11条の波状文4帯。右回り。断絶4回。中部高地型。	口縁、横ナデ。 頸部、縦ハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。波状文を切る。 内面、横・斜めハケ整形、横ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
241 [98] 18 I BX62 10	壺	15.0 — — —		無文	頸部、斜めハケ整形。わずかに縦ヘラミガキ。 体部上半、縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、わずかに横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
242 [98] 18 I BY61 2外	壺	22.8 — — —		段部にハケの押圧による縦沈線文。	斜めハケ整形。ハケ目はきれいに残る。 内面、横・斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
243 [98] 18 I BY61 10	壺	16.0 — — —		頸部に10条の波状文1帯以上。	口縁、横ナデ。 頸部上半、縦ヘラミガキ。波状文を切る。 内面、横ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を若干含む。焼成良好。
244 [98] 18 I BY63 10外	壺	— — 16.0 —		無文	頸部、横・斜めハケ整形。わずかに斜めヘラミガキ。 体部、縦・横・斜めハケ整形。 雑な斜めヘラミガキ。 内面、斜めハケ整形。わずかに横ヘラミガキ。	暗褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面全体に煤付着。



245 [98] 18 I BY62 16	壺	9.9 — —		口縁にヘラ描き 沈線文 3 本。	横ハケ整形。 内面、縦ヘラミガキ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。
246 [99] 18 I BX61 6外	甕	25.1 — 23.0 —		頸部から体部上 半に10条の波状 文 4 帯。右回り。 断絶 3 回以上。 中部高地型。	口縁、横ナデ。 頸部から体部上半、縦ハケ整形。 体部下半、斜めハケ整形、雑な 縦ヘラミガキ。 内面、斜めハケ整形。雑な横、 斜めヘラミガキ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。 外面全体 に煤付着。
247 [99] 18 I CA62 7	甕	— — 23.3 7.1		頸部に 3 条の波 状文 2 帯。	頸部、横・斜めハケ整形。 体部、雑な縦、斜めヘラミガキ。 内面、横・斜めヘラミガキ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。 外面全体 に煤付着。
248 [98] 18 I BY61 18外	甕	— — 11.1 6.4		頸部に波状文 2 帯以上。	頸部、体部、縦ヘラミガキ。波 状文を切る。 内面、斜めハケ整形。横・斜め ヘラミガキ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。
249 [98] 18 I BX61 10外	甕	— — 9.6 4.8		頸部から体部上 半に波状文1帯。 横線文 2 帯、波 状文 1 帯。 内、外面とも朱 の塗彩。	体部、縦・横・斜めヘラミガキ。 底部、ヘラミガキ。 内面、丁寧な横・斜めヘラミガ キ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。
250 [98] 18 I CA61 15外	甕	— — 19.9 —		頸部から体部上 半に 7 条の破状 文 4 帯。右回り。	頸部、横・斜めハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。波状文を 切る。 内面、雑な、横・斜め・縦ヘラ ミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。 埋甕炉。
251 [98] 18 I BX62 11外	甕	10.8 — — —		頸部に 6 条の波 状文 2 帯。右回 り。断絶 3 回以 上。中部高地型。	頸部、縦ハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。波状文を 切る。 ハケ目はきれいに残る。 内面、横ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	茶褐色。 砂粒を若 干含む。 焼成良好。 外面全体 に煤付着。
252 [99] 18 I BX63 5外	甕	18.2 — — —		頸部に 9 条の波 状文 3 帯。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。波状文を 切る。 内面、横・斜めヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	茶褐色。 砂粒を含 む。焼成 良好。外 面に煤付 着。
253 [99] 18 I BX62 8	甕	— — 20.9 —		頸部に 3 条の波 状文 3 帯以上。	頸部、横ハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。波状文を 切る。 内面、横ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。 外面全体 に煤付着。






254 [98] 18 I BY63 4外	鉢	21.6 — —		無文	口縁、横ナデ。 体部、横・縦ハケ整形。 ハケ目はきれいに残る。 内面、横・斜めハケ整形。	茶褐色。 砂粒を含む。 焼成良好。外面に煤付着。
255 [99] 18 I BY63 9	片口鉢	15.1 10.7 5.8		無文 内、外面とも朱の塗彩。	口縁、横へラミガキ。 体部、縦へラミガキ。 内面、横へラミガキ。	赤色。砂粒を若干含む。焼成良好。
256 [99] 18 I BX61 12	高坏	18.6 — —		無文 内、外面とも朱の塗彩。	口縁、横ナデ。 体部、斜めへラミガキ。 内面、丁寧な横へラミガキ。	赤色。わずかに砂粒を含む。焼成良好。
257 [99] 18 I CA61 9	高坏	— — 14.0		無文	体部、縦へラミガキ。 脚端部、横ナデ。 内面、横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。脚部に円孔を穿つ。

48号住居址




	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
258 [99] 18 I CA63 25	甌	— — 7.1		不明	体部、縦ハケ整形。縦へラミガキ。 内面、横ハケ整形。雑なへラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。底部中央に円孔を1個穿つ。P1内。

49号住居址

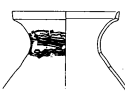
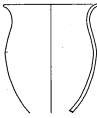






	品種	法量	土器図	文様	技法	備考
259 [99] 18 I BL64 9	甕	16.2 — 17.7		頸部に5条の波状文2帯。断絶2回以上。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、斜めハケ整形、斜め・縦へラミガキ。波状文を切る。 内面、横・斜めハケ整形、雑な横へラミガキ。 ハケ整形→施文→へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面全体に煤付着。
260 [99] 18 I BM65 12	甕	19.6 — 18.5		頸部に7条の波状文2帯。	頸部、斜めハケ整形。 体部、縦へラミガキ。 内面、横ハケ整形、横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面全体に煤付着。




261 [99] 18 I BN66 1外	甕	17.2 — — —		頸部に10条の波状文1帯、簾状文1帯、波状文1帯。右回り。	口縁、横ナデ。 頸部、横へラミガキ。波状文を切る。 体部、縦へラミガキ。波状文を切る。 内面、斜めにハケ整形。横へラガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
262 [99] 18 I BM66 2	甕	18.0 — — —		頸部に波状文3帯。	頸部、横ハケ整形。 体部、縦へラミガキ。波状文を切る。 内面、横へラミガキ。 ハケ整形→施文→へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面に煤付着。
263 [100] 18 I BM64 12外	甕	21.0 — — —		頸部から体部上半に9条の波状文4帯以上。	口縁、横ナデ。 頸部、縦ハケ整形。 内面、横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
264 [99] 18 I BM65 14	甕	— — 21.0 8.1		不明	体部、縦へラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形、横・縦へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内面体部下半に煤付着。埋甕炉。
265 [99] 18 I BN66 2	甕	— — 6.2		不明	体部、縦へラミガキ。 底部、へラミガキ。 内面、横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。

50号住居址



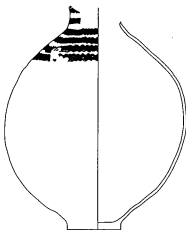


	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
266 [100] 18 I BO65 4	壺	— — 13.4 6.2		不明	体部、横・斜めハケ整形、縦へラミガキ。 体部下半、縦ハケ整形。特に沈線状になった縦へラミガキ。 内面、斜めハケ整形。雑な横・斜めへラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
267 [100] 18 I BN63 5	高坏	— — 11.8		不明	脚外面、雑な斜めへラミガキ。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
268 [100] 18 I BN63 11	高坏	— — 4.2		不明	体部、縦へラミガキ。 内面、坏部、縦へラミガキ。 脚部、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。

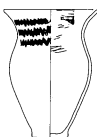



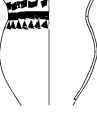




51号住居址





	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
269 [100] 18 I CH65	壺	22.4 — — —		頸部に波状文、 籐状文、波状文 各1帯。波状文 右回り、断絶4 回以上。中部高 地型。	口縁、横ナデ。 頸部、雑な斜めへらミガキ。 体部、雑な縦へらミガキ。波状 文を切る。 内面、横へらミガキ。 ハケ整形→施文→へらミガキ。	褐色。砂 粒・小石 を多く含 む。焼成 良好。整 形悪く頸 部横断面 は楕円形 を呈す。
270 [100] 18 I CH64	甗	20.0 — 19.3 —		無文	口縁、横ナデ。 頸部、斜めへらミガキ。 体部、縦へらミガキ。 内面、雑な横・斜めへらミガキ。	暗褐色。 砂粒を含 む。焼成 良好。
271 [100] 18 I CH65 16	甗	7.2 7.6 5.9 4.9		無文	口縁から体部上半、横ハケ整形、 体部下半、細い縦へらミガキ。 底部、ハケの押圧痕。 内面、ハケ整形。	茶褐色。 砂粒を含 む。焼成 良好。焼 成むらあ り。口縁 に煤附着。
272 [100] 18 I CH65	甗	17.9 — 19.0 —		頸部に5条の波 状文2帯。右回 り、断絶3回以 上。中部高地型。	頸部、横ハケ整形。 体部、縦へらミガキ。波状文を 切る。 内面、横ハケ整形、雑な横・斜 めへらミガキ。 ハケ整形→施文→へらミガキ。	暗褐色。 砂粒を含 む。焼成 良好。頸 部・体部 外面に炭 化物の付 着が厚く ある。
273 [100] 18 I CG65	甗	22.8 — — —		無文	口縁、横ナデ。 頸部・体部上半、雑な縦・横へ らミガキ。 内面、横へらミガキ。	黒色。砂 粒を含む。 焼成良好。
274 [100] 18 I CH65 16外	甗	— — 13.0 —		無文	頸部、斜めハケ整形。 体部、丁寧な縦へらミガキ。 内面、横・斜めへらミガキ。	茶褐色。 砂粒を含 む。焼成 良好。
275 [100] 18 I CH65	甗	— — 15.5 6.8		不明	体部、縦へらミガキ。 内面、横へらミガキ。	褐色。砂 粒を含む。 焼成良好。 体部外面 に煤附着。
276 [100] 18 I CH64 4	甗	— — 14.5 6.0		不明	体部上半、ハケ整形、雑な縦へ らミガキ。 体部下半、丁寧な縦へらミガキ。 内面、横ハケ整形。雑な斜めへ らミガキ。	茶褐色。 砂粒を含 む。焼成 良好。外 面に煤付 着。

277 [100] 18 I CH64 4	甃	— — — 6.6		不明	体部下半、縦へラミガキ。 内面、横へラミガキ。	茶褐色。 砂粒を含む。 焼成良好。焼成むらあり。外面に煤付着。
278 [100] 18 I CH64 6	甃	— — — —		頸部に4条の波状文3帯。右回り。断絶3回以上。中部高地型。	頸部、斜めハケ整形。 体部上半、縦へラミガキ。波状文を切る。 内面、横ハケ整形。 ハケ整形→施文→へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
279 [100] 18 I CH64 16外	甃	— — — 7.7		不明	体部、雑な縦へラミガキ。	灰褐色。 砂粒を含む。 焼成良好。外面に煤付着。

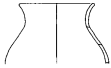
55号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
280 [101] 18 II AY58 21外	壺	11.2 — 19.0 —		頸部に6条の波状文1帯、8条の同心円弧文2帯。	頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めへラミガキ。 内面、横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
281 [101] 18 II AY57 3外	壺	15.0 — —		段部に波状文1帯。頸部に10条の波状文1帯。	口縁、横ハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
282 [101] 18 II BA58 23外	壺	— — 38.7 11.4		頸部から体部上半に13条の波状文6帯以上。右回り。断絶1回、回転台使用。	外面、斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
283 [101] 18 II BA57 12	壺	— — 49.0 —		不明	体部上半、斜めへラミガキ。 体部下半、横へラミガキ。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 外面全体
284 [101] 18 II BA58 11外	壺	— — — —		頸部に7条のT字文。波状文1帯以上。	体部上半、横ハケ整形。 内面、横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。



285 [102] 18 II BA57 6外	甗	20.2 27.2 17.5 7.8		頸部に10条の波状文3帯。右回り。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、斜めハケ整形。縦ヘラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面全体に煤付着。
286 [102] 18 II AY56 6外	甗	17.0 21.7 17.5 8.0		頸部から体部上半に5条の波状文2帯。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形、縦ヘラミガキ。波状文を切る。 体部、縦ヘラミガキ。文様を切る。 内面、横・縦ハケ整形。横、縦ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	暗褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面全体に煤付着。
287 [101] 18 II BA57 6外	甗	15.0 — 13.8 —		頸部に7条の斜走短線文1帯、7条の波状文2帯。右回り。断絶1回、回転台使用。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。縦ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面に煤付着。
288 [102] 18 II BA57 16	甗	16.9 — 19.6 —		頸部に11条の斜走短線文1帯、11条の波状文1帯、11条の円弧文1帯。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面全体に煤付着。
289 [102] 18 II BA 57 16	甗	20.2 — 20.7 —		口唇部に刻目文。頸部に10条の斜走短線文1帯、10条の籐状文1帯、10条の円弧文1帯。右回り。	頸部、横ハケ整形。 体部、斜め・横ハケ整形。斜めヘラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形、横、斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内・外面の体部に煤付着。埋葬炉F ₁ 。
290 [101] 18 II AY58 17外	甗	6.5 — 5.7 —		頸部に波状文1帯。	口縁、横ナデ。 頸部、体部、縦ヘラミガキ。波状文を切る。 内面、横・斜めハケ整形。横、斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
291 [102] 18 II AY57 4外	甗	23.0 — — —		無文	頸部、縦ハケ整形。 体部、斜め、横ハケ整形。 ハケ目はきれいに残る。 内面、横・斜めハケ整形。	暗褐色。砂粒を含む。焼成良好。
292 [102] 18 II AY57 17	甗	— — 20.9 —		頸部に11条の籐状文1帯以上。	頸部、横ハケ整形。 体部、縦ハケ整形。雑な斜め、縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内・外面の体部に煤付着。埋葬炉F ₂ 。
293 [103] 18 II AY57 18	甗	— — 20.0 —		頸部から体部上半に8条の波状文3帯。右回り。断絶4回。中部高地型。	頸部、斜めハケ整形。 体部、縦、横、斜めハケ整形。 内面、縦、横、斜めハケ整形。 雑な斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面体部に煤付着。埋葬炉F ₃ 。



294 [101] 18II BA56 9	甗	— — — 8.0		不明	体部、縦、斜めへらミガキ。 内面、横へらミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
295 [101] 18II BA57 13	甗	— — — 7.4		不明	体部、斜めへらミガキ。 内面、横へらミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
296 [102] 18II BA58 15外	甗	— — — —		頸部から体部上半に6条の斜走短線文4帯。	体部、斜め、縦ハケ整形。 内面、横ハケ整形。雑な横・斜めへらミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 外面に煤付着。
297 [102] 18II BA58 9外	鉢	13.3 6.8 — 6.0		無文	口縁、横ナデ。 体部、横、縦、斜めへらミガキ。 底部、へらミガキ。 内面、横へらミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。

56号住居址


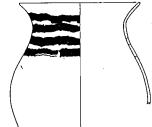
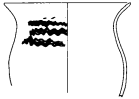



	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
298 [103] 18II BA56 7外	甗	16.1 — — —		無文	口縁、横ナデ。 頸部から体部、斜め・横へらミガキ。 内面、横ハケ整形、一部雑な横斜めへらミガキ。	黒褐色。砂粒を含む。 焼成良好。外面全体に煤付着。

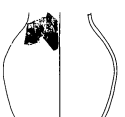
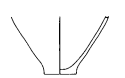

57号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
299 [103] 18II DO49 4外	壺	16.4 — — —		頸部に8条の波状文1帯、簾状文2帯以上。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 内面、横・斜めへらミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
300 [103] 18II DP49 2外	甗	14.5 21.5 —		無文	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。雑な斜めへらミガキ。 体部、斜めハケ整形、雑な斜め縦へらミガキ。 内面、斜め・横へらミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。

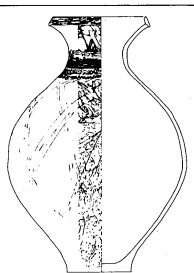
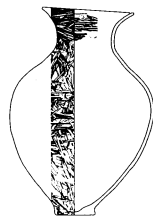
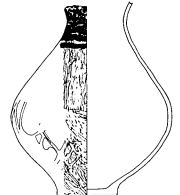

301 [103] 18II DO50 6	甗	18.6 — — —		頸部に7条の波状文4帯。右回り。断絶2回。回転台使用。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。波状文を切る。 内面、横・斜めハケ整形。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。埋甗炉F ₁ 。
302 [103] 18II DP49 5外	高坏	13.1 — 3.1 —		無文	口縁、横ナデ。 体部、斜めヘラミガキ。 内面、斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。

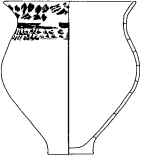
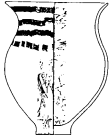
58号住居址

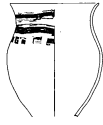
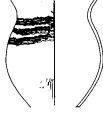



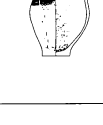
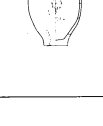
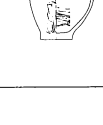

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
303 [103] 18II DK49 9	甗	14.8 18.7 14.7 7.3		無文	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、縦・斜めヘラミガキ。 内面、横ハケ整形。横ヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。内・外面全体に煤付着。
304 [103] 18II BI48 13外	甗	25.6 — 29.8 —		頸部から体部上半に13条の波状文4帯。右回り。断絶1回。回転台使用。	口縁、横ナデ。 頸部から体部上半、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。横・斜めヘラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内・外面の体部に煤付着。埋甗炉F ₁ 。
305 [103] 18II BJ47 5	甗	26.9 — 24.9 —		頸部から体部上半に9条の波状文3帯。右回り。断絶3回以上。中部高地型。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、横ハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形。雑な横・斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内・外面の体部に煤付着。埋甗炉F ₂ 。
306 [103] 18II BI47 7外	甗	23.8 — — —		無文	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜め・縦ハケ整形。 内面、横ハケ整形。雑な横ヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面全体に煤付着。
307 [104] 18II BI48 13	甗	— — 19.0 —		体部上半に7条の波状文2帯以上。	体部、縦ハケ整形。縦ヘラミガキ。 内面、斜めハケ整形。横ヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。内・外面の体部に煤付着。埋甗炉F ₃ 。
308 [104] 18II BI48 12	甗	— — 27.9 —		体部上半に9条の波状文2帯以上。	体部、斜めハケ整形。縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。埋甗炉F ₁ 下の土器。







309 [104] 18II BI48 12	甗	— — 24.1 —		頸部に10条の波状文2帯以上。	頸部、斜めハケ整形。 体部、斜め・縦ヘラミガキ。波状文を切る。 内面、横・斜めヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。埋甗炉F。
310 [104] 18II BJ49 5外	甗	— — 7.0 —		不明	体部、縦ヘラミガキ。 内面、横・斜めヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面体部に煤付着。
311 [104] 18II BJ49 6外	甗	— — 8.9 —		不明	体部、縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。

59号住居址



	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
312 [104] 18II BD56 81外	壺	19.9 54.2 38.2 13.8		段部に12条の波状文。頸部から体部上半に12条の波状文1帯、12条の簾状文1帯、12条の波状文1帯。波状文右回り、断絶1回。回転台使用。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜め・縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。剥落。	褐色。砂粒・2~3mmの小石を含む。焼成良好。焼成むらあり。体部に煤付着。体部に籠の網目の跡が見られる。
313 [105] 18II BF56 13外	壺	23.0 43.0 30.6 8.7		無文	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。雑な縦、横ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、雑な横ヘラミガキ。	褐色。砂粒・雲母粒子・3~4mmの小石を含む。焼成良好。焼成むらあり。口縁・体部に煤付着。内面は剥落。
314 [105] 18II BF57 11外	壺	— — 34.4 12.9		頸部から体部上半に14条の波状文6帯以上。断絶1回、回転台使用。	体部、縦・斜めヘラミガキ。波状文を切る。	褐色。砂粒・3~5mmの小石を含む。焼成良好。焼成むらあり。頸部から体部に煤付着。内面は剥落。籠の網目跡が見られる。
315 [104] 18II BE57 7外	壺	18.1 — — —		頸部に7条の波状文2帯、10条の簾状文1帯、波状文1帯以上。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。焼成むらあり。内・外面は剥落。




316 [105] 18Ⅱ BD56 30外	壺	11.5 25.6 16.9 6.0		頸部に7条の波状文1帯、7条の斜走短線文1帯、7条の波状文1帯。右回り、断絶12回以上。中部高地型。	口縁、横ナデ。横ハケ整形。頸部、縦ハケ整形。体部、縦・斜めハケ整形、縦ヘラミガキ。波状文を切る。内面、横ハケ整形。横・斜めヘラミガキ。ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒・白色粒子・2~3mmを含む。焼成良好。頸部から体部に煤付着。
317 [104] 18Ⅱ BD57 5	壺	10.7 — 10.8 —		頸部に波状文2帯以上。	頸部から体部上半、波状文。内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面は剥落。
318 [105] 18Ⅱ BE57 7	壺	— — — —		頸部から体部上半に簾状文1帯以上、7条の波状文1帯、9条の斜走短線文2帯、波状文2帯。	体部、斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内面は剥落。
319 [105] 18Ⅱ BE57 15	壺	12.4 — — —		段部に円弧文、縦直線文。頸部に11条の横線文2帯以上。	口縁、横ナデ、横・縦ハケ整形。雑な横ヘラミガキ。頸部、縦ハケ整形。内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。焼成むらあり。
320 [105] 18Ⅱ BD56 90外	壺	16.5 — — —		段部に波状文1帯。頸部に12条の波状文2帯、9条の簾状文1帯。	口縁、横ナデ。頸部、斜めハケ整形。内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。焼成むらあり。
321 [106] 18Ⅱ BD57 8外	甕	28.3 32.4 29.5 9.8		口縁から頸部に8条の斜走短線文2帯、8条の簾状文1帯、8条の円弧文2帯。	口縁、横ナデ。頸部、斜め・横ハケ整形。体部、斜めヘラミガキ。円弧文を切る。内面、横ヘラミガキ。ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。焼成むらあり。口縁から体部に煤付着。
322 [106] 18Ⅱ BD56 82	甕	— — 27.7 —		頸部から体部上半に10条の波状文4帯以上。	頸部、斜めハケ整形。体部、縦ヘラミガキ。波状文を切る。内面、横ヘラミガキ。ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。頸部から体部に煤付着。
323 [106] 18Ⅱ BF57 14	甕	21.9 28.1 22.0 7.5		頸部から体部上半に8条の波状文3帯、9条の斜走短線文1帯。波状文、右回り断絶6回、中部高地型。	口縁、横ナデ。横ハケ整形。頸部、斜め・横ハケ整形。体部、斜めハケ整形、縦ヘラミガキ、斜走短線文を切る。内面、横ヘラミガキ。ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。焼成むらあり。口縁から体部に煤付着。
324 [106] 18Ⅱ BF57 13	甕	20.3 22.9 22.2 8.2		頸部に7条の斜走短線文1帯、7条の波状文2帯。	口縁、横ナデ。頸部、横ハケ整形。体部、斜めハケ整形、斜めヘラミガキ、波状文を切る。内面、横ハケ整形。横、縦・斜めヘラミガキ。ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤付着。

325 [107] 18II BF57 12外	甗	18.7 — 20.2 —		頸部から体部上半に9条の波状文2帯、9条の斜走短線文1帯。波状文、右回り断絶5回、中部高地型。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤附着。
326 [106] 18II BC57 7外	甗	18.2 — 20.5 —		頸部から体部上半に7条の波状文3帯、右回り断絶5回以上。中部高地型。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜め・縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
327 [106] 18II BE57 16	甗	19.7 — 20.5 —		口唇部に刻み目文。 口縁から体部上半に7条の斜走短線文1帯。8条の簾状文1帯、7条の波状文1帯。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、斜め・縦ヘラミガキ。波状文を切る。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤附着。埋甗炉F ₁ 。
328 [107] 18II BE57 9外	甗	20.9 — — —		頸部から体部上半に9条の波状文2帯。	口縁、横ナデ。 頸部、横・斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
329 [107] 18II BE57 17	甗	— — 21.5 —		頸部に波状文1帯以上。	体部、斜めハケ整形、縦ヘラミガキ、波状文を切る。 内面、横ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤附着。埋甗炉に敷いてあった土器。
330 [107] 18II BD57 9外	甗	14.8 — 17.1 — 12.6 — 5.9 —		頸部から体部上半に8条の波状文3帯。左回り断絶6回、中部高地型。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、横ハケ整形。 体部、斜めハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、雑な横ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。頸部から体部に煤附着。
331 [107] 18II BD56 16外	甗	12.9 — 15.7 — 11.3 — 5.0 —		頸部に6条の波状文3帯、右回り断絶7回以上、中部高地型。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、雑な横・斜めヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤附着。
332 [107] 18II BF57 11外	甗	— — 13.5 — 6.9 —		頸部から体部上半に8条の波状文2帯以上。	体部、斜めハケ整形、縦、斜めヘラミガキ。 内面、縦、横、斜めヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。頸部から体部に煤附着。
333 [107] 18II BF56 15	甗	10.9 — 11.0 — 9.4 — 5.6 —		無文	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、斜め・横ハケ整形。 体部、斜め・縦ハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、雑な横ヘラミガキ。	褐色。砂粒・雲母・3mmの小石を含む。焼成良好。内・外面の口縁から体部に煤附着。






334 [107] 18II BD57 4外	甗	9.6 10.6 8.9 5.9		頸部に7条の波状文1帯、右回り断絶2回以上。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形、斜め・縦ヘラミガキ。 内面、横・斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内・外面に煤付着。
335 [107] 18II BD56 9	甗	7.7 7.5 7.8 4.1		無文	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、横、斜めハケ整形、雑な縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、雑な横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤付着。
336 [107] 18II BF56 12	甗	— — 8.7 5.1		頸部に5条の波状文2帯、右回り断絶7回以上。中部高地型。	頸部、横ハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤付着。
337 [107] 18II BE56 14外	鉢	17.4 10.3 — 7.0		無文	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。焼成むらあり。体部に煤付着。
338 [107] 18II BD57 13外	鉢	18.3 — — —		無文	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
339 [107] 18II BC57 4外	高坏	— — 5.1 9.4		不明	外面、丁寧な縦ヘラミガキ。 脚部端部、横ナデ。 内面、ヘラミガキ。 脚部内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。





60号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
340 [107] 18II DC46 15	甗	19.0 — 20.6 —		頸部に9条の波状文1帯、9条の簾状文1帯、9条の波状文1帯。右回り。6回断絶。中部高地型。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。波状文を切る。 内面、横ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面全体に煤付着。
341 [108] 18II DC47 19外	甗	18.0 — — —		頸部に9条の波状文1帯、9条の簾状文1帯、9条の波状文1帯。右回り。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面全体に煤付着。

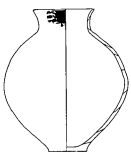



342 [108] 18II DE46 8	甗	19.2 — — —		頸部に7条の波状文1帯、7条の簾状文1帯、波状文1帯。右回り。	頸部、斜めハケ整形。 内面、横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
343 [108] 18II DE46 15	甗	— — 19.4 —		頸部に6条の波状文3帯以上。右回り、断絶1回、回転台使用。	頸部、横ハケ整形。 体部、縦ハケ整形。雑な斜めへラミガキ。 内面、横ハケ整形、雑な斜めへラミガキ。	褐色。砂粒・金雲母を含む。 焼成良好。内・外面の体部下半に煤付着。埋甗炉。
344 [107] 18II DO47 17	甗	— — — —		不明	体部、縦へラミガキ。 内面、横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。







61号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技 法	備考
345 [108] 18II DF54 14	壺	12.8 — — —		無文	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、縦へラミガキ。 内面、縦・斜めハケ整形、雑な横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
346 [108] 18II DF55 9外	壺	— — 13.3 7.2		不明	体部、縦・斜めへラミガキ。 内面、横へラミガキ。	赤褐色。砂粒を含む。 焼成良好。内・外面の一部に煤付着。
347 [108] 18II DF54	壺	— — — 8.8		不明	体部、縦・斜めへラミガキ。 内面、横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
348 [108] 18II DF54 8外	甗	9.6 13.5 9.5 5.0		無文	口縁、横ナデ。 頸部、縦ハケ整形、横へラミガキ。 体部、縦へラミガキ。 内面、横・斜めへラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
349 [108] 18II DF55 10	甗	18.2 — 18.9 —		口唇部に刻目文。 頸部に12条の波状文2帯。右回り。断絶5回。 中部高地型。	頸部、斜めハケ整形。 体部、縦へラミガキ。波状文を切る。 内面、横ハケ整形、横へラミガキ。 ハケ整形→施文→へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。内・外面の体部に煤付着。埋甗炉F1。



350 [108] 18Ⅱ DG54 14	甕	20.0 — 18.1 —		無文	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。 内面、横・斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 外面全体に煤付着。
351 [108] 18Ⅱ DG54 16	甕	21.8 — — —		無文	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 内面、横・斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
352 [108] 18Ⅱ DF55 6外	甕	— — — 6.4		不明	体部、縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
353 [108] 18Ⅱ DF54 13	甕	— — — 6.4		不明	体部、斜めハケ整形。縦ヘラミガキ。 内面、斜めハケ整形。斜め・縦ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。

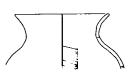




62号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
354 [109] 18Ⅱ DK54 12	壺	13.1 30.3 26.4 8.2		無文	口縁、横ヘラミガキ。 頸部～体部上半、斜めハケ整形。 横ヘラミガキ。 体部、斜めヘラミガキ。 内面、斜めハケ整形。横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 焼成むらあり。
355 [109] 18Ⅱ DJ55 5	壺	11.5 — — —		無文	口縁、横ナデ、横ヘラミガキ。 頸部、横ヘラミガキ。 体部、斜めヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒・3～4mmの小石を含む。 焼成良好。 P ₅ 。
356 [109] 18Ⅱ DK 54 13	壺	9.2 — 9.9 —		無文	口縁、丁寧な横ヘラミガキ。 頸部、縦・斜めハケ整形。 体部、横ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒・3mmの小石を含む。 焼成良好。 焼成むらあり。
357 [109] 18Ⅱ DT53 23	甕	17.0 — 20.5 —		無文	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、横ハケ整形、斜めヘラミガキ。 体部、斜めハケ整形、雑な斜めヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、雑な横ヘラミガキ。	褐色。砂粒・3～4mmの小石を含む。 焼成良好。 埋甕炉。

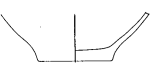
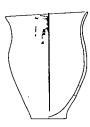

358 [109] 18 II DI53 21外	甗	18.1 — — —		無文	口縁、横ナデ、横ヘラミガキ。 頸部、縦ハケ整形、雑な横ヘラミガキ。 体部、縦ハケ整形、斜めヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 口縁に煤附着。
359 [109] 18 II DK54 8外	甗	— — — 4.6		不明	体部、縦ハケ整形。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 体部に煤附着。
360 [109] 18 II DK54 19	高坏	12.2 — 3.2 —		無文	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
361 [109] 18 II DK53 24外	高坏	— — 3.9 11.6		不明	外面、縦・横ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 脚部端部に煤附着。 脚部に円孔を穿つ。
362 [109] 18 II DJ52 10	高坏	— — 3.4 —		不明	外面、縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 脚部に円孔を穿つ。
363 [109] 18 II DK52 10	器台	— — 3.2 10.2		不明	外面、縦・斜めヘラミガキ。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 脚部に円孔を4方に穿つ。






63号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
364 [109] 18 II DD57 9	壺	14.0 — 22.5 —		無文	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形、横ヘラミガキ。 体部、斜めヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒・3mmの小石を含む。焼成良好。焼成むらあり。
365 [109] 18 II DD57 10外	甗	10.8 12.4 10.6 5.8		無文	口縁、横ナデ。 頸部、縦ハケ整形。 体部、横・縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 口縁から体部に煤附着。外面は剝落。



366 [109] 18II DD57 13	甕	19.9 — — —		無文	口縁、横ナデ、横へラミガキ。 頸部、横ハケ整形、横へラミガキ。 体部、横へラミガキ。 内面、横ハケ整形、横・斜めへラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤附着。埋甕畑。
367 [109] 18II DD57 13	甕	— — 20.8 —		不明	体部、縦ハケ整形。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
368 [109] 18II DE57 18	鉢	11.5 6.4 — 5.5		無文	口縁、横ハケ整形。 体部、横ハケ整形、横・縦へラミガキ。 内面、横ハケ整形、横へラミガキ。	赤褐色。砂粒・白色粒子・2mmの小石を含む。焼成良好。
369 [109] 18II DD57 6	高坏	17.2 — — —		無文	口縁、横ナデ。 体部、横ハケ整形、横へラミガキ。 内面、横ハケ整形、横・斜めへラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁に煤附着。
370 [109] 18II DE57 5外	高坏	14.9 — — —		無文 内、外面、朱の塗彩。	口縁、横へラミガキ。 体部、丁寧な横へラミガキ 内面、丁寧な横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤附着。

64号住居址


	品種	法量	土器図	文様	技法	備考
371 [110] 18II DB52 13	壺	— — — 16.0		不明	体部、縦へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内面は剥落。
372 [110] 18II DA52 9	甕	17.5 22.2 16.6 7.5		無文	頸部、横ハケ整形。 全体、縦へラミガキ。 内面、横へラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良。外面全体に煤附着。口縁は磨耗。
373 [110] 18II DC51 13	甕	22.3 — 22.2 —		頸部～体部上半に14条の波状文3帯。右回り。断絶11回。中部高地型。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、縦ハケ整形、縦へラミガキ。 ハケ整形→施文→へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。








374 [110] 18II DC52 10	甗	19.6 — 19.5 —		口唇部に刻目文。 頸部に9条の波状文3帯。	頸部、横ハケ整形。 体部、斜めハケ整形、雑な縦ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
375 [110] 18II DA53 7	甗	— — 6.1 —		不明	体部、縦ハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 内面に煤付着。 P ₅ 内。
376 [110] 18II DA53 7	甗	— — 5.2 —		不明	体部、縦ヘラミガキ。 内面、斜めハケ整形。斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 P ₅ 内。
377 [110] 18II DA53 7	甗	— — 4.2 —		不明	体部、雑な縦ヘラミガキ。 内面、斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 P ₅ 内。
378 [110] 18II DC51 9	鉢	20.4 14.0 8.3		無文	口縁、横ナデ。 体部、斜めハケ整形。縦ヘラミガキ。 内面、斜めヘラミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。 焼成良好。外面の一部に煤付着。

65号住居址


	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
379 [110] 18II CS52 5	甗	19.4 — 20.4 —		頸部に8条の波状文3帯。右回り。断絶4~6回。中部高地型。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。波状文を切る。 内面、横、斜めヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 内・外面の体部下半に煤付着。 埋甗炉。
380 [110] 18II CQ53 4	甗	16.4 — 16.9 —		頸部に8条の波状文3帯。右回り。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。波状文を切る。 内面、横・斜めヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 外面全体に煤付着。



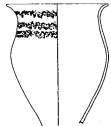


66号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
381 [111] 18II CY48 7	甗	10.9 11.9 8.6 4.8		頸部に7条の波状文2帯。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ、波状文を切る。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 口縁から体部に煤付着。


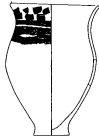
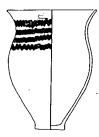
382 [111] 18II CY48 12	甗	12.7 14.0 10.8 6.2		頸部に8条の波状文1帯。 体部上半に頸部より大きな波状文1帯。	口縁、横ナデ。 頸部、横・縦ハケ整形。 体部、横ハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒・白色粒子・2~3mmの小石を含む。焼成良好。内・外面の口縁から体部に煤付着。
383 [111] 18II CY48 8外	甗	15.5 11.9 14.1 6.8		口唇部に刻み目文。 頸部に7条の波状文2帯、断絶1回、回転台使用。	口縁、横ナデ。 頸部、縦・横ハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。 体部下半、縦ハケ整形。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。頸部から体部に煤付着。
384 [111] 18II CY48 11	甗	16.5 18.1 13.6 6.7		頸部に8条の簾状文1帯。 体部上半に6条の波状文1帯。	口縁、横ナデ。 頸部、縦ハケ整形、縦・横ヘラミガキ。 体部、縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。口縁から体部に煤付着。
385 [111] 18II CY48 23	甗	17.9 — 18.7 —		頸部から体部上半に7条の波状文3帯、右回り断絶7回、中部高地型。	口縁、横ナデ、横ヘラミガキ。 頸部、横ハケ整形。 体部、横ヘラミガキ。 内面、横・斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤付着。埋甗炉。
386 [111] 18II CY43 13外	甗	— — 21.4 8.0		体部上半に7条の波状文2帯以上。	体部、縦・横・斜めハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤付着。
387 [110] 18II DA48 9外	甗	18.2 — 18.1 —		頸部に4条の小さな波状文1帯、体部上半に4条の波状文1帯。	口縁、横ナデ。 頸部、横ヘラミガキ。 体部、縦ヘラミガキ。 内面、横ハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。頸部から体部に煤付着。
388 [110] 18II CY48 14外	鉢	19.2 — — —		無文	口縁、横ナデ、横ヘラミガキ。 体部、縦ヘラミガキ。 内面、横ナデ、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。

67号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
389 [111] 18II CY49 12	甗	9.0 10.1 8.8 5.0		頸部に8条の波状文1帯。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、縦・横ハケ整形、雑な縦ヘラミガキ。 内面、縦・横ハケ整形。雑な横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部上半に煤付着。


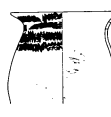
390 [111] 18Ⅱ CX49 12	甕	13.2 18.9 13.3 6.6		口唇部に刻み目文。 頸部から体部上半に5条の波状文3帯。右回り断絶4回、中部高地型。	口縁、縦・横ハケ整形。 頸部、縦ハケ整形。 体部、縦ハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、横、斜めハケ整形、斜め・横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内・外面の頸部から体部に煤付着。
391 [111] 18Ⅱ CX49 11	甕	18.9 — 17.6 —		口縁から体部上半に8条の波状文4帯、右回り断絶7回、中部高地型。	口縁、横ナデ。 体部、斜めハケ整形、縦ヘラミガキ。 内面、横、斜めハケ整形、横・斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内面の口縁から体部に煤付着。
392 [111] 18Ⅱ CY49 14	甕	21.6 — 20.7 —		頸部から体部上半に4条の波状文3帯、断絶1回、回転台使用。	口縁、横ナデ。 頸部、縦ハケ整形。 体部、斜めハケ整形。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤付着。埋甕炉F ₁ 。
393 [111] 18Ⅱ CY49 13	甕	23.6 — — —		口縁から体部上半に9条の波状文3帯。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。縦ヘラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
394 [111] 18Ⅱ CY49 13	甗	— — — 6.6		不明	外面、縦ヘラミガキ。 内面、斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。底部の中央に円孔を1個穿つ。

68号住居址


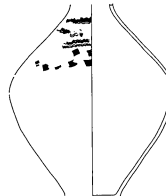
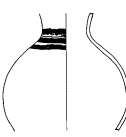


	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
395 [112] 18Ⅱ BT51 11外	壺	17.8 — — —		不明	口縁、横ナデ。 頸部上半、斜めヘラミガキ。 頸部下半、横ヘラミガキ。 内面、横・斜めヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
396 [112] 18Ⅱ BU49 9	甕	19.1 27.9 19.3 7.7		頸部から体部上半に10条の斜走短線文2帯。11条の簾状文1帯、10条の波状文2帯。波状文断絶2回。右回り。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。縦ヘラミガキ。 内面、横ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面全体に煤付着。
397 [112] 18Ⅱ BT50 10外	甕	19.2 25.5 18.0 6.4		頸部から体部上半に7条の波状文4帯。右回り。断絶5回。中部高地型。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、縦ヘラミガキ。波状文を切る。 内面、横・斜めヘラミガキ。 ハケ整形→施文→ヘラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面全体に炭化物付着。


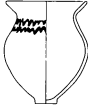


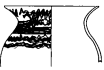

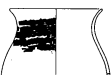

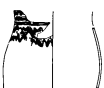
398 [112] 18II BT49 6	甗	13.6 18.7 13.2 6.4		頸部に11条の波状文2帯、右回り。断絶1回。回転台使用。	口縁、横へらミガキ。体部、縦へらミガキ。内面、横へらミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。焼成むらあり。外面全体に煤付着。
399 [112] 18II BU49 13	甗	19.4 18.2		頸部から体部上半に12条の斜走短線文2帯、12条の波状文2帯。右回り。断絶2回。	口縁、横ナデ。頸部、斜めハケ整形。体部、縦へらミガキ。波状文を切る。内面、横へらミガキ。ハケ整形→施文→へらミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内・外面の体部に煤付着。埋甗炉Fi。
400 [112] 18II BV50 1	甗	13.4 12.4		頸部に7条の波状文1帯、7条の簾状文1帯、7条の波状文1帯。右回り。	口縁、横ナデ。頸部、斜めハケ整形。体部、斜めへらミガキ。波状文を切る。内面、横・斜めへらミガキ。ハケ整形→施文→へらミガキ。	暗褐色。砂粒を含む。焼成良好。
401 [112] 18II BT51 9	甗	19.1 — — —		頸部に11条の波状文3帯以上。	口縁、横ナデ。頸部、横・斜めハケ整形。内面、横へらミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
402 [112] 18II BT50 4外	甗	— — 11.0 6.2		不明	体部、縦へらミガキ。内面、横・斜めハケ整形。	暗褐色。砂粒を含む。焼成良好。
403 [112] 18II BV49 12	甗	— — 20.2 —		頸部に9条の波状文3帯以上。	頸部、斜めハケ整形。体部、斜めハケ整形、縦へらミガキ。波状文を切る。内面、横・斜めへらミガキ。ハケ整形→施文→へらミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。埋甗炉の下に敷いてあった土器。
404 [112] 18II BV50 8外	甗	— — 14.1 —		頸部に7条の波状文3帯。	頸部から体部上半、斜めハケ整形。体部、縦へらミガキ。内面、横・斜めハケ整形、雑な横、斜めへらミガキ。	茶褐色。砂粒を含む。焼成良好。外面に煤付着。
405 [112] 18II BT49 10	甗	12.6 — 10.9 —		頸部から体部上半に9条の波状文3帯。右回り。断絶2～6回。	口縁、横ナデ。体部、縦へらミガキ。内面、横・縦ハケ整形、横へらミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内面半分に煤付着。




69号住居址

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
406 [113] 18II CI53 9外	甗	16.0 — 14.4 —		口縁から頸部に7条の波状文3帯。右回り、断絶2回以上。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜め・縦ハケ整形。 内面、横ハケ整形、横へラミガキ。	褐色。砂粒・3mmの小石を含む。焼成良好。頸部から体部に煤附着。
407 [112] 18II CI53 10	甗	23.2 — 23.3 —		口縁から体部上半に8条の波状文1帯。11条の波状文1帯。8条の波状文2帯。右回り。波状文の断絶2回。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、縦ハケ整形、縦へラミガキ。 内面、斜めハケ整形、横へラミガキ。	褐色。砂粒・3～5mmの小石を含む。焼成良好。体部に煤附着。埋甗炉。






70号住居址



	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
408 [113] 18II CF57 6外	壺	12.0 — 15.2 —		頸部に8条の波状文1帯、簾状文1帯。波状文1帯。簾状文右回り。波状文断絶1回。回転台使用。	口縁、剥落。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。斜めへラミガキ。 内面、斜めハケ整形、横へラミガキ。	赤褐色。砂粒を含む。焼成良好。焼成むらあり。
409 [113] 18II CF58 4外	壺	— — 35.0 — 11.7 —		頸部から体部上半に8条以上の波状文4帯以上。11条の斜走短線文2帯。	頸部、横・斜めハケ整形。 体部、横・斜めハケ整形。 内面、剥落。	赤褐色。砂粒を含む。焼成良好。
410 [113] 18II CG56 4	壺	— — 27.0 —		頸部に9条の波状文3帯。右回り。断絶1回。回転台使用。	頸部上半、縦へラミガキ。波状文を切る。 頸部下半、斜めハケ整形。 体部、斜めへラミガキ。 内面、横へラミガキ。 ハケ整形→施文→へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
411 [113] 18II CG56 4外	壺	— — 24.5 —		不明 朱を塗彩。	体部、丁寧な縦へラミガキ。 内面、横へラミガキ。	赤色。砂粒を含む。焼成良好。部分的に煤附着。
412 [113] 18II CF58 4	壺	— — 15.6 —		不明	体部、縦ハケ整形。 ハケ目はきれい。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。内面は剥落。

413 [113] 18II CE57 3	壺	— — — 6.0		不明	体部、縦へラミガキ。 内面、ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
414 [114] 18II CE58 3	甗	17.3 21.8 17.8 4.6		頸部に5条の波状文2帯。	頸部、横ハケ整形。 体部、横・斜めハケ整形。 内面、横・斜めハケ整形。	暗褐色。砂粒を含む。 焼成良好。外面全体に煤付着。
415 [114] 18II CF57 6	甗	15.1 16.7 13.8 6.3		無文	口縁、横ナデ。 全体、縦ハケ整形。 体部下半、縦へラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形。	暗褐色。砂粒・金雲母を含む。 焼成良好。外面全体に煤付着。
416 [114] 18II CF56 6	甗	14.8 13.9 12.2 5.9		頸部に11条の波状文1帯。12条の簾状文1帯。11条の波状文1帯。簾状文右回り。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。縦へラミガキ。 内面、横・斜めへラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
417 [114] 18II CG58 5外	甗	20.0 — 21.4 —		頸部に10条の波状文2帯、10条の簾状文1帯。10条の波状文2帯。右回り。波状文断絶1回。回転台使用。	頸部、横ハケ整形。 体部、横・斜めハケ整形。雑な斜めへラミガキ。波状文を切る。 内面、横へラミガキ。 ハケ整形→施文→へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
418 [114] 18II CE57 9	甗	19.2 — 20.0 —		口唇部に刻目文。頸部に9条の波状文1帯、9条の簾状文1帯、9条の波状文1帯。右回り。波状文断絶1回。回転台使用。	頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。雑な縦、斜めへラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形、雑な横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。埋甗炉F ₁ 。
419 [114] 18II CF56 5外	甗	19.7 — — —		頸部から体部に12条の波状文5帯。右回り。断絶8回。中部高地型。	口縁、横ナデ。 頸部上半、縦ハケ整形。斜めへラミガキ。波状文を切る。 体部、横・斜めハケ整形。斜めへラミガキ。波状文を切る。 内面、横へラミガキ。 ハケ整形→施文→へラミガキ。	暗褐色。砂粒を含む。 焼成良好。外面全体に煤付着。
420 [114] 18II CF57 2外	甗	12.6 — — —		頸部に5条の波状文1帯、5条の簾状文1帯、5条の波状文1帯。右回り。波状文断絶1回。回転台使用。口唇部に刻目文。	頸部。体部、縦ハケ整形。 体部、縦へラミガキ。 内面、横・斜めハケ整形。横、斜めへラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
421 [114] 18II CE57 10	甗	— — 20.9 —		頸部に10条の波状文1帯以上、11条の簾状文1帯、10条の波状文2帯。右回り。波状文断絶1回。回転台使用。	頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めへラミガキ。波状文を切る。 内面、横へラミガキ。 ハケ整形→施文→へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。内・外面の体部に煤付着。 埋甗炉F ₂ 。


422 [114] 18II CF58 7外	甗	— — 18.4 6.9		不明	外面、縦へラミガキ。 内面、横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
423 [114] 18II CF57 3	甗	— — — 5.0		不明	体部、縦へラミガキ。 内面、斜めハケ整形。横・斜めへラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 外面に煤附着。
424 [114] 18II CG58 6	鉢	22.4 — — —		無文 内、外面に朱を塗彩。	口縁、横ナデ。 体部上半、横へラミガキ。 体部、縦・斜め、丁寧なへラミガキ。 内面、丁寧な横へラミガキ。 内、外面に朱を塗彩。	赤色。砂粒を少し含む。 焼成良好。

溝 2


	器種	法量	土 器 図	文 様	技 法	備 考
425 [115] 18II CW46 16	甗	— — 19.9 —		体部上半に7条の波状文2帯以上。	体部、斜め・縦ハケ整形。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
426 [115] 18II CX46 12	甗	23.2 — — —		頸部から体部上半に6条の波状文3帯以上。	口縁、横ナデ、雑な横へラミガキ。 頸部、縦・斜めハケ整形、雑な横へラミガキ。 内面、横ハケ整形、横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
427 [115] 18II CW46 21	甗	— — — 9.4		不明	体部、斜め・縦へラミガキ。 内面、横へラミガキ。	赤褐色。 砂粒・2~3mmの小石を含む。 焼成良好。
428 [115] 18II CX45 1	甗	— — — 5.6		不明	体部、縦へラミガキ。 内面、縦・横・斜めへラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 焼成むらあり。
429 [115] 18II CW46 20	甗	— — — 8.8		不明	体部、縦へラミガキ。 内面、横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。

430 [115] 18II CW46 10	甗	— — — 4.4		不明	体部、縦へラミガキ。 内面、斜め・横へラミガキ。	黒褐色。 砂粒を含む。 焼成良好。
431 [115] 18II CX45 10	甗	— — — 4.0		不明	体部、横ハケ整形。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。





溝 3

	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
432 [115] 18II CG47 2	壺	16.0 — — —		頸部から体部上半に4条の波状文1帯、7条の波状文1帯、8条の波状文1帯、5条の波状文1帯。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。 内面、斜め・横ハケ整形。	褐色。砂粒・2～3mmの小石を含む。 焼成良好。
433 [115] 18II CJ47 12	甗	16.6 21.5 15.0 5.8		頸部から体部上半に7条の波状文3帯、7条の簾状文1帯。	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。 内面、斜めハケ整形。	赤褐色。 砂粒・2～3mmの石英を含む。 焼成良好。
434 [115] 18II CK47 12	甗	21.7 — 21.9 —		頸部から体部上半に7条の波状文3帯、9条の斜走短線文1帯以上。	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、斜め・横ハケ整形。 体部、斜めハケ整形。 内面、斜め・横ハケ整形、雑な横へラミガキ。	茶褐色。 砂粒を含む。 焼成良好。
435 [115] 18II CI47 12	甗	15.0 — — —		頸部に8条の波状文1帯、8条の簾状文1帯、8条の波状文1帯。右回り。	口縁、横ナデ。 頸部、縦ハケ整形。 体部、縦・斜めハケ整形。 内面、縦・横・斜めハケ整形。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。
436 [115] 18II CI47 13	甗	— — — —		頸部から体部上半に8条の波状文1帯、8条の波状短線文1帯、8条の波状文1帯。	頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。 内面、斜め・横ハケ整形、雑な横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。


25P

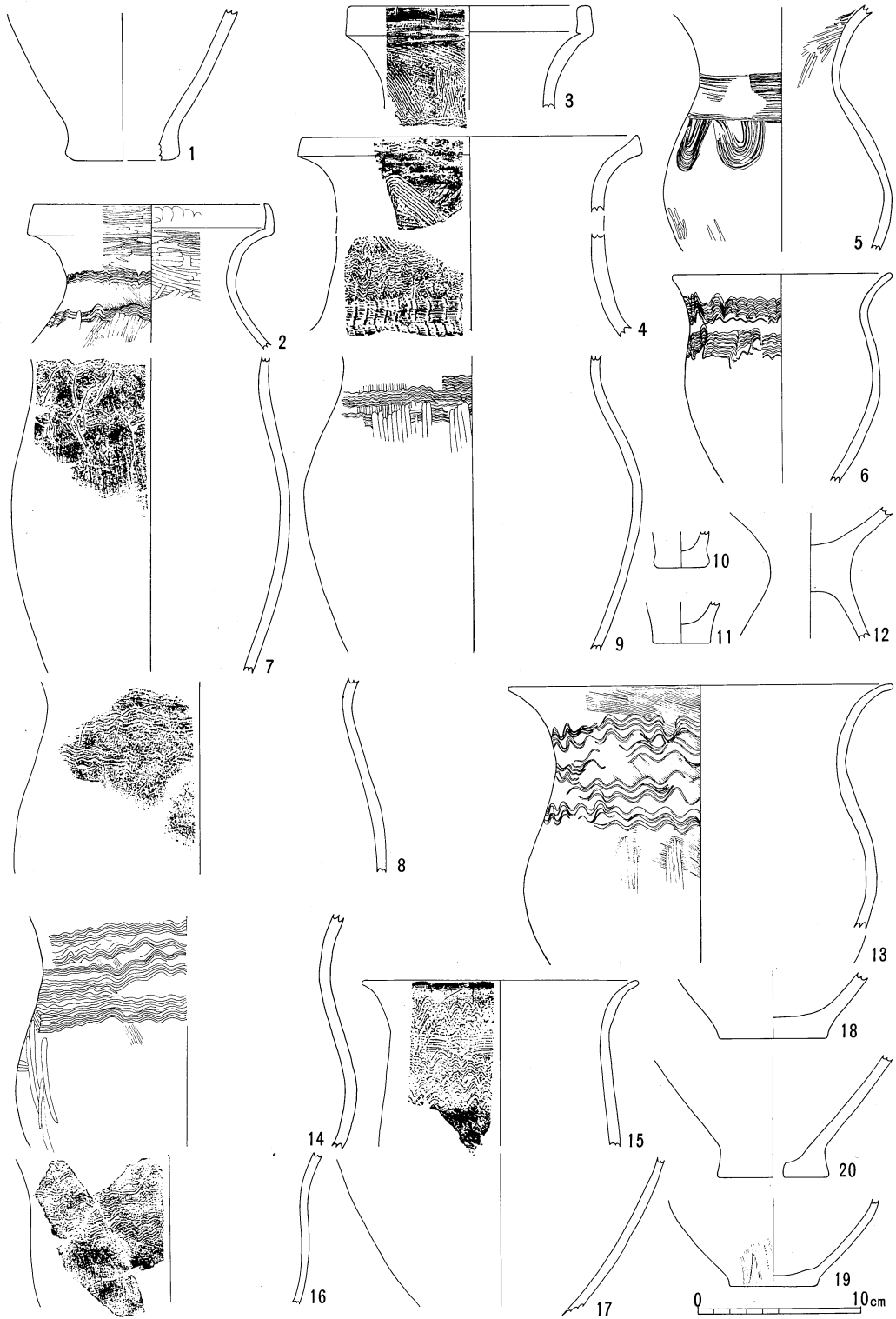
	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
437 [116] 18II DE58 2	甗	15.2 15.3 13.8 6.8		無文	口縁、横ナデ、横ハケ整形。 頸部、斜め・横ハケ整形。 体部、斜め・横ハケ整形、雑な斜めへラミガキ。 内面、斜め・横ハケ整形、横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。 焼成良好。 頸部から体部上半に煤付着。

遺構外

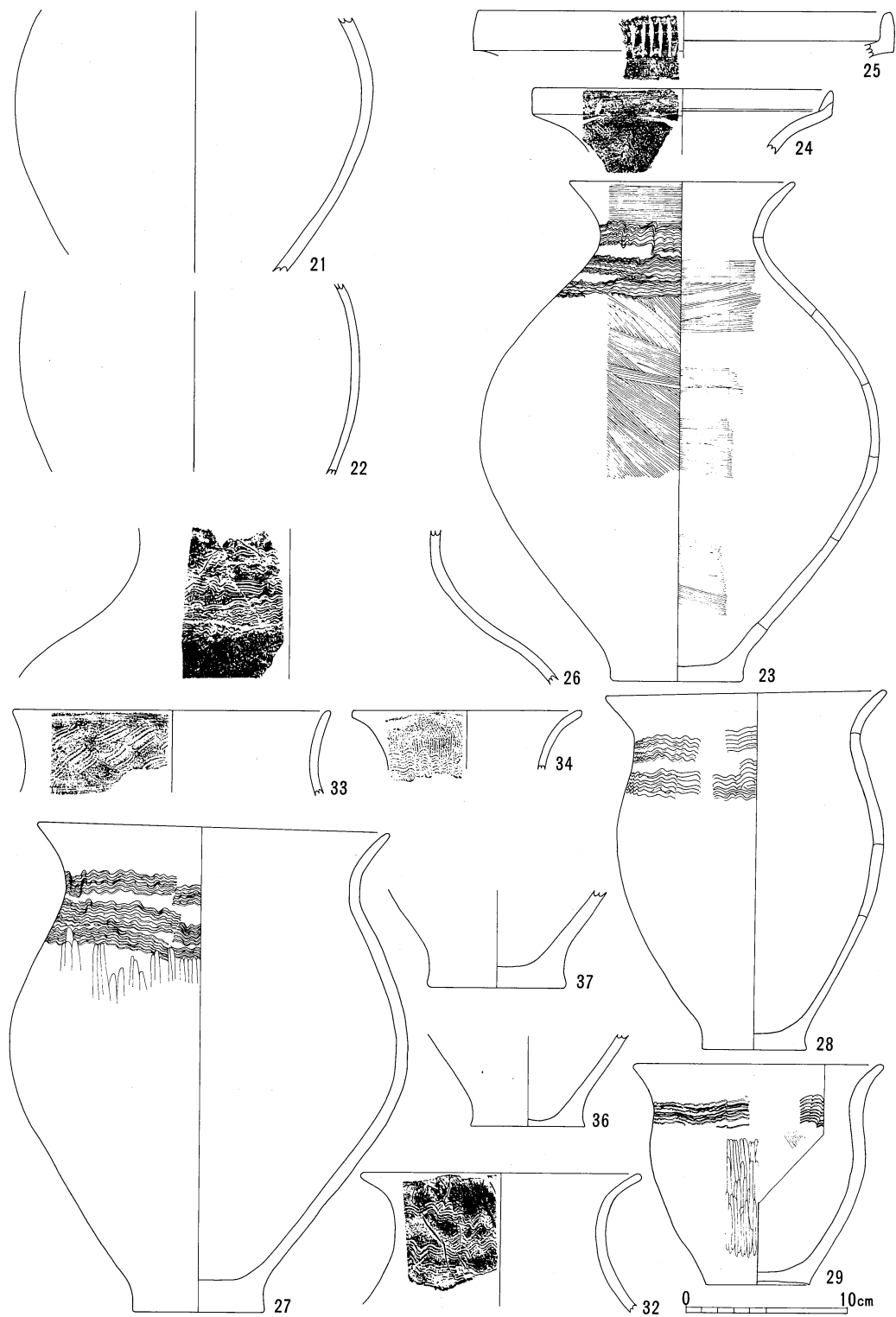
	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
438 [116] 18II CL48 15	壺	— — — 15.0		不明	外面、縦へラミガキ。 内面、剥離。	褐色。砂粒・2～3mmの小石を含む。焼成良好。
439 [116] 18II CK48 14	甗	14.5 (16.0) 12.3 6.4		頸部に5条の波状文2帯。	口縁、横ナデ。 頸部、横ハケ整形。 体部、縦・斜めハケ整形、縦へラミガキ。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。
440 [116] 18I BR60 13	甗	— — — 20.0		頸部から体部上半に6条の波状文2帯以上。	頸部、横ハケ整形。 体部、縦へラミガキ。 内面、横ハケ整形。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。体部に煤付着。
441 [116] 18II CK46 4	甗	19.9 — — 16.6		無文	口縁、横ナデ。 頸部、斜めハケ整形。 体部、斜めハケ整形。 内面、横・斜めハケ整形、雑な横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。

III区

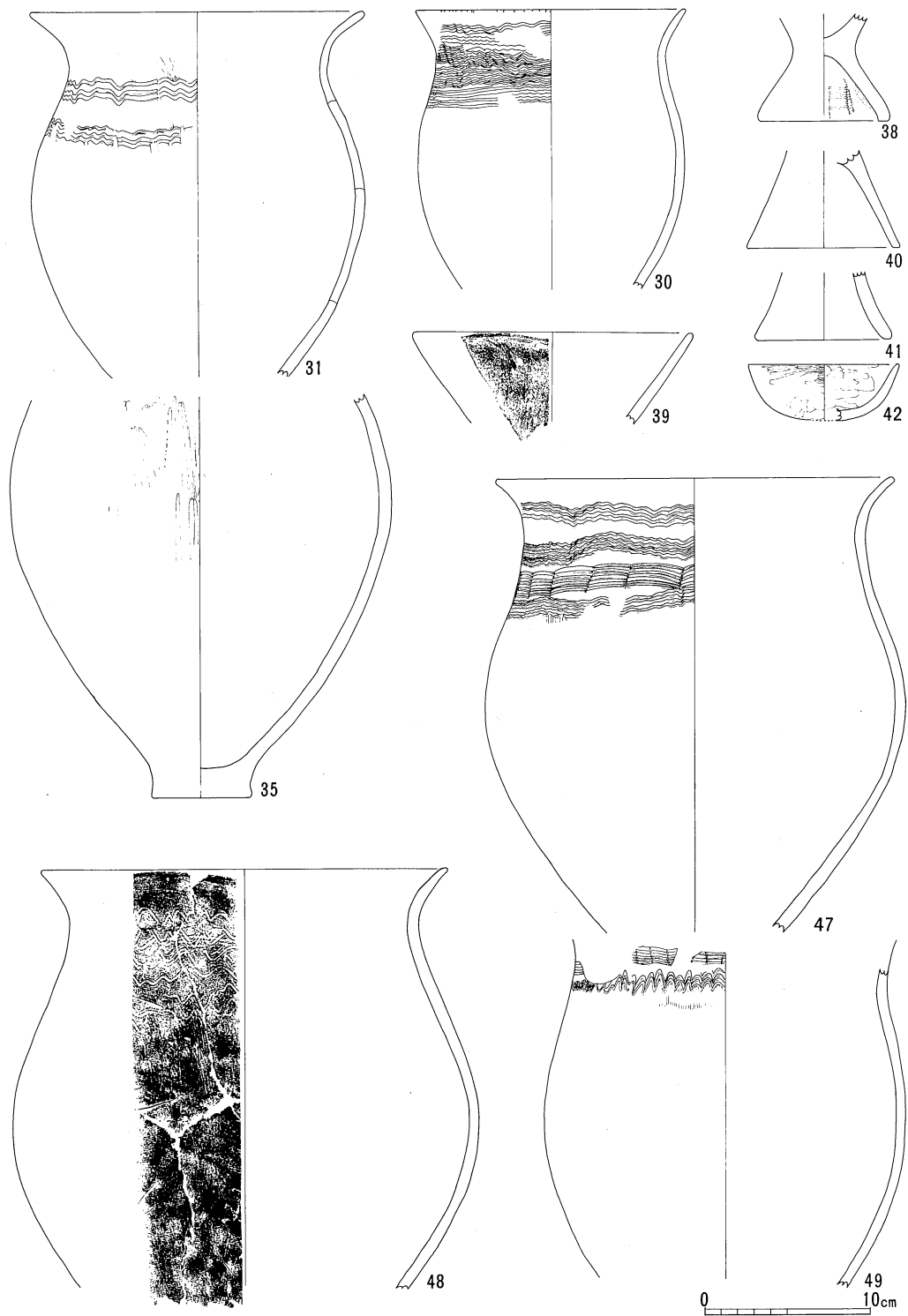
	器種	法量	土器図	文様	技法	備考
442 [116] 18III CU57 1	壺	15.5 — — —		口縁段部に縄文、その上に5条の波状文1帯、ボタン状貼り付け文5個、頸部に簾状文1帯以上。	口縁、横ナデ、横へラミガキ。 頸部、斜めハケ整形、横へラミガキ。 内面、横へラミガキ。	褐色。砂粒を含む。焼成良好。段部に小円孔2対を穿つ。



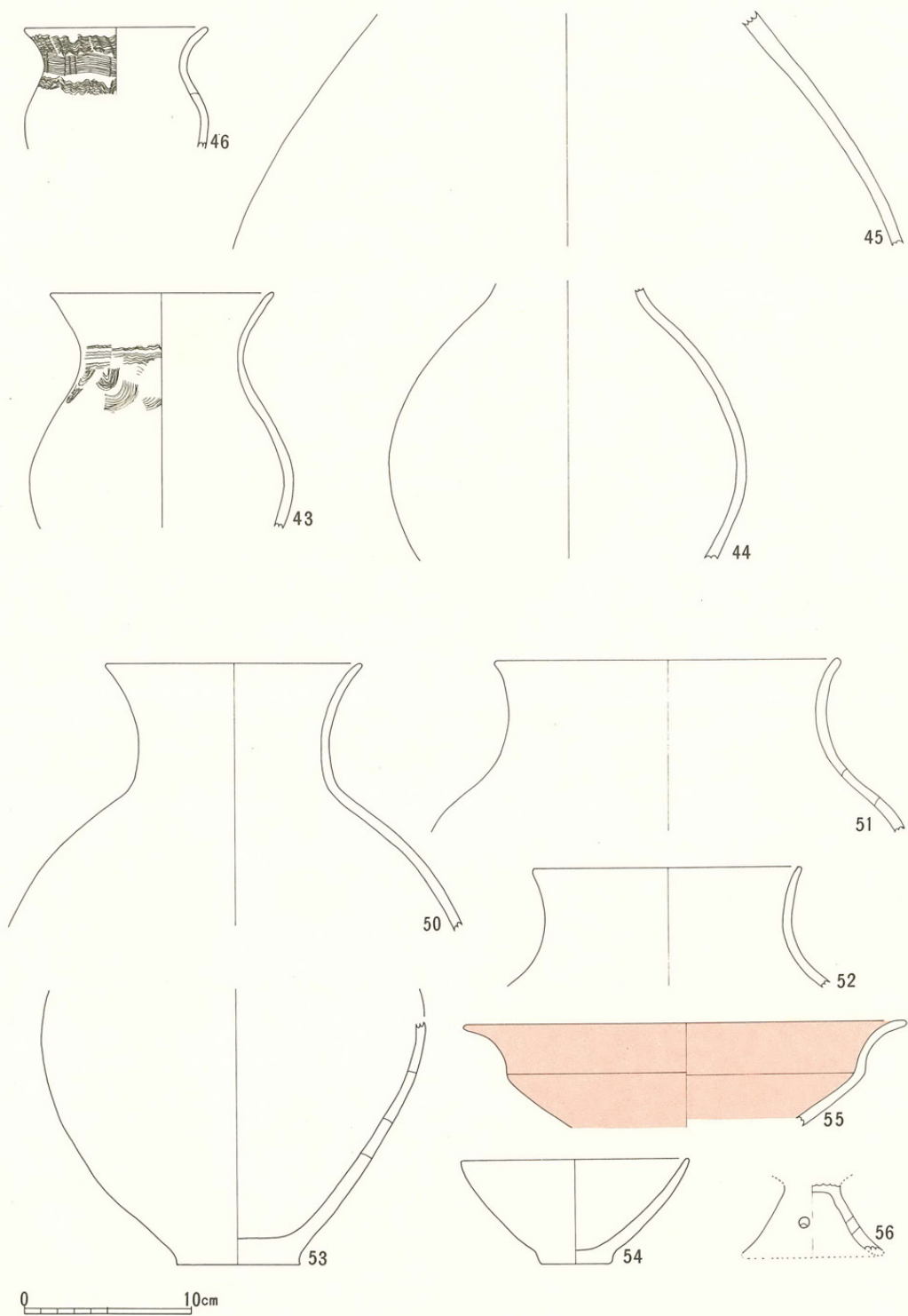
第 82 图 1 号住居址 (1) · 3 号住居址 (2~12) · 4 号住居址 (13~20) 出土土器实测图(1/4)



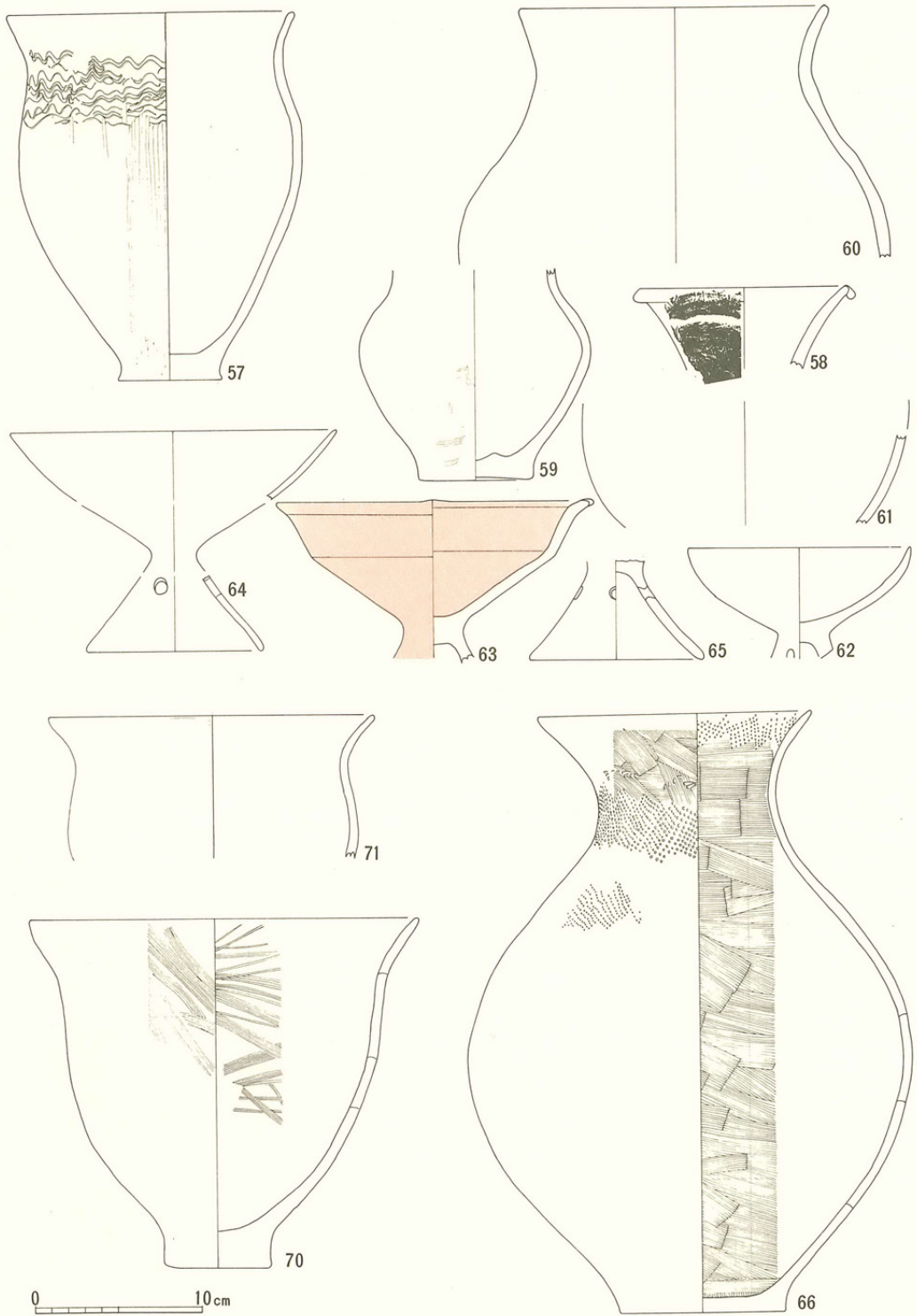
第 83 图 5 号住居址 (21·22)·6 号住居址出土土器实测图 (1/4)



第 84 图 6 号住居址 (30·31·35·38~42) · 7 号住居址 (47~49) 出土土器实测图 (1/4)

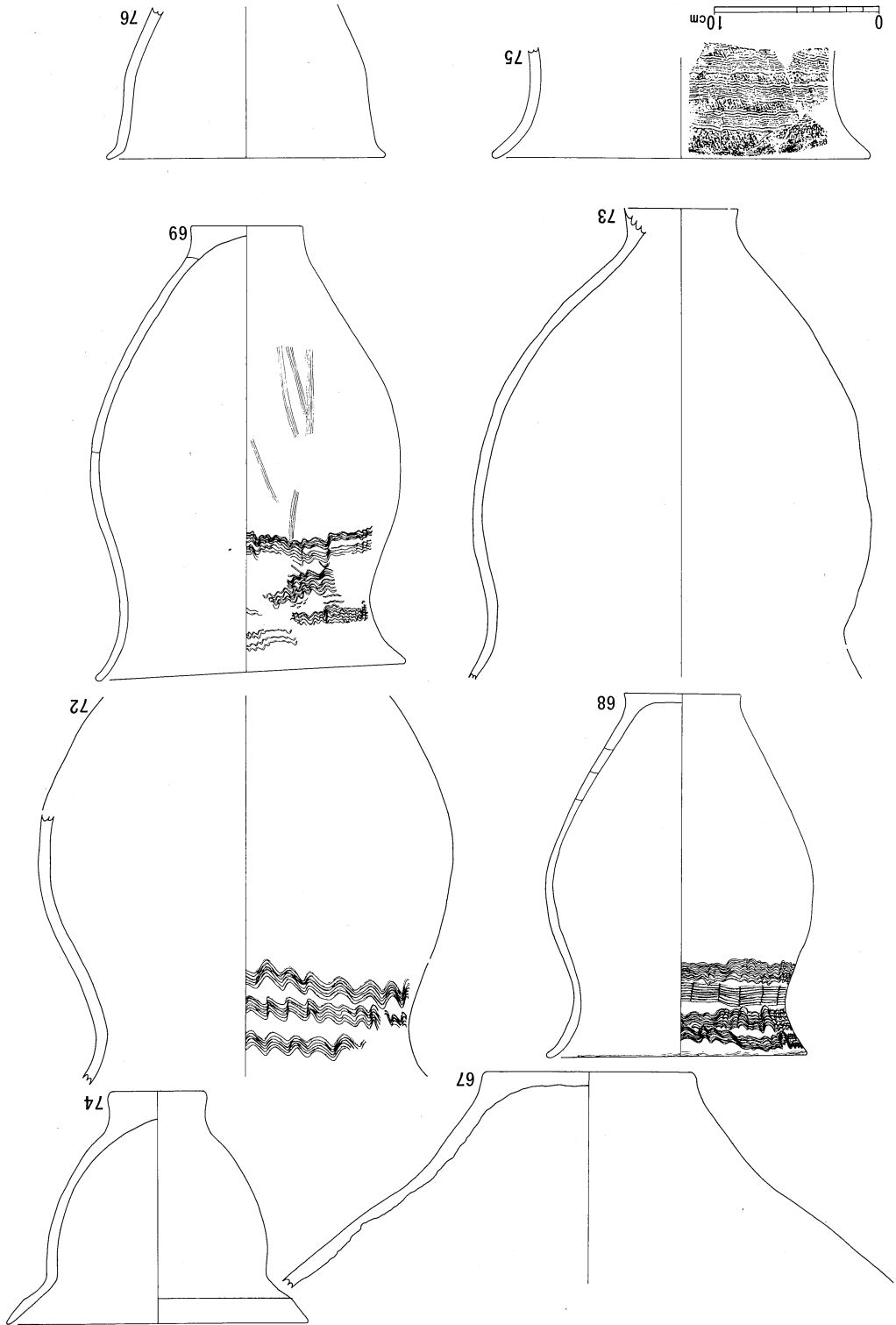


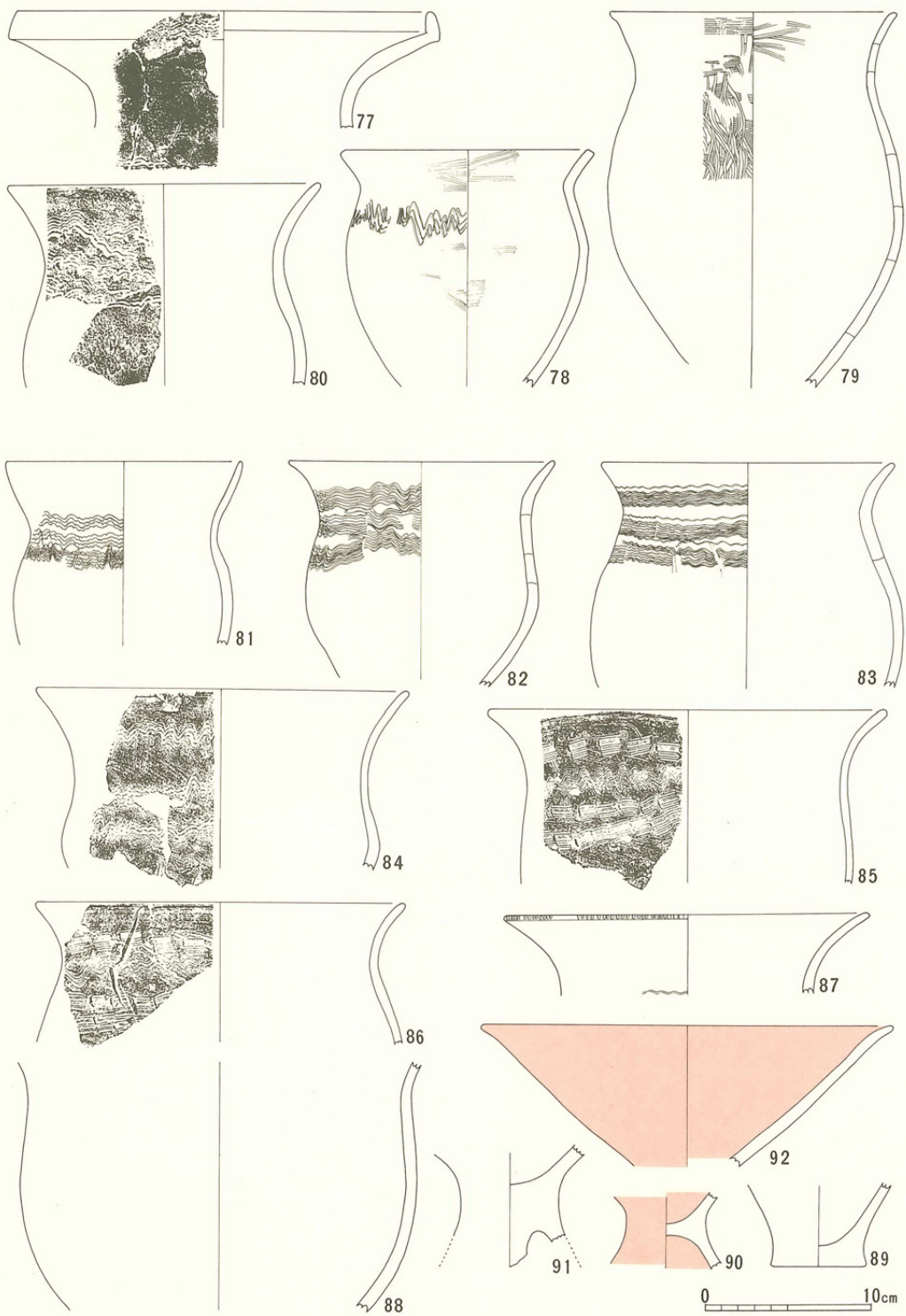
第 85 图 7号住居址(43~46)・8号住居址(50~56)出土土器实测图(1/4)



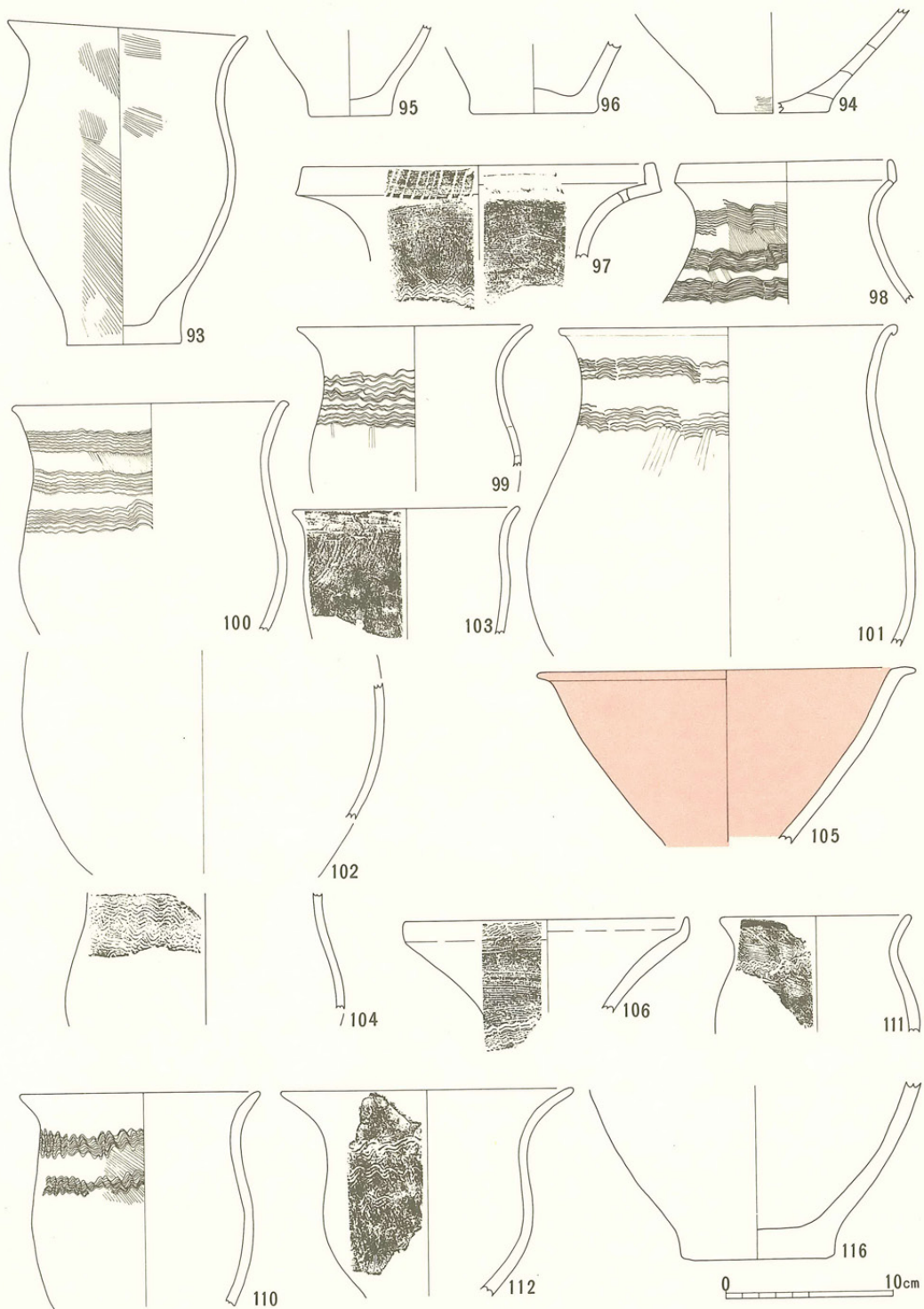
第 86 图 9 号住居址 (57) · 10 号住居址 (58~65) · 11 号住居址 (66·70·71) 出土土器实测图 (1/4)

第 87 图 11 号住居址 (67~69·72~74)·12 号住居址 (75·76) 出土土器美测图 (1/4)

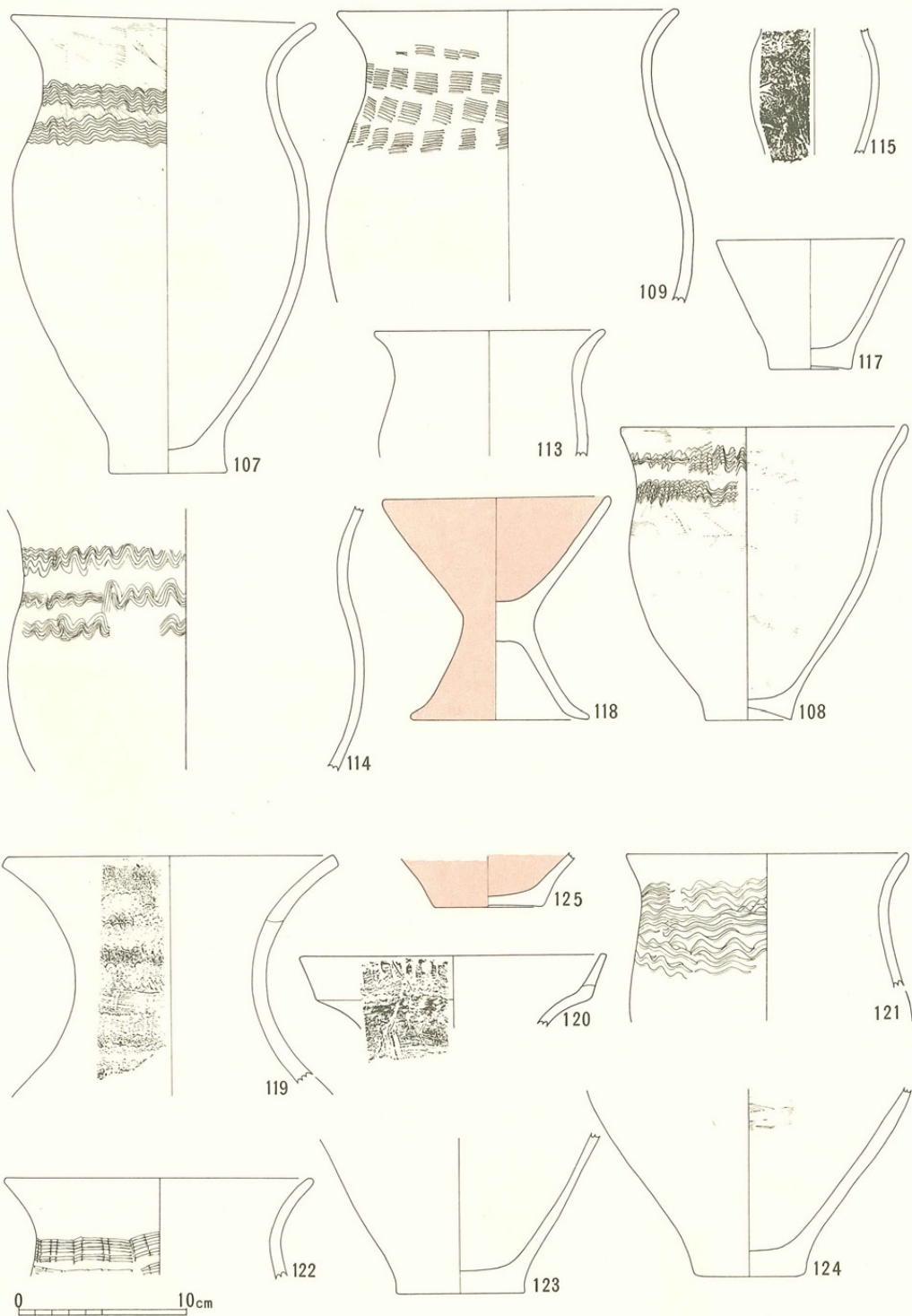




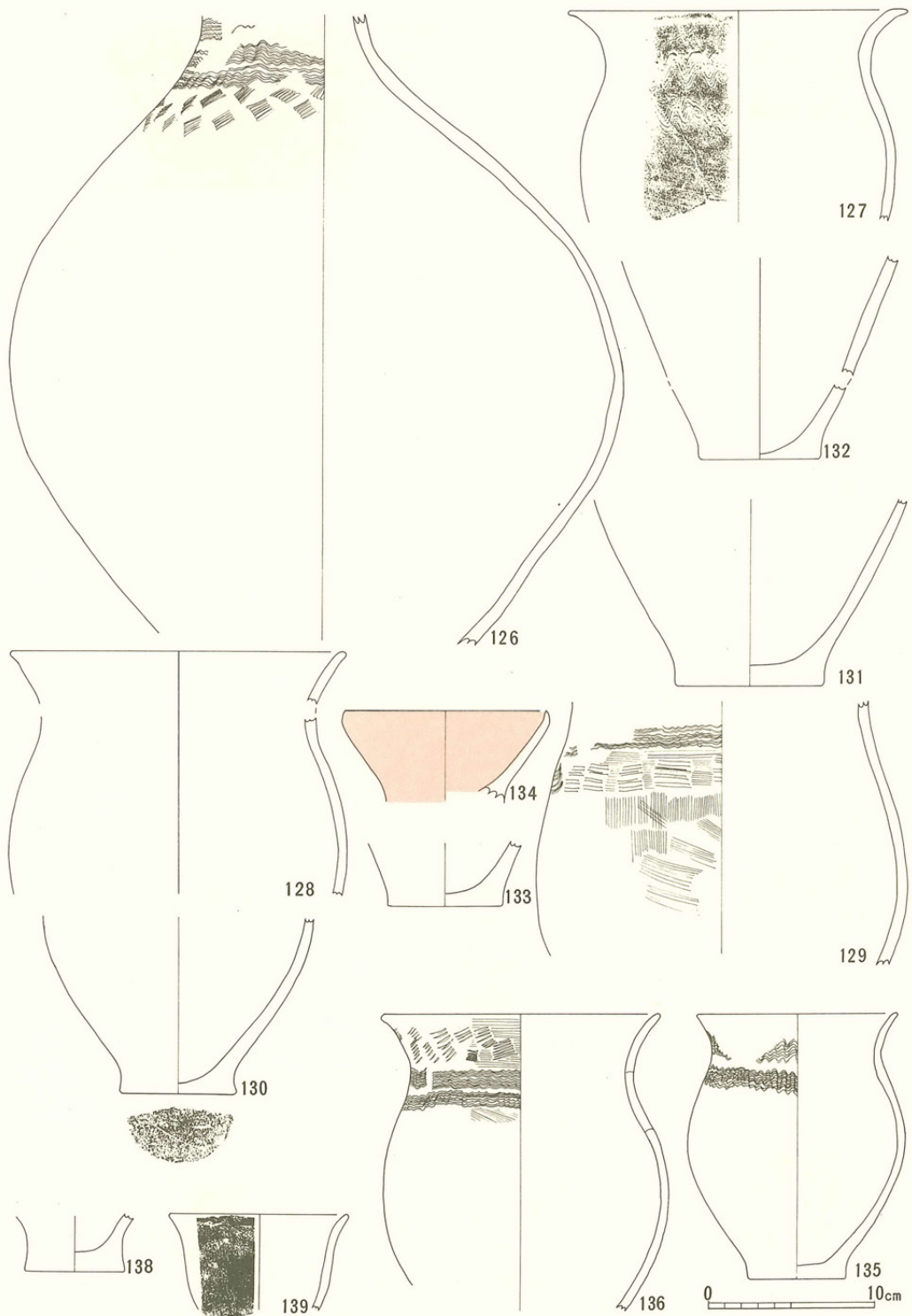
第 88 图 14 号住居址 (77~80)・15 号住居址 (81~92) 出土土器实测图 (1/4)



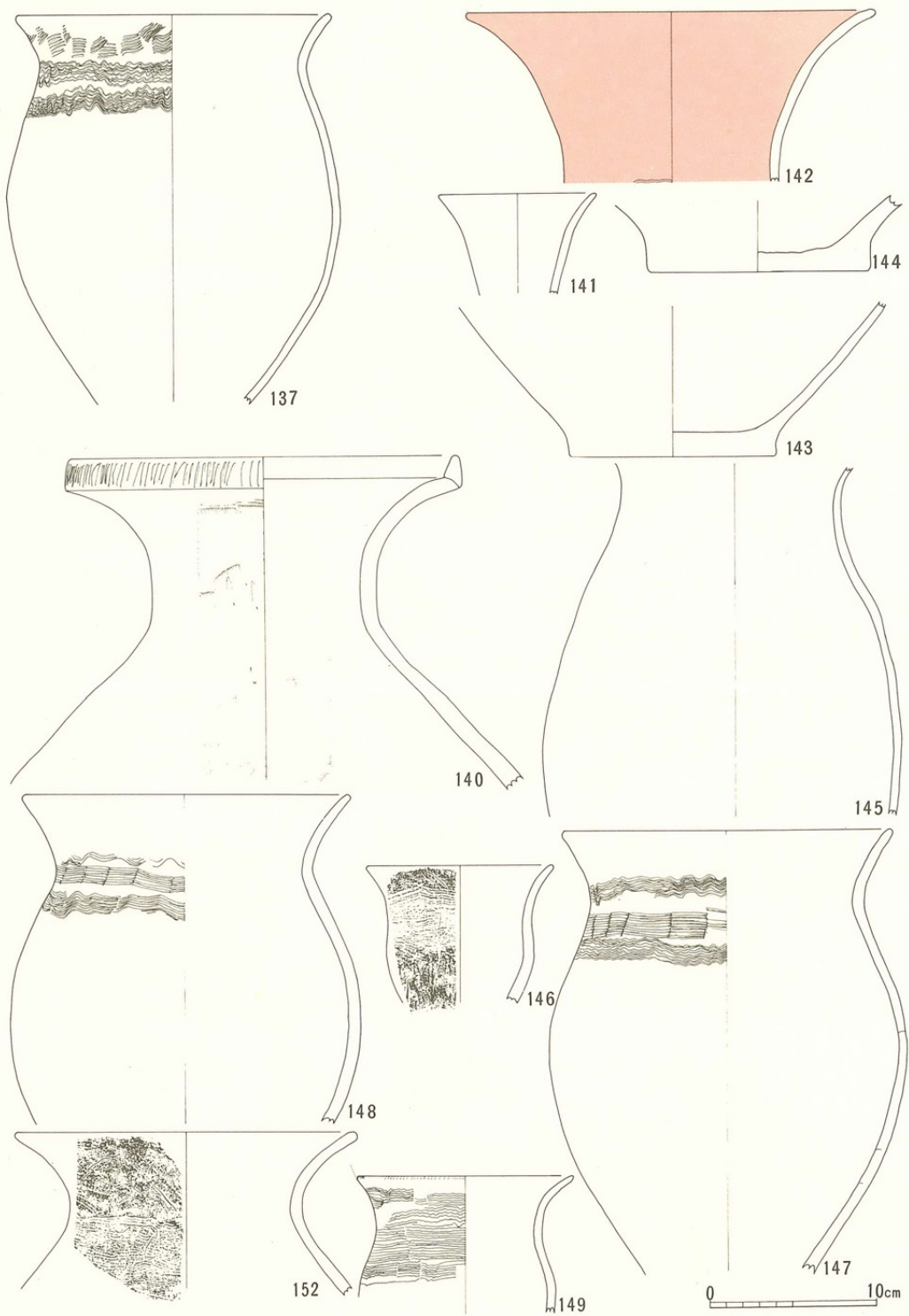
第 89 图 16号住居址 (93~96) · 17号住居址 (97~105) · 19号住居址 (106 · 110~112 · 116)
出土土器实测图 (1/4)



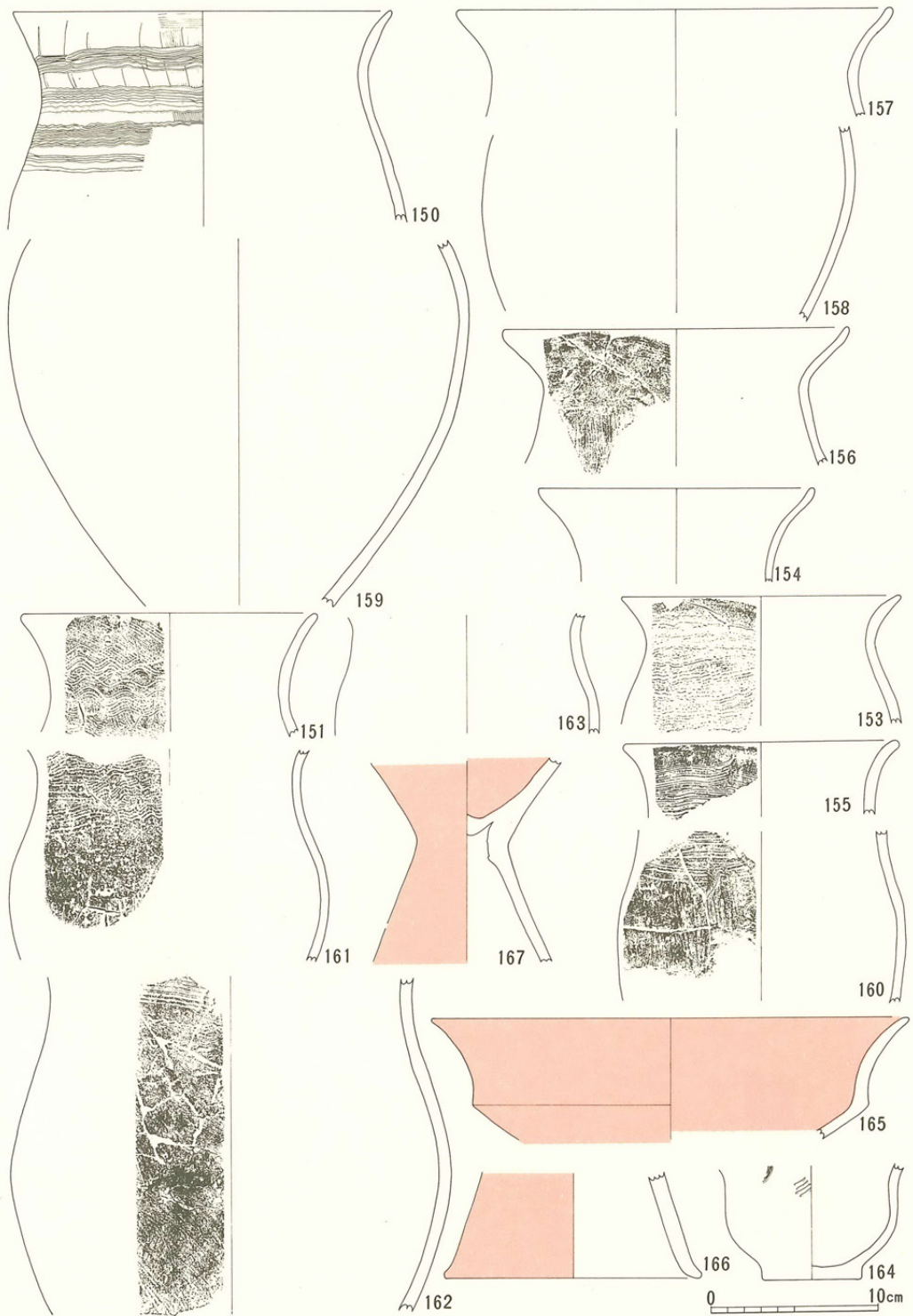
第90图 19号住居址(107~109·113~115·117·118)·20号住居址(119~125)出土土器实测图(1/4)



第 91 图 21 号住居址 (126~134) · 22 号住居址 (135·136·138·139) 出土土器实测图 (1/4)



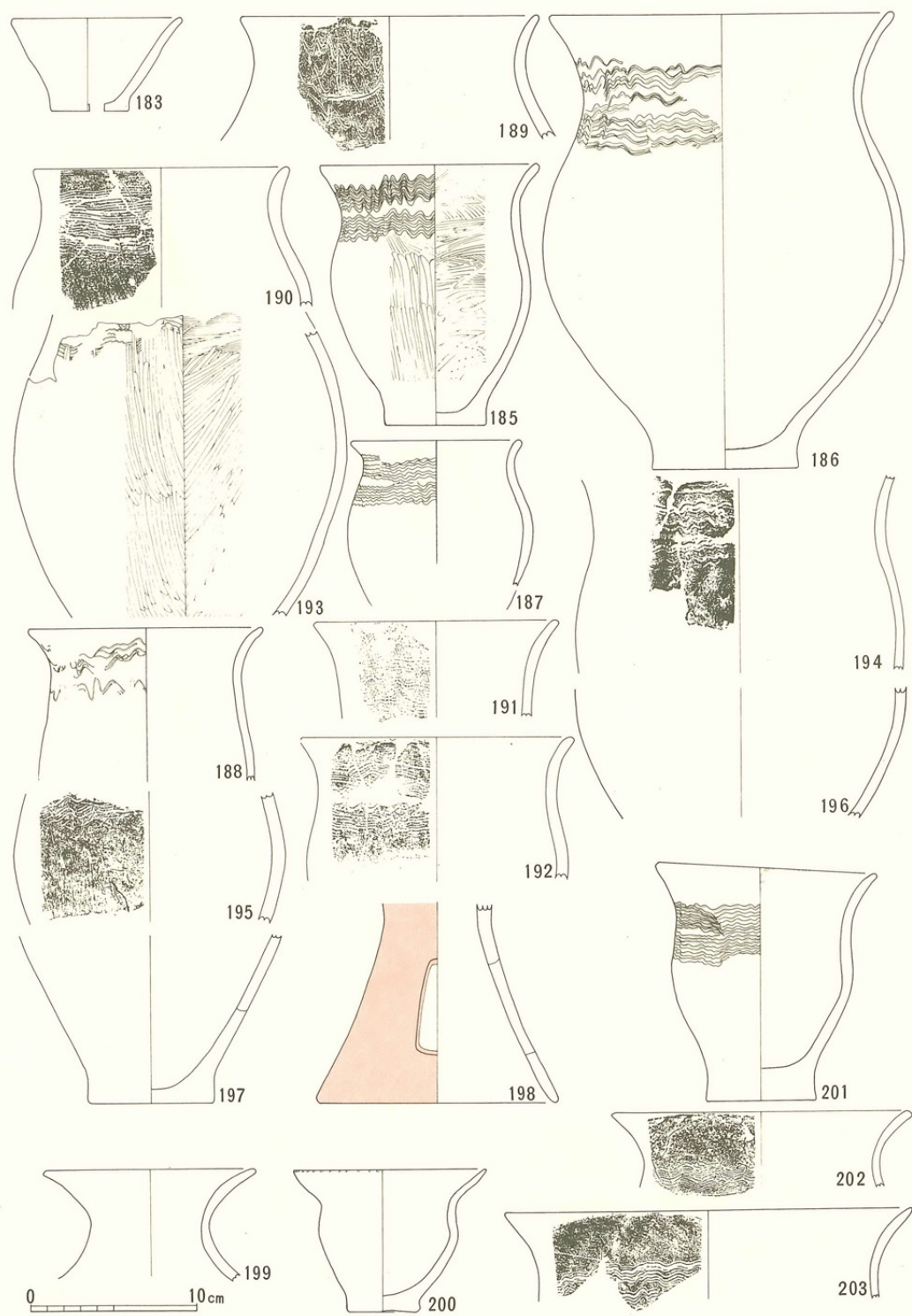
第 92 图 22号住居址 (137) · 24号住居址出土土器実测图 (1/4)



第 93 图 24 号住居址出土土器实测图 (1/4)



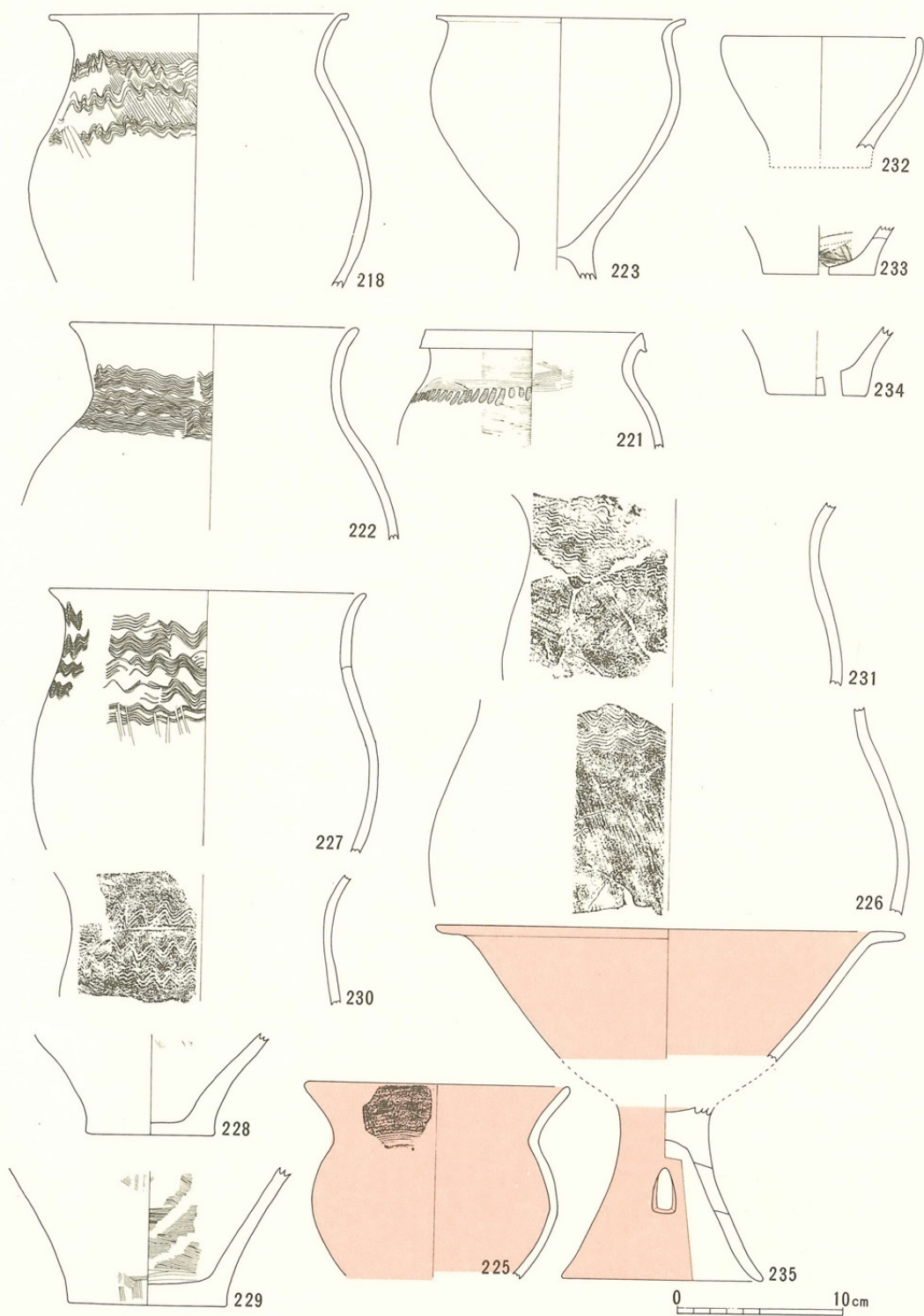
第 94 图 28 号住居址 (168~171) · 29 号住居址 (172·173) · 31 号住居址 (174~179) · 32 号住居址 (180~182·184) 出土土器实测图(1/4)



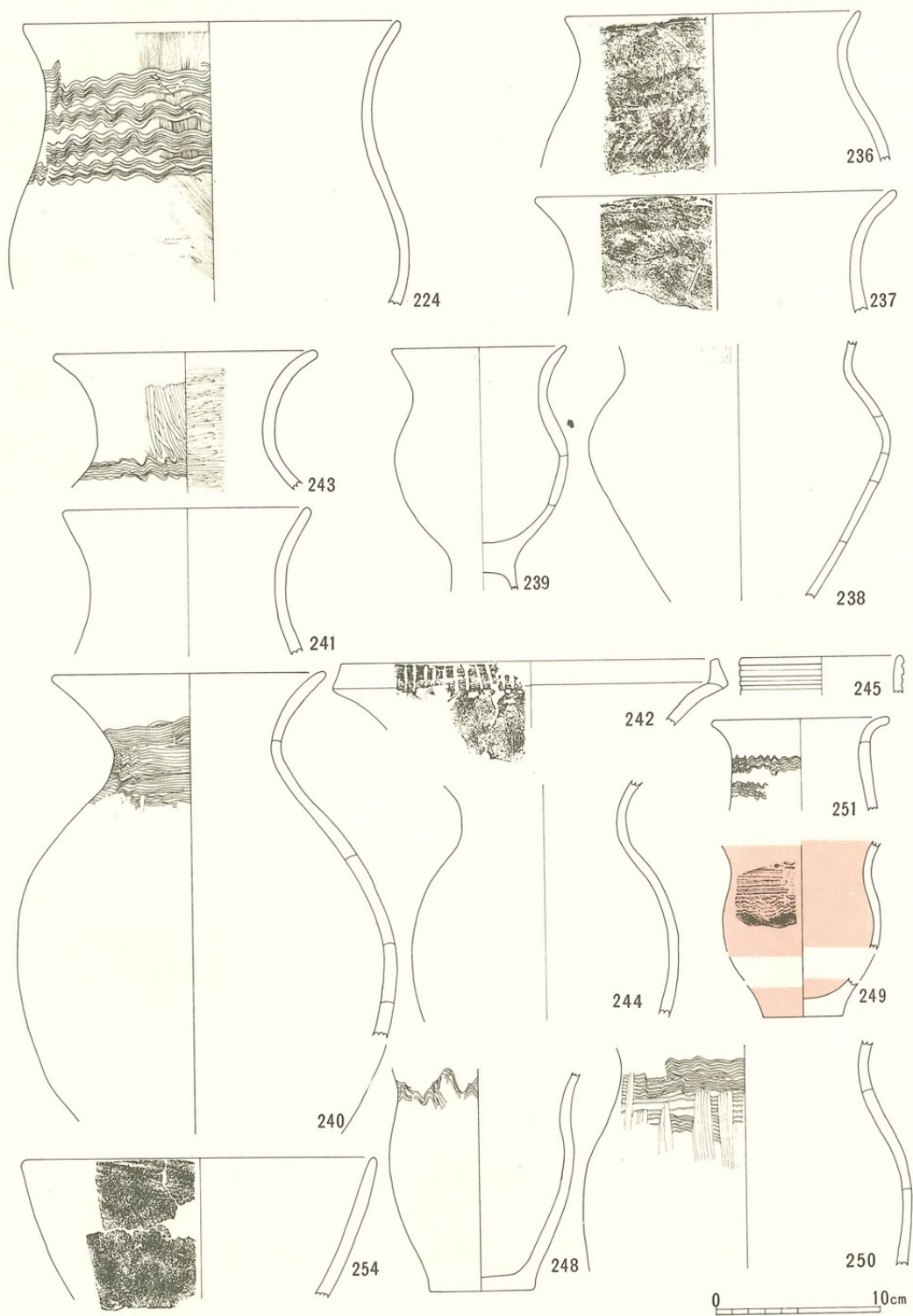
第 95 图 32号住居址 (183) · 33号住居址 (185~198) · 34号住居址 (199~203) 出土土器实测图 (1/4)



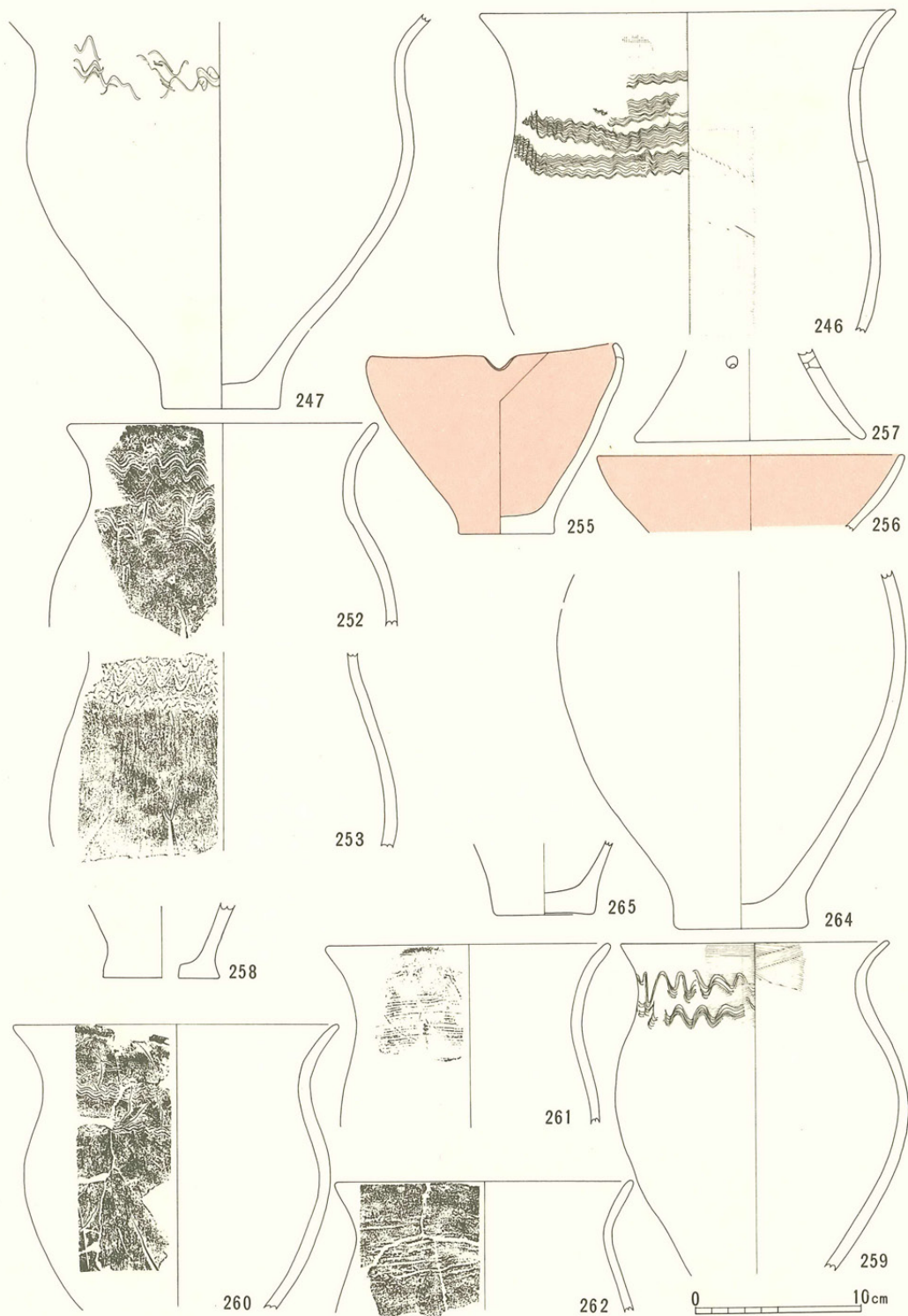
第 96 图 34号住居址 (204~208) · 35号住居址 (209~213) · 36号住居址 (214~217) · 37号住居址 (219·220) 出土土器实测图(1/4)



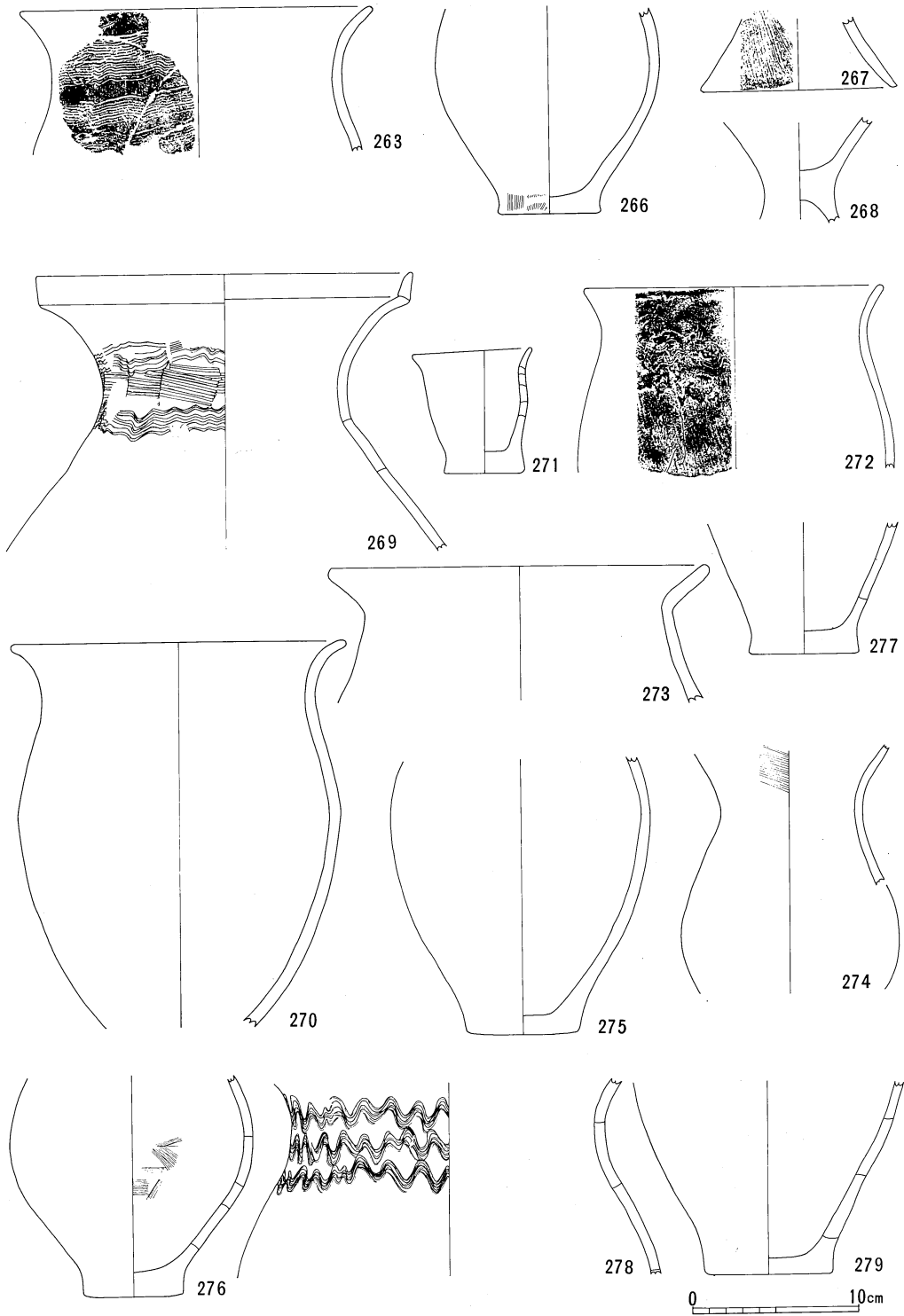
第 97 图 37号住居址(218)·39号住居址(221·222)·41号住居址(223)·43号住居址出土土器实测图(1/4)



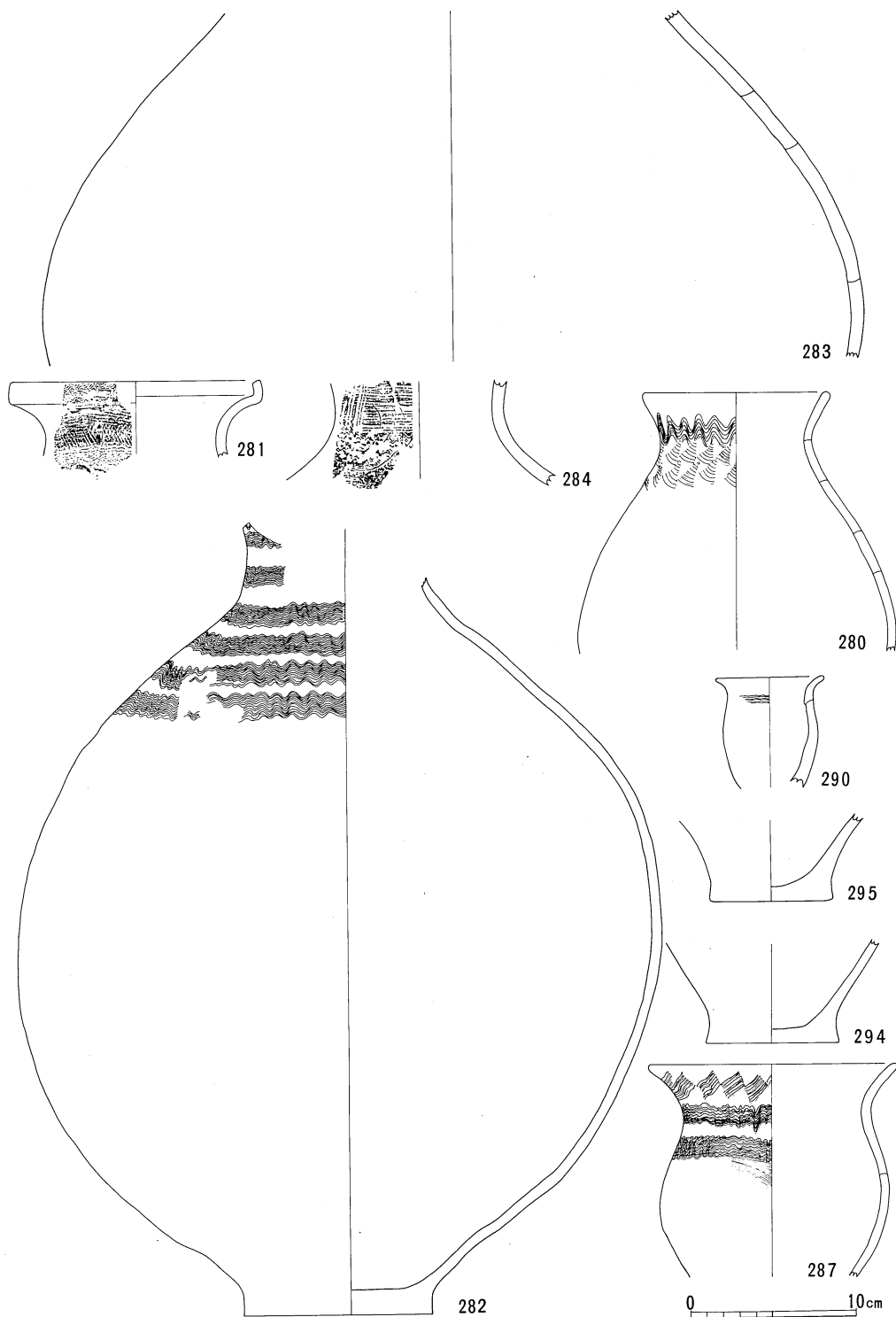
第 98 图 43号住居址 (224) · 44号住居址 (236~239) · 46号住居址 (240~245·248~251·254)
出土土器实测图(1/4)



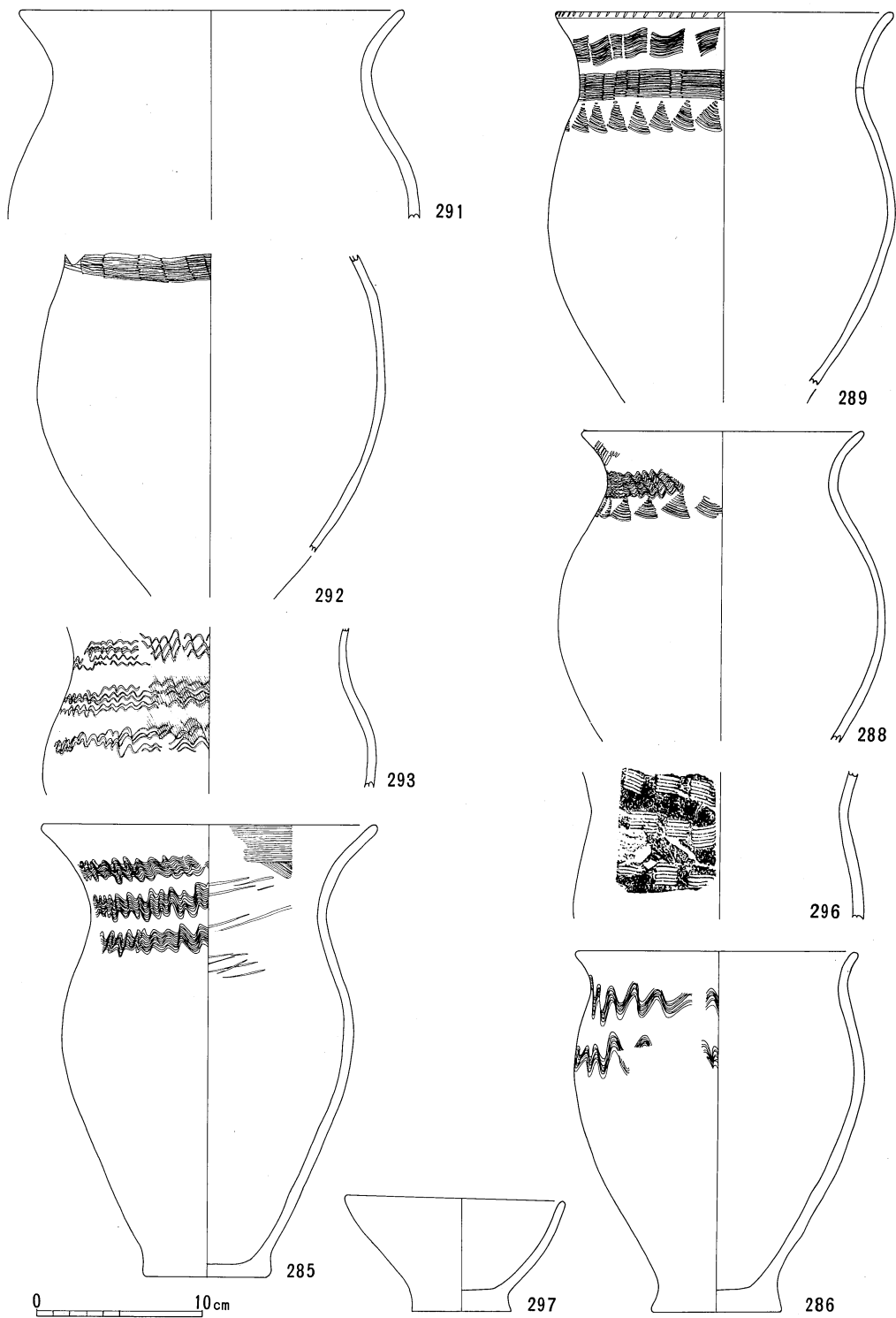
第 99 图 46号住居址 (246·247·252·253·255~257)·48号住居址 (258)·49号住居址 (259~262·264·265) 出土土器美测图 (1/4)



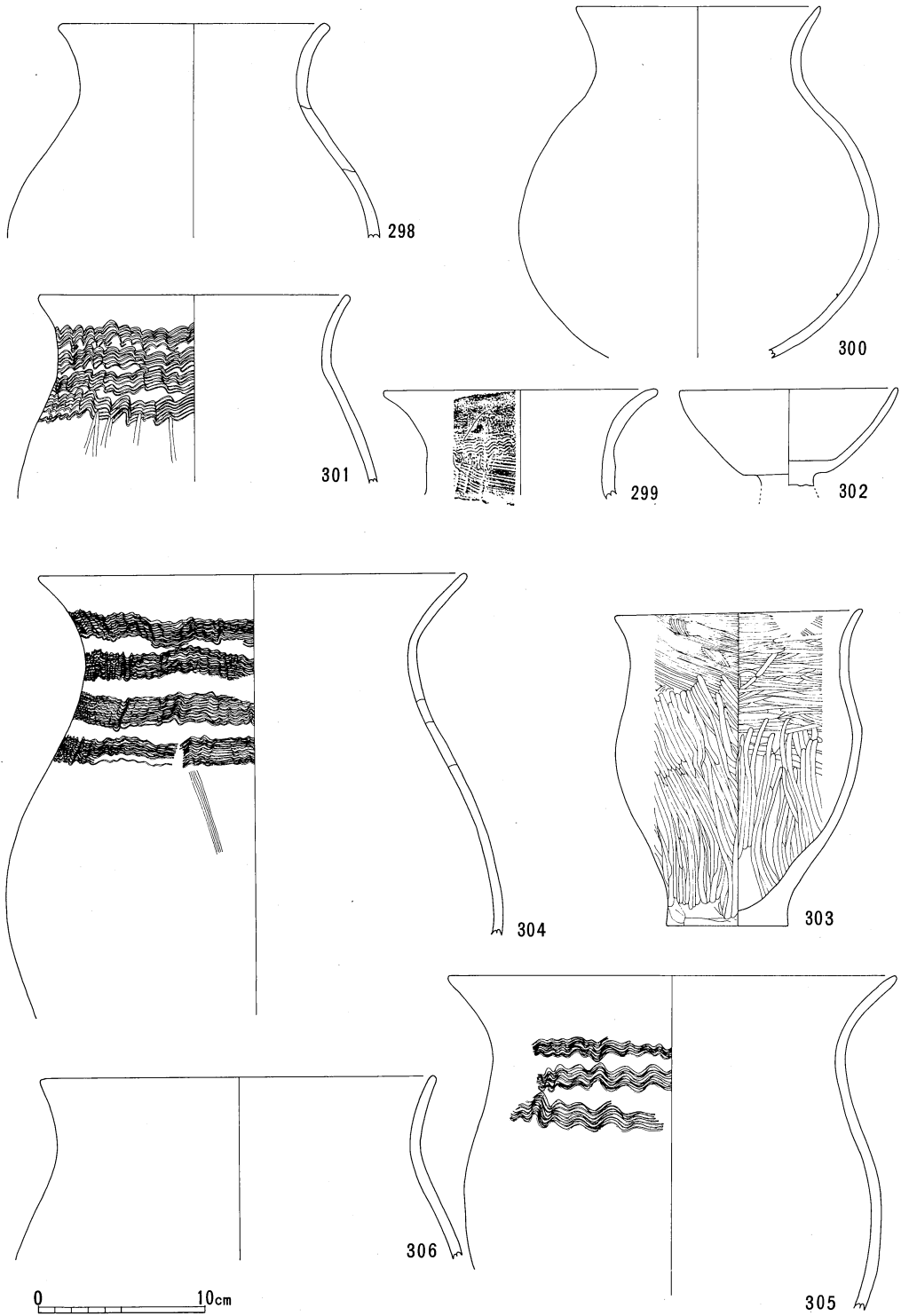
第 100 图 49号住居址 (263) · 50号住居址 (266~268) · 51号住居址 (269~279) 出土土器实测图 (1/4)



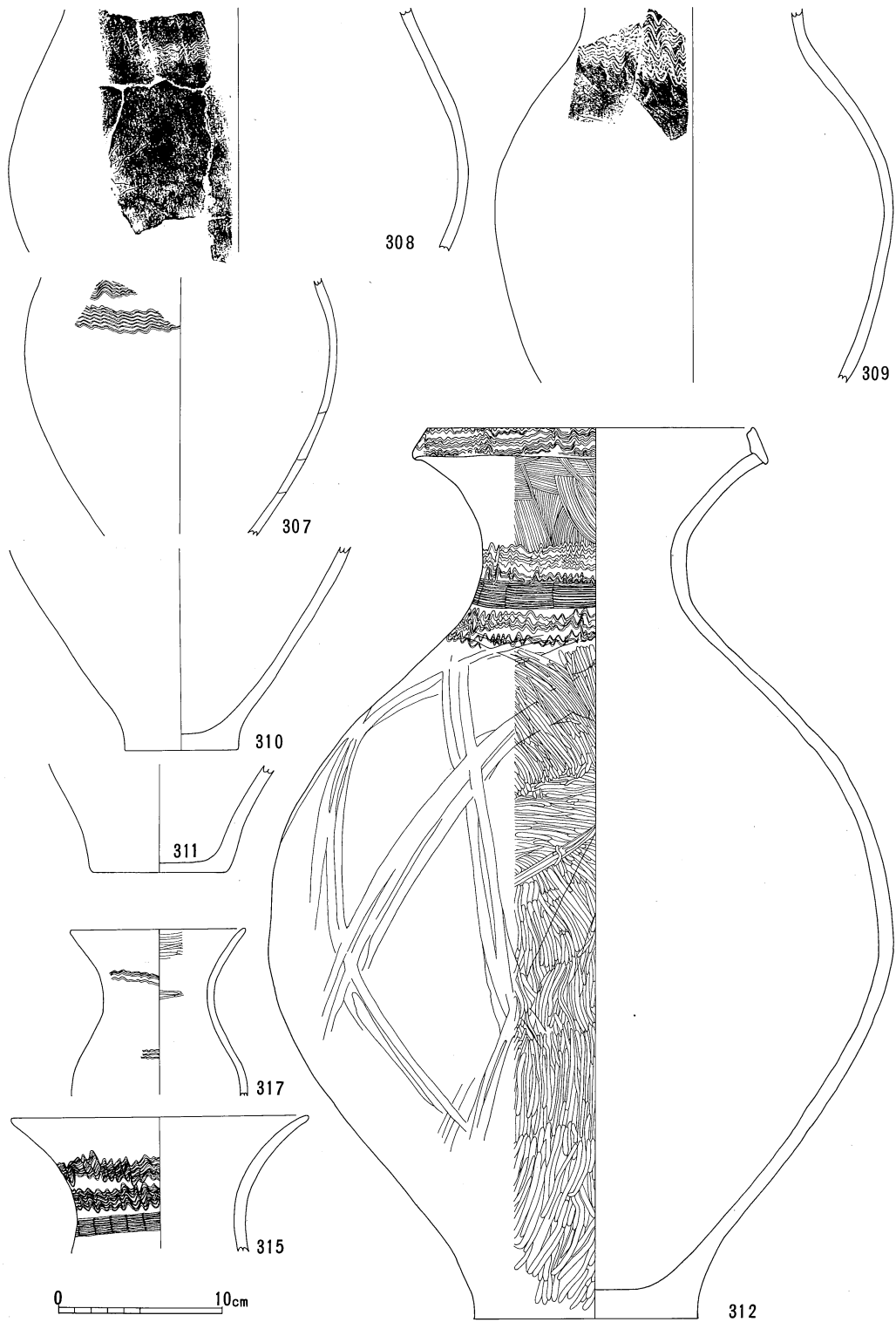
第 101 图 55号住居址出土土器实测图 (1/4)



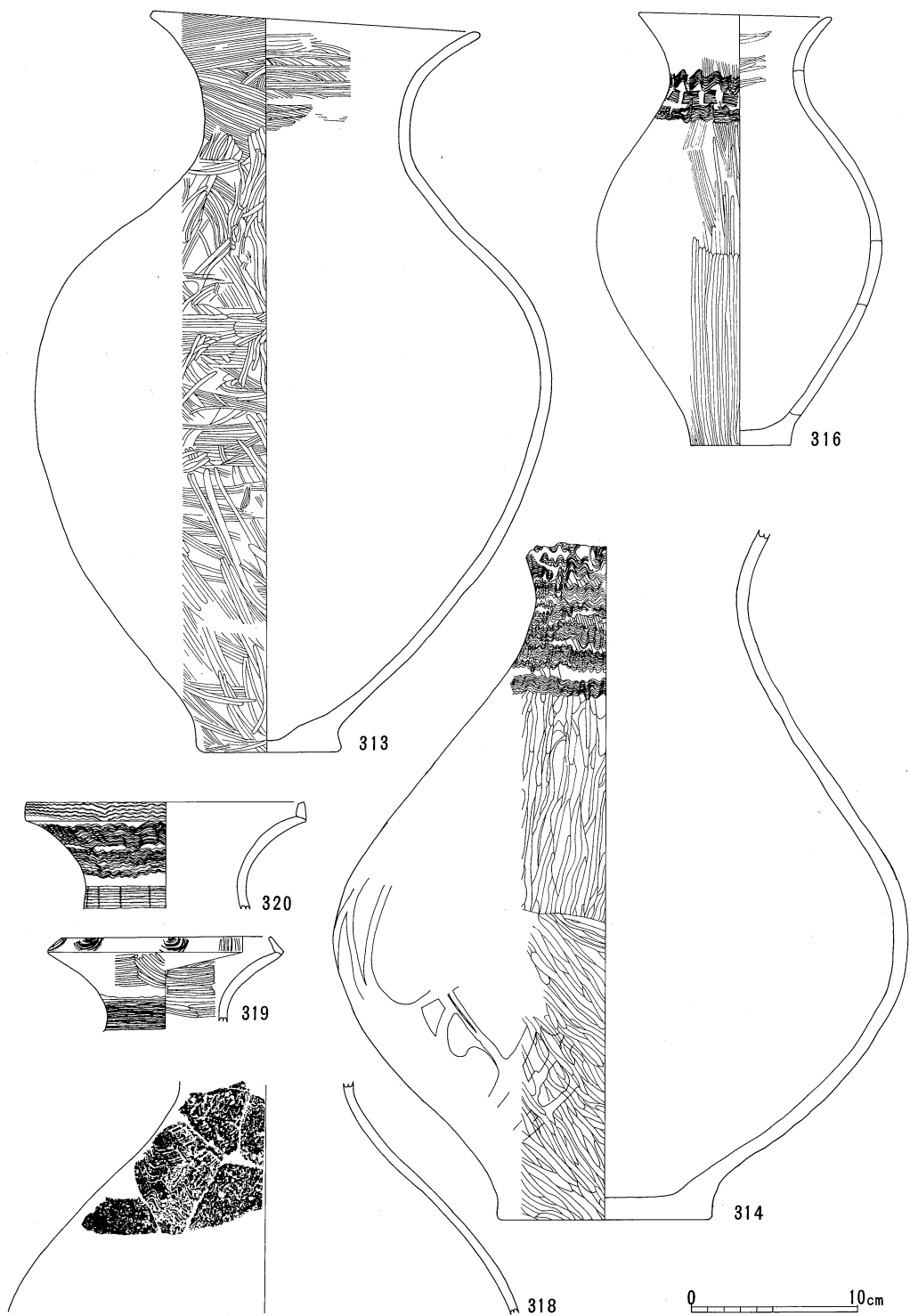
第 102 图 55号住居址出土土器实测图 (1/4)



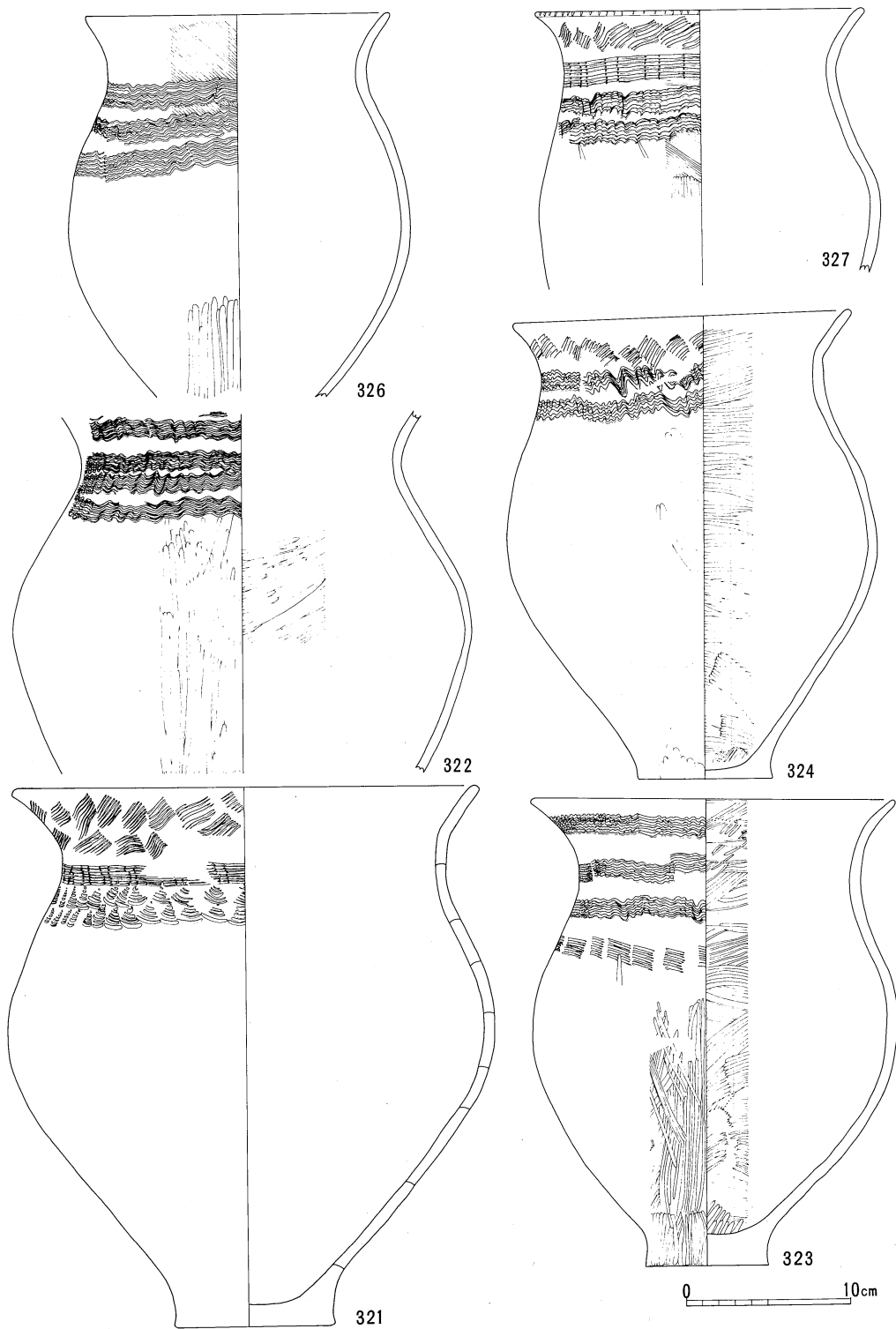
第 103 图 56号住居址(298)・57号住居址(299~302)・58号住居址(303~306)出土土器実測図(1/4)



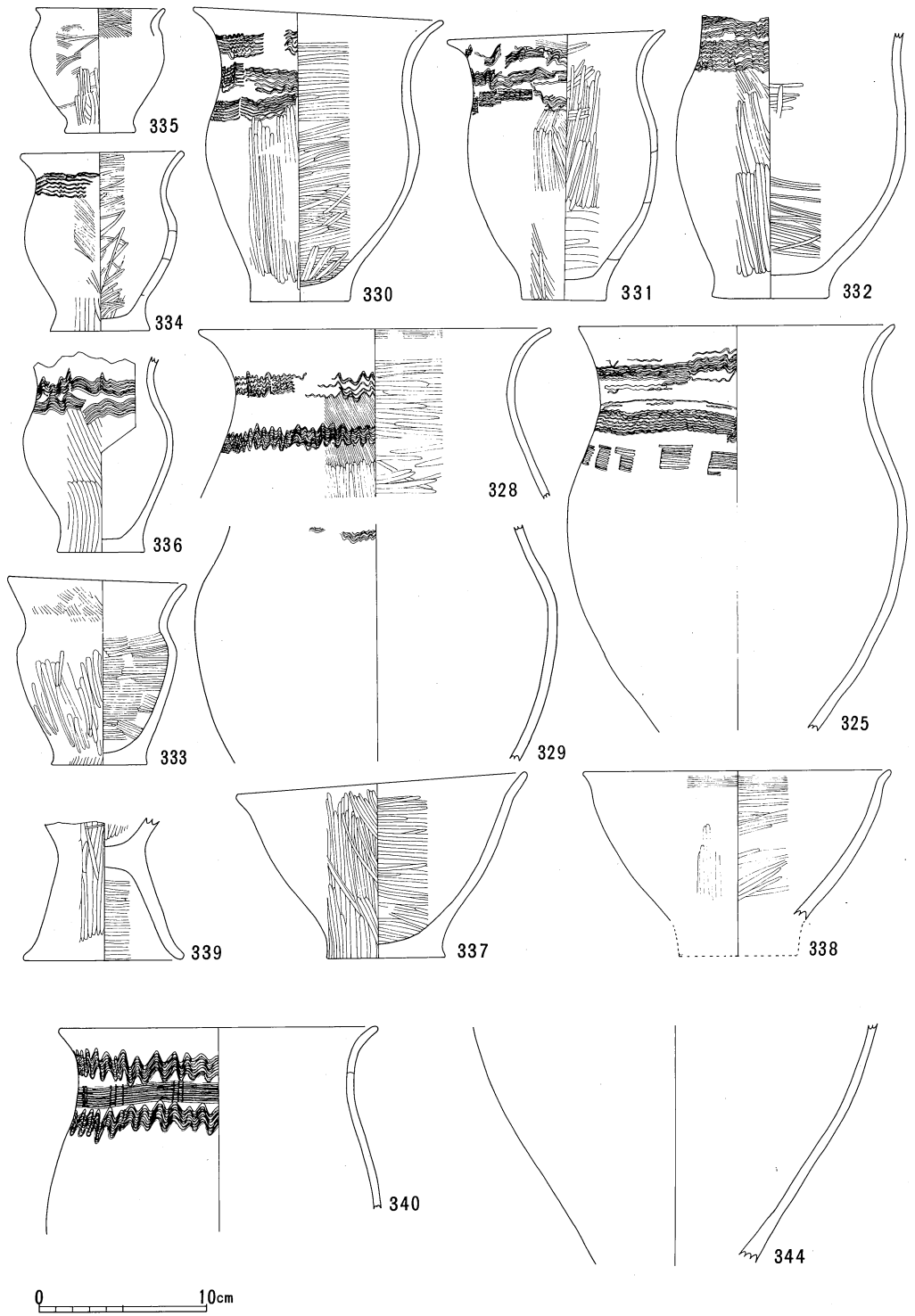
第 104 图 58号住居址 (307~311) · 59号住居址 (312·315·317) 出土土器实测图 (1/4)



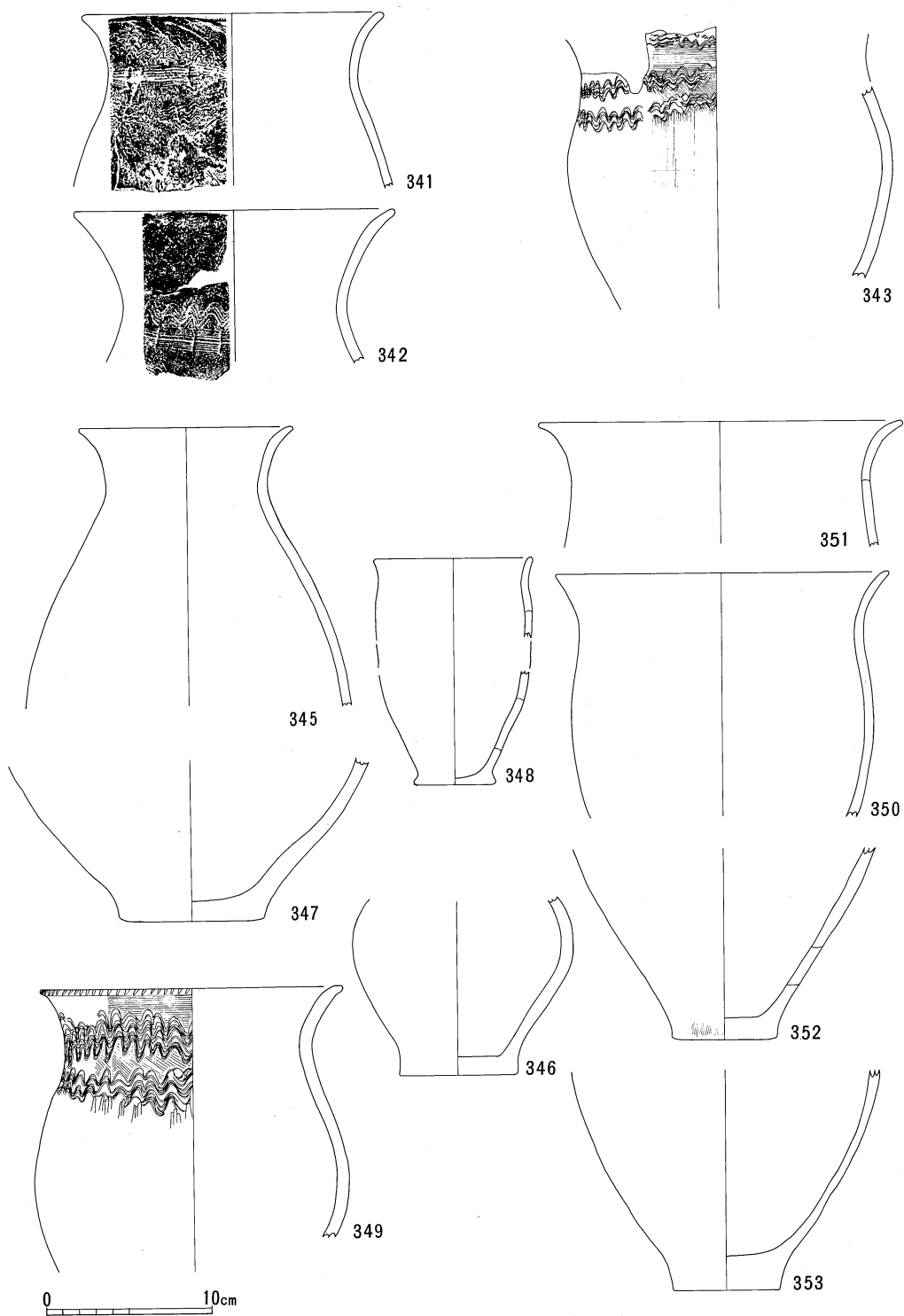
第 105 图 59号住居址出土土器实测图 (1/4)



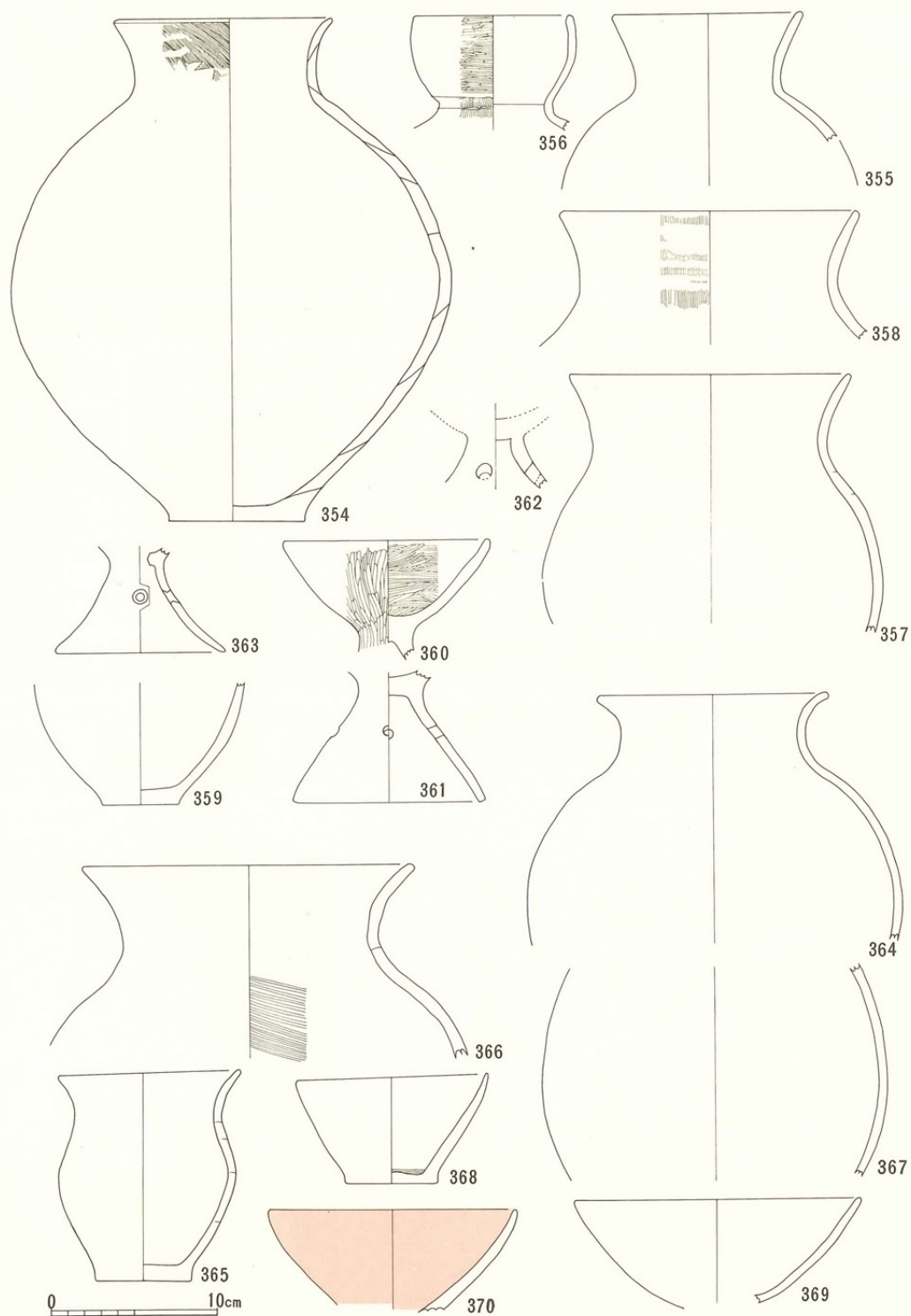
第 106 图 59号住居址出土土器实测图 (1/4)



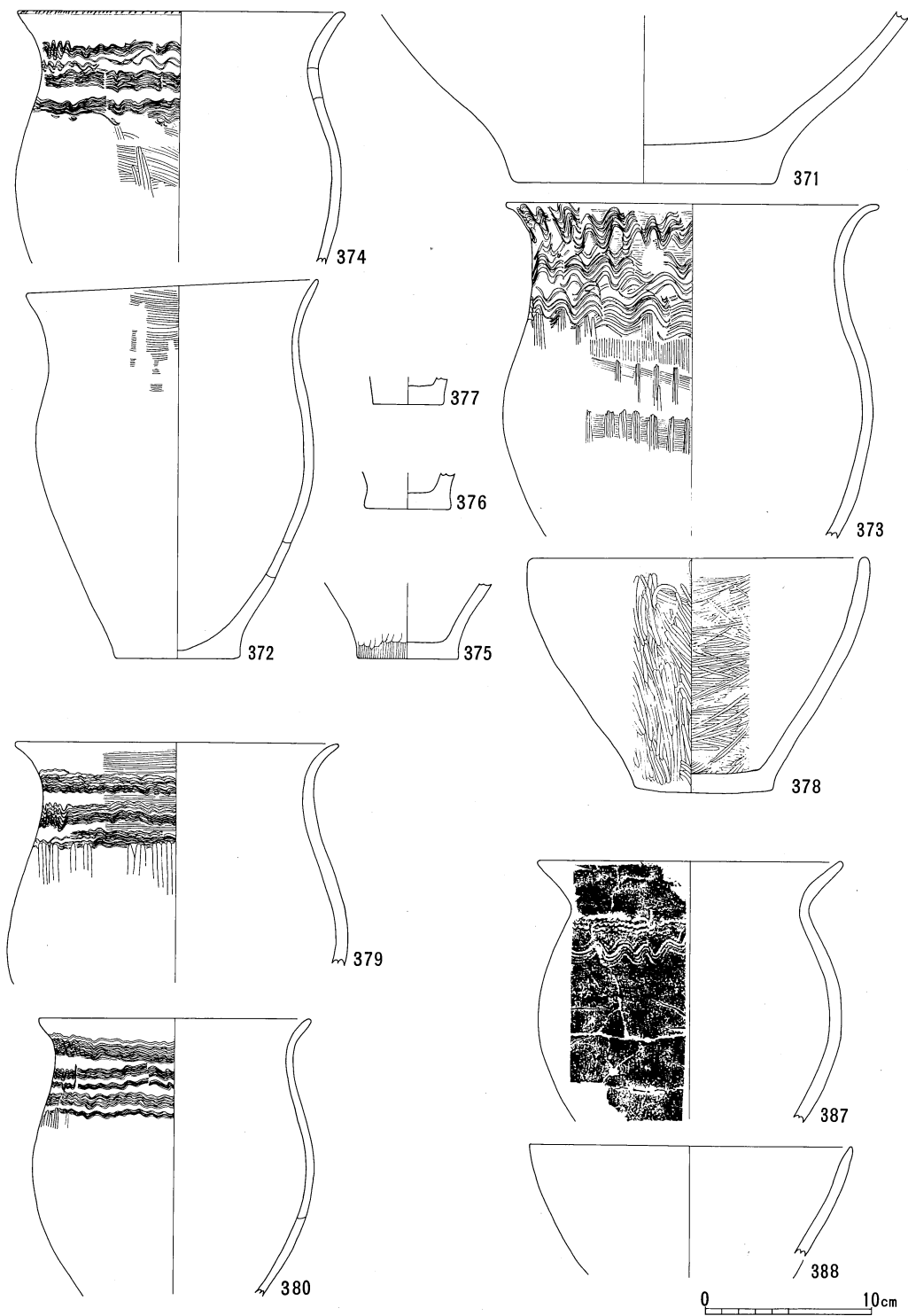
第 107 图 59号住居址(325·328~339)·60号住居址(340·344)·出土土器实测图(1/4)



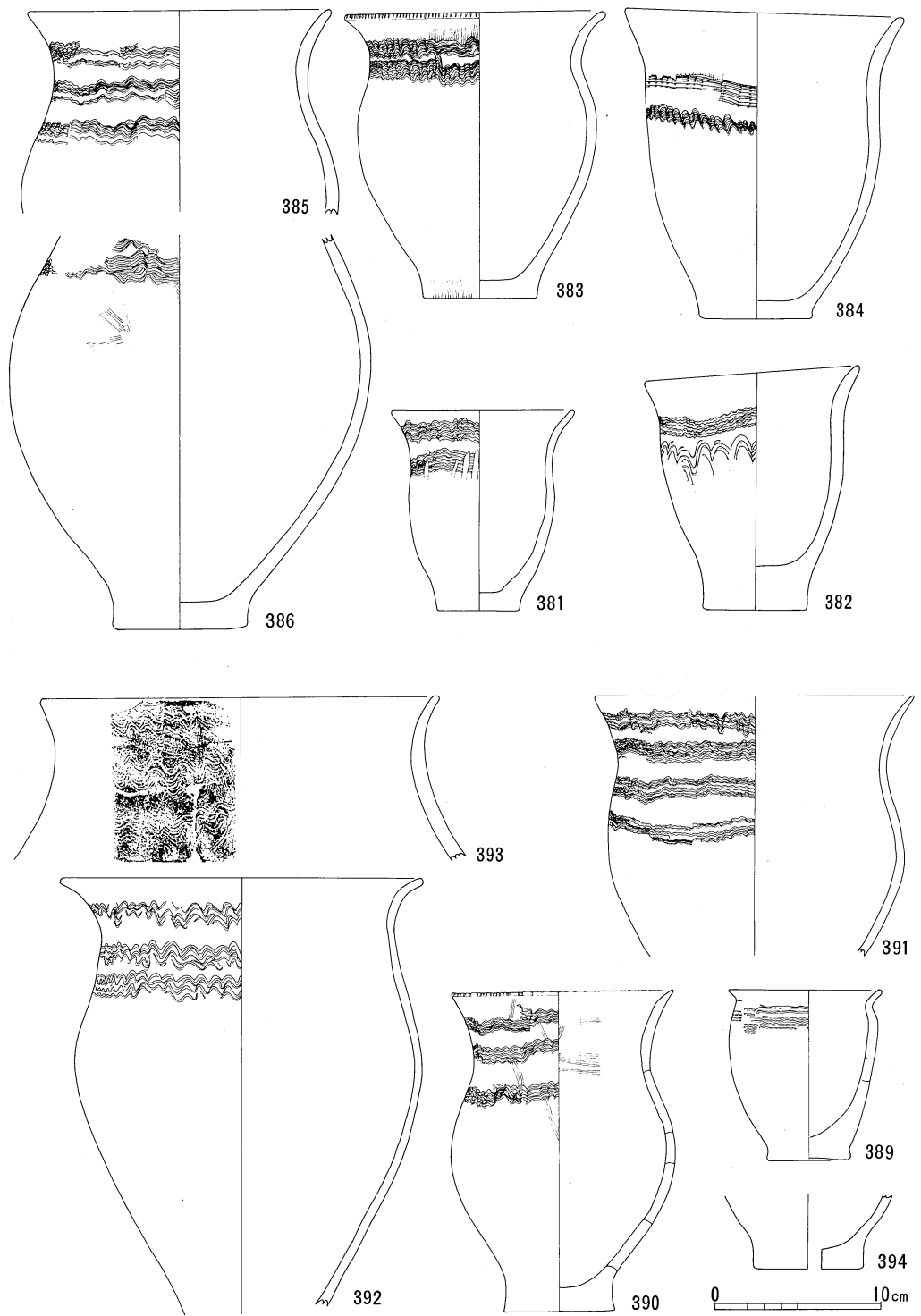
第108图 60号住居址(341~343)·61号住居址(345~353)出土土器实测图(1/4)



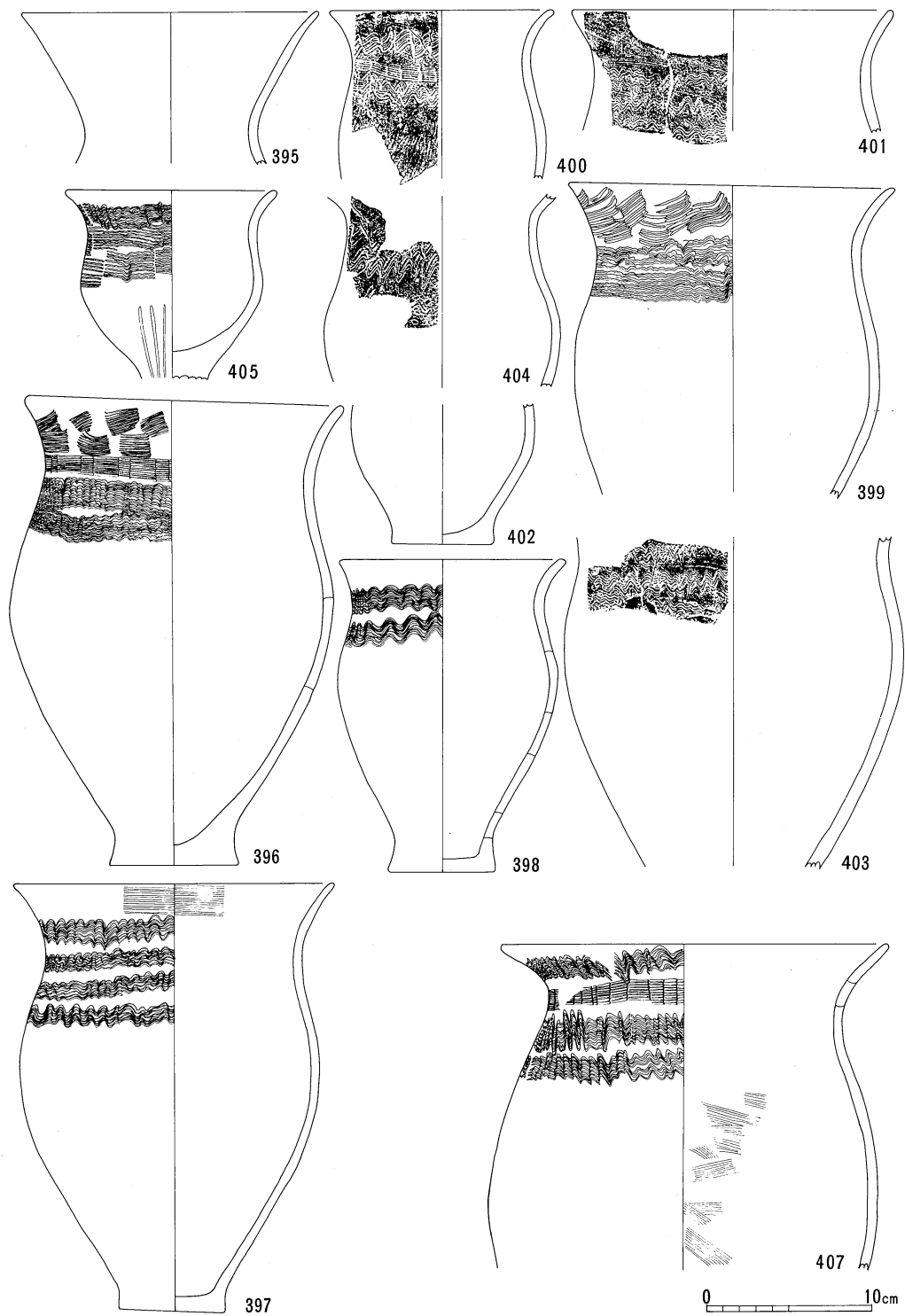
第109图 62号住居址(354~363)·63号住居址(364~370)出土土器实测图(1/4)



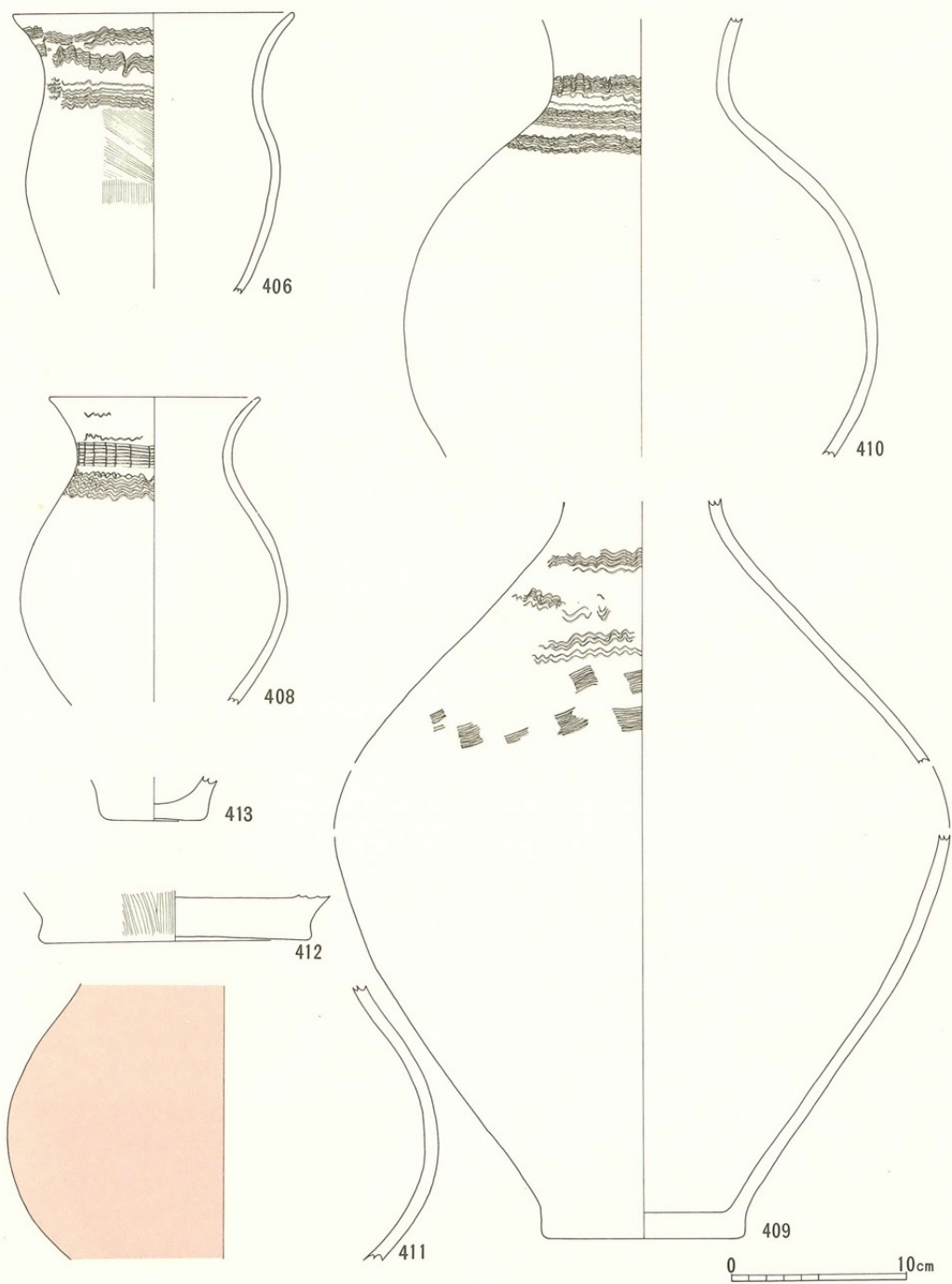
第110图 64号住居址(371~378)·65号住居址(379~380)·66号住居址(387~388)出土土器实测图(1/4)



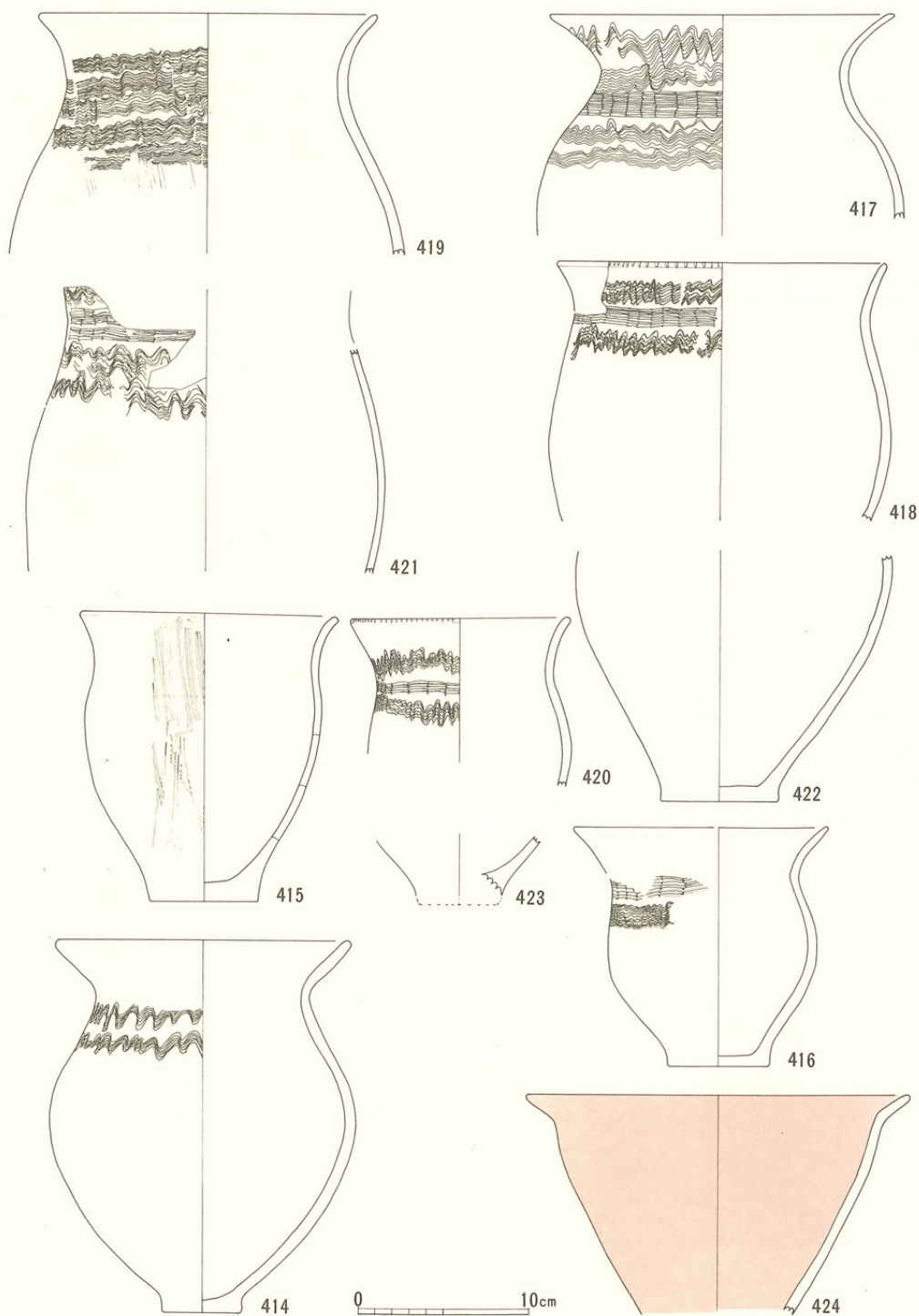
第 111 图 66号住居址 (381~386) · 67号住居址 (389~394) 出土土器实测图 (1/4)



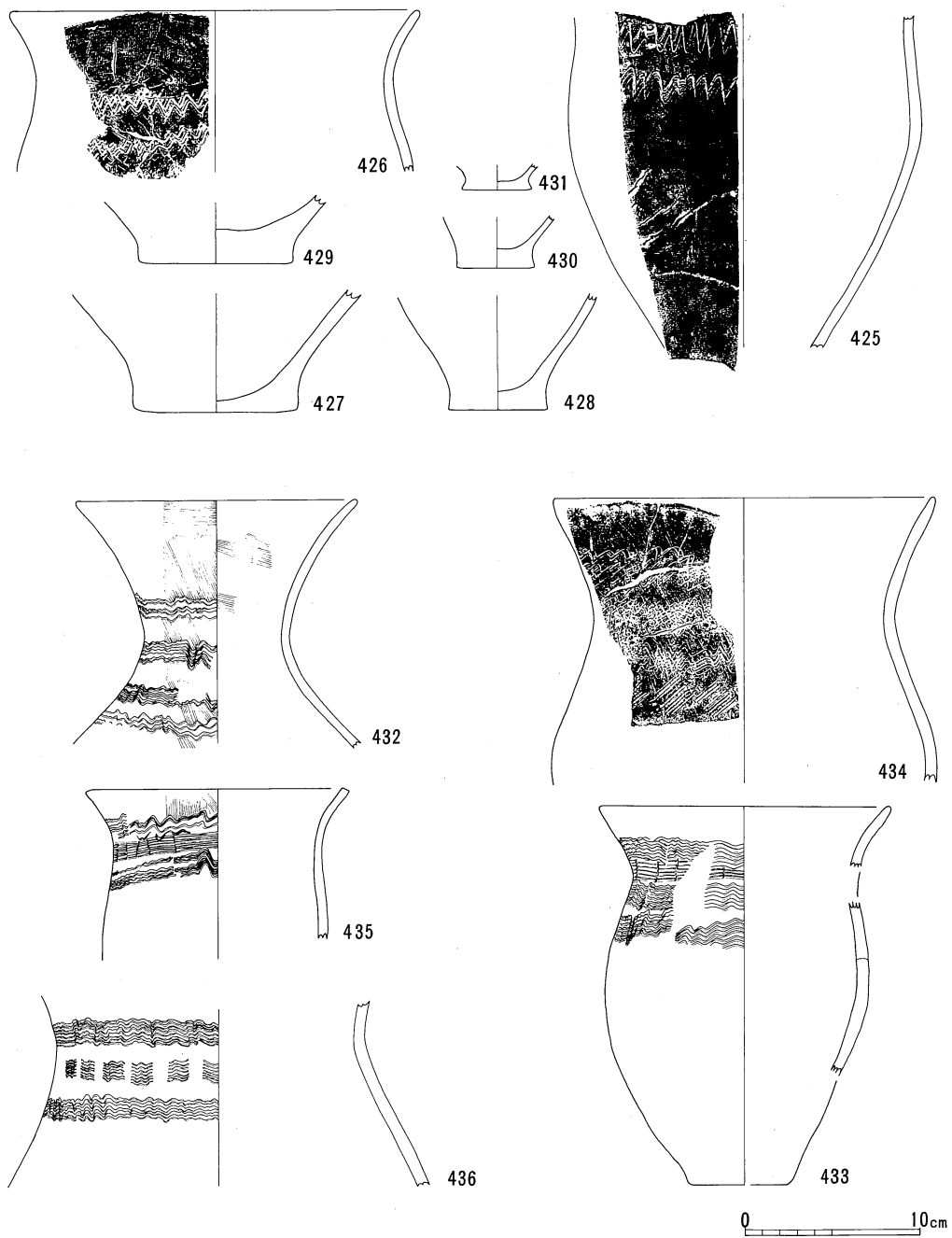
第 112 图 68号住居址 (395~405) · 69号住居址 (407) 出土土器实测图 (1/4)



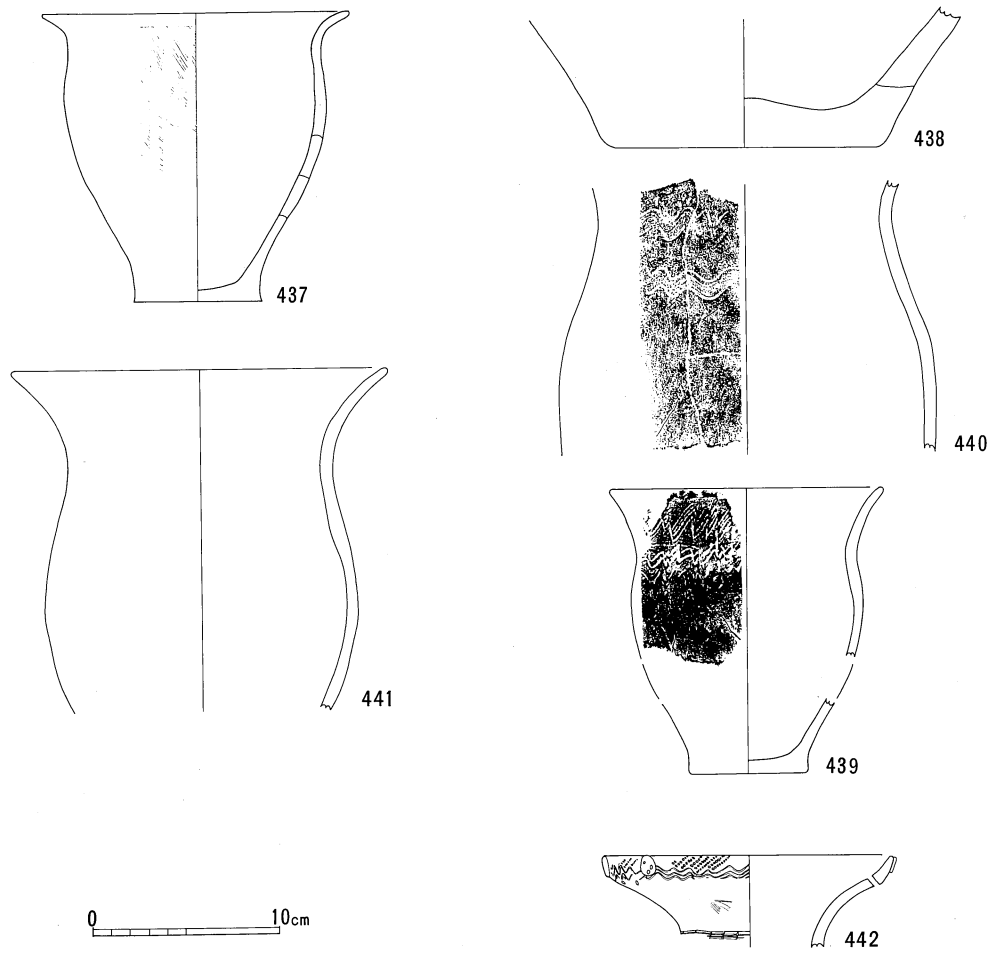
第 113 图 69号住居址 (406) · 70号住居址出土土器实测图 (1/4)



第 114 图 70号住居址出土土器实测图 (1/4)



第115図 溝2(425~431)・溝3(432~436)出土土器実測図(1/4)



第 116 図 25P (437)・Ⅲ区砂層上面 (442)・遺構外出土土器実測図 (1/4)

第3節 石器その他の遺物

石 器

橋原遺跡から出土した石器類は縄文時代、弥生時代を合わせて、別表（第11表）のように377点に達する。大部分は住居址群中の出土であり、遺構の全く存在しない地点（旧線路の山側、第Ⅲ区）からは、ほとんどないに等しい数である。本遺跡では石器の出土位置が住居址竪穴およびその周辺に限定されている点が大きな特徴であろうか。したがってその多くは弥生時代の石器と違って差しつかえないと思われる。

縄文時代の遺構は42住（中期）1基だけであるが、土器片の出土は前述の通り住居址群中に散発的に見られ、当然、縄文時代とされる石器（例えば鍬形鏃）が竪穴覆土中に検出されている。実際には縄文時代の石器がわずかに含まれていることは事実であるが、形態上から厳密にそれらをすべて分けることは、いささか無理があると考え、ここでは時代別の区別はしていない。縄文時代の石器としては、石鏃の一部と石匙、穀摺石がはっきりしている。また先土器時代のスクレパー1点の出土がある。

遺構出土の石器点数は、器種によってかなりの差が見られる。住居址竪穴内から出土する割合の高かったのは砧石・磨製石鏃・磨製石斧・石庖丁・砥石・敲石であり、低いのは打製石斧・石鏃である。前者は比較的出土点数が少ないことも考慮しなくてはなるまい。もっとも、竪穴周辺や傍からの出土を含めると、かなり竪穴内出土の割合は高くなる。

住居址別に石器の出土数を見ると、15・24・19・35・46・58・62住の各住居址に多く出土している。火災に遭った59住には蛤刃形石斧以外に特に目立ったものは残されていない。

石器の器種別説明については、主な石器について以下に概略を記してまとめとしておきたい。ただし石庖丁、砥石、砧石については別項にて詳しく述べているので、ここでは観察表と実測図作成上の留意点だけ記した。石庖丁・石鏃・石槍・石錐・石匙・スクレパー・穀摺石・多頭石斧は観察表に詳しいので省略した。

表の石器の大きさ（法量）は、図示した状態において縦・横直交する方向で最大値を求めた。その場合、原則として断面を下に配した位置で縦を長さ、横を巾として計測した。なお図版作成の中で、必ずしも合わないものが生じている。厚さは最大厚である。折損・破損した石器は現存値を（ ）で示した。

石器の表・裏という場合は図示した面を表面、その反対側を裏面と呼称して説明を記述している。石器の表裏について特別に基準はなく、一般的な慣例にしたがったが単に便宜的に用いている場合もある。とくに敲石、凹みの二面ある凹石についてはその傾向が強い。

打製石斧

総数158点が出土しているが、住居址竪穴とその傍の出土は個々に見ていくと極めて少ない点数であり、完形品に限って見ればさらに少ない。住居址別に打製石斧の出土状況を見ると、8住と22住における完形品が特異な在り方を示している。ともに2本が並んで南壁際に出土している。

打製石斧の形態は厳密に検討を加えていない。従来の短冊形、分胴形、撥形に基準をおくが、撥形はほとんどなく、分銅形も数少ない。大部分が短冊形であり、かなりバラエティーがある。その中でも細身の頭部が刃部に比し細くなる、あるいは尖る例があり、全体に尖頭器状を呈す形のものがある。また、これと形状は同じであるが側縁がわずかに括れるかまたは非対称形に曲る例もある。前者を尖頭形、後者を茄子形と称しておく。極少の撥形が分類されるならそれより多い両者も区別されて当然と考えられる。これらの形態上の差は、用途より先に、着柄方法による差と、使用による変形——磨耗・破損による再加工の所産と考えられる。磨耗痕についてはとくに刃部の状態に強く現われているようである。短冊形の多くは、平刃の例が多いが、それでも斜めにあるいは円味を呈している例がかなりあり、それらは刃部に磨耗痕が顕著である。

刃先が斜めの場合は片側だけ極度に使用されて片減りしたと思われる例がある(23・32・47・149)ので注意したい。再加工は、体部と刃部の磨耗度が極端に異なる場合があり、刃部を新たに作り出していると考えるのが適切である。

ところで、8住・22住で大きな完形の打製石斧が出土していることを述べたが、これらはいずれも使用痕が全く認められないのである。使用前の姿なのか、非実用品か検討の余地がある。特に22住の2点(111・112)は、長い年月の風化を差し引いても、使用に耐え得ないもろさのある大形品である。

分胴形は深い挟りの入る例(7)とわずかになだらかに括れる例がある(23・107)。後者に完形品が多く、23のように括れ部を除いて刃部・頭部の区別がつかないほどに磨滅しているものもある。これは交互に刃部を使ったと見るより、同時に両端が使えるように着柄したと考えるべきであろう。分胴形の側縁には一様に敲打痕が認められ、括れ部を作り出していることがはっきりしている。

横刃型石器

剥片あるいは板状薄手の礫の片側に剥離を加えて刃部としている例(151、155、157)、縦長の剥片の側縁を刃部とする例(152、156)がある。いずれも刃先が磨耗し円味を呈している。打製石斧とは区別して横刃型石器の名称を踏襲した。打製石庖丁の類に加えてよいのかもしれない。あるいはスクレパーの用途も考えられる。

石 庖 丁

住居址竪穴内から12点が出土した。遺構外の1点(196)はⅢ区の崖錘地西縁部という、集落からやや離れた地点から出土している。石庖丁の大きさは全体に小形で、よく使いこなされたというようなものばかりである。完形品が7点あるが、端部片などもあり、破損の度が強すぎるとされるものがある。特異なことは62住と22住の半欠品が接合したことであろうか。62住と22住出土の土器には、若干時間差が見られるので、あるいは62住の石庖丁は重複する16住覆土中にあったものかもしれない。砥石例やこれも含めて住居址竪穴内の遺物の在り方については、なお十分の検討を加える必要がある。本遺跡では遺物の分布図を作成しているので、これについてはさらに分析をするつもりである。

磨 製 石 斧

42住出土の1点を除いて、弥生時代の石器としてよいであろう。小形の石斧では定角式の整った形のもの(160・170・174・175)と粗雑な整形のものがある。前者は両刃、後者は片刃である。蛤刃形石斧はどれも着柄痕が顕著に残る。ことに165は頭部を敲打によって強くすぼめ、体部には円形に小さく凹ませた部分がある。ソケット状の着柄部に挿入させるための加工であろうか。弥生時代通有の着柄方法であったことは、火災に遭遇した59住の石斧(166)が炭化した柄部に挿入した状態で出土したことで明らかである。この石斧には、着柄部と思われる敲打痕の著しい部分を除いて、タール状の炭化物が全面に付着している。火災時に露出していた部分にのみ炭化物が付着したためと思われる。

磨 製 石 鏃

わずかに6点の出土である。17住の1点が先端を欠く以外は完形品であるが、うち3点は研磨による全体の整形がなされていないので未完成品と思われる。17住の欠損品の(181)は先端近くの両側縁が面取りをしたように平坦面となっているので、あるいは再加工(先端の作り出し)の途上であったかもしれない。出土位置は15住(177)、62住(182)の2点を除いて、南西コーナー付近の出土である。南辺あるいは東辺の入口に近い主柱穴の近辺に出土しているということは、数少ないとはいえ斉一性が強い在り方を示している。入口に近い主柱に置かれた(掛けておく)非実用の「矢」はさしずめ「破魔矢」とでもいってよいであろうか。

磨 製 石 剣

33住より出土、粘板岩製である。長さ3.8cmの残片であり、加えて剣身の片面が剥落、また区の部分も欠損しているために全形を把握することはできない。残存片で見ると、身幅は3cmで、両面ともに樋や鎬はなく、身の厚さ0.7cmの薄い偏平な作りである。下部も欠けているために茎についても明確ではないが、区と思われる部分が若干残っているところから見ると、茎のない形態のものと思われる。刃については片側は鋭く研磨され区に至り、石剣独特のカーブ

を描いているが、片側は石質の関係から鈍く面どりされている。刃のカーブからすると、区
の幅は推定で4cmとなる。

以上、概略を述べたが、本県内における出土例も少なく、諏訪地域においても諏訪市四賀ミ
ソギ平出土例が一点のみである。それらの例からしても利器としての使用より、国産銅器に見
られる武威の象徴と考えて良いであろう。

砥石

46点の出土があり、36点が住居址竪穴内の出土である。竪穴傍の溝、土壇の出土を含めると
1点を除いて他はすべて遺構内から発見されている。これらは大部分が円礫・垂角礫の自然石
や板状破片をそのまま利用していて、形を作り出していない。そのため、特に形態分類は無用
と考え、使用痕の観察を主として第12表にまとめた。

砥石の機能部は石器または金属器を研磨した磨耗面であるが、敲石と同様の敲打痕や凹石と
類似する凹みなども見られる。多目的に使われたか、転用されていたのであろう。ここでは
石器観察表および実測図においては、これら機能部の使用痕を次のように記号によって示した。

磨耗面 研磨痕A 石器、金属器を研磨したツルツルの面、擦痕はあまり見られない。見え
ても非常に微細である。

B 磨耗面の縁に見られる局部的に磨り減った部分、荒い擦痕の残る例が多
い。

擦痕C 研磨によって生じたキズ、肉眼で容易に見える荒いキズである。

溝 D 金属器の尖端や角を研磨したような太いキズや溝。

敲打部 敲打痕E 敲石と同様に平坦面となる例。

凹みF 凹石と同様のアバタ状に凹む例。

磨耗面の範囲は図中に実線で示し、裏面、側面の図示できなかった部分は断面図、側面図に
ボウ線で模式的に示しておいた。

なお、石質による用途区分、使用形態の分類は別項に詳しく述べているのでここでは触れな
い。

砧石

住居址の床上あるいは床上近くに固定されるような状態で発見された板状または石塊状の大
きな石器である。縄文時代の石皿と違って、使用された面は平坦であることが必要であったと
思われる点に特徴がある。

使用痕の観察では、平坦面の磨耗の程度に四段階が認められ、その他に敲打痕や擦痕、凹み
も見られるため、実測図および観察表では次のように使用痕を記号で示した。

磨耗痕A 磨り減ったツルツルの面、光沢を帯び、異常に光る例が多い。

B 同様にツルツルの面であるが、若干の光沢を帯びる程度。

C 表面が潰れて平坦になり、そこだけ色が変わっている。

D 表面の色がその部分だけ違っている程度であり、平坦面とまでいかないが、なめらかな面となっている。

敲打痕E 敲石としてもよいような敲打痕を残す例もある。

擦痕F 砥石の磨耗面と同様の微細なキズ。

凹みG 敲打痕ともいべきアバタ状の凹み。

以上の使用痕だけでは砥石との区別がいささか曖昧である。両者の大きな相違は第一に石材にあり、次に磨耗面の形状にある。すなわち、安山岩という砥石に適さない、当地方特産の鉄平石を用いていること、磨耗痕は平坦面を形成することである。後者については一様ではないが、磨耗面A・B・Cは使用面の凸部だけが平坦に潰れているという具合に、平な大きなものを当ててこすっているような形跡がある。これに対し砥石が弧状の磨耗面である傾向が強い点、大きく相違する。

使用痕の多彩な点において用途は細分化されることも考えられるので、以後は砧石（キヌタイシ）という語を用いてダイイシと読んでおく。

敲 石

13点を挙げてあるが、凹石（267）、砥石あるいは磨石（265・271）でもあり、砥石の中に敲打痕のある例は多数あるのであるから、実数は意味がないかもしれない。典型的な敲石は、乳棒状の礫の先端を使用しているもの（264・266・268）である。石槌状に平坦面を形成し、擦痕の残る例もある（266）。また非常に強度の打撃痕が残る例もある（269）。267は円礫の側面に二条、浅い溝状に敲打痕が全周する。畿内地方の弥生時代遺跡に見られる例に似ているが、出土した45住は平安末期の住居址である。敲石かどうか疑問が残る。262・264の2点も弥生時代以外の住居址から出土している。砥石に見られる敲打痕も合わせると相当量何かをこすり、たたいていることが窺い知られる。また、269は60住床上に出土した平石（砧石）と並んであったが、セットとして捉えてよいかもしれない。ただし、共に使用痕はそれほどはっきり残っていない。

凹 石

20点の出土があるが、砥石、敲石の敲打痕（凹み）もあるので、これは単独に凹みだけある石器の数ということである。弥生時代の住居址竪穴および竪穴そばからの出土が16点であり、すべて該期の凹石としてよいと思われる。敲石に比べ、素材の選択はおぎなりの感があり、遺跡地内で拾える亜角礫が大部分である。大きさ、形はバラバラといってよい。注意される凹石は19住床上に出土した1点（282）である。凹みのある面を上にして出土しているので、片面の擦痕が新しいキズでない事ははっきりしている。相当に強い力で、縦横に擦った後が残るが、砥石のようなツルツルな面はないので凹石の中に入れておく。

石製品、ガラス製品

15住から有孔円板、58住から管玉（破損）とガラス小玉、1住から紡錘車（破損）が各1点出土している。弥生時代のものとして問題はない。有孔円板は普通の平たい碟の中心に敲打による径0.6cmの孔が両側から穿たれている。全体の形は整形されていない。出土状況がやや曖昧なため、詳しい説明は差し控えておきたい。

管玉はガラス小玉発見後の水洗いによって採集されたため、出土位置は明確ではない。灰緑色を呈した硬玉製で、長さ18.2mm太さ5.3mmの小品である。

紡錘車（380）は1/6程度の残片である。

ガラス小玉は58住の床面から検出された。床上10cmの覆土を水洗いしたが、この1点のみ検出されただけである。色はコバルトブルーを呈し、外径5.9mm、である。弥生時代の玉類は、周辺遺跡の一つになる天王垣外遺跡（第1図2）において多量に発見されている。勾玉、管玉、水晶玉の総数362個であるが、ガラス小玉は1点も含まれていない。（「岡谷市史」第一巻）

土製品

紡錘車44点、小型手捏土器20点、有孔円板1点、勾玉状土製品1点、土玉4点、土錘19点、土偶2点が発見されている。

土器の破片を成形した無孔の円板が10点出土しているが、紡錘車よりも側面を摺り磨いて形を整えているので、あるいは別種として検討する必要があるかもしれない。

紡錘車と小形手捏土器は別項にて詳述しているので、観察表に委ねここでは特に触れない。

土製品の中で特異な存在は、勾玉状土製品と土玉、ペンダント風の有孔円板であろうか。勾玉を除いては床面上、あるいは埋甕炉の土器内から発見されているので、弥生時代の遺物であることははっきりしている。

土偶2点は縄文時代後期の土偶片である。

土錘19点は、8住の住居址竪穴内出土も含めてすべて表土層、あるいは攪乱層の出土であり、弥生時代の土錘ではない。平安～中世に使われた投網の錘であろう。湖北地区では縄文後代後期の遺跡から石錘が多量に発見されているので、弥生時代に魚労をしていなかったとは考えられず、別の手段を用いて補獲していたと想像されるのである。あるいは魚労に対する依存度が低かったのか、興味ある問題である。

鉄製品

32住床面から鉋（445）と思われる完形品が1点と先端部片が1点、35住からやはり同様の先端部片が1点（456）出土している。刀子のようにも思われるが錆がはなはだしくはっきりしない。この他にも6点の鉄片が出土しているが、遺跡全体に攪乱がはなはだしく、床面付近の確実なものだけ取り上げてある。いずれも小さな残片のため、どういうものか全くわからない。

石器その他遺物観察表

打製石斧

第12表 石器その他遺物観察表

() 内数値は現存値

No挿図No.	台帳番号	出土遺構名	形態	残存状態	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1-117	18 I B J 56. 2		尖頭形	完形	粘板岩	10.1	5.2	1.5	89
2	18 I B L 56. 3		短冊形	刃部片	粘板岩	7.0	4.8	0.7	36
3	18 I B L 57. 5		短冊形	完形	粘板岩	12.2	7.5	1.6	84
4-117	18 I B L 55. 4	15住	不明	体部片	粘板岩	(7.3)	(5.1)	(1.8)	(67)
5- "	18 I B M 54. 11	15住	不明	頭部片	粘板岩	(8.1)	(4.0)	(1.8)	(59)
6- "	18 I B M 55. 1	15住	短冊形	刃部一部欠	粘板岩	12.5	(5.1)	2.1	(165)
7- "	18 I B N 53. 9	15住	分胴形	刃部欠	粘板岩	(11.0)	(4.4)	(1.4)	(73)
8- "	18 I B N 60. 14	32住	短冊形	刃部一部欠	粘板岩	(9.2)	(4.8)	(1.3)	(76)
9- "	18 I B O 58. 2	32住	不明	刃部欠	粘板岩	(9.5)	(5.5)	(2.8)	(153)
10	18 I B O 61. 1	36住	短冊形	頭部片	粘板岩	(6.1)	(3.9)	(0.9)	(28)
11	18 I B P 50. 10		短冊形	完形	砂岩	10.2	4.6	1.5	113
12	18 I B P 52. 1		短冊形	刃部、頭部欠	ホルンフェルス	(10.3)	(5.1)	(2.2)	(141)
13	18 I B P 55. 23	33住	不明	頭部片	粘板岩	(6.2)	(5.2)	(1.4)	(54)
14	18 I B Q 55. 6	33住	短冊形	頭部欠	粘板岩	(8.4)	(3.7)	(1.1)	(45)
15	18 I B Q 52. 1		短冊形	刃部欠	粘板岩	(12.1)	(6.2)	(1.9)	(195)
16	18 I B R 58. 1		短冊形	完形	粘板岩	(10.2)	4.3	1.8	(100)
17	18 I B R 54. 2	31住西傍	不明	刃部片	粘板岩	(4.0)	(5.9)	(1.2)	(35)
18-117	18 I B R 59. 9	34住	短冊形	完形	結晶片岩	15.7	6.1	2.5	363
19- "	18 I B T 60. 8	34住	不明	刃~体部欠	粘板岩	(8.2)	(6.9)	(3.0)	(210)
20- "	18 I B S 47. 80	24住	不明	完形	粘板岩	7.9	9.2	1.9	177
21- "	18 I B S 46. 75	24住	短冊形	完形	粘板岩	15.7	9.2	2.8	562
22- "	18 I B W 49. 3	5住	短冊形	完形	粘板岩	12.7	7.5	1.6	193
23- "	18 I B W 49. 2	5住西北傍	分胴形	完形	粘板岩	17.6	6.6	3.1	459
24-118	18 I B W 62. 3	46住	分胴形	刃部欠	粘板岩	(9.7)	(5.4)	(1.6)	(100)
25- "	18 I B X 62. 5	46住	短冊形	完形	粘板岩	6.3	3.5	0.8	31
26- "	18 I B Y 61. 4	46住	短冊形	頭部欠	結晶片岩	(7.6)	(4.8)	(1.7)	(94)
27- "	18 I B Y 62. 14	46住	撥形	完形	結晶片岩	12.8	7.0	2.3	259
28-117	18 I B Y 47. 63	3住	尖頭形	完形	ホルンフェルス	9.1	5.3	1.2	71
29	18 I C A 59. 3		短冊形	頭部欠	粘板岩	(10.1)	(6.0)	(1.8)	(115)
30-117	18 I C A 55. 6	4住	短冊形	刃部欠	結晶片岩	(11.7)	(5.7)	(2.0)	(158)
31	18 I C B 62. 2	44住傍	不明	頭部片	粘板岩	(5.4)	(3.5)	(1.0)	(22)
32-118	18 I C B 64. 9	44住	尖頭形	完形	粘板岩	14.3	6.6	2.4	268
33- "	18 I C C 53. 2	35住	短冊形	完形	粘板岩	13.3	4.8	2.1	186
34- "	18 I C C 54. 8	35住	撥形	頭部欠	輝緑岩	(9.9)	(6.5)	(2.1)	(161)
35- "	18 I C D 54. 9	35住	短冊形	刃部欠	粘板岩	(8.9)	(4.3)	(1.4)	(68)
36- "	18 I C E 54. 3	35住	分胴形	頭~体部欠	砂岩	(9.1)	(7.3)	(2.5)	(69)
37	18 I C D 57. 28		不明	刃~体部欠	粘板岩	(7.5)	(4.3)	(1.9)	(69)
38	18 I C D 63. 1	6住	不明	刃部片	蛇紋岩	(3.6)	(5.1)	(1.1)	(28)

No挿図No.	台帳番号	出土遺構名	形態	残存状態	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
39	18 I C F 65 . 7	6住	不明	頭部片	結晶片岩	(3.7)	(4.0)	(1.0)	(16)
40-118	18 I C F 64 . 12	6住	短冊形	完形	粘板岩	9.9	4.8	1.6	78
41- "	18 I C G 55 . 3	42住西傍	尖頭形	頭部欠	ホルンフェルス	(8.0)	5.0	1.4	(63)
42- "	18 I C G 57 . 4	7 S 付近	分胴形	頭部欠	粘板岩	(8.7)	(6.0)	(1.1)	(65)
43	18 I C H 57 . 2		不明	頭部片	粘板岩	(3.5)	(4.0)	(0.9)	(15)
44	18 I C H 63 . 3	43住東傍	短冊形	頭部欠	粘板岩	(8.8)	(4.7)	(1.4)	(64)
45-118	18 I C G 60 . 1	43住北東傍	短冊形	頭部欠	砂岩	(9.2)	(4.3)	(2.5)	(116)
46- "	18 I C I 59 . 3	43住	不明	体~頭部欠	粘板岩	(6.5)	(6.2)	(1.1)	(52)
47- "	18 I C I 63 . 4	43住南東傍	尖頭形	完形	粘板岩	9.7	5.8	2.1	115
48- "	18 I C I 63 . 3	43住	短冊形	頭部片	結晶片岩	(9.4)	(7.1)	(3.4)	(178)
49- "	18 I	43住	短冊形	頭部欠	粘板岩	(9.9)	4.3	1.8	(92)
50-119	18 II A T 44 . 233	19住	短冊形	刃部欠	粘板岩	(10.1)	(4.7)	(1.8)	(77)
51- "	18 II A T 44 . 285	19住	短冊形	体部片	粘板岩	(6.2)	(5.5)	(1.0)	(47)
52- "	18 II A T 44 . 303	19住	茄子形	刃~胴部片	粘板岩	(11.6)	(3.8)	(1.0)	(42)
53	18 II A Q 45 . 15	19住東傍	不明	頭部片	粘板岩	(6.1)	(3.8)	(1.2)	(46)
54-119	18 II A R 46 . 53		不明	頭部欠	粘板岩	(7.8)	(5.7)	(1.6)	(86)
55	18 II A R		撥形	刃部欠	砂岩	(8.8)	(5.8)	(1.6)	(105)
56	18 II A V 44 . 17		不明	頭部片	粘板岩	(4.7)	(5.3)	(1.5)	(46)
57-119	18 II A W 61 . 58		短冊形	頭部欠	粘板岩	(9.9)	(5.0)	(1.8)	(111)
58- "	18 II A W 51 . 1	7住北壁傍	短冊形	頭部欠	礫質砂岩	(11.2)	(5.5)	2.3	(167)
59	18 II A W 63 . 36		短冊形	刃部欠	粘板岩	(9.7)	(5.5)	(1.6)	(96)
60	18 II A X 61 . 3	20住東傍	不明	刃部片	砂岩	(7.4)	(3.0)	(1.2)	(26)
61-119	18 II A Y 61 . 6	20住東傍	尖頭形	完形	粘板岩	10.8	5.6	1.2	109
62	18 II B A 61 . 4	20住	不明	頭部片	変輝緑岩	(5.3)	(3.7)	(1.2)	(33)
63-119	18 II B A 58 . 17	55住	短冊形	頭部欠	粘板岩	(10.9)	(4.7)	(1.3)	(93)
64	18 II B C 55 . 1	59住北傍	短冊形	刃部欠	粘板岩	(10.2)	(6.3)	(2.3)	(168)
65-119	18 II B I 50 . 8	58住	短冊形	刃部欠	粘板岩	(7.9)	(5.5)	(2.9)	(109)
66- "	18 II B I 50 . 2	58住	不明	刃部片	粘板岩	(5.7)	(5.3)	(1.3)	(42)
67- "	18 II B K 48 . 11	58住	不明	頭部欠	粘板岩	(6.9)	(4.7)	(1.1)	(32)
68- "	18 II B K 48 . 2	58住	不明	刃部片	硬砂岩	(6.2)	(5.1)	(1.1)	(38)
69- "	18 II B K 59 . 1	8住	不明	頭部欠	粘板岩	(8.0)	6.2	1.5	(109)
70- "	18 II B L 58 . 13	8住	短冊形	完形	粘板岩	14.5	4.3	1.6	156
71- "	18 II B L 58 . 12	8住	短冊形	完形	硬砂岩	13.0	5.6	2.0	181
72	18 II B P 50 . 4		短冊形	刃部片	粘板岩	(7.9)	(5.4)	(1.8)	(81)
73-	18 II B Q 52 . 2		不明	刃部片	粘板岩	(4.2)	(4.5)	(0.9)	(27)
74-119	18 II B Q 52 . 6		尖頭形	完形	粘板岩	9.7	4.9	1.6	94
75	18 II B R 48 . 6		撥形	頭部片	粘板岩	(6.2)	(4.3)	(1.5)	(57)
76	18 II B R 50 . 4		分胴形	頭部欠	粘板岩	(8.0)	(5.4)	(1.8)	(202)
77	18 II B U 51 . 6	68住	不明	刃部片	粘板岩	(5.8)	(3.8)	(1.1)	(24)
78	18 II B S 49 . 2	68住東傍	短冊形	体部片	粘板岩	(6.3)	(4.1)	(1.2)	(35)

No挿図No.	台帳番号	出土遺構名	形態	残存状態	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
79	18II BS49. 3	68住東傍	短冊形	刃部欠	粘板岩	(8.8)	(4.6)	(1.3)	(78)
80-119	18II BT51. 6	68住東傍	茄子形	頭部欠	粘板岩	(11.0)	5.1	1.6	(95)
81- "	18II BT50. 5	68住傍	短冊形	完形	粘板岩	10.6	4.5	2.4	159
82- "	18II BV49. 2	68住西傍	尖頭形	刃部一部欠	粘板岩	(10.6)	5.6	1.6	(109)
83- "	18II BV51. 2	68住南西傍	尖頭形	完形	粘板岩	9.7	5.0	1.9	93
84	18II CD51. 2		短冊形	刃部欠	砂岩	(16.2)	(5.2)	(1.1)	(128)
85	18II CE56. 2	70住傍	尖頭形	頭部片	粘板岩	(7.0)	(3.8)	(1.5)	(41)
86	18II CF57. 4	70住	分胴形	頭部片	砂岩	(8.3)	(3.7)	(2.5)	(78)
87	18II CG56. 2	70住北西傍	不明	刃部片	粘板岩	(4.6)	(4.6)	(1.1)	(33)
88	18II CG55. 1	69住・70住傍	茄子形	頭部欠	粘板岩	(10.4)	(4.4)	(2.3)	(154)
89-120	18II CF51. 1	69住北東傍	茄子形	完形	粘板岩	12.6	5.1	1.6	130
90	18II CK54. 2	69住西近く	短冊形	頭部欠	輝緑凝灰岩	(8.1)	(4.9)	(1.6)	(97)
91	18II CF53. 1		不明	頭部片	粘板岩	(8.5)	(3.5)	(1.2)	(39)
92	18II CF53. 2		不明	刃部片	粘板岩	(5.3)	(5.0)	(0.9)	(26)
93	18II CI56. 2		短冊形	刃部片	粘板岩	(9.2)	(4.0)	(2.1)	(77)
94-120	18II CJ44. 5		短冊形	頭部欠	粘板岩	(7.2)	(4.4)	(1.7)	(65)
95	18II CJ46. 2	18住	不明	体部片	粘板岩	(4.4)	(4.1)	(1.4)	(23)
96-120	18II CJ60. 2		不明	頭部欠	粘板岩	(7.7)	5.7	1.2)	(85)
97- "	18II CK57. 1		分胴形	頭部刃部欠	砂岩	(8.9)	(7.3)	(1.9)	(113)
98	18II CL46. 14		不明	刃部片	粘板岩	(4.7)	(6.5)	(1.3)	(56)
99-120	18II CS48. 8	溝2	分胴形	完形	ホルンフェルス	8.6	5.5	1.6	83
100	18II CS48. 5	溝2	短冊形	頭部欠	ホルンフェルス	(10.8)	(4.6)	(1.4)	(99)
101	18II CL48. 24	溝2、溝3傍	短冊形	刃部欠	粘板岩	(9.4)	(4.3)	(2.1)	(110)
102	18II CK48. 19	溝2傍	不明	体部片	粘板岩	(4.8)	(5.5)	(1.1)	(40)
103	18II CM48. 41	溝2傍	不明	刃部片	粘板岩	(4.8)	(5.1)	(1.7)	(45)
104	18II CO48. 3	溝2傍	不明	体部片	粘板岩	(8.9)	(7.0)	(1.5)	(104)
105	18II CQ48. 2	溝2傍	短冊形	体~頭部欠	粘板岩	(6.9)	(4.5)	(1.7)	(85)
106-120	18II CV46. 5	溝2傍	短冊形	頭部欠	粘板岩	(10.8)	5.7	1.7	(113)
107- "	18II CM54. 5		分胴形	完形	粘板岩	12.6	6.3	2.2	257
108	18II CM54. 9		尖頭形	頭部欠	粘板岩	(8.0)	(4.8)	(1.3)	(82)
109-120	18II CM62. 3	9住	尖頭形	完形	安山岩	10.1	5.0	1.5	112
110	18II CN52. 4		不明	刃部片	粘板岩	(8.6)	(4.0)	(1.3)	(59)
111-120	18II CM58. 90	22住	短冊形	完形	粘板岩	17.9	6.8	2.6	357
112- "	18II CM58. 75	22住	短冊形	完形	粘板岩	15.8	6.7	2.4	310
113- "	18II CN58. 8	22住	短冊形	頭部剥落	粘板岩	(16.8)	5.8	1.5	(181)
114- "	18II CO57. 7	22住	茄子形	頭部欠	粘板岩	(12.3)	4.2	1.5	(93)
115-	18II CP56. 2	22住傍	不明	頭部片	粘板岩	(7.1)	(4.4)	(0.8)	(23)
116	18II CO50. 3		不明	刃部片	粘板岩	(4.3)	(4.3)	(1.0)	(31)
117-120	18II CQ56. 4		短冊形	完形	粘板岩	9.3	3.9	1.5	67
118- "	18II CR51. 4	65住	撥形	完形	硬砂岩	9.2	4.4	2.1	83

No.挿図No.	台帳番号	出土遺構名	形態	残存状態	石 材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
119-120	18II CR52. 18	65住	短冊形	刃部欠	粘板岩	(8.1)	(4.2)	(1.8)	(83)
120- "	18II CR53. 10	65住南傍	不明	完形	結晶片岩	8.5	3.9	1.1	52
121	18II CR55. 2		不明	刃部片	砂岩	(4.8)	(5.6)	(1.5)	(59)
122	18II CR57. 2		短冊形	頭部欠	粘板岩	(8.9)	(5.5)	(1.6)	(86)
123-120	18II CR59. 3	14住北傍	短冊形	刃部欠	粘板岩	(9.4)	(3.8)	(1.3)	(48)
124	18II CV48. 5	12住北傍	短冊形	刃~体部欠	粘板岩	(8.7)	(6.3)	(3.0)	(188)
125	18II CX58. 2		不明	体部片	粘板岩	(8.6)	(6.4)	(1.7)	(97)
126-121	18II CX61. 1	10住	不明	刃~体部欠	粘板岩	(6.0)	(3.6)	(1.2)	(36)
127- "	18II CV62. 2	10住東傍	短冊形	完形	砂岩	8.2	4.1	2.1	71
128- "	18II DA51. 2	64住	不明	刃部片	結晶片岩	(9.9)	(6.3)	(2.5)	(150)
129- "	18II DD50. 4	64住西傍	尖頭形	完形	粘板岩	8.6	3.2	0.8	(27)
130- "	18II DC49. 6	64住北傍	短冊形	完形	粘板岩	10.3	5.2	1.6	97
131- "	18II DD47. 18	60住	尖頭形	完形	粘板岩	11.5	4.7	1.8	99
132- "	18II DD54. 4		短冊形	完形	粘板岩	9.9	5.1	1.4	88
133	18II DE50. 5		不明	体部片	粘板岩	(7.1)	(5.1)	(1.4)	(54)
134	18II DE51. 3		短冊形	頭部欠	ホルンフェルス	(9.3)	(5.5)	(1.6)	(118)
135	18II DF56. 3	61住北西傍	不明	頭部欠	粘板岩	(6.4)	(6.3)	(1.2)	(71)
136	18II DF59. 2		不明	体部片	ホルンフェルス	(11.0)	(4.2)	(1.7)	(108)
137	18II DJ50. 2	17住南傍	不明	体部片	粘板岩	(6.4)	(4.8)	(1.2)	(50)
138	18II DJ51. 3	62住北傍	短冊形	体~頭部欠	粘板岩	(7.6)	(4.3)	(1.1)	(50)
139	18II DJ59. 1	29p傍	茄子形	刃部欠	ホルンフェルス	(12.5)	(6.2)	(1.1)	(71)
140	18II DS55. 2	10p	短冊形	刃部欠	砂岩	(8.9)	(4.0)	(1.6)	(73)
141-121	18II DW54. 1	8p	短冊形	頭部欠	粘板岩	(11.4)	5.1	(1.7)	(123)
142	18II EA50. 1	6p	短冊形	体~頭部欠	粘板岩	(7.6)	(6.0)	(1.7)	(96)
143	18II	表採	茄子形	刃部、頭部欠	粘板岩	(12.0)	(5.9)	(2.3)	(179)
144	18II	表採	不明	頭部欠	粘板岩	(8.2)	(5.2)	(1.3)	(75)
145	18II	表採	不明	刃部、頭部欠	粘板岩	(13.8)	(6.0)	(1.0)	(77)
146	18II	表採	短冊形	刃部欠	輝緑凝灰岩	(9.5)	(4.1)	(1.6)	(90)
147	18III CJ50. 4		短冊形	刃部欠	粘板岩	(8.1)	(5.6)	(0.9)	(56)
148-121	18III CJ50. 3		短冊形	刃部欠 体部剥落	粘板岩	(15.0)	(8.2)	(1.3)	(159)
149- "	18III CR62. 26	植物遺体層	短冊形	完形	粘板岩	11.0	4.8	1.6	88
150- "	18III		不明	頭部片	砂岩	(7.2)	(4.5)	(1.4)	(44)

横刃型石器

() 内数値は現存値

No.挿図No.	台帳番号	出土遺構名	残存状態	石 材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
151-121	18I BM54. 11	15住	完形	安山岩	6.4	10.0	1.7	167
152- "	18I BM54. 8	15住	完形	粘板岩	3.3	9.5	0.8	34
153- "	18I BP47. 23	24住	完形	粘板岩	3.8	4.6	0.9	21
154- "	18I BR46.175	24住	完形	玄武岩	10.4	13.0	1.7	231
155- "	18I CD57. 27		完形	粘板岩	3.7	8.3	0.8	30
156- "	18I CH57. 6		完形	砂岩	5.6	7.9	0.8	43
157- "	18II CJ47. 3	17住傍	完形	粘板岩	4.9	7.9	1.3	76

磨製石斧

() 内数値は現存値

No.挿図No.	台帳番号	出土遺構名	分類	残存状態	石材	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
159-122	18 I B P 55. 16	33住	乳棒状	体部片	変輝緑岩	(9.3)	(5.0)	(4.0)	(218)
160- "	18 I B V 57. 3	4住	定角式	完形	滑石	5.2	3.2	1.2	36
161- "	18 I B X 63. 11	46住	定角式	刃部片	チャート	(8.2)	(4.6)	(2.0)	(114)
162- "	18 I B Y 63. 3	48住	乳棒状	完形	変輝緑岩	12.3	4.7	2.9	227
163- "	18 II A R 45.146	19住	定角式	頭部欠	泥岩	(4.2)	(3.7)	(0.9)	(20)
164- "	18 II A Y 57. 6	55住	定角式	完形	泥岩	6.0	4.1	0.9	36
165- "	18 II B A 60.5-6	20住	蛤刃形	頭部欠	変質斑れい岩	(14.3)	6.2	4.4	(589)
166- "	18 II B E 58. 7	59住	蛤刃形	完形	安山岩	11.8	5.6	3.5	397
167- "	18 II B Q 49. 2	32号土坑	蛤刃形	完形	変質斑れい岩	10.0	5.2	2.9	291
168- "	18 II C G 57. 5	70住	乳棒状	刃・体部欠	変輝緑岩	(8.4)	(4.3)	(2.8)	(182)
169- "	18 II C J 46. 1	18住	不明	完形	輝緑岩	7.1	3.3	0.6	16
170- "	18 II C K 48. 17	溝2傍	定角式	刃部片	粘板岩	(2.2)	(3.2)	(0.6)	(6)
171- "	18 II C U 50. 6	12住	定角式	頭部欠	結晶片岩	(6.5)	(4.3)	(0.9)	(38)
172- "	18 II C X 54. 1	11住	蛤刃形	頭部片	変質斑れい岩	(7.5)	(3.8)	(2.2)	(95)
173- "	18 II D C 50. 6	64住傍	定角式	頭部欠	閃緑岩	(9.4)	5.7	3.4	(292)
174- "	18 II D H 47. 2	17住	定角式	半欠	粘板岩	(6.2)	(2.0)	(1.0)	(20)
175- "	18 II D I 54. 18	62住	定角式	刃部一部欠	グリーンタフ	7.0	(3.3)	1.2	(48)
176- "	18 I C F 55. 6	42住	定角式	刃先欠	泥岩	(9.3)	3.3	1.5	(73)

磨製石鏃、磨製石剣

() 内数値は現存値

No.挿図No.	台帳番号	種別	出土地点	分類	石材	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土位置
177-123	18 I B M 55.16	磨製石鏃	15住	未成品	粘板岩	5.0	2.6	0.4	7.0	南東コーナー-P ₁₅ 内
178- "	18 II A S 43.94	磨製石鏃	19住	未成品	粘板岩	5.1	2.9	0.4	7.0	内区西側床上
179- "	18 II B D 47.54	磨製石鏃	21住	未成品	粘板岩	8.8	4.7	0.7	37.2	南西コーナー床上16cm
180- "	18 II B D 48.39	磨製石鏃	21住	完成品	粘板岩	4.5	3.6	0.4	6.4	南西コーナー床上18cm
181- "	18 II D I 48.15	磨製石鏃	17住	(完成品 尖端欠)	粘板岩	(4.5)	2.5	0.4	5.9	南西主柱穴の縁
182- "	18 II D I 53.15	磨製石鏃	62住	完成品	粘板岩	2.6	1.8	0.3	1.4	北東主柱穴近くの覆土中
184- "	18 I B T 59.11	磨製石剣	33住	(基部片)	粘板岩	(3.8)	(3.5)	(0.7)	(12)	内区中央床上

石庖丁

() 内数値は現存値

No.挿図No.	台帳番号	出土遺構名	形態	残存状態	石材	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
183-123	18 I B T 59. 11	34住	楕円状	完形	結晶片岩	8.8	4.1	1.0	52
185- "	18 I B Q 48.208	24住	台形	完形	粘板岩	7.2	3.7	0.6	22
186- "	18 I B Q 47.340	24住	長方形	完形	粘板岩	7.7	2.7	0.6	18
187- "	18 I B Y 63. 4	48住	長方形	——	結晶片岩	7.1	3.4	0.7	23
188- "	18 I C C 54. 9	35住		端部片	粘板岩	(4.3)	(3.2)	(0.6)	(13)
189- "	18 I C C 54. 21	35住		細片	粘板岩	(3.9)	(3.0)	(0.5)	(5)
190- "	18 II B A 47. 51	21住	台形	完形	結晶片岩	9.0	3.8	0.7	31
191- "	18 II B K 49. 8	58住	半月形	完形	粘板岩	10.4	3.2	0.6	31
192- "	18 II B J 47. 7	58住	木ノ葉形	——	粘板岩	9.5	3.2	0.4	20
193- "	18 II C M 57. 87	22住	半月形	半欠	粘板岩	9.9	3.0	0.9	27
194- "	18 II D K 54. 6	62住	半月形	半欠	粘板岩	8.6	2.7	0.6	25
195- "	18 II C X 45. 8	溝2	半月形	完形	粘板岩	8.6	2.7	0.6	25
196- "	18 III C J 51. 2		コハゼ形	完形	砂岩	8.9	4.2	0.8	51

砥石

() 内数値は現存値

No. 挿図No.	台帳番号 (遺構番号)	石材 重量(g)	長さ 巾 厚さ(cm)	素材の形状	使用面の数 使用痕(磨耗の程度A~F)	備考 (出土位置 ・その他)
197	18 I BM55. 11 15住	砂 岩 77	6.2 3.9 1.6	板状の長方形、完形 整形しているか?	A-6面 全面に研磨痕あり、表面の左側縁辺はツルツル。B 裏側の両側縁は部分的に強度の使用により凹む。	南東コーナー
[123]						
198	18 I BO63. 7 36住	硬砂岩 2356		板状、長方形	A-2面 表面は、全体になめらかであるが、部分的に平滑にツルツルに磨耗する。また表面にしわのような微細な凹凸があり、その凸部だけが研磨されたように光沢を帯びる(図点線内)。C, D 丸のみで削ったような太いきずと細い擦痕が両サイドに見られわずかながら鉄分の付着がある。F 中央辺りにアバタ状に打痕が残る。磨耗より先に残された使用痕である。	南東コーナー 近くの床上
[123]						
199	18 I BO65. 8 49住	砂 岩 539	18.6 6.3 2.3	板状の細長い不整形長 方形礫をそのまま使 用	A-2面 表裏面の一部が研磨によってツルツル。面は完全な平坦面にはなっていない。片側先端の角にかすかに敲打痕が見られ先端と縁に大きな打撃痕(剝離)が残る。	南西コーナー
[124]						
200	18 I BR47. 95 24住	砂 岩 49	(10.3) (3.4) (1.0)	板状で不整形、破損 品	A-2面 表面と側面を使用。浅い凹面となる。D 側面に細いが深い傷が1本残る。	南壁際中央 P45内
[123]						
201	18 I BP46.106 24住	粘板岩 36	(8.0) (3.6) (0.8)	板状で不整形、破損 後も使用している	A-2面 表面は磨耗によりかすかに凹面となる。裏面はわずかに擦痕が荒く残る。	北壁際中央
[123]						
202	18 I BS46. 87 24住	砂 岩 83	7.2 5.2 1.0	薄手の板状で長方形、 完形	A-3面 表面はやや凹むほどに磨滅し、微細な擦痕も見られる。側面は表裏面に平行する方向に擦痕が見られるが敲打痕のようなザラザラ面である。B-2面	南西コーナー (位置不明)
[124]						
203	18 I BS45. 36 24住	硬砂岩 494	(9.3) (7.2) (5.8)	角柱状の細長い礫で あったと推定される	A-6面 巾4cmの凹面(A ₁)や強度の弧状面(A ₂)を形成、平坦面は一面(A ₅)だけである。E 先端と裏面にとくに敲打痕残る。研磨面を潰しているが、敲石に転用か。	南西コーナー 近く(位置不明)
[124]						
204	18 I BS47.158 24住	硬砂岩 136	11.3 5.6 2.9	板状、撥形、完形	A-5面 裏面は平坦面と弧状面が重なる。表面以外は鉄分(赤錆)が厚く付着するため擦痕・敲打痕は観察できない。	南壁ピット群 (南壁中)
[124]						
205	18 I BS47.159 24住	砂 岩 186	24.0 3.6 2.2	細長い板状長方形で あったと推定される	A-5面 一番磨耗している部分の厚みは、わずか0.9cmになっている。大きな弧状の曲面となり、研磨面に段差を生ずるなど、相当量の使用が伺える。	南壁ピット群 (南壁中)
[124]						
206	18 I BQ55. 1 33住	安山岩 44	9.4 2.3 1.4	板状の細長い棒状の 礫、完形	A-1面 わずかに磨耗する。	北側炉周辺 (地点不明)
[124]						

No. 挿図No.	台帳番号 (遺構番号)	石材 重量(g)	長さ 巾 厚さ(cm)	素材の形状	使用面の数 使用痕(磨耗の程度A~F)	備考 (出土位置 ・その他)
207	18 I B Q 56. 16 33住	砂岩 153	9.4 2.3 1.4	不整形な三角形、破 損後も使用	A-4面 表裏の広い面は、局部的に 研磨痕があり、擦痕がよく見られる。 側面は全面がツルツル。B-2面 尖 った先端の研痕根(B ₁)は手持でない と生じないような局部的である。使用 痕のない部分に鉄分(赤錆)が付着。	内区南東コー ナー寄り
[124]						
208	18 I B R 53. 2 31住傍	砂岩 63	7.8 3.8 1.3	細長い板状、折損品	A-1面 かすかに凹面となる。 B-1面 局部的に凹む。	31住西側傍
[124]						
209	18 I B U 60. 4 34住	粘板岩 315	(13.6) (5.0) (2.5)	板状、長方形、破損 品	A-4面 表面は軽い凹面に、側面は わずかに弧状に磨耗する。いずれも 荒く擦痕が残る。表裏面とも全面が 一様に磨耗していない。	西壁際中央
[124]						
210	18 I B Y 62. 3 46住	安山岩 60	8.1 2.9 1.6	断面山形状の乳棒状 礫、完形	A-1面 研磨面はツルツル。凹みの 周辺に荒く擦痕が残る。F-2 打痕 がアバタ状に見られる凹み。	内区西南寄り、 地点不明
[124]						
211	18 I C A 54. 2 4住西傍	粘板岩 15	(3.8) (1.7) (1.8)	不明(破片)	A-1面 ツルツルに磨耗し、微細な 擦痕がたくさん見られる。	4住西傍
[124]						
212	18 I B X 56. 11 4住	粘板岩 75	6.5 3.5 2.4	不整形な礫でヒビ割 が入る	A-1面 ツルツルに磨耗し、微細な 擦痕がたくさん見られる。	東側炉と壁の 間の床上
[124]						
213	18 I C B 51. 5 37住	砂岩 263	8.3 6.4 3.7	不整形な山形状	A-2面 表面はなめらか、裏面は部 分的になめらかな面と擦痕が見られ る。E 裏面の縁にほぼ全周して敲 打痕がめぐり剥離痕が見られる。 F 平滑な凹み。	内区中央付近
[124]						
214	18 I C B 54. 4 35住東傍	粘板岩 9	(4.4) (2.2) (0.8)	破片	A-3面 表面は平坦でなめらか、側面は凹凸 があり、荒い擦痕が残る。D 深い溝が斜め に研磨面を切る。側面は整形痕か。	35住東北コー ナー傍
[124]						
215	18 I C C 55. 13 35住	硬砂岩 128	(8.9) (3.3) (3.5)	断面台形、棒状、折 損品	A-3面 表裏面は平滑によく磨耗す るが、側面はわずかに凸部だけ磨耗 する程度。B-2面	南東コーナー
[124]						
216	18 I C H 54. 5 7号集石址近く	輝石安山岩 335	(9.2) (6.4) (4.9)	厚手の板状、長方形	A-2面 表面は弧状に磨耗する。 B-2面 両側縁は極端な減り方はし ていない。表面の擦痕はこの縁に向 う方向である。	
[125]						
217	18 I C H 62. 8 43住	砂岩 1050	(13.8) (8.5) (5.4)	厚手の板状、長方形 破損後に使用してい る。	A-1面 ゆるい凹面状に中央部に研 磨痕がある。磨耗部分だけ色が変わ っている。F 裏面に浅いアバタ状凹 みが二つ並ぶ。	東壁下中央の 床上
[125]						
218	18 I C I 60. 18 43住	玢岩 436	(9.1) (8.3) (3.6)	扁平なカマボコ形、 折損品	A-2面 中央部がとくに磨耗してツ ルツルするが、平坦面を形成するこ ろまではいっていない。F 裏面 にかすかな敲打痕が見られる。	北壁際中央
[125]						
219	18 I C J 60. 14 43住	砂岩 31	(6.4) (5.2) (0.7)	薄手の板状、不整形 な破損品	A-3面 表面は中央辺りが著しく磨 耗し、擦痕が見られる。側面は破損 面が平滑に磨耗する。B 縁辺がゆ るく磨滅する。	南西コーナー 近く
[125]						
220	18 I C K 61. 10 43住	安山岩 635	(11.0) (6.5) (5.2)	断面梯形の角柱状礫	A-6面 いずれも磨耗の程度は軽く 表面が平滑な面であるが、両端部分 は光沢を帯びるほどにツルツルに研 磨された状態である。折損部分は凸 部だけが平坦に減る。E 研磨の後 と思われる敲打痕がわずかであるが 見られる。全体に淡い赤褐色。	南西コーナー 寄りの南壁下
[125]						

No. 挿図No.	台帳番号 (遺構番号)	石材 重量(g)	長さ 巾 厚さ(cm)	素材の形状	使用面の数・ 使用痕(磨耗の程度A~F)	備考 (出土位置 ・その他)
221 [125]	18II A R 46. 52 19住南東傍	泥岩 104	9.1 3.7 2.1	断面卵形の乳棒状円 礫	A-1面 平坦にはなっていないが なめらかで軽い光沢を帯びる。両端 に敲打痕はない。	19住南東隅の 傍
222 [125]	18II A S 43. 98 19住	砂岩 61	(5.4) (3.7) (2.1)	板状の細長い長方形	A-4面 表裏面は軽い弧状に磨耗し、 裏面の縁はとくに磨滅して弧状を呈 す。B 片側折損部の縁が磨耗して 円味を帯びる。D 裏面の中央に浅 い溝状の研磨痕が残る。	内区西側の床 上
223 [125]	18II A V 54. 18 7住	硬砂岩 161	11.3 6.0 2.9	断面三角形の直角三 角形状	A-3面 表面は全面なめらかに磨耗 し側面は平滑な面であるが裏面は凸 凹のまま部分的に磨耗する程度。 B 側面の中央縁が極端に磨り減っ て擦痕が残る。長辺の鋭利な縁も磨 滅して円味を帯びる。E 鋭角の縁 が敲打によって円味を帯び、表面短 辺の縁は巾広く磨滅する。	
224 [125]	18II B A 61. 8 20住	凝灰岩 39	(5.8) (3.9) (1.5)	板状の長方形、破損 品	A-3面 平滑な研磨面となっている。 表裏面の縁がやや弧状に磨り減る。	東壁際中央の P ₇ 内
225 [125]	18II B C 48. 35 21住	硬砂岩 570	(15.7) (6.8) (3.3)	扁平な円味のある細 長い石斧形、折損品	A-2面 部分的にツルツルに磨耗す る。先端部に鉄分の付着がある。 E 先端をわずかに敲いている。	南西コーナ ーに寄った南壁 下
226 [125]	18II 59住	砂岩 18	(4.3) (3.4) (0.7)	破損品のため原形不 明	A-1面 全体によく磨耗して滑らか。 B 縁が弧状に磨り減る。	(位置不明)
227 [125]	18II B J 50. 5 58住	変輝岩 340	(12.1) (6.9) (2.1)	扁平な細長い石斧形、 半欠	A-2面 全体になめらかに磨耗し、 裏面は長軸方向に微細な擦痕が見え る。B 側縁に局所的な磨耗がある。 D 表面に7本のU字状の溝あり。 E 先端は平坦に潰れて、剥離が入る。	南壁際中央
228 [125]	18II B U 50. 4 68住	砂岩 15	(4.7) (4.2) (1.0)	破損品のため原形不 明	A-2面 いずれも平滑に磨耗する。 敲打による剥離痕が見られ、これ自 体が剥片である。	内区やや南寄 り、233(67住) に接合する
229 [125]	18II B T 51. 13 68住	粘板岩 169	(9.8) 5.3 1.3	板状、細長い不整形、 先端欠	A-2面 全面均一な磨耗ではなく、 表裏面とも両側縁がとくに磨り減っ て微細な擦痕が見える。これは、研 磨の方向が長軸に直行せず、斜め方 向であるため、B面とは異なる。先 端にわずかに敲打痕あり。	南東コーナ ー付近(位置不 明)
230 [125]	18II C G 58. 8 70住	安山岩 837	(14.7) (6.9) (4.2)	断面長方形の角柱状 折損品	A-4面 表裏面は平滑にツルツルに 磨耗する。側面は凸凹をそのまま残 すが、同じように磨耗する。E 先 端の縁は四辺の稜に敲打痕が見られ 一部平坦面を作り出している。	南西コーナ ー 床上
231 [125]	18II C M 54. 4 25	泥岩 25	(6.0) (3.7) (0.8)	薄手、板状長方形	A-4面 平坦面を形成し、擦痕が残る。 B-1面 局所的な溝状に磨滅する。 弥生期の砥石としてよいか疑問は残 る。表土層の出土。	
232 [126]	18II C X 50. 8 67住	砂岩 42	(5.7) (3.5) (1.3)	板状、細長い長方形、 折損品	A-2面 表裏面とも軽く弧状に磨耗 する。B-1面 側縁がわずかである が磨滅する。	内区南東寄 り (位置不明)

No. 挿図No.	台帳番号 (遺構番号)	石材 重量(g)	長さ 巾 長さ(cm)	素材の形状	使用面の数・ 使用痕(磨耗の程度A~F)	備考 (出土位置 ・その他)
233	18II CW49. 8 67住	硬砂岩 681	10.0 10.9 5.9	不整形、大きな礫を 打割って使用してい る。	A-3面 表面は平坦にならないがな めらかに、側面は平滑に、裏面は中 央の8×3cmの範囲が磨耗し擦痕が残 る。B-1 側面の縁が磨り減る。 E 研磨面の縁が全体に円味を帯び、 角に敲打痕がわずかに残る。	北東コーナ ー壁下 (P ₇ 上面) 228(68住) 砥 石破片が接合
[126]						
234	18II CX45. 2 溝2	輝石安山岩 508	(14.5) (9.4) (3.0)	破損片のため原形不 明、かなり大きな鉄 平石であったと推測 される。	A-1面 磨いたように平滑であり、 光沢を帯びる。微細な擦痕がかすか に看取される。砧石としてもよいか?	溝上面
[126]						
235	18II CY45. 8 溝2	砂岩 157	(6.8) (6.1) (2.6)	板状三角形、破損後 使用か。	A-1面 部分的に平滑。E 数回程 度の打痕がある。	
[126]						
236	18II DC51. 2 64住	砂岩 384	11.0 3.8 4.6	断面長方形の角柱状 完形。	A-3面 側面は平滑。先端がドーナ ツ状に平坦に磨耗してツルツルにな り光沢を帯びている。E 両端に敲 打痕があるが、一端は強い打撃によ って剝離が多数入る。この剝離後に 研磨面が使われている(A ₂)	南西コーナ ー近く、主柱穴 傍。
[126]						
237	18II DD47. 19 60住	粘板岩 75	(11.0) (3.6) (1.2)	扁平なキュウリ形、 端部欠。	A-2面 全体になめらかに磨耗する。 敲打痕のない側の側面や縁も磨耗す る。D 深い鋭い溝が残る。E 先 端に敲打痕とその際に生じた剝離痕 があり先端部側面に平たく磨滅した 敲打痕あり。	内区東寄りの 床上
[126]						
238	18II DE47. 12 60住	砂岩 190	8.8 4.4 3.5	断面梯形の角柱状	A-3面 凸凹をそのままになめら かに磨耗する。B-1面 縁が弧状に磨 り減る。E 両端の縁辺に敲打痕あ り。側縁にもわずかなから見られる。	南壁際、南西 コーナー近く
[126]						
239	18II DE53. 3	粘板岩 63	(7.8) (1.8) (2.9)	破損片で原形不明	A-3面 表裏面は平滑で微細な擦痕 が見える。縁側がよく使われている。 側面は部分的にわずかに磨耗する程 度。先端を敲打して割れたか。	
240	18II DF54. 12 61住	硬砂岩 905	(12.0) (8.8) (7.3)	破損片のため原形は 不明。厚手、板状の 台石であったかもし れない。	A-2面 表裏面は、磨耗して平坦で あるが、中心が少しくぼんでいて、 まわりの高いところはドーナツ状に ツヤがあり、かなり光沢を帯びる。 側面はわずかに磨耗する程度。 E 潰れて平坦面を作っている。	北西コーナ ー 近くの床上
[126]						
241	18II DG50. 8 30号土坑	安山岩 2421	12.4 9.8 8.5	断面梯形の角柱状	A-3面 表裏面は平滑に磨耗。側面 は局部的に6×1.6cmの範囲が浅い 樋状に磨耗する。	
[126]						
242	18II DK54. 10 62住	雲母片岩 253	(11.6) (9.4) (1.5)	板状、三角形。	A-2面 風化がひどく研磨面の観察 は不可能。	南西コーナ ー 近く、主柱穴 傍の床上
[126]						

砧石

() 内数値は現存値

No. 挿図No.	台帳番号 (遺構番号)	石材 重量(kg)	長さ 巾 厚さ(cm)	素材の形状	使用痕 (磨耗の程度、位置)(A~D)	備考 (出土位置)
243	18I BQ54. 27 31住	安山岩 25.0	34.4 41.4 11.4	厚手の大きな鉄平石 中央を分割するよう に段差がある。	表面中央の段差の縁が円味を帯びて いるが、使用痕かどうかが明確さを欠 く。	西壁際中央の 床上
[127]						

No. 挿図No.	台帳番号 (遺構番号)	石材 重量(kg)	長さ 巾 厚さ(cm)	素材の形状	使用痕 (磨耗の程度、位置)(A~D)	備考 (出土位置)
244	18 I BR 45. 48 24住	安山岩 2.4	(32.5) (14.5) (3.8)	不整形な鉄平石、熱を受けて、赤化し剥落がある。	D.F 端の方がわずかに磨耗して擦痕が残る。	埋甕炉の炉辺石(2枚のうち内側)として埋め込まれていた。
[127]						
245	18 I BR 45. 49 24住	安山岩 0.3	(15.5) (11.8) (1.6)	不整形な鉄平石の一面に使用痕が残る。もともと厚手の鉄平石が板状に割かれたもの。	B 礫のしわ状の凸凹のうち凸部が平たく摩滅してツルツルになっている。	埋甕炉の炉辺石(2枚のうち外側)として埋め込まれていた。
[127]						
246	18 I BR 47.181 24住	安山岩 2.8	18.7 16.8 4.8	不整形な鉄平石。表裏面の両方に使用痕が明瞭に残る。	B.D 表面の中央部は平坦面となって、ツルツルに磨耗。C 裏面は石の凸凹が残るが、全体によく磨耗してなめらか。E 側面に敲打痕がある。角がとれて円味を呈するが、整形のための加工痕ではない。	南壁中央(入口部)のピット内
[127]						
247	18 I B Y 61. 17 46住	安山岩 59.0	61.0 44.3 12.4	不整形な鉄平石、裏面がより平坦であるが、使用痕は表面によく残る。	D.C 表面は部分的にスペースに磨耗する。裏面は中央部分の色が変りわずかに磨耗する程度である。	北西コーナー近くの床上0~16cmに壁側を高く傾斜した状態(図表面が下向き)で出土。
[128]						
248	18 I C E 62. 10 6住	安山岩 4.2	26.7 29.3 5.3	不整形な鉄平石の片面に使用痕は局部的に残るだけ。	B 磨耗してなめらかな部分はきわめてわずかである。	北側炉と北壁の間の床上。
[127]						
249	18 I C F 62. 13 6住	安山岩 7.6	29.2 37.3 5.9	不整形な鉄平石の片面が全体的にスペースとして鈍い光沢をもつ。下側半分位が黒くスけたように黒褐色を呈し熱による剥落が見られる。	B.D わずかに一ヶ所だけ平滑な部分がある。	北側炉の西、北西支柱穴と壁との間の床上
[127]						
250	18 II B D 47. 63 21住	安山岩 5.3	16.7 15.3 13.6	断面梯形の円味のある垂角礫で、平坦面は一面だけ赤褐色を呈す。剥落、割れは熱によるものか。	B.C 表面の中央がツルツルに磨耗する。裏面の一部にもB・C面があり角や縁に敲打痕が見られる。凹みと思われる部分もあるが、やや明確さを欠く。	南西コーナーの床上
[127]						
251	18 II B F 56. 16 59住	安山岩 3.6	28.4 21.8 5.1	扇形の鉄平石。片面に使用痕が見られる。	A.C.D 中央部は光沢を帯びるほどにツルツル磨耗し研かれたようであり、周辺ほど磨耗の度合が下る。ある程度平なもので全体的にこの面をこすっている。従って高い部分だけとくに磨れてツルツルになっている。	炉西側、壁との間の床上
[127]						
252	18 II C N 58. 12 22住	安山岩 8.4	21.0 30.0 8.3	厚手の扁平な不整形の平石、片面を使用。	C 中央辺りは色が変わって凸部は若干平坦に磨耗する。	南側支柱穴間の床上
[127]						
253	18 II C X 54. 11 67住	安山岩 0.9	12.6 15.0 4.0	不整形な鉄平石の片面にわずかに使用痕が残る。破損品ではなく、この状態で使用している。	C.D 節理面の赤褐色が使用部分だけ薄れて1ヶ所がツルツルに磨耗する。E 敲打によって角がとれ円味を帯びる。タタキ石に転用、あるいは兼用か。	
[128]						
254	18 II C Y 61. 14 10住	安山岩 11.2	28.0 25.0 10.1	扁平、不整形な河原石、裏面には熱による剥落が見られるので、割れた石を用いたと思われるが、意識的に割った可能性もある。	A.C 中央部は軽く石皿状に凹み、光沢を帯びるほどツルツルに磨耗する。また円味のある縁部の縁辺がよく磨耗する。E 割れ口部の鋭い縁が敲打かあるいは研磨によって、円味を帯びるほどに磨滅する。裏面の割れ口も同様に使われている。	北西コーナーの床上
[128]						

No. 挿図No.	台帳番号 (遺構番号)	石材 重量(kg)	長さ 巾 厚さ(cm)	素材の形状	使用痕 (磨耗の程度、位置)(A~D)	備考 (出土位置)
255 [128]	18 II D A 48. 10 66住	安山岩 10.0	21.8 21.8 15.2	サイコロ状の四角な 垂角礫の一面を使用、 部厚く重い。	B, D 中央に細長い範囲でツルツル に磨耗した部分があり、かすかに凹 面になる。砥石の研磨面と似ている。 F 縦横に擦痕が見られる。	南西コーナー 近くの床上
256 [128]	18 II D A 48. 21 66住	安山岩 4.5	31.2 23.6 5.5	板状、楕円形の垂角 礫、石皿状にわん曲 する。	D 全体に表皮は黄白色であるが、 中央部は灰色に変じている。使用は 微々たる程度か。裏面も同様である。	炉の南西側内 区の床上
257 [129]	18 II D B 52. 16 64住	安山岩 2.2	19.8 19.5 4.3	円形の鉄平石、片面 だけ使用。	D 中央部がわずかに白色を帯びて かすかに磨耗する程度。	床上 20cm の 覆土中
258 [128]	18 II D G 50. 9 30号土壇	安山岩 13.4	30.0 12.8 15.0	断面梯形の不整形な 垂角礫、平坦面 3 面 持つ。全体に黒い付 着物が凹部に入りこ む。	D 表裏面はなめらかで鈍い光沢を もつが、面が潰れて平坦面を作るこ とはない。側面に局部的に樹脂を塗 り付けたような光沢を帯びた平滑な 部分がある。側面は全体に凹凸面 にもつやがある。	
259 [129]	18 II D G 54. 20 61住	安山岩 9.5	23.7 36.9 9.0	半月形の厚手の鉄平 石を利用している。 片面だけ全面に使用 痕が見られる。	B, C B 面は光沢こそはないが、ツ ルツルに磨耗して長辺方向にのびる 軽い凹面となっている。下側の縁は とくに磨耗して角に円味があり、微 細な擦痕が見られる。	床上 19cm の 覆土中 (内区 中央) に出土
260 [129]	18 II 61住	安山岩 11.0	31.0 21.0 8.6	厚手の板状、梯形な 垂角礫の両面縁に使 用痕が残る。	D 表裏面とも磨耗痕はほとんどな い。E 縁辺の角が潰れて平坦にな る、あるいは剥落する。G 凹み にはならないか、敲打痕によってザラ ザラな平坦面になる。	
261 [129]	18 II D I 49. 10 17住	安山岩 1.5	15.9 19.2 3.8	板状、不整四角形の 鉄平石。	D, G 明瞭な使用痕は残っていない が、1ヶ所、面が潰れてかすかに凹 む。	17住炉の傍に 敲石とともに 出土

敲 石

() 内数値は現存値

No. 挿図No.	台帳番号 (遺構番号)	石材 重量(g)	長さ 巾 厚さ(cm)	素材の形状	敲打痕の位置と残存程度	備考
262 [129]	18 I B R 46. 1 26住	結晶片岩 286	13.1 3.2 4.3	断面梯形の細長い棒 状の礫。	尖った先端の頂部から側面と、図示 した面の反対側先端の縁にわずかに 見られる。	
263 [129]	18 I B Y 62. 11 46住	安山岩 344	(8.0) (8.6) (4.9)	円いおむすび形か。 破片のためはっきり しない。	円味のある先端が平らに石槌のよう に潰れる。	
264 [129]	18 I C A 46. 2 3住	安山岩 120	10.9 3.4 2.3	細長い乳棒状の円礫	両端にあり、一端は平坦に磨滅する。	表面に長軸方 向の擦痕があ る。
265 [129]	18 I C B 63. 12 44住	砂岩 163	9.6 6.0 2.0	扁平な小判形	両端と両側縁にみられる。一端は平 縁になるほど潰れて剥離痕がある。 側縁は敲打痕が凹みをなす。	表面はツルツ ルに磨耗し、 擦痕が見られ る (砥石か)
266 [129]	18 I C J 61. 12 43住床上	安山岩 114	9.6 3.8 2.4	断面扁楕円形の乳棒 状	両端にあり、一端は平らに石槌のよ うに潰れる。	表裏面に擦痕 あり。側面は 凹むほどに強 い擦痕がある。

No. 挿図No.	台帳番号 (遺構番号)	石材 重量(g)	長さ 巾 厚さ(cm)	素材の形状	敲打痕の位置と残存程度	備考
267 [129]	18 I C K 58. 6 45住	玄武岩 787	9.8 8.7 6.0	厚手の円盤形	側面全周に二条、浅い溝状に敲打痕がめぐる。溝の間は凸帯状に残る。	表裏面にアバタ状の凹みがある。凹みの中心部は面が潰れて平滑。
268 [130]	18 II B I 50. 10 58住床上	硬砂岩 260	11.8 5.6 2.9	断面三角形の乳棒状の礫	両端にあり、一端は石槌のように平坦に潰れ、一端は敲打による剝離痕が見られる。角張った稜部にもある。	一面にかすかな磨耗痕と打痕が残る。砥石か。
269 [130]	18 II D E 45. 5 60住	安山岩 222	8.3 5.8 2.9	板状、長方形の礫	ほぼ全周におよぶ。両端は角がとれて円味を呈し剝離痕がある。側面には強度の打撃痕が残る。	表裏面とも滑らか。
270 [130]	18 II D J 54. 14 62住	安山岩 508	13.9 6.4 6.0	断面三角形の不整形な礫	尖った先端が平らに潰れる。	
271 [130]	18 II D K 54. 20 62住	砂岩 1346	14.3 8.3 7.4	断面四角形の角柱状の礫	両端の縁にあり、一端は三辺の縁に見られ、この内側がドーナツ状にツルツル磨耗する。	磨石または砥石か。
272 [130]	18 II D I 49. 11 17住	安山岩 188	8.0 4.5 4.5	断面四角形の不整形な礫	側縁の一边がわずかながら平たく磨滅する。	石皿の傍に出土。
273	18 I B K 58. 2 黒色土層	安山岩 250	7.5 5.8 4.5	楕円形の饅頭形、一部欠	側面の角にわずかな平坦面が残る。	
274	18 II 表採	安山岩 416	15.7 4.5 3.0	断面四角の角柱状の礫	尖端部の側面にわずかに残る。	

凹石

() 内数値は現存値

No. 挿図No.	台帳番号 (遺構番号)	石材 重量(g)	長さ 巾 厚さ(cm)	素材の形状	凹みの数 表面 裏面 側面	使用痕(凹みの形状)	備考
275 [130]	18 I B O 47. 22 24住	安山岩 323	8.2 7.2 4.7	扁平な円い饅頭形	1	浅い凹み。腐食がはなはだしくて凹みの範囲がはっきりしない。	
276 [130]	18 I B R 47.182 24住P ₄₉ 内	砂岩 479	13.1 7.2 3.5	断面三角形の細長い礫	2	浅い凹み。凹みの内と外に長軸方向の擦痕が見られる。	片側の縁の両端に敲打痕がある。
277 [130]	18 I B X 62. 7 46住	安山岩 549	8.9 8.7 5.5	扁平な円い饅頭形の礫	1 1	表面はアバタ状で浅い。裏面はロート状で深く周辺はアバタ状。	
278 [130]	18 I C I 60. 3 43住	安山岩 410	8.3 7.3 5.1	断面四角形であるが不整形の亜角礫	2 2 2-3	表と裏面はロート状、側面はアバタ状の凹み。	
279 [130]	18 II B A 60. 9 20住	安山岩 248	(11.3) (6.2) (3.2)	断面楕円形で細長い棒状	2	アバタ状に小さな凹みが散在する。	
280 [131]	18 II A Y 60. 2 20住傍	安山岩 3100	15.0 14.3 9.6	部厚い大きな亜角礫、剝落か	1	ナベ底状に大きく凹み、内面はそれほど平滑ではない。	

No. 挿図No	台帳番号 (遺構番号)	石材 重量(g)	長さ 巾 厚さ(cm)	素材の形状	凹みの数			使用痕(凹みの形状)	備考		
					表面	裏面	側面				
281 [130]	18II A Y 62. 4 20住傍	安山岩 383	9.7	円形、山形状 の饅頭形	1			ナベ底状に凹む、腐食 がはなはだしく、よく 判らない。			
			7.8								
			5.1								
282 [130]	18II A S 44.350 19住	グリーンタフ 123	7.3	板状、薄手の 不整形な礫	1			アバタ状の浅い凹み	片面に夥しい 擦痕が残る。 ツルツルした 面はない。		
			8.5								
			1.7								
283 [131]	18II B A 58. 25 55住	安山岩 462	11.9	板状の不整形 な角礫	1	2		ロート状で深い。凹み の平面形は卵形で一方 にすぼまるような形に なる。			
			7.7								
			5.1								
284 [131]	18II B J 48. 10 58住床上	安山岩 789	13.1	不整形な細長 い角礫	2	1	2	アバタ状で浅い。			
			8.1								
			6.6								
285 [131]	18II B J 49. 7 58住	砂岩 482	10.5	扁平な卵形の 円礫	2	2		ロート状で深い。凹み 内は平滑。	表面はツルツル に滑らか、 磨石か。		
			7.3								
			4.9								
286 [131]	18II C V 50. 6 12住	安山岩 1002	10.3	板状の不整形 な亜角礫	1	1	1	表裏面はナベ底状の深 い凹み、内面は凹凸が ある。側面はアバタ状。			
			12.3								
			5.9								
287 [131]	18II C W 51. 5 12住	安山岩 782	11.1	山形状の不整 形な亜角礫	2	1		アバタ状の部分か広く あり、一部が深く凹む。			
			11.0								
			6.6								
288 [131]	18II D H 49. 16 17住床上	安山岩 451	12.0	板状、三角形 の角礫、表皮 はデコボコ	1	1		アバタ状で深い。			
			10.5								
			3.3								
289 [131]	18II D J 53. 12 62住	安山岩 405	10.1	板状、不整形 な角礫	1	1		アバタ状で浅い。			
			8.3								
			4.6								
290	18 I 表採	安山岩 253	8.2	断面台形の不 整形な角礫。 腐食がはなは だしい。	1		2	ロート状の深い凹み。			
			6.4								
			4.8								
291	18II C H 47. 9 溝 3	砂岩 238	9.0	扁平な楕円形 の河原転石	1			アバタ状の打痕が集ま った細長い凹み。	縁に1ヶ所敲 打痕あり。		
			7.2								
			2.7								
292	18II C J 44. 4	結晶片岩 186	(9.2)	小判形の円味 のある河原転 石、半欠品	1	剥落		ロート状の円く深い凹 み、内面は平滑でない。			
			(5.8)								
			(3.3)								
293	18II C N 59. 1	安山岩 118	(6.7)	断面扁楕円形 の棒状河原石 半欠	1	1		アバタ状(半欠のため 不明)			
			(5.2)								
			(2.6)								
294	18II D F 45. 2	安山岩 904	11.7	円い山形状の 河原石、おむ すび形	1		1	小さな凹み			
			10.6								
			7.0								

石鏃、石槍、石錐、多頭石斧、石匙、スクレパー、穀摺石

() 内数値は現存値

No挿図No.	台帳番号	器種	出土地点	残存状態	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
295	18 I B C 63.	2 石鏃	44住傍	完形	黒耀石	2.1	1.7	0.4	0.8	凸基有茎式
296	18 I B L 54.	11 石鏃	15住	頭部と片脚欠	"	(2.2)	(1.5)	0.5	(1.2)	"
297	18 I B M 55.	12 石鏃	15住	基部下欠	"	(1.4)	(1.2)	0.4	(0.5)	不明
298	18 I B L 59.	4 石鏃	32住	片脚欠	"	2.0	(1.5)	0.4	(1.2)	凹基無茎式
299	18 I B N 59.	8 石鏃	32住	頭部欠	"	(2.6)	1.5	0.4	(0.7)	"
300	18 I B M 57.	7 石鏃		茎部欠	"	(2.2)	1.5	0.5	(1.1)	凸基無茎式
301	18 I B Q 46.	120 石鏃	24住	片脚欠	"	(1.8)	(1.2)	0.3	(0.3)	凹基無茎式
302	18 I B T 61.	6 石鏃	34住	片脚欠、茎部欠	"	(1.6)	(1.0)	0.3	(0.2)	凸基有茎式
303	18 I B U 45.	6 石鏃		両脚の先欠	"	(1.9)	(1.5)	0.4	(0.6)	凹基無茎式
304	18 I B W 46.	3 石鏃	3住	完形	"	2.0	1.3	0.5	0.8	"
305	18 I B Y 46.	48 石鏃	3住	"	"	2.0	1.4	0.4	0.6	"
306	18 I B Y 47.	55 石鏃	3住	"	"	2.1	1.6	0.4	1.1	平基無茎式
307	18 I B X 61.	8 石鏃	46住	"	"	2.3	1.6	0.4	0.8	凸基有茎式
308	18 I B Y 63.	8 石鏃	46住	片脚欠	"	(1.8)	(1.6)	0.4	(0.5)	凹基無茎式
309	18 I C A 61.	14 石鏃	46住	完形	"	3.1	1.6	0.5	1.5	凸基有茎式
310	18 I C A 63.	5 石鏃		"	"	1.6	1.3	0.2	0.3	凹基無茎式
311	18 I C B 51.	11 石鏃	37住	"	"	1.5	1.5	0.3	0.3	"(長脚鏃)
312	18 I C D 54.	6 石鏃	35住	片脚欠	"	(1.9)	(1.6)	0.3	(0.5)	凹基無茎式
313	18 I C E 54.	7 石鏃	35住	頭部、脚欠	"	(2.6)	1.3	0.4	1.2	凸基有茎式
314	18 I C E 53.	3 石鏃	35住傍	完形	"	2.4	1.5	0.4	1.0	凹基無茎式
315	18 I C E 53.	11 石鏃		"	"	1.6	1.2	0.3	0.3	平基無茎式
316	18 I C F 65.	8 石鏃	6住	"	チャート	2.6	1.5	0.4	1.0	凹基無茎式
317	18 I C F 64.	13 石鏃	6住	両脚欠	黒耀石	1.3	1.4	0.4	0.4	"
318	18 I C F 65.	11 石鏃	6住	頭部、茎部欠	"	(2.8)	(1.7)	0.4	(1.5)	凸基無茎式
319	18 I C F 63.	4 石鏃	6住	片脚欠	"	2.5	(1.5)	0.5	(1.1)	凸基有茎式
320	18 I C H 60.	4 石鏃		両脚欠	"	(1.9)	(1.6)	0.3	0.6	凹基無茎式
321	18 II A P 48.	23 石鏃		基部下欠	"	(1.2)	(1.2)	0.3	(0.3)	不明
322	18 II A R 45.	163 石鏃	19住	完形	"	2.3	1.6	0.7	2.1	平基無茎式
323	18 II A S 43.	94 石鏃	19住	片脚欠	"	(1.2)	(1.0)	0.3	(0.2)	凹基無茎式
324	18 II A S 45.	105 石鏃	19住	"	"	(2.5)	(1.5)	0.3	(0.8)	"
325	18 II A V 45.	2 石鏃		"	チャート	(2.1)	(1.2)	0.4	(0.6)	"
326	18 II A W 51.	3 石鏃	7住傍	基部下欠	黒耀石	(1.8)	(0.6)	(0.3)	(0.3)	不明
327	18 II B A 61.	6 石鏃	20住	片脚欠	"	(1.7)	(1.0)	(0.2)	(0.3)	凸基有茎式
328	18 II B A 59.	2 石鏃		完形	"	2.3	1.6	0.3	0.8	凹基無茎式
329	18 II B D 47.	15 石鏃	21住	"	"	1.7	1.8	0.3	0.5	"(長脚鏃)
330	18 II B D 56.	92 石鏃	59住	片逆刺欠	"	(3.5)	(2.1)	0.6	(3.8)	平基無茎式
331	18 II B E 56.	10 石鏃	59住	片脚欠	"	1.7	1.4	0.3	0.3	凹基無茎式
332	18 II	石鏃	58住	頭部欠	頁岩	(1.3)	1.4	0.2	(0.2)	"(長脚鏃)
333	18 II B I 55.	2 石鏃		完形	黒耀石	1.9	1.4	0.4	0.8	凹基無茎式
334	18 II B J 51.	2 石鏃		"	"	1.7	1.5	0.4	0.8	"
335	18 II B K 59.	9 石鏃	8住	"	"	3.2	1.2	0.3	1.1	凸基有茎式
336	18 II B R 51.	8 石鏃		両脚の先欠	"	1.3	1.2	0.2	0.2	凹基無茎式
337	18 II C K 45.	5 石鏃	18住	完形	"	1.6	1.5	0.3	0.2	"(長脚鏃)

No挿図No	台帳番号	器種	出土地点	残存状態	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
338	18II CK47.	4 石鏃		基部下欠	黒耀石	(1.2)	(0.4)	(0.2)	(0.2)	不明
339	18II CG58.	3 石鏃	70住	完形	"	2.5	1.6	0.4	1.0	凹基無茎式
340	18II CG54.	2 石鏃	69住	"	"	1.7	1.5	0.4	0.6	"
341	18II CI53.	6 石鏃	69住	"	チャート	2.8	1.8	0.4	1.0	"(鍬形鏃)
342	18II CI51.	2 石鏃		"	黒耀石	2.9	1.9	0.3	1.3	凹基無茎式
343	18II CM48.	37 石鏃	溝2	頭部欠	"	1.7	1.4	0.4	1.0	"
344	18II CM54.	8 石鏃		完形	"	1.8	1.5	0.2	0.6	"
345	18II CP50.	2 石鏃		頭部欠	"	(1.9)	1.6	0.3	(0.8)	凹基無茎式
346	18II CQ50.	1 石鏃		完形	"	1.9	1.4	0.3	0.7	"
347	18II CQ60.	1 石鏃	14住	"	"	1.8	1.4	0.4	1.0	平基無茎式
348	18II CT53.	1 石鏃		片脚欠	"	1.2	(1.3)	0.3	0.5	凹基無茎式
349	18II CV49.	3 石鏃	12住傍	頭部、両脚欠	"	(1.5)	(0.7)	(0.3)	(0.3)	"
350	18II CV53.	12 石鏃	11住	頭部欠	"	0.4)	(1.0)	(0.2)	(0.1)	"
351	18II CV53.	5 石鏃	11住	片脚欠	"	(1.9)	(1.0)	0.3	(0.2)	"
352	18II CW53.	8 石鏃	11住	片脚欠	"	(2.8)	(1.9)	0.3	1.3	"
353	18II CW53.	15 石鏃	11住	完形	"	3.0	1.4	0.3	1.3	"
354	18II DB55.	2 石鏃		"	"	2.4	1.4	0.3	1.2	"
355	18II DC56.	2 石鏃	63住傍	片脚欠	"	(2.3)	(1.3)	0.3	(1.7)	"
356	18II DE47.	10 石鏃	60住	基部欠	"	(2.4)	1.2	0.4	(0.9)	凸基有茎式
357	18II DE49.	3 石鏃		両脚欠	"	(2.1)	(0.7)	0.3	(0.6)	不明
358	18II DF54.	9 石鏃	61住	完形	"	1.5	1.4	0.3	0.4	凹基無茎式 (長脚鏃)
359	18II DF48.	4 石鏃		"	"	2.1	1.4	0.3	0.7	凹基無茎式
360	18II DH58.	1 石鏃		頭部欠、片脚欠	"	(1.7)	(0.8)	0.4	(0.6)	"
361	18II DI53.	10 石鏃	62住	片脚欠	"	(1.5)	(1.2)	0.3	(0.5)	凹基無茎式
362	18II DJ53.	14 石鏃	62住	頭部、基部欠	"	(2.1)	(1.5)	0.3	(1.6)	不明
363	18II DK53.	25 石鏃	62住	頭部、基部欠	"	1.2	1.0	0.3	(0.5)	凸基有茎式
364	18II DK53.	7 石鏃	62住	頭部、片脚欠	"	1.6	1.2	0.2	(0.4)	"
365	18II DK51.	4 石鏃		片脚欠	"	2.6	(1.6)	0.3	(0.8)	凹基無茎式 (鍬形鏃)
366	18II	石鏃		"	"	1.6	1.0	0.2	0.4	凹基無茎式
367-132	18I BT59.	8 石槍	34住	頭部片	"	(2.5)	(1.5)	(0.4)	(1.4)	
368-	18I BL60.	1 石槍	32住	"	"	(2.8)	(1.4)	(0.4)	(1.4)	
369-	18II DR50.	3 石槍	57住	頭部欠	"	(4.0)	(1.4)	(0.4)	(2.4)	有舌尖頭器
370	18III DY58	石槍		基部欠	"	(4.5)	(2.8)	(0.6)	(6.8)	全体に磨耗する
371-132	18I BW62.	5 石錐	46住	"	チャート	(2.5)	(0.9)	(0.4)	(1.0)	先端わずかに磨耗する
372	18I CD55.	5 石錐	35住	頭部欠	黒耀石	(2.9)	(1.1)	(0.7)	(3.0)	
373	18II DC47.	17 石錐	60住	完形	"	4.3	1.8	0.7	(4.9)	先端わずかに磨耗する
374-132	18II DI54.	14 石錐	62住	基部欠	硬砂岩	(3.5)	(1.0)	(0.3)	(1.2)	
375-121	18I BY63.	13 多頭石斧	46住	半欠	輝緑凝灰岩	(10.5)	(5.0)	(2.2)	(139.5)	抉りは浅いのか4ヶ所と推定される
376-132	18II CS64.	1 石匙		完形	チャート	5.2	2.7	0.5	9.4	
377	18III CR62.	24 スクレーパー		"	頁岩	11.3	3.7	1.3	36.1	
378	18III CJ52.	2 穀摺石		半欠		(9.3)	(6.3)	(7.2)	(696.4)	磨耗面2、先端に敲打痕あり

紡錘車

() 内数値は現存値

No.	台帳番号	分類	外径(mm)	孔径(mm)	特	徴
挿図No.	(遺構番号)	残存状態 (個体)	厚さ(mm)	重量(g)		
379-132	18 I B M 64. 1住	5 手捏 1/3	42 12	(7)		全面がへら研磨されている。中心部がわずかに厚さを増す。
380- "	18 I B N 65. 1住	2 石製 1/6	(56) 6	(6)		全面研磨されるが、表・裏面とも平坦ではない。側面わずかに平坦面を作出。中心孔は両面から穿孔、中心部が厚味を増す。
381- "	18 I B N 65. 50住	7 土器片加工 1/3	(54) 8	(10)		側面はすって整形しているが、やや雑な整形である。無孔の円板であるかもしれない。
382- "	18 I B O 63. 36住	8 手捏 1/4	34 10	(3)		きれいにへらミガキされている。中心部がわずかに厚みを増す。
383- "	18 I B O 63. 36住	12 手捏 1/3	(48) 9	(8)		丁寧にへらミガキされている。
384- "	18 I B P 62. 36住	2 手捏 完形	47 13	8 28		雑な整形で、全体に表面は凸凹して、側面は少し円味がついている。へらミガキ痕が荒く残る。中心部が厚味を増す。
385- "	18 I B R 45. 24住床面近く	41 土器片加工 1/2	(21)×32 7	(5)		側面は摺って整形している。胎土もろく磨滅する。
386- "	18 I B S 47. 24住ビット内	175 手捏 1/2	52 19	(20)		側面は円味をもち、中心部が厚くなる。全体に丁寧にへらミガキしてある。
387- "	18 I B S 60. 34住	2 手捏 1/2	52 13	7 (16)		穿孔はやや雑でわずかに斜行する。整形も雑で側面は平坦ではなく凹凸があり円味を帯びる部分もある。中心部が厚味を増す。
388-133	18 I B X 56. 4住	9 土器片加工 完形	46 13	8 26		土器片の湾曲はそのままに、側面は摺って整形しているが凹凸が残る。中心孔は両側から穿孔している。
389- "	18 I B Y 63. 46住	17 土器片加工 完形	36 7	5 8		側面はすって整形してある。胎土もろく全体に磨滅する。
390- "	18 I C D 59. 3住	3 土器片加工 1/2	52 10	(10)		側面平坦に摺って整形している。孔の位置がややずれるか、楕円形になるらしい。
391- "	18 I C E 54. 35住	16 土器片加工 完形	37 5	5 7		表面に炭化物付着、はっきりとしたハケ整形痕が見られる。側面摺って整形している。全体に磨滅が著しい。
392- "	18 I C K 61. 43住	2 手捏 1/2	45 15	6 (17)		全面へらミガキされてなめらかに整形されている。側面は円味がつく。孔の周囲及び周辺は、表面が荒れているが、使用痕であろうか。中心部が厚味を増す。
393- "	18 II A X 62. 5住	5 土器片加工 1/2	44 7	(3)		表面はへらミガキされており、裏面は荒れている。側面は整形されていない。中心孔の形跡は全く無い。
394- "	18 II A Y 57. 55住	8 手捏 1/2	50 13	(15)		表・裏、側面とも、平滑に整形されているが、さほど研磨痕はない。片面にかすかにへら痕が放射状に見えるが、文様かどうか明確ではない。
395- "	18 II B B 46. 21住	10 手捏 完形	47 12	5 37		全体に丁寧にへらミガキされているが、へらの跡が荒く残る。裏面にこくわずか炭化物付着、中心部の厚味が増す。
396- "	18 II B K 49. 58住	7 手捏 1/3	(54) 13	(7)		なめらかに整形される。片面は平坦であるが、一方は傾斜を持ち、周縁は円味をもって尖るため、断面は山形状をなす。
397-	18 II B K 57. 8住	125 手捏 破損片	24×17 18	(4)		
398-133	18 II B L 57. 8住	57 手捏 1/2	51 17	(22)		全体になめらかに整形され、指紋がかすかに残る。中心部が厚味を増す。

No.	台帳番号	分類	外径(mm)	孔径(mm)	特	徴
挿図No.	(遺構番号)	残存状態 (個体)	厚さ(mm)	重量(g)		
399-133	18Ⅱ B T 50. 68住	3 土器片加工 1/2	33(隅丸方形) 6	4 (5)		隅丸方形に側面を摺って整形している。湾曲の強い破片を用いている。
400- "	18Ⅱ C G 54. 69住	5 手捏 完形	47 13	5 26		表・裏面とも凹凸が残り、指圧痕が見える。側面は円く、正円形ではない。穿孔は、裏から表になされて、孔周囲に粘土の盛り上りが残る。
401-134	18Ⅱ C S 47. 溝2	3 土器片加工 完形	44 8	5 4		両面はへらミガキされている。側面は割ったままで、整形していない。
402- "	18Ⅱ C U 51. 12住	2 土器片加工 1/2	32 9	7 (4)		側面は、あまり研磨されていない。
403- "	18Ⅱ C W 50. 12住	2 土器片加工 完形	64 6	5 21		穿孔しただけで周縁の加工をしてない。
404- "	18Ⅱ C X 60. 10住	3 手捏 1/2	48 9	8 (13)		全面にへらミガキが施されている。中心部がわずかに厚さを増す。
405- "	18Ⅱ D A 48. 66住	2 手捏 1/3	(52) 3	(13)		裏面は平坦であるが、表面は凹凸がある。側面も円味があり、中心部が厚味を増す。全体にへらミガキされている。孔の位置がやや中心からずれるようである。
406- "	18Ⅱ D A 51. 64住	11 土器片加工 完形	34 6	3 8		波状文のある土器片に両面から孔をあけている。側面の整形はしていない。
407- "	18Ⅱ D F 53. 61住傍	5 手捏 完形	36 5	5 8		楯描波状文の破片を用いる。側面を荒く摺って整形する。全体にもろく、磨耗する。
408- "	18Ⅱ D I 53. 62住	20 土製 完形	51 11	8 36		円板状に表・裏面、側面とも平坦に整形され、表面は丁寧に磨かれて模様か施されている。側面と裏面にも部分的にへらミガキが行われている。綾杉文が放射状に描かれる。
409- "	18Ⅱ D J 54. 62住	12 手捏 完形	52 18	7 46		中心部が厚味を増し、側面は円味を呈す。凹凸が多く、やや整形は雑であるが、全面へらミガキされ、両面に模様か施してある。胎土に雲母を多く含む。裏面の孔周囲にわずかな欠けがめぐる。使用痕か。側面は少し円味をもつ。
410- "	18Ⅱ D J 54. 62住	16 手捏 完形	61 12	9 49		円板状に、表・裏面、側面とも平坦に整形される。表・裏面とも微細な刺突と条痕が残る。刺突は焼成前のものと思われるが、条痕は整形痕以外に使用痕とも見えるが、はっきりしない。同様な条痕は側面にも見える。
411-134	18Ⅱ D J 54. 62住床上	22 手捏 1/3	52 12	(12)		表・裏面、側面とも平滑に整形され、へらミガキされている。表面に放射状の文様が施される。
412-135	18Ⅱ D K 53. 62住	16 手捏 1/2	50 11	(12)		表・裏面、側面とも平滑に整形され、へらミガキされている。中心以外に一ヶ所穿孔されているが、どういふための孔かわからない。
413- "	18Ⅱ D Q 50. 57住	2 手捏 1/2	50 10	(13)		片面平坦で、片面はわずかに凹凸があるが、全体にへらミガキが施されて表面はきれいである。中心部が厚味を増す。
414- "	18Ⅱ 表採	土器片加工 完形	38×31 7	10		不整形な土器片に穿孔して周縁を整形していない。胎土はもろく、全体に磨耗する。孔はスリバチ状に挟れず管状にあく。
415-	18Ⅰ B P 47. 24住	157 土器片加工 完形	31 5	5		円形に側面を整形している。
416	18Ⅰ B T 61. 34住	7 土器片加工 完形	45×41 7	15		楕円形に側面を整形している。
417	18Ⅰ B X 56. 4住	7 土器片加工 完形	38×41 6	8		不整形。

No. 挿図No.	台帳番号 (遺構番号)	分類 残存状態 (個体)	外径(mm) 厚さ(mm)	孔径(mm) 重量(g)	特 徴
418	18Ⅱ A P 47. 黒色土	9 土器片加工 1/4	36 4	(2)	隅丸長方形に側面を整形している。
419	18Ⅱ A R 46. 19住竪穴傍	3 土器片加工 完形	39×38 7	14	四角形を呈す。側面を整形し、穿孔しかけている。
420	18Ⅱ A X 58. 55住	8 土器片加工 1/2	37 5	(6)	楕円形に側面を整形している。
421	18Ⅱ A X 60. 黒色土	7 土器片加工 1/2	32 5	(5)	隅丸長方形に側面を整形している。
422	18Ⅱ A X 62. 黒色土	7 土器片加工 1/2	41 8	(17)	円形に側面を整形している。
423	18Ⅱ B L 56. 8住	42 土器片加工 完形	29×21 8	6	隅丸長方形に側面を整形している。

小形手捏土器

No. 挿図No.	台帳番号	出土 遺構名	出土地点	器形	器高	文 様	胎 土	焼成	成形、整形、その他
424	18Ⅰ B N 63.	7 50住	覆土	高坏?		不 明	砂粒を含む	良	不明、ヘラミガキ
425-135	18Ⅰ C A 45.	21 28住	南西コーナー のピット内	鉢	2.6	口唇部刻目	"	良好	手捏ね、 "
426- "	18Ⅰ C E 64.	13 6住	壁際ピットの 縁の粘土上	"	2.6	無 文	"	良	輪積み、 "
427- "	18Ⅰ C I 59.	5 43住	北壁中央	"		"	"	良好	手捏ね、 "
428- "	18Ⅱ A R 44.	154 19住	東側埋裏炉傍	"		不 明	"	良	輪積み、ナデ
429- "	18Ⅱ A V 53.	1 7住	内区やや南、 床直上	"	1.8	無文	砂粒若干含む	"	手捏ね、ヘラミガキ
430	18Ⅱ A W 53.	1 7住	不明	高坏		"	砂粒を含む	"	輪積み、ナデ
431-135	18Ⅱ B A 56.	2 55住	東側	鉢		"	"	"	" ヘラミガキ
432- "	18Ⅱ B J 49.	11 58住	南西コーナー 覆土	高坏		"	"	"	手捏ね、ナデ
433- "	18Ⅰ B M 57.	2 8住	西壁付近	甕	4.0	"	砂粒若干含む	"	輪積み、ヘラミガキ、 口辺部穿孔
434- "	18Ⅱ B M 57.	131 8住	p ₂ 際	壺	3.3	頸部に二本 沈線	粘土精良	"	手捏ね、ヘラナデ、中 央貫通孔
435- "	18Ⅱ B M 57.	139 8住	p ₂ 内	坏	1.8	無 文	砂粒多く含む	"	手捏ね、ヘラナデ
436- "	18Ⅱ B M 57.	165 8住	p ₂ 内	高坏		"	砂粘若干含む	"	" ヘラミガキ
437- "	18Ⅱ C O 57.	5 22住	埋裏炉西、壁 際	"		不 明	砂粒を含む	"	指痕あるも不明、ナデ
438- "	18Ⅱ C Y 49.	8 66住	南東コーナー 攪乱部	鉢		無 文	"	"	手捏ね、ナデ
439- "	18Ⅱ C X 63.	6 10住	南側中央	高坏	3.0	不 明	"	"	" "
440- "	18Ⅱ P B 50.	1 64住	南東コーナー ピット内	高坏?		無文一孔	砂粒若干含む	良好	輪積み、ヘラミガキ、 高坏脚か?
441- "	18Ⅱ D C 57.	6 63住	北東壁	台付甕	4.1	無 文	粘土精良	"	輪積み、ヘラミガキ
442- "	18Ⅱ D H 56.	4 住居外黒色土 層		鉢	1.1	"	砂粒を含む	"	手捏ね、ナデ
443- "	18Ⅱ A W 53.	1 7住	地点不明	壺?		不 明	"	"	輪積み、ヘラミガキ

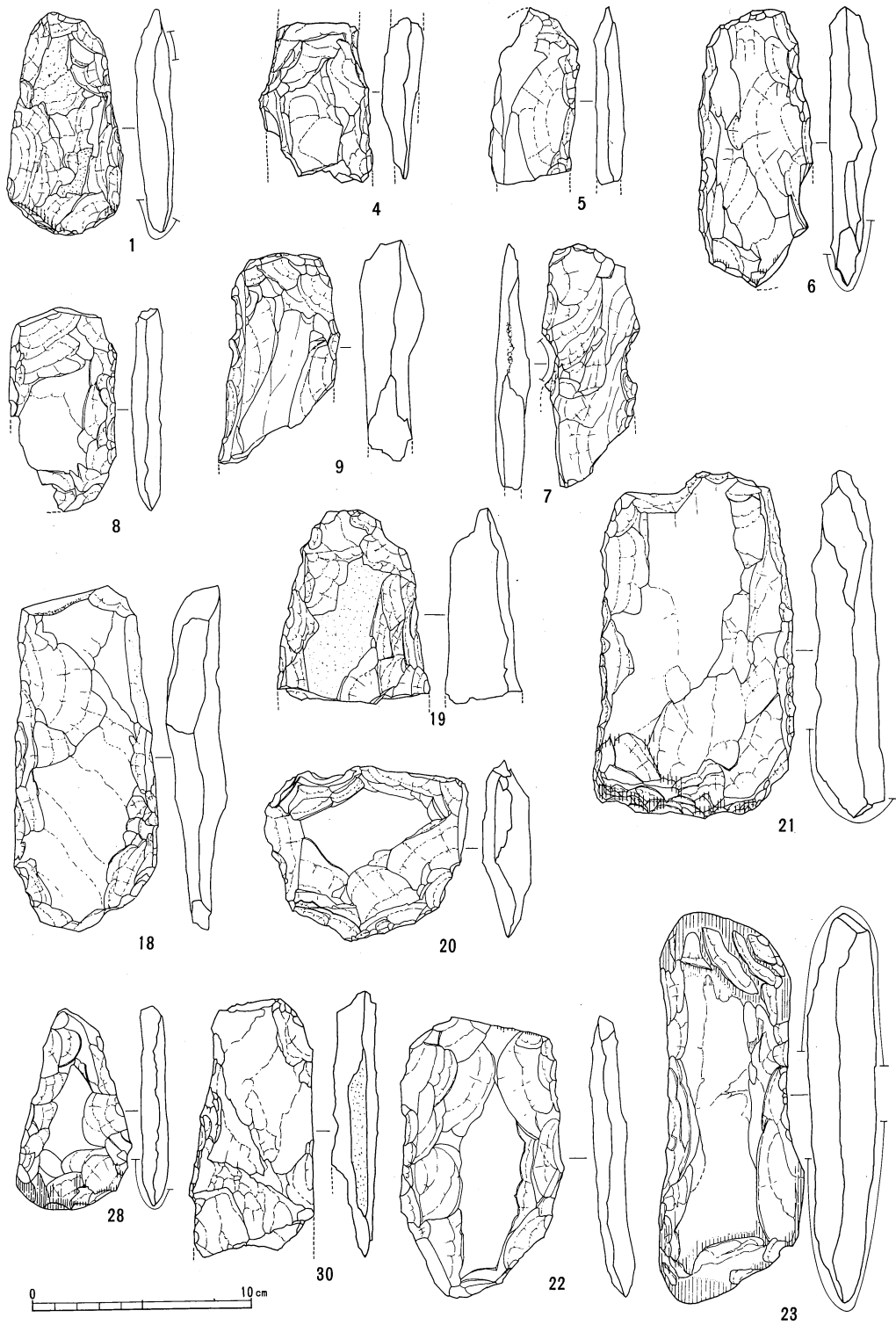
土製品、石製品、ガラス製品

No. 挿図No.	台帳番号 (遺構番号)	器種	外径 (cm) 厚さ (cm)	孔径 (cm) 重量 (g)	特 徴	備 考
444	18 I B Y 46.113 28住	有孔土製円板 (ペンダント)	4.2 0.8	0.50 17.7	略円形に整形し、側面は雑であるが、平に整えようとしたらしく、そのために裏面に盛り上りを残す。わずかにヘラナデが見えるが、紡錘車のような全面研磨はしていない。表面に繊維状あるいは織物状の圧痕が残るが、意識的に押印したものとみられる。孔は整形前に穿孔している。やや斜行し、孔縁に紐ズレ痕は見えない。	内区中央の床面 写真70
445	18 I B R 14 53住	土 玉(有孔)	0.9 (長さ)0.8	0.15 0.7	短い管状というより、低い円筒形を呈し、細い孔が貫通する。土製の白玉としてよいか。灰黒色。	53住の炭化したドングリの 中から出土
446	18 II 35住	土 玉(有孔)	0.9 0.7	0.22 0.4	球状の玉、孔は斜に貫通する。黄黒色。	埋甕炉の土器 内から出土
447	18 II C J 53. 7 69住	土 玉(有孔)	1.7 2.0	0.37 4.3	不整形の粗雑な作りで、指先で丸めて、無雑作に細い棒を貫通させている。孔は中心をはずれている。研磨痕もない。赤褐色。	
448	18 II C M 62. 9 9住	土 玉(無孔)	1.7 1.7	4.1	球形を呈し、色調、胎土は53住の白玉と似るが孔はあけられていない。	
449	18 II C B 54. 8 35住	勾玉形土製品	3.4×1.9 1.4	11.2	粘土紐を無雑作に曲げて勾玉状にしたという程度で紐孔もなく、研磨痕もない。	
450	18 I B N 60. 10 32住	棒状土製品	1.0 (長さ)3.2	4.2	何かを作ろうとした粘土紐が偶然焼けたものかもしれない。細長い棒状を呈し両端はちぎられたままで、指圧痕が残る。	
451	18 I C I 60. 22 43住	棒状土製品	1.1 (長さ)1.1	2.0	折損品	
452	18 I B M 53. 5 15住	有孔石製円盤	5.7×4.6 1.1	0.6 43.5		
453	18 II 58住	管 玉	0.53 (長さ)1.82	0.17	半裁しているため両側から穿孔している様子がよくわかる。	
454	18 II B I 48. 8 58住	ガラス小玉	0.59 0.35	0.12		

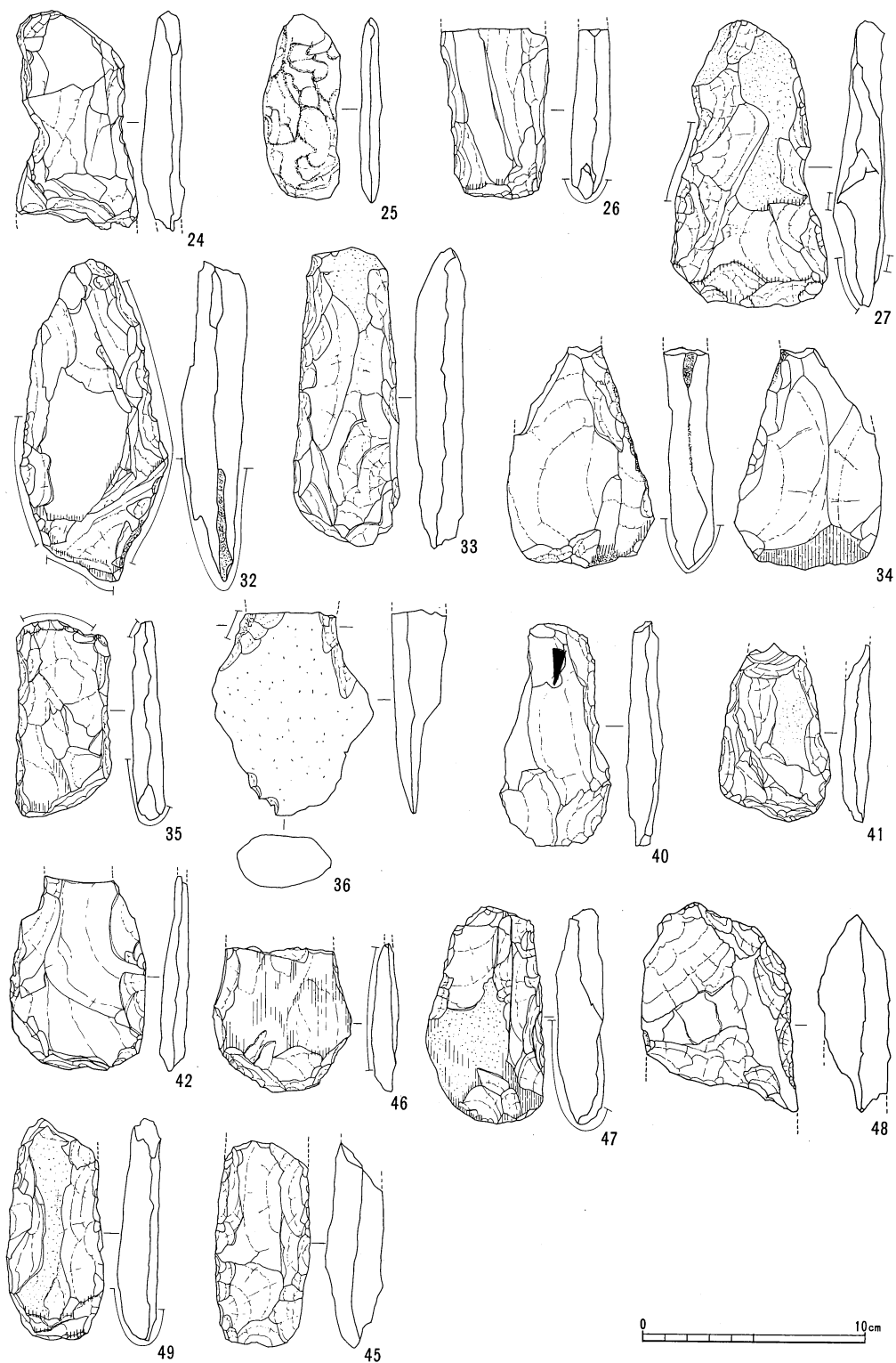
鉄製品

() 内数値は現存値

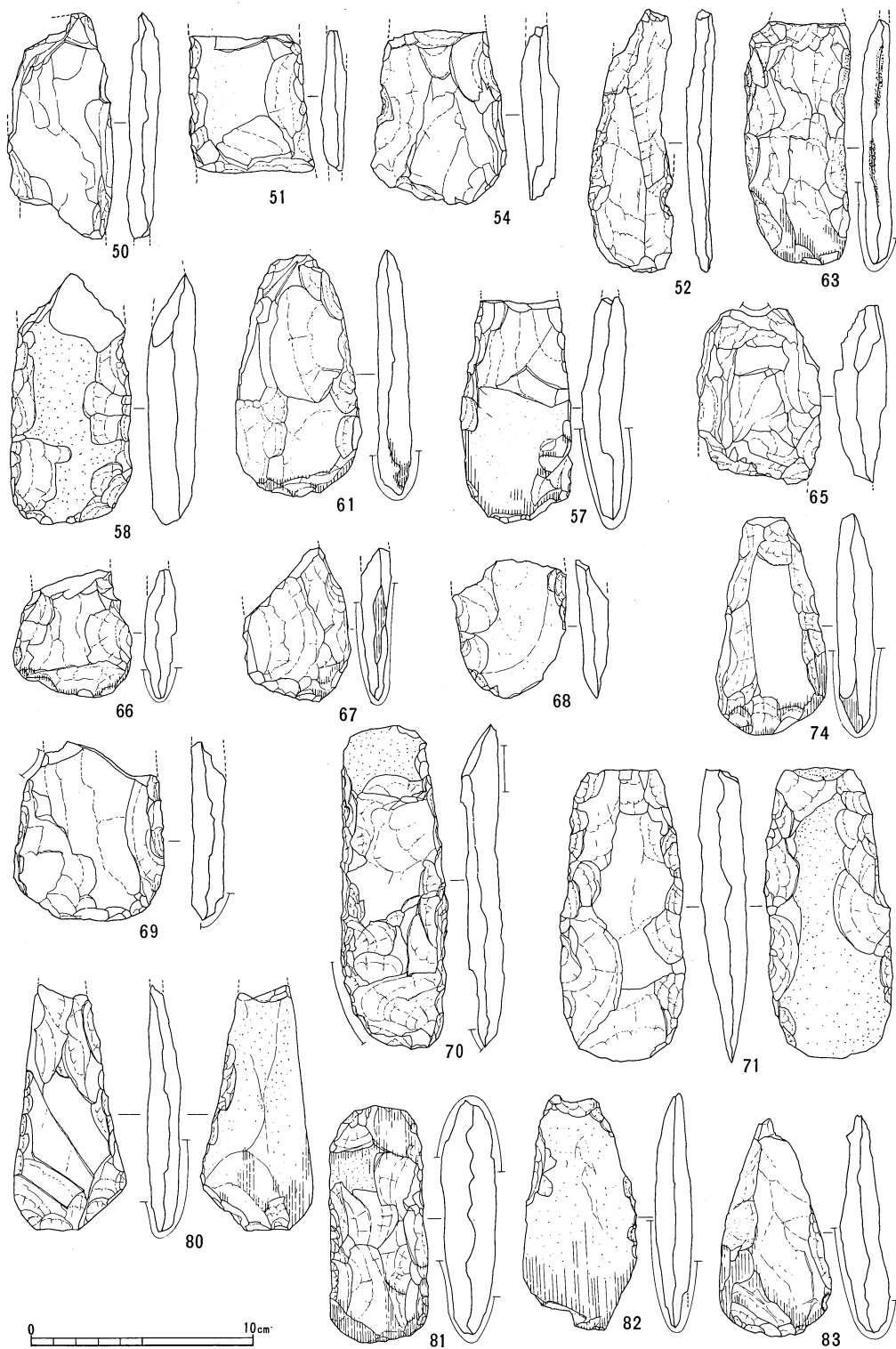
No挿図No.	台帳番号	器種	出土地点	残存状態	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
455-136	18 I B M 59. 12	鈍	32住	完形	8.9	1.4	0.3	5.6
456	18 I B M 59. 13	鈍	32住	柄部側欠	2.3	1.3	0.2	
457	18 I B X 57. 9	鉄片	4住		1.5	1.2	0.3	
458	18 I B X 61. 9	鉄片	46住		4.1	0.9	0.3	1.6
459-136	18 I C D 55. 3	鉄片	35住		5.7	2.2	0.3	6.6
460	18 I C H 65. 1	鉄片	6住		2.1	1.7	0.3	1.0
461	18 II B A 60. 8	鉄片	20住		2.3	0.6	0.2	
462	18 II C X 49. 9	鉄片	67住		2.6	1.0	0.4	1.4



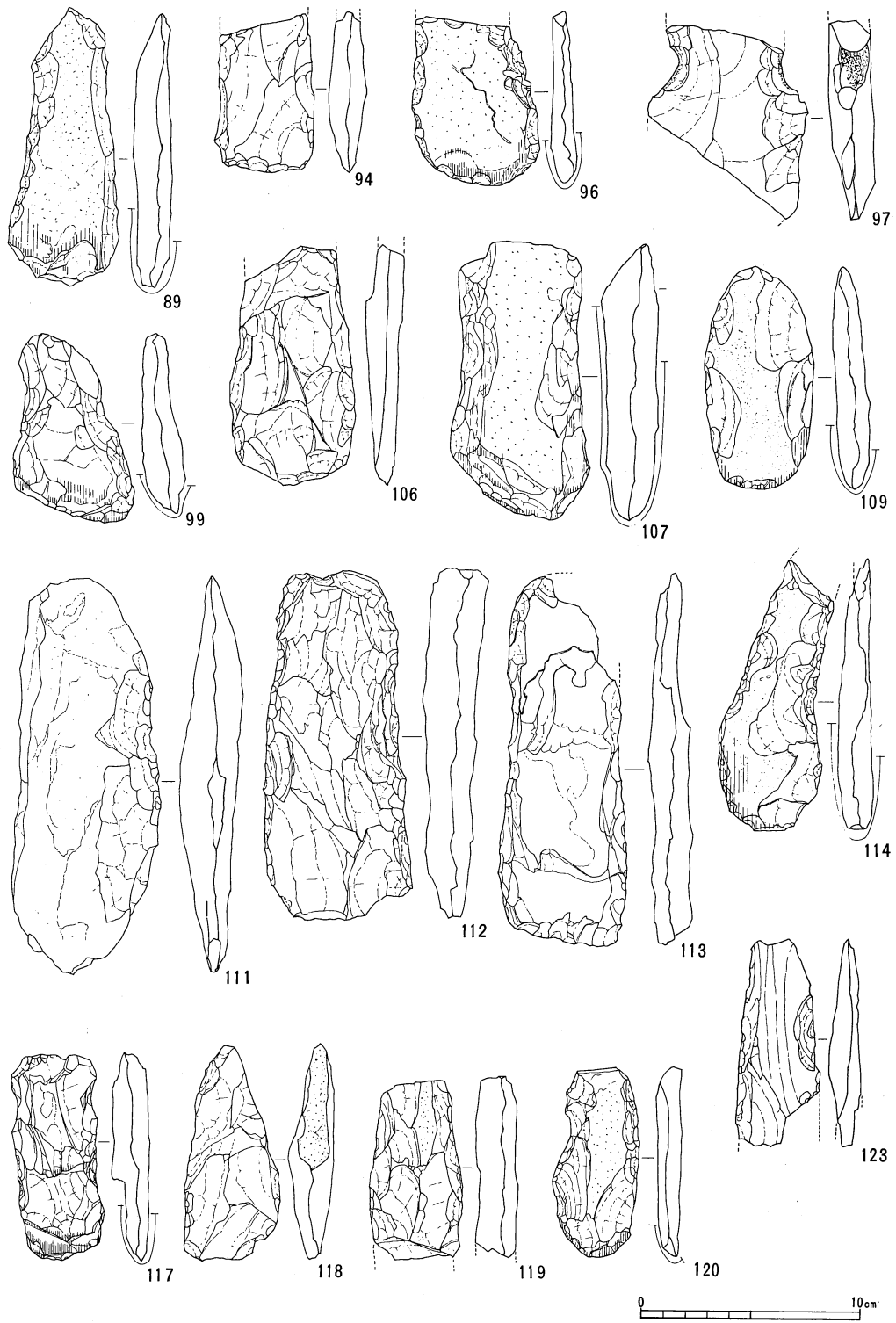
第117图 打製石斧 (1/3)



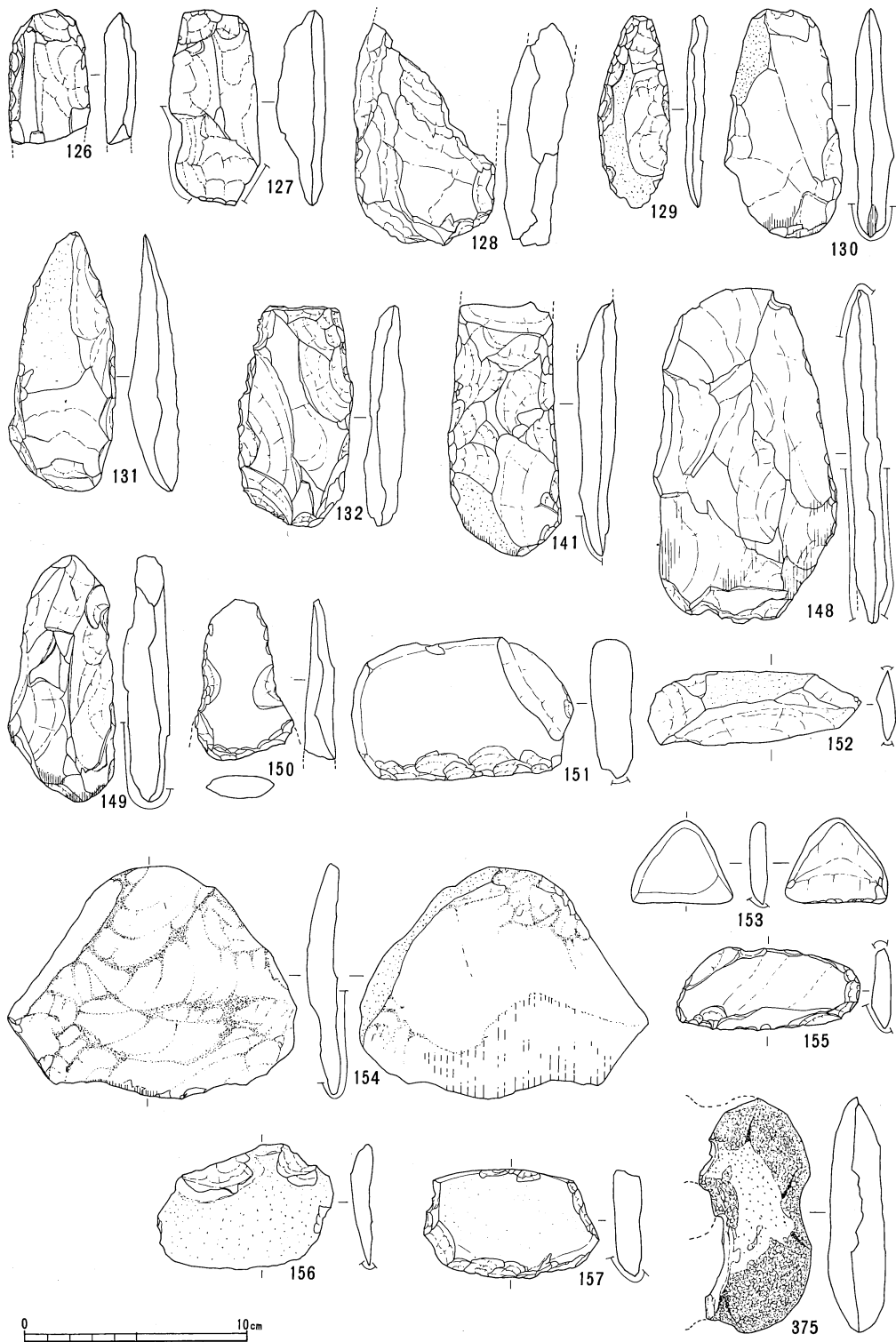
第118图 打製石斧实测图 (1/3)



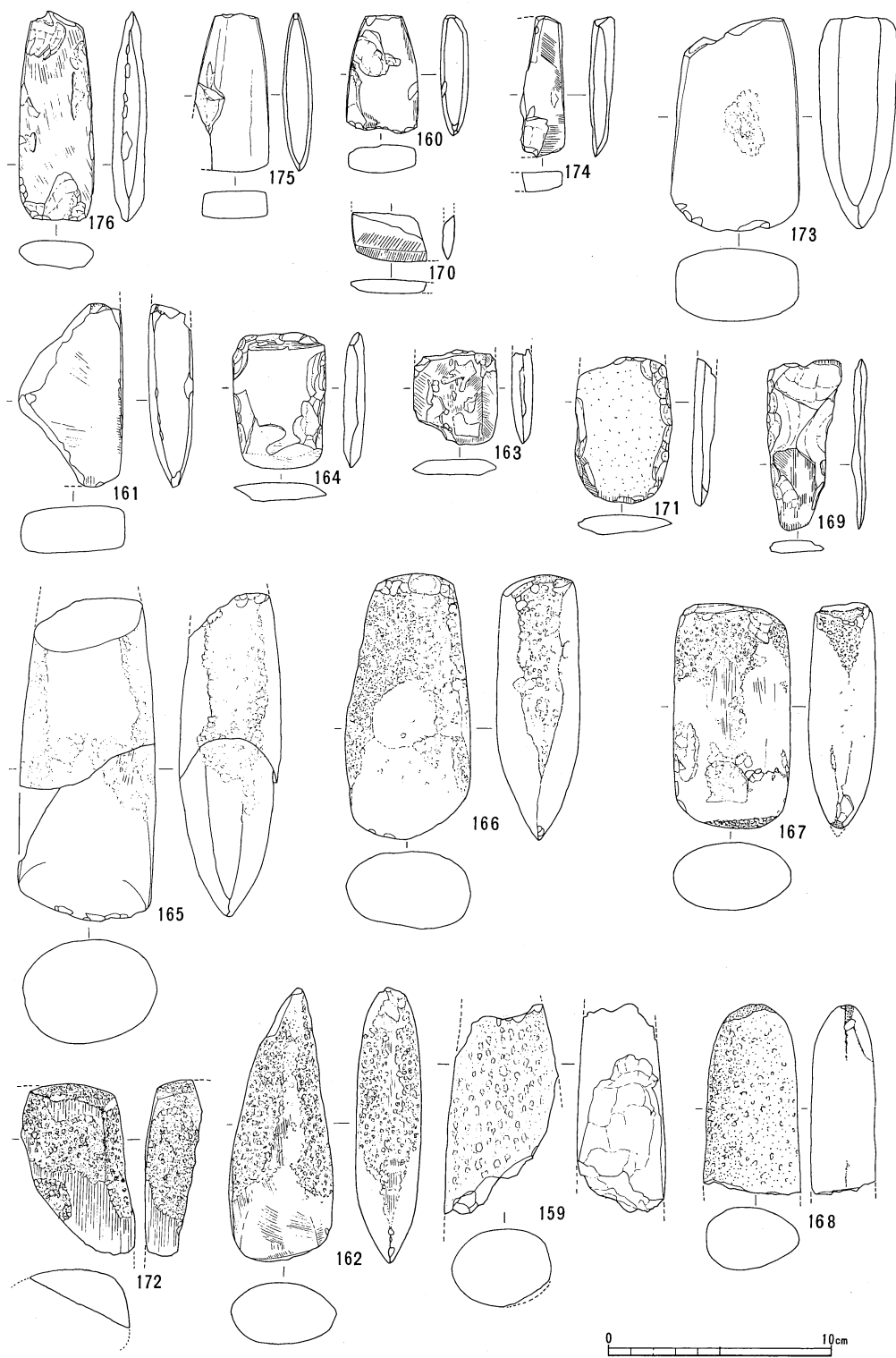
第119图 打製石斧実測図 (1/3)



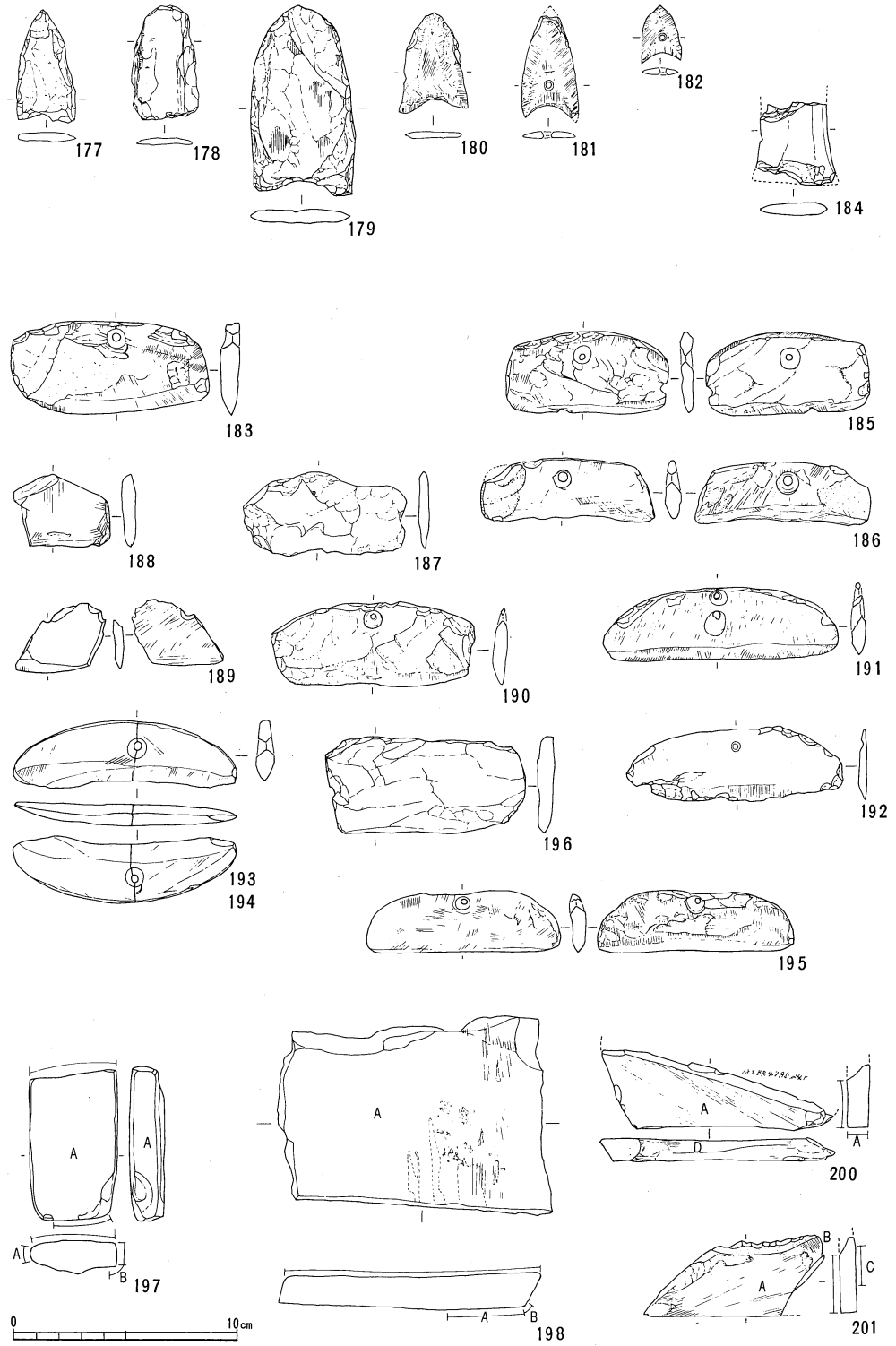
第120图 打製石斧实测图 (1/3)



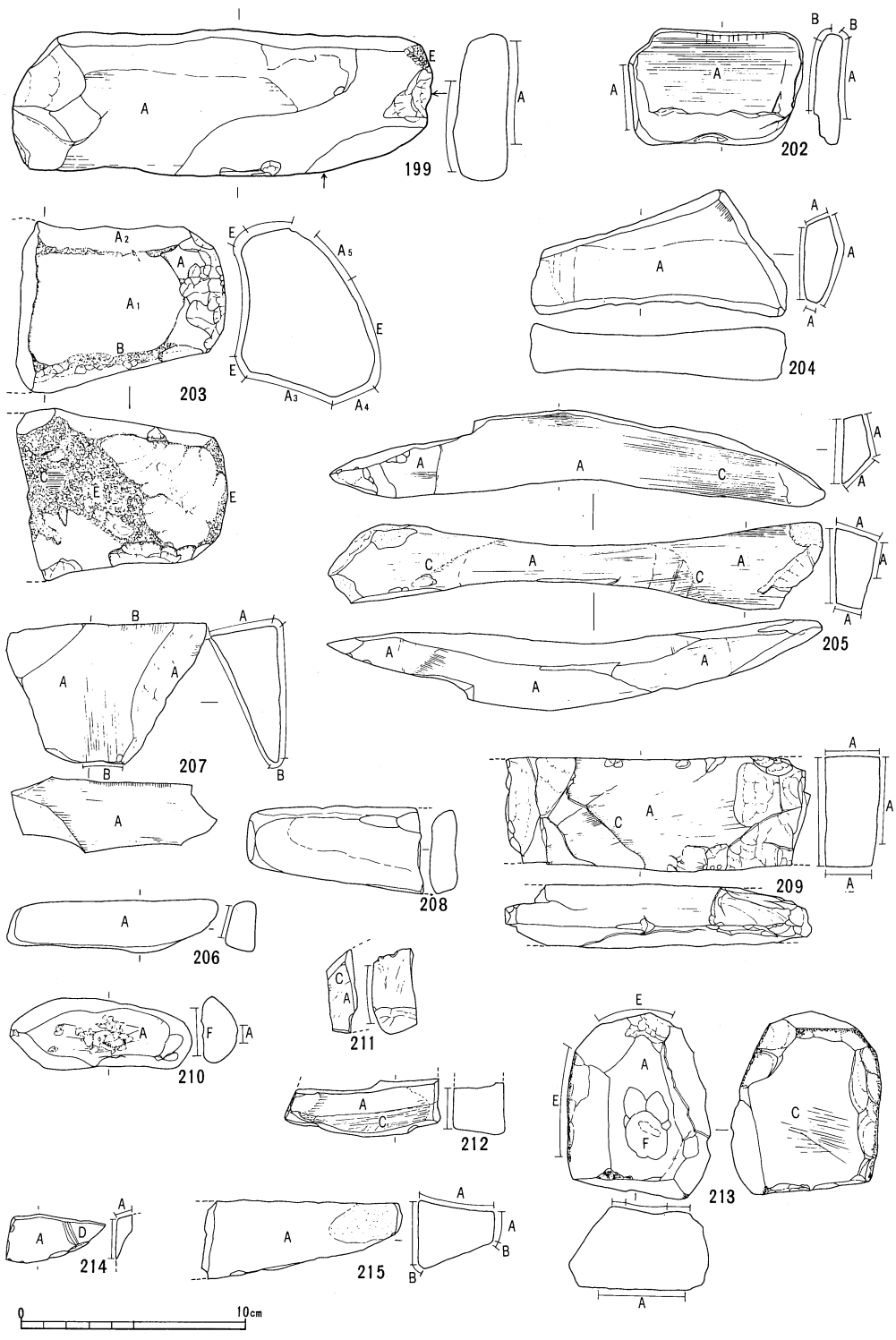
第121图 打製石斧、横刃型石器（下段）实测图（1/3）



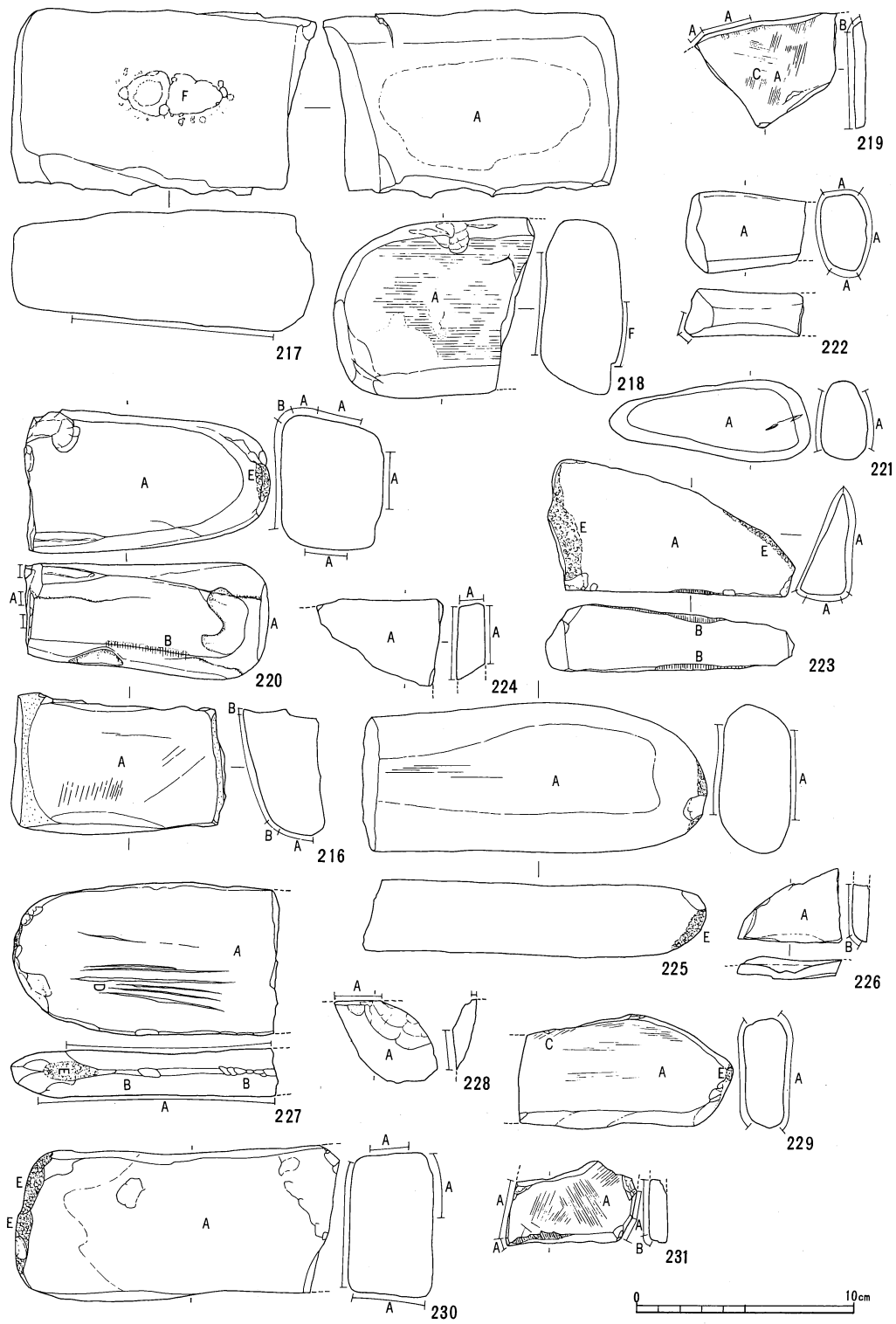
第122図 磨製石斧実測図



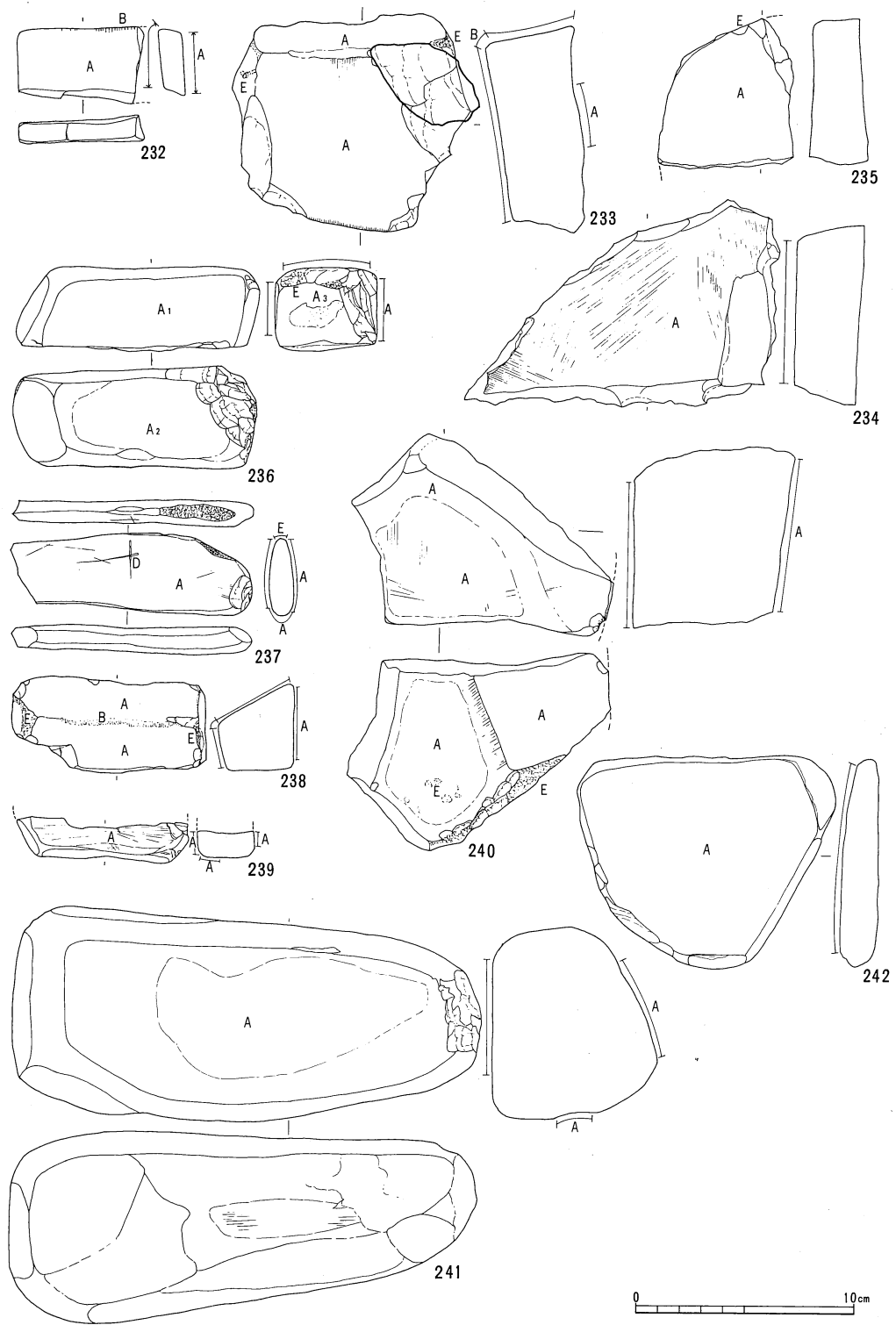
第123図 磨製石鍬（上段左）、石劍（184）、石庖丁（中段）、砥石（下段）実測図（1/3）



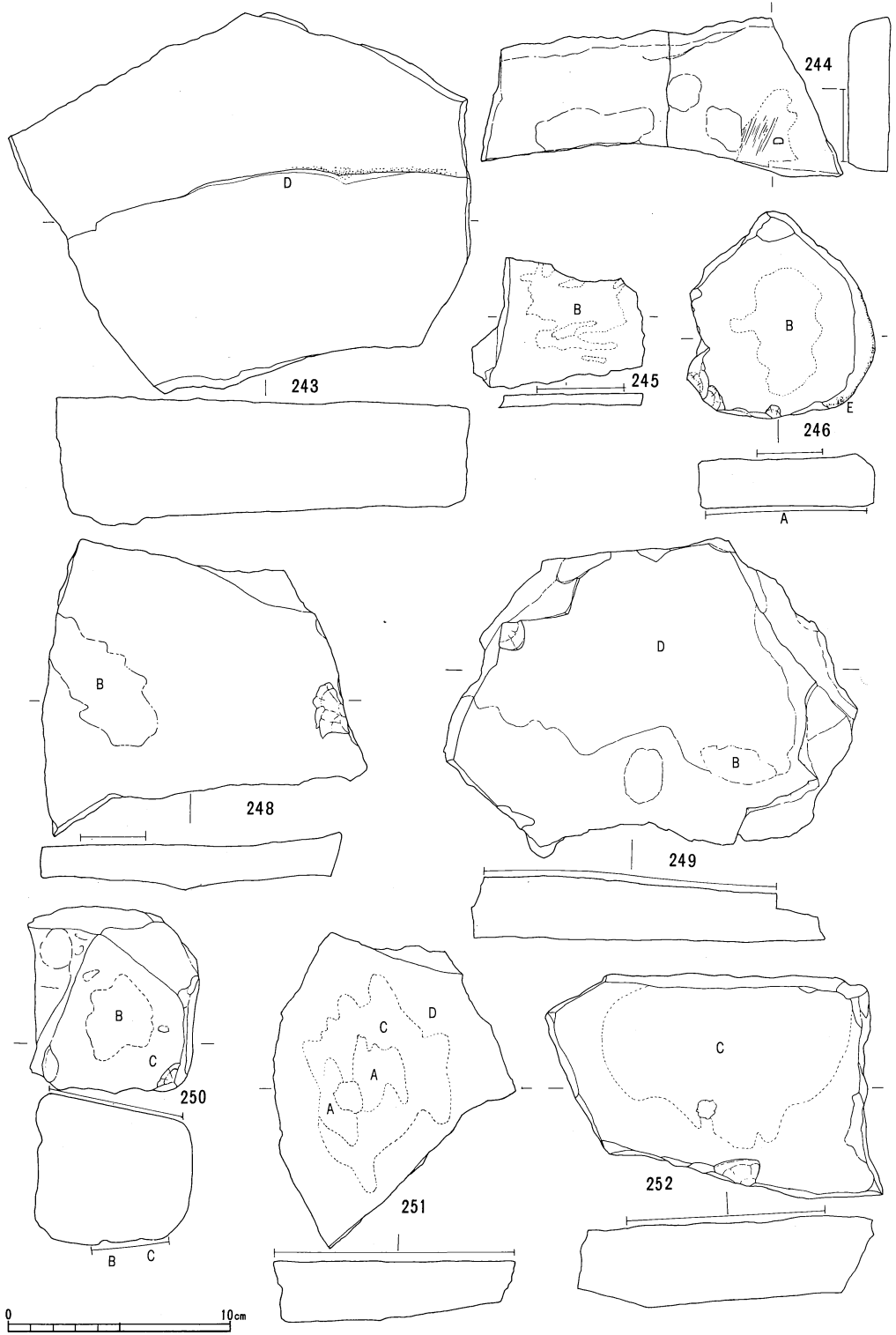
第124图 砥石夷测图 (1/3)



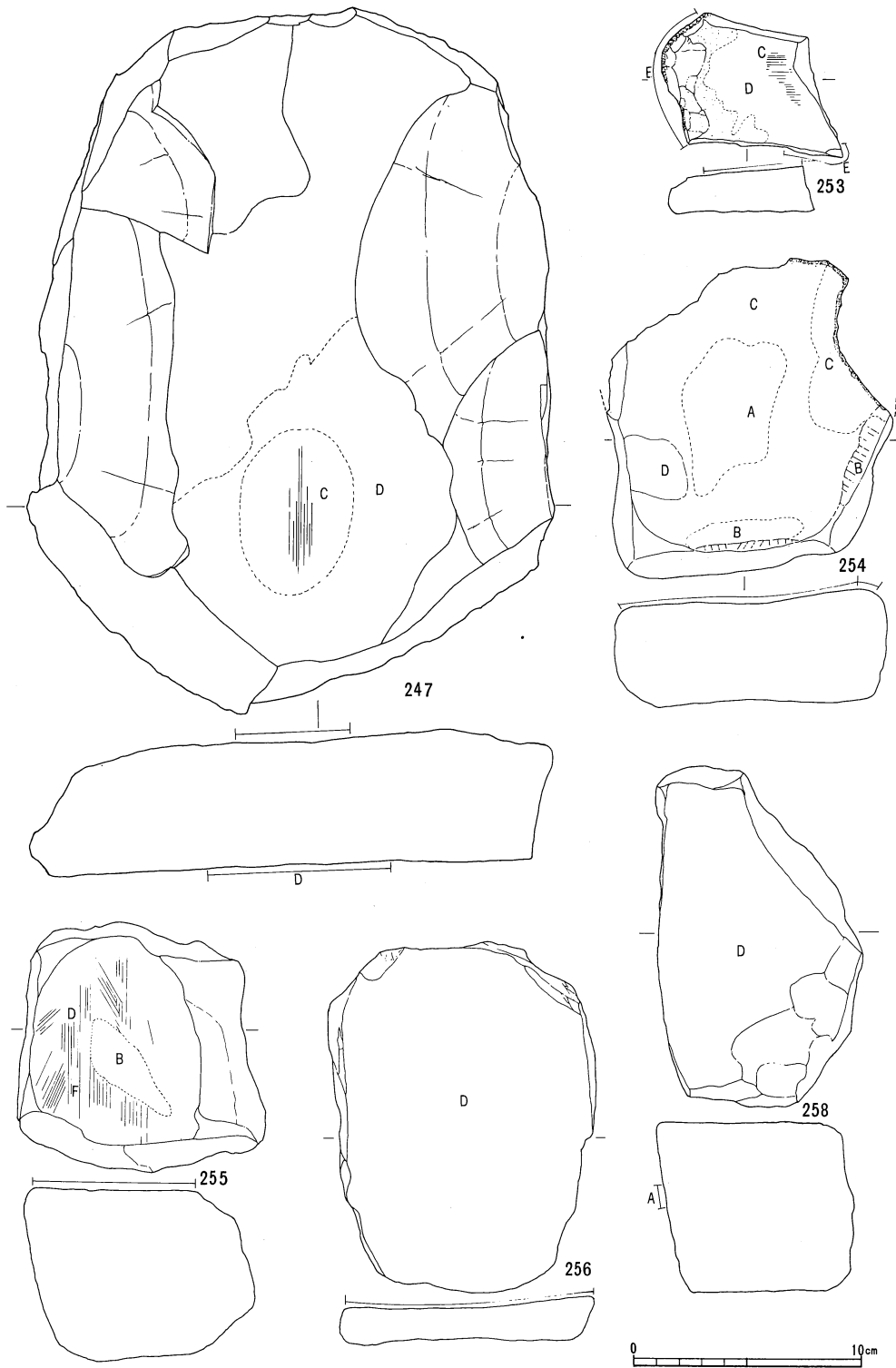
第125图 砥石实测图 (1/3)



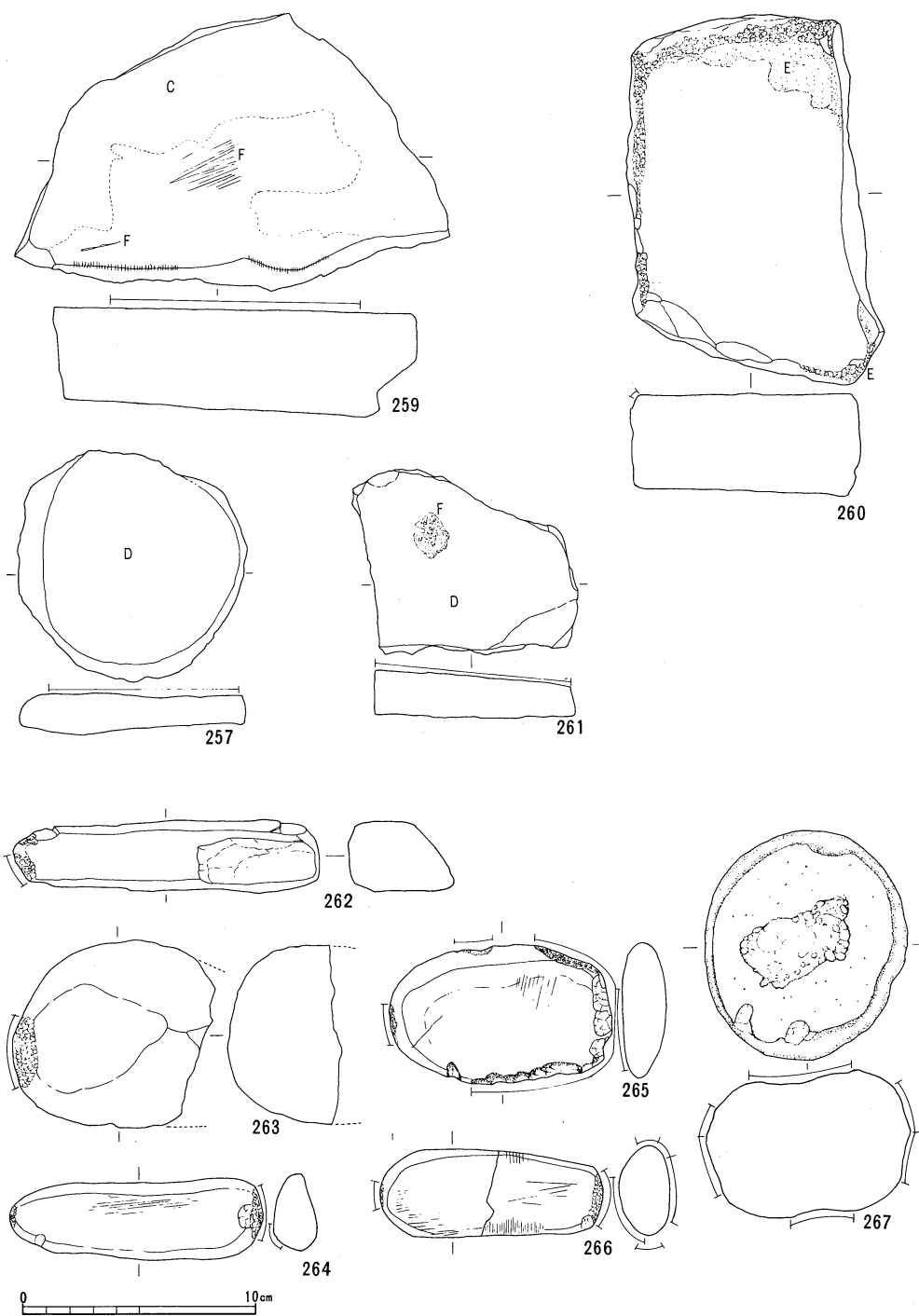
第126图 砥石实测图 (1/3)



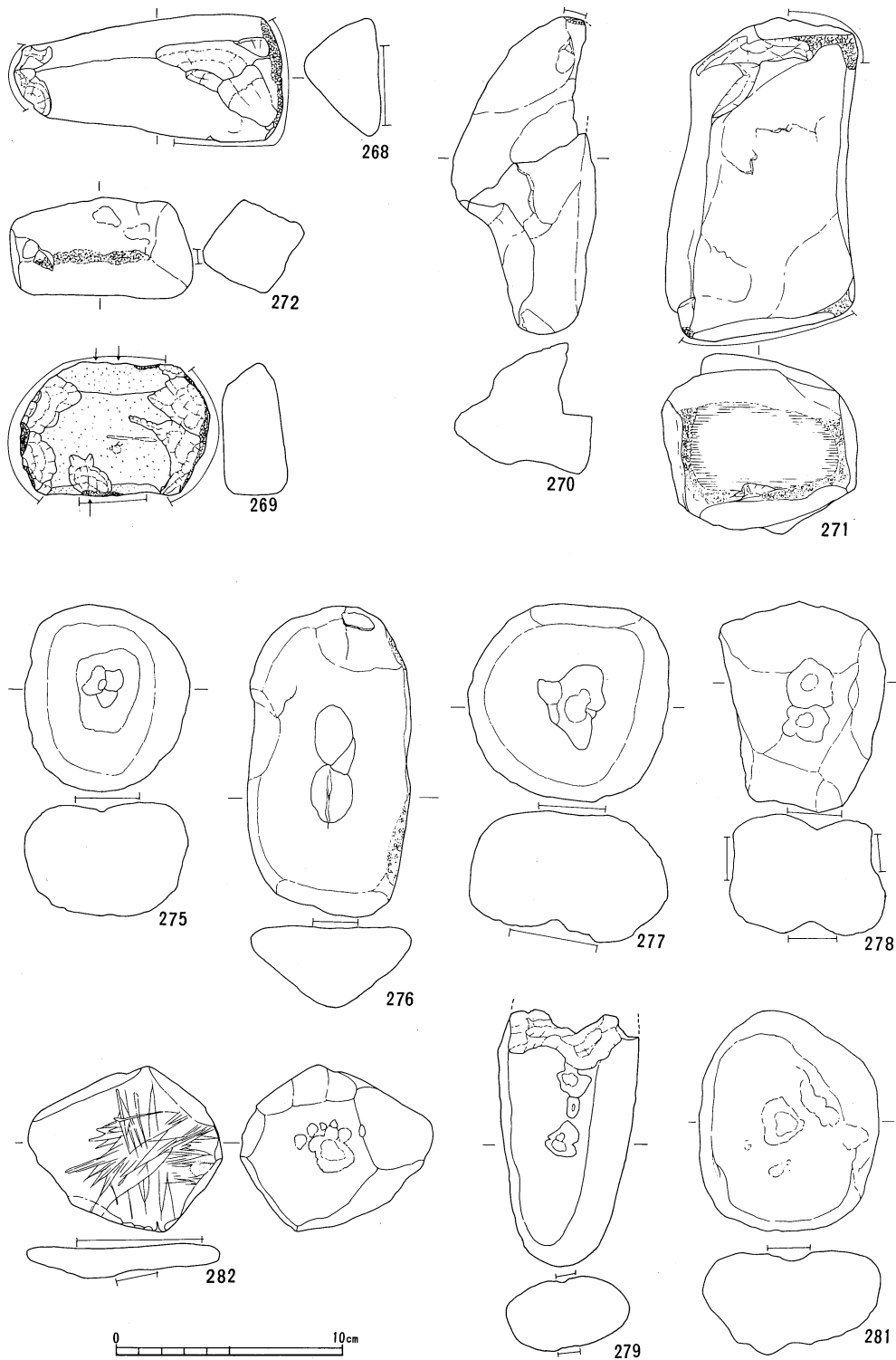
第127图 砧石实测图 (1/6)



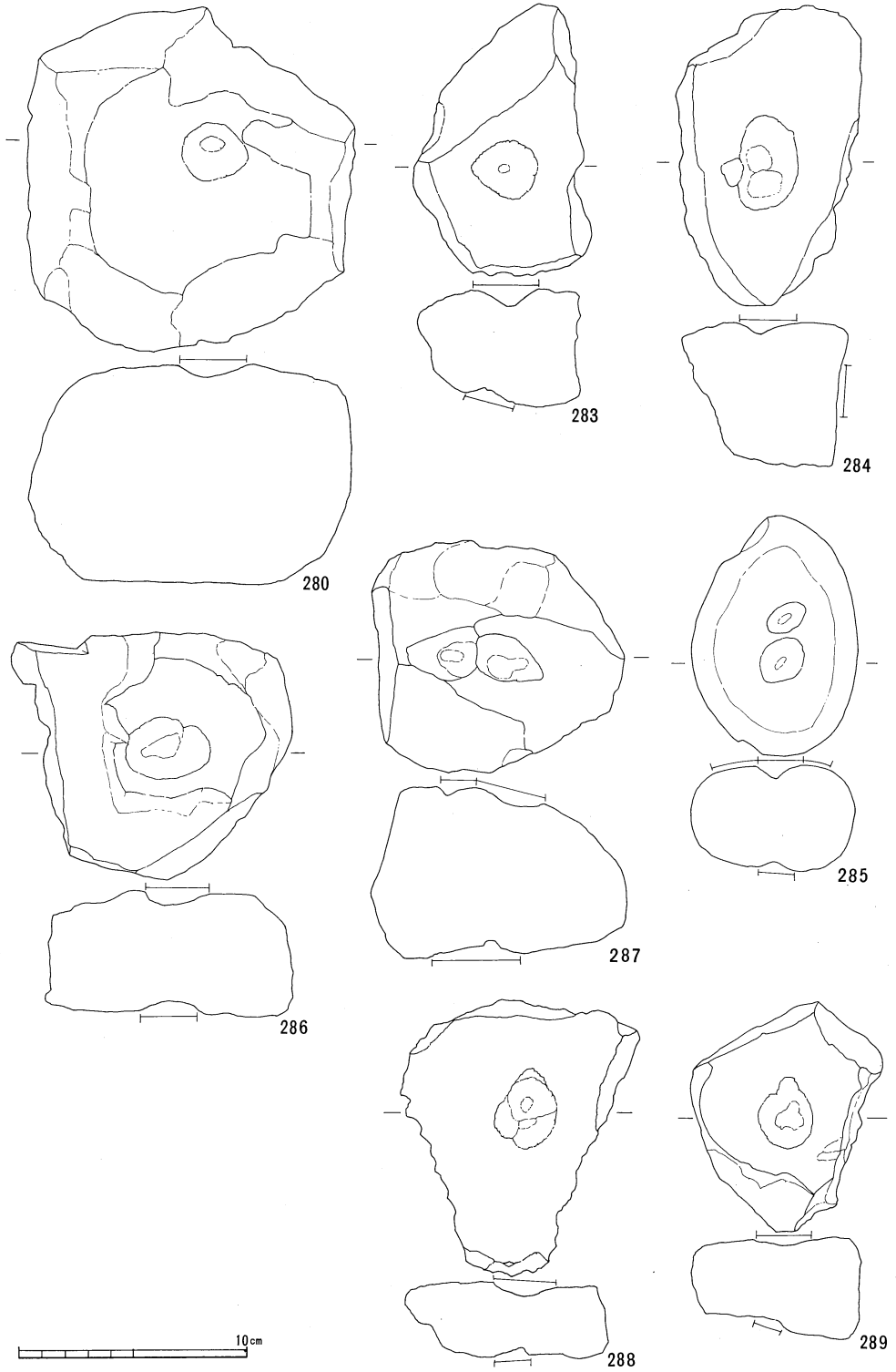
第128图 砧石实测图 (1/6)



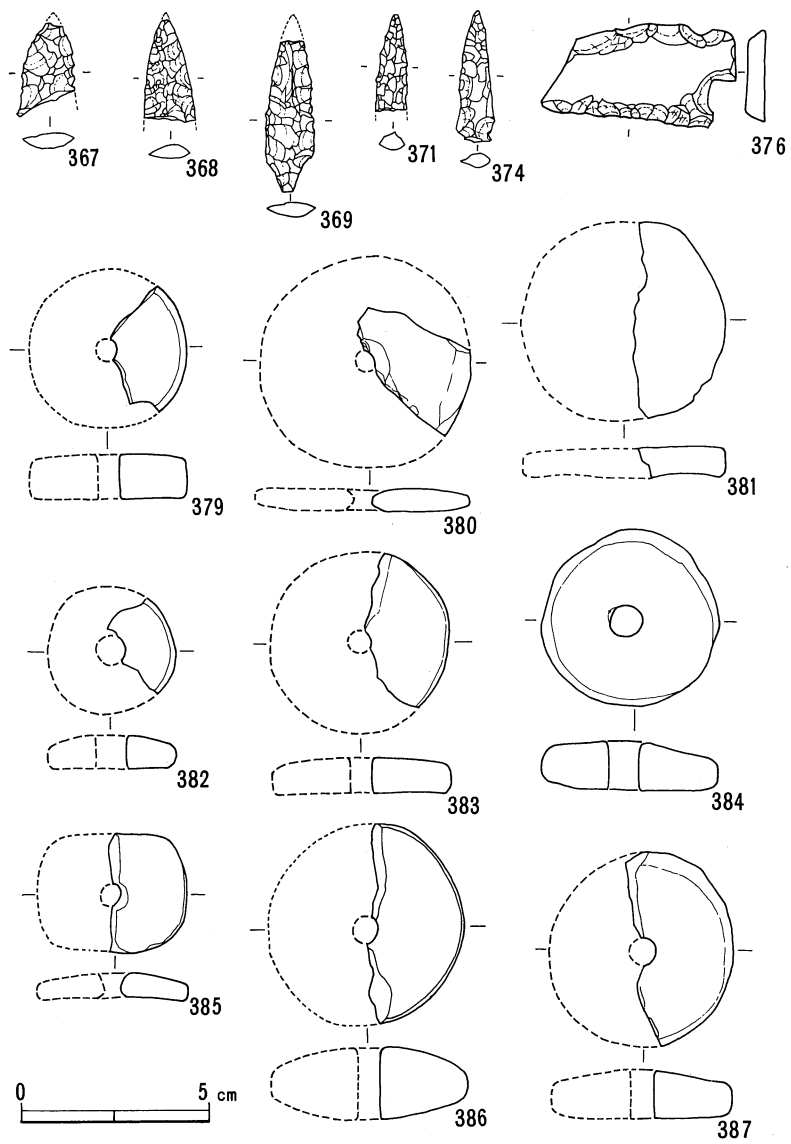
第129图 砧石（上段）实测图（1/6）、敲石实测图（1/3）



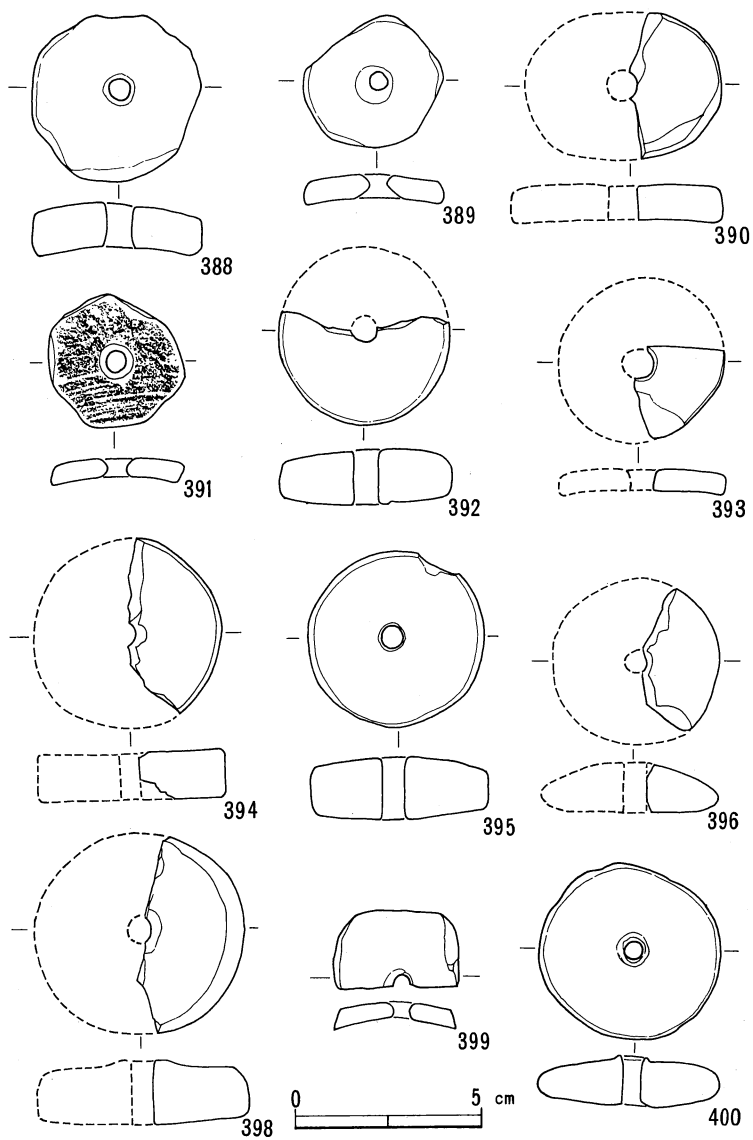
第130图 敲石（上段）、凹石実測図（1/3）



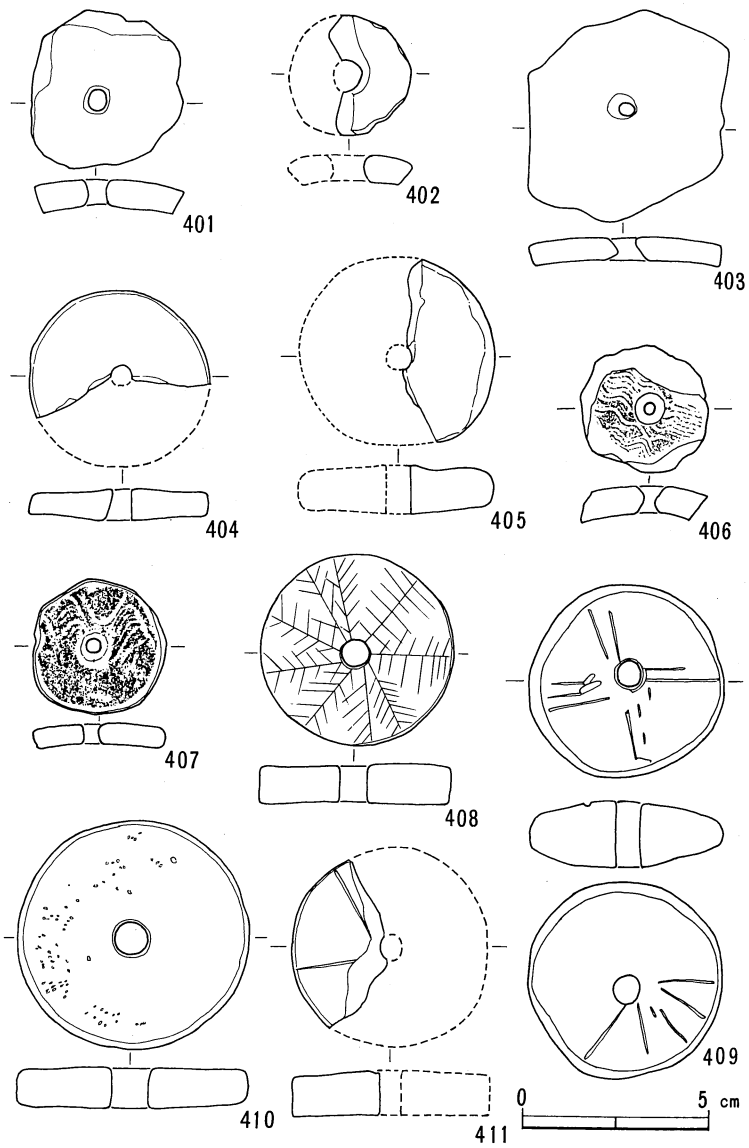
第131图 凹石実測図 (1/3)



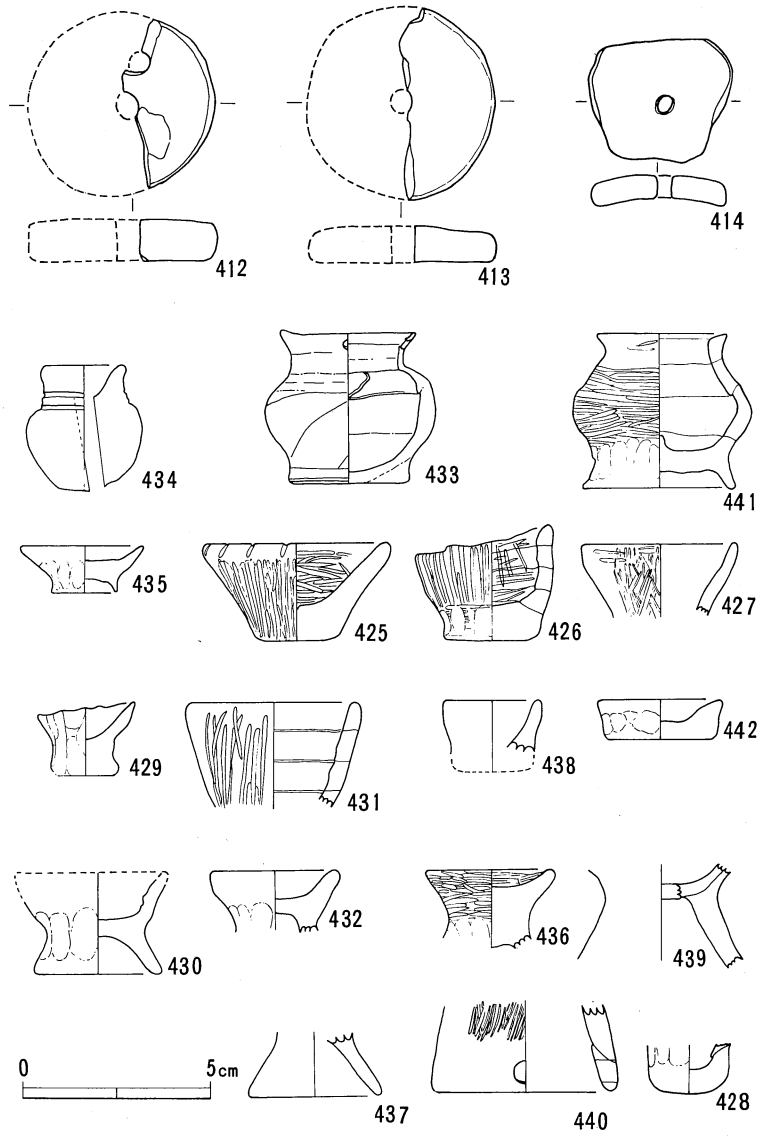
第132図 石槍、石匙、紡錘車（下段）実測図（1/2）



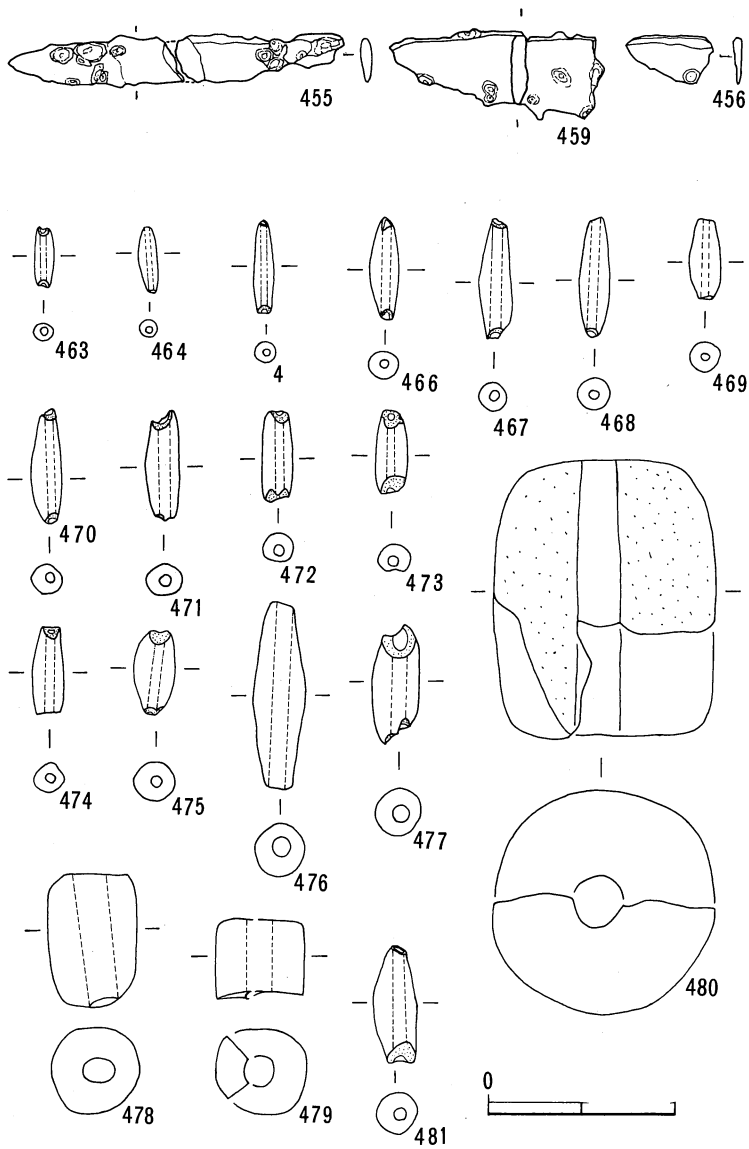
第133図 紡錘車実測図 (1/2)



第134図 紡錘車実測図 (1/2)



第135图 紡錘車（上段）、小型手捏土器実測図（1/2）



第136図 鉄器（上段）、土錘実測図（1/2）

第4節 平安時代以降の遺物

1. 住居址出土遺物

遺構編で前述した通り、耕作による破壊攪乱のため、完掘した住居址は皆無に等しい。そのため、確実に住居址に伴なう遺物の絶対量は少ない。各住居址出土の遺物は第13表にみられる如く、土器・土製品及び自然遺物がある。また、各住居址出土の土器組成については第13表、その種別・器形・法量等については第14表を参照されたい。

第13表 古代・中世住居址別出土遺物

住居址番号	遺 物														備 考				
	土 師 器 (土 師 質)										須 恵 器		灰 釉 陶 器			中 世 陶 器	土 製 品	自 然 遺 物	そ の 他
	甕	小甕A	小甕B	坏A	坏B	高台皿	小形高台坏	カワラケ	内耳	その他	甕	その他	高台椀	その他					
18	2片			1 3片			1片	3片						1片		土錘1	炭化米		坏Aの内2は平安的
23				2片				7 1片	1					瓶1					
25	1		1片	1	2片						2片		1片	瓶1片					
26	1片	2	1片		15 52片	3					1	壺1片	4片						坏Bの内に墨書「可」。高台皿1は耳皿
27							1	2 8片	3					瓶4片 片0片	灯明皿2片 鉢1、黄瀬戸 小皿2片、 その他破片				
38				2			1	3 1片											カワラケの内1に漆内外面に付着する。
45				3				1片											
52								3片							須恵質カメ片1				
53				2 2片			1	1									炭化米 ドングリ etc		火災

<小甕B=ハケ状工具による横走線文あり、器肉が薄い。坏B=黒色土器>

土 器 (第14表、第137、138図)

土器は平安時代の土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器と、古代末から中世にかけての土師質土器及び中世陶器がある。

土師器は甕形土器・小形甕形土器A類・B類および坏形土器である。甕形土器は25住出土の

1 個体分破片である。外面体部にハケ状工具による縦方向への施文がみられ、口縁部内面は指頭によるヨコナデがなされている。小形甕形土器A類は26住出土の2点である(第137図13・14)。共にロクロ成形され底部調整は糸切りである。13は内外面にロクロ痕が顕著にみられ、胎土に雲母が混入する。14は外面体部にハケ状工具による横走線文が残るが器肉は厚い。小形甕形土器B類の資料は破片のみである。ロクロ成形された体部にハケ状工具による細い横走線文が走り、その器肉は非常に薄く、底部は糸切底をなしている(第137図11)。供膳形態用の坏形土器は、25号住居址出土の1点のみである。他はその胎土等から土師質土器の範疇に入れられるものである。

黒色土器は二大別される。内外両面共に炭素吸着研磨した第一類と、内面のみ漆黒色を呈する第二類である。25・26住で出土したが、特に後者に圧倒的に多い。第一類に該当するのは26の高台付耳皿1点のみである。皿部を成形し、糸切り後高台を付し、皿部の両端をつまんで耳となし、炭素吸着研磨している。黒色土器第二類は坏形土器と高台付皿形土器の二形態である。坏形土器はいずれもロクロ成形後、底部を糸切り調整し、内面に炭素を吸着研磨している。特別に暗文を施したものはみられないが、口縁部は横ヘラミガキをなし、底部に向って縦ヘラミガキ整形を行うものである。19は墨書土器である。体部外面に細い流調な筆跡で「可」字一字を正位に墨書している。高台付皿形土器は2点あり、24は灰釉陶器をまねている。

須恵器は貯蔵形態用土器としての甕形土器および壺形土器の破片が若干みられる程度であり、体部に敲目が施されている。

灰釉陶器は高台壺および長頸瓶の破片である。高台壺は25・26住より若干出土しているが、いずれも黒笹90号窯期に属し、その産地は東濃系窯および猿投窯製品である。長頸瓶破片は23・25・27住より出土しているが、25住出土品は小破片である。9は23住出土品で頸部巾が広くやや後出する時期のものである。

古代末から中世にかけての土師質土器は、供膳形態の坏形土器・小形高台坏形土器およびカワラケ(小形坏形土器)があり、さらに煮沸形態用の内耳土器が加わる。特に土師質土器として土師器と区別したのは、その胎土が内耳土器にやや類似する点およびその形態・製作技法等を考慮しての上である。

土師器の坏形土器は、18・23・38・45・53住より出土している。ロクロ成形後糸切り調整をなす雑なつくりで、器肉は全般に厚味がちである。底部は厚いものや、中心部に向ってスリバチ状に落ち込み底部中央の器肉が最も薄くなるものの両者がある。胎土は砂質気味で褐色を呈するものが多い。

小形高台坏形土器は、18・27・38・53住から出土した31・37・45である。ロクロ成形後底部を糸切りしているが、その切離しは雑である。坏部はやや深く中には浅いものもみられる。体部の器肉は肥厚している。高台部分は底部器肉を厚くしただけのもので、底部外面内側を削り高台したり、貼高台していないのが特徴的である。平均的な法量は口径8.5cm、器高3.5cm、底径5cmで、その口径に対する器高指数は41.2である。カワラケ(小形坏形土器)の器高指数

が17～28であるのに対し、大きなのが注意される。胎土は粘質と砂質の両者があり、その色調は褐色である。

カワラケは平安時代後半からあらわれる小形の坏形土器で、ロクロ成形後底部を糸切り調整したものである。25・26住を除き7棟から出土しているが、特に内耳土器を伴う23・27住からの出土量が多い。カワラケは器高指数が25以上のものをⅠ類、20～25までのものをⅡ類、20以下のものをⅢ類と大別できる。Ⅰ類は器肉が比較的厚いのに対し、Ⅱ類は薄くしかも内耳土器を伴出する場合が多い。胎土はいずれも砂質気味である。

内耳土器は2軒から出土し、ロクロ成形痕がみられる。図示されていないが27住の内耳土器底部の外面に糸切痕がみられる。また、同一個体の破片から推定してやや深い内耳土器である。

中世陶器は破片が多く図示できたものは34の灯明皿のみである。ロクロ引きした上、内面に「十五」の文字をへら状工具により刻書している。他に黄瀬戸小皿破片・鉢破片等々がみられる。

土製品（第15表、第136図）

土製品は18号住居址出土の土錘1点（481）のみである。一部欠損しているが、その形態は紡錘形で、長径3.2cm、胴形1.1cm、孔径0.3cmを呈する。

自然遺物

自然遺物は18・53住から出土している。18住から炭化米が少量発見され、53住からは炭化米、ドングリと粟の混在した炭化物および住居用材の炭化材が出土した。いずれも植物学者に鑑定依頼しており、ここでの記述は避けたい。

2. 竪穴状遺構その他の出土遺物

竪穴状遺構

竪穴状遺構からの遺物は極少である。

1号址からは内耳土器の口縁部片・底部片3点、瀬戸系陶器片1点および砥石3点が出土している。中砥1点のほかは仕上砥である。欠損しているが、3点とも直径10cm前後、断面径3cmの小形の砥石で、手で持って使用したものである。石質は中砥は砂岩、仕上砥はグリーンタフである。

2号址出土品はこれまた小破片の内耳土器片と器肉の厚い土師質の坏片が若干発見されたにすぎない。

33号土坑

本址からの出土遺物は江戸時代の瀬戸系および伊万里系の陶器小破片若干である。器形は仏

第14表 古代・中世土器観察表

図番号	住居址	種別	器形	法量			技法	底部調整	備考
				口径cm	器高cm	底径cm			
137-1	18号	土師器	坏	—	(3.2)	5.8	ロクロ成形	糸切り	
"-2	23号	土師質	カワラケ	9.8	2.7	5.2	"	"	器高指数27.6
"-3	"	"	"	8.4	2.3	4.0	"	"	" 27.4
"-4	"	"	"	9.6	1.7	5.6	"	"	" 17.7
"-5	"	"	"	8.6	1.5	5.2	"	"	" 17.4
"-6	"	"	"	9.6	1.8	5.6	"	"	" 18.8
"-7	"	"	"	8.2	1.5	6.0	"	"	" 18.3
"-8	"	"	"	9.2	(1.5)	—	"	—	
"-9	"	灰釉陶器	瓶	—	—	—	"	—	
"-10	25号	土師器	甕	—	—	—	—	—	破片一括
"-11	"	"	小形甕	—	—	—	ロクロ成形	—	B類
"-12	"	"	坏	—	(1.1)	6.0	"	糸切り	
"-13	26号	"	小形甕	—	(6.8)	8.4	"	"	
"-14	"	"	"	—	(3.2)	7.4	"	"	
"-15	"	黒色土器	坏	13.4	3.9	5.6	"	"	
"-16	"	"	"	14.8	4.5	6.0	"	"	
"-17	"	"	"	15.0	4.0	6.6	"	"	
"-18	"	"	"	13.8	(3.5)	—	"	—	
"-19	"	"	"	13.4	(3.7)	—	"	—	墨書「可」
"-20	"	"	"	14.2	(3.8)	—	"	—	
"-21	"	"	"	14.4	(4.3)	—	"	—	
"-22	"	"	"	—	(1.4)	5.6	"	糸切り	
"-23	"	"	"	—	(1.3)	5.4	"	"	
"-24	"	"	高台皿	13.8	3.1	5.8	"	"	
"-25	"	"	"	—	(2.3)	6.0	"	"	
"-26	"	"	耳皿	9.4	1.8	5.0	"	"	
"-27	"	須恵器	甕	—	(11.0)	24.6	—	ヘラ切り	
"-28	"	灰釉陶器	高台埴	15.6	(2.0)	—	ロクロ成形	—	東濃窯・K-90号期
"-29	27号	土師質	内耳土器	30.2	(7.4)	—	"	—	
138-30	"	"	"	35.2	(9.5)	—	"	—	
"-31	"	"	小形高台坏	8.2	3.7	5.0	"	糸切り	
137-32	"	"	カワラケ	8.4	2.4	4.6	"	"	器高指数28.6
"-33	"	"	"	9.0	1.9	5.0	"	"	" 21.1
138-34	"	瓦質	灯明皿	10.8	(1.1)	7.6	"	"	刻書「十五」
"-35	38号	土師質	坏	12.6	4.3	6.8	"	"	
"-36	"	"	"	—	1.8	5.4	"	"	
"-37	"	"	小形高台坏	—	(2.8)	6.0	"	"	
"-38	"	"	カワラケ	7.8	2.0	4.6	"	"	器高指数25.6
"-39	"	"	"	8.0	1.9	4.4	"	"	" 23.8

図番号	住居址	種別	器形	法量			技法	底部調整	備考
				口径cm	器高cm	底径cm			
138—40	45号	土師質	坏	13.6	4.6	7.0	ロク口成形	糸切り	底部外面剥離
"—41	"	"	"	—	(3.5)	7.0	"	"	
"—42	"	"	"	—	(3.5)	7.0	"	"	
"—43	53号	"	"	13.0	4.5	(5.6)	"	—	
"—44	"	"	"	13.6	3.3	—	"	—	
"—45	"	"	小形高台坏	8.6	3.5	4.6	"	糸切り	
"—46	"	"	カワラケ	9.6	(1.7)	—	"	—	

第15表 土 錘 一 覧 表

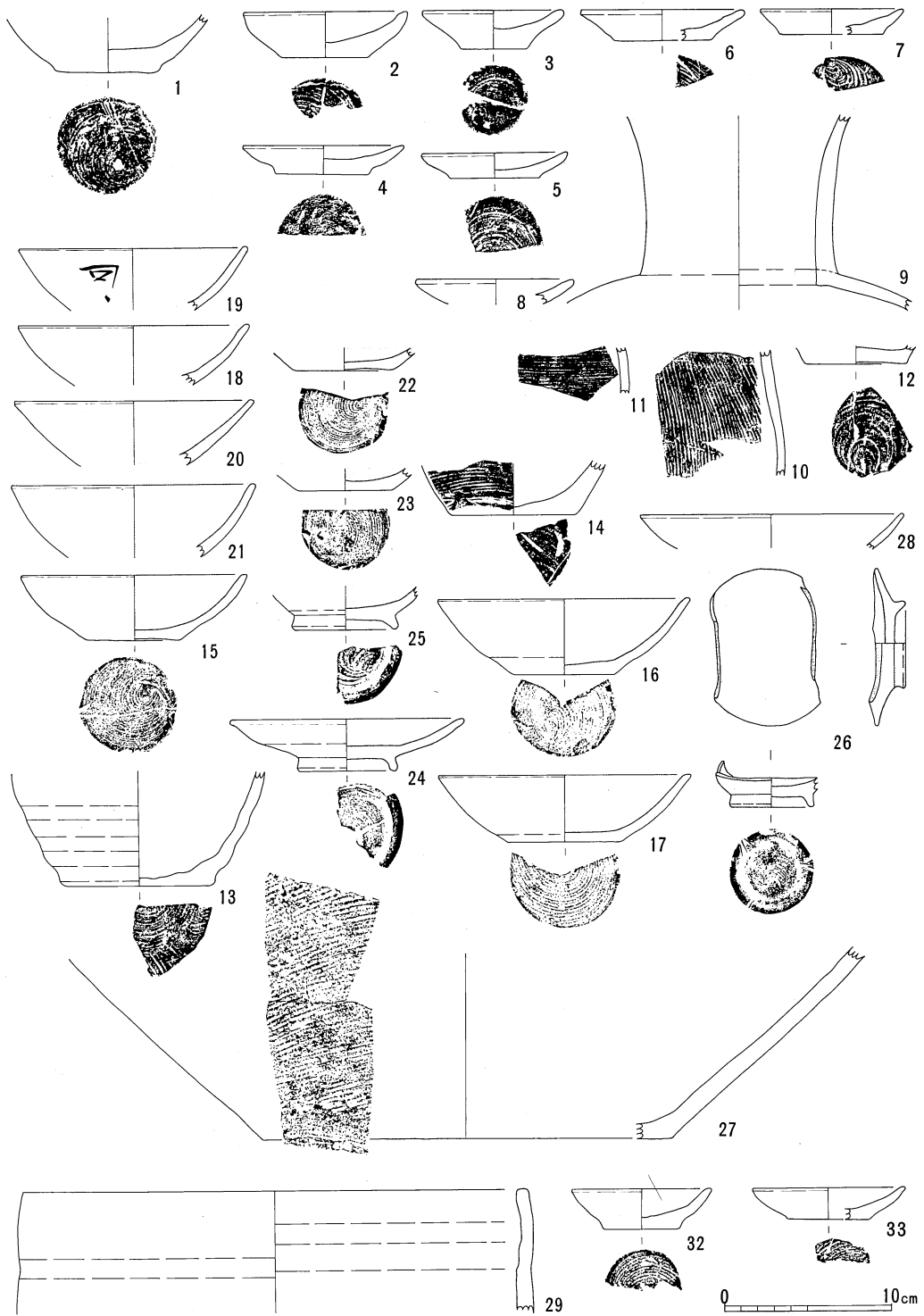
No.・挿図No.	台帳番号	遺構	形態	長径 (cm)	胴径 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	備考
463—136	II AR 46.56		紡錘形	1.6	0.6	0.2	0.4	
464— "	II BQ 52. 3		"	1.8	0.5	0.2	0.4	完形
465— "	II AV 43. 4		"	2.3	0.6	0.2	0.7	
466— "	II AR 46. 2		"	2.7	0.8	0.2	1.2	完形
467— "	II DF 52. 5		"	3.2	0.8	0.3	1.7	
468— "	II CG 58. 1		"	3.2	0.9	0.3	1.8	完形
469— "	II BC 48.44	21	"	2.2	0.8	0.2	1.2	
470— "	II BQ 51. 3		"	3.1	0.9	0.2	1.8	
471— "	II AY 62. 7		"	2.9	1.0	0.3	1.8	
472— "	II BC 48. 5	21	"	2.4	0.8	0.3	1.5	
473— "	II CP 49. 1		"	2.2	0.9	0.3	1.4	
474— "	I BR 57. 2	33	"	2.3	0.9	0.3	1.4	
475— "	II CO 58. 7	22	"	2.2	1.2	0.3	3.4	完形
476— "	I CB 50. 1	37	"	4.5	1.3	0.5	9.4	完形
477— "	II BE 48. 4	40	"	3.2	1.2	0.5	5.0	
478— "	II DH 55. 6	16	管状形	3.6	2.4	0.8	19.8	完形
479— "	I CD 64. 1	6	"	2.2	(2.4)	(0.8)	(3.3)	1/5片
480— "	I BD 59.11	32	囊状形	7.4	5.8	1.3	(116.1)	2/3片
481— "	II CJ 46.14	18	紡錘形	3.2	1.1	0.3	3.0	

具の供献具と茶碗である。また、直接土坑内出土品ではないが、遺構に隣接して発見された寛永通宝9枚は注意される。

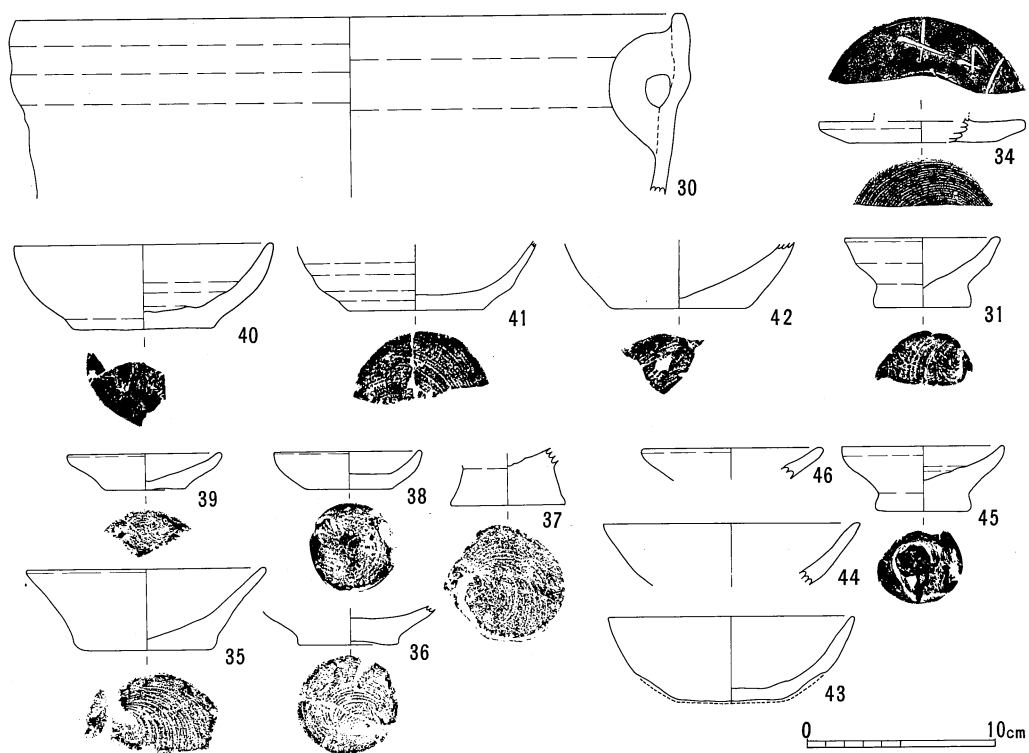
包 含 層 (第15表、第136図)

遺構に伴わない包含層出土遺物中、特に注目されるものに土錘がある。土錘は18点で紡錘形を呈するもの15点、管状形2点、囊状形1点である。

紡錘形は長径1.8cm、胴径0.5cmの小形のものから長径3.6cm、胴径2.4cmの中形のものまでであるが、5cm以上の大型品はみられない。一般に胴部中央が膨むもので、使用されたため破



第137图 18号住居址(1)·23号住居址(2~9)·25号住居址(10~12)·26号住居址(13~28)·
27号住居址(下段)出土土器实测图(1/4)



第138图 27号住居址(29~34)·38号住居址(35~39)·45号住居址(40~42)·53号住居址(43~46) 出土土器实测图(1/4)